

—— 千葉県市原市 ——

き く ま て な が
菊 間 手 永 遺 跡

1 9 8 7

市 原 市 下 水 道 建 設 課

財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は房総半島西部、東京湾東岸地域に位置し、自然環境に恵まれ、太古から人々の生活の舞台として栄え、その結果として、埋蔵文化財が豊富な地域として周知されております。また、昭和30年代より京葉コンビナートの中心として、臨海工業地帯の中樞をなしており、一方では、首都50km圏内として大規模宅地造成などの開発が急がれ、このことから地域開発と埋蔵文化財保護との調和は、今日の大きな課題となっています。

本遺跡の調査は、本市と千葉市との境を流れ、東京湾に注ぐ村田川が市原台地に別れを告げる左岸北端部に建設された、菊間終末処理場造成に伴って実施されたものであります。下水道の普及は、市民の快適な住環境の基本であり、建設が急がれております。遺跡内の縄文時代の手永貝塚は、3次にわたる調査でほぼ終了いたしました。数多くの貴重な資料が得られました。また、古代における菊間地域の首長墓群の一角の調査によっても同様以上の成果を得ております。右岸の千原台地区では、財団法人千葉県文化財センターにより広範囲に発掘調査が進められており、左岸地域における菊間地区の調査成果と伴に、この地域の歴史が解明されつつあります。

本報告書が学術資料としてだけでなく、今後の埋蔵文化財の保護、涵養のため、一般市民の方々にも広く活用され、役立つことができれば幸いと存じます。

最後に調査にあたり、ご指導、ご協力をいただいた千葉県教育庁文化課、市原市下水道建設課、市原市教育委員会文化課をはじめ、多くの方々、並びに地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和62年 3 月25日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

例 言

1. 本書は、千葉縣市原市菊間字北野谷貝塚台2162番地ほかに所在する、菊間手永遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、市原市下水道建設課による下水処理場関連工事に伴い実施したものである。
3. 発掘調査作業、整理・報告書作成作業は以下の通りに行った。

発掘調査作業 昭和58年12月5日～昭和59年3月31日

担当 近藤 敏

整理作業 昭和59年4月4日～昭和62年3月31日

担当 近藤 敏

また、調査研究員田中新史・田所 真・木對和紀が協力した。

4. 本書の原稿執筆及びその他の原稿の編集は、担当の近藤が行った。
5. 本書は、市原市菊間下水処理場の建設に伴い昭和47年7月30日から昭和48年3月25日まで2次にわたり、現地発掘調査を実施した手永貝塚・手永弥生遺跡発掘調査団の成果も併せて報告している。これら調査成果の引継ぎは、昭和59年5月20日付で行われた。調査団は、団長平野元三郎氏・副団長菊池義次氏であり、調査員として對馬郁夫氏・内野美三夫氏・柿沼広氏・伊藤博氏・谷島一馬氏ら諸氏で編成されていた。ここに記して、調査団の労に報い、感謝の意を表する次第である。
6. 関連する諸科学については、次の先生から玉稿を頂いた。記して感謝の意を表するものである。人骨鑑定－森本岩太郎（聖マリアンナ医科大学）・小片丘彦（鹿児島大学）・平田和明・吉田俊爾（聖マリアンナ医科大学） 動物遺存体－金子浩昌（早稲田大学） 調査区域の植生－田辺盛光（千葉県立中央博物館準備室） 以上は昭和62年当時の所属である。
7. 発掘調査から整理作業の過程において、以下の諸機関、諸氏よりご協力、ご指導を賜った。市原市下水道建設課・千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会教育指導部文化課・聖マリアンナ医科大学第二解剖学教室・石坂俊郎（岡山大学）・樋泉岳二・忍澤成視（早稲田大学）・陣内康光・黒沢 浩（明治大学）・本間 宏・築瀬裕一・加納 実
8. 石器の石材・石質については柴田 徹氏（東京都立上野高校）のご教授を得た。
9. 縄文時代資料の赤色彩色顔料については、成瀬正和氏の分析と報告を掲載した。感謝申し上げる。

組

織

役 員

理 事 長	石井 正泰（教育委員会教育長）	昭和58年4月1日～昭和58年7月16日
	星野 一郎（教育委員会教育長）	昭和58年7月17日～昭和62年3月31日
副理事長	石井 作二（教育委員会教育次長）	昭和58年4月1日～昭和58年9月19日
	横濱 辰夫（教育委員会教育指導部長）	昭和58年9月19日～昭和62年3月31日
常務理事	井原 茂（専任）	昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
	内藤 隆（専任）	昭和60年4月1日～昭和61年3月31日
	岩見 一民（専任）	昭和61年4月1日～昭和62年3月31日
理 事	滝口 宏（早稲田大学名誉教授）	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	寺村 光晴（和洋女子大学教授）	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	海上 信久（姉崎神社宮司）	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	川島 穰（市 企画部長）	昭和58年4月1日～昭和59年3月31日
	櫻井 徹郎（市 企画部長）	昭和59年4月1日～昭和60年3月31日
	松崎 良一（市 企画部長）	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	関 見旭代（市 総務部長）	昭和58年4月1日～昭和59年3月31日
	松崎 良一（市 総務部長）	昭和59年4月1日～昭和60年3月31日
	斎藤 栄亮（市 総務部長）	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	伊藤 昭（市 都市部長）	昭和58年4月1日～昭和59年3月31日
	中島 英夫（市 都市部長）	昭和59年4月1日～昭和61年3月31日
	地引 希壹（市 都市部長）	昭和61年4月1日～昭和62年3月31日
	佐野 年男（市 財政課長）	昭和58年4月1日～昭和59年3月31日
	松下 隆（市 総務部財政課長）	昭和59年4月1日～昭和62年3月31日
監 事	西賀 静雄（市 下水道部企画調整室長）	昭和58年4月1日～昭和59年3月31日
	山中 定義（市 福祉事務所長）	昭和58年4月1日～昭和59年3月31日
	白鳥 一夫（市 会計課長）	昭和59年4月1日～昭和62年3月31日
	山口 節（教育委員会総務課長）	昭和59年4月1日～昭和60年3月31日
	松本辰之助（教育委員会総務課長）	昭和60年4月1日～昭和61年3月31日
	斎藤 崇雄（教育委員会総務課長）	昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

職 員

庶務課	課 長	小茶 文夫	昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
	課 長	田丸 萬富	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	主 事（兼務）	浅利 幸一	昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
	主 事 補	相野 光江（大鐘光江）	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	事 務 員（嘱託）	秋田 晴美	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	事 務 員（嘱託）	塚本 和江	昭和59年4月1日～昭和60年3月31日
	事 務 員（嘱託）	藤沢ひろみ	昭和60年4月1日～昭和61年3月31日
	事 務 員（嘱託）	石渡あゆみ	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
調査課	課 長	郷田 良一	昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
	課 長	清藤 一順	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	主 幹	石田 広美	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	主任調査研究員	山口 直樹	昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
	主 幹	同 上	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	宮本 敬一	昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
	主任調査研究員	同 上	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	米田耕之助	昭和58年4月1日～昭和61年3月31日
	主任調査研究員	同 上	昭和61年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員（兼務）	浅利 幸一	昭和58年4月1日～昭和60年3月31日
	調査研究員	同 上	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	田中 清美	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	近藤 敏	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	高橋 康男	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	田所 真	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	大村 直	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員	木對 和紀	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員（嘱託）	鈴木 英啓	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員（嘱託）	半田 堅三	昭和60年4月1日～昭和62年3月31日
	調査研究員（嘱託）	田中 新史	昭和61年4月1日～昭和62年3月31日
	事 務 員（嘱託）	高浦 貞子	昭和58年4月1日～昭和62年3月31日
	事 務 員（嘱託）	長谷川いずみ	昭和60年4月1日～昭和61年3月31日

凡 例

1. 本書に用いた遺跡の名称・遺構の名称・番号等は、既刊の年報等のそれとは異なる場合がある。これは本書の作成に際し、発掘調査で使用したものを整理改訂したためである。
2. 菊間手永遺跡の遺物注記の略記号は、昭和58年度の市原市文化財センター調査分を「セ11」としている。昭和47年から昭和48年の調査団調査分を「手永」としており、ローマ数字をいれて一次調査分「手永Ⅰ」、二次調査分を「手永Ⅱ」とした。報告書遺構番号のセ11はアラビア数字のままとし、手永一次は0（ゼロ）を手永二次に α を冠している。
3. 遺構及びその配置図の方位は磁北を示し、市原市は真北よりW-5°53'-Nとなっている。
4. 遺構断面図にある水平線は、数値があれば標高を示す（単位m）。
5. 挿図の遺物・遺構番号は、表組・写真図版番号と共通する。また遺物注記番号と共通する。
6. 挿図等に使用した地形図・地図等の出典は各図に記した。
7. 遺構、遺物の挿図の縮尺については、住居跡1／90、土坑は1／60を原則としている。完形土器は1／4、土器拓影及び石器に関するものは1／3、剥片石器・金属器は1／1を基準としたが、その性格形状において異なるため必要時はスケールを記した。
8. 遺構図のスクリーン・トーンフィルムは、地床・炉の表示は中濃の網点、焼土範囲は濃い網点となる。薄い網点は貝層を表示し、混貝・混土の区別をしていない。砂目は粘土・山砂等のカマド構築材の範囲を表示している。縦線は各遺構断面図の基盤面を表わし、ローム層とは限らない。遺物図の薄い網点のスクリーンは赤色彩色の範囲を表わしている。
9. 挿図の遺構分布図は、縮尺表示のないものは土坑については1：400とし、住居跡等については1：600となっている。
10. 遺物の観察表については、次のとおりである。「せいけい」の矢印（→）は接触の新旧を表わす（新→旧）。（・）は上下関係であり（上位・下位）となる。三角形の黒塗は実測図の位置等の基点・定点を表わす。土器・石器ともこれに準拠する。
11. 遺跡遺構名は、千葉県埋蔵文化財分布地図(3)－市原市・君津・長生地区－（1987年3月刊行予定）千葉県文化財センターに準拠したが、遺跡番号599手永貝塚、遺跡番号600菊間手永台遺跡をあわせて、当遺跡名を菊間手永遺跡とした。
12. 注釈、引用、参考文献については各項の文末に記し、著作者の敬称を略させていただいた。

本文目次

序 文

理事長 星 野 一 郎

例 言

組 織

凡 例

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の地理的位置と歴史的環境	2
III. 調査の方法	24
IV. 縄文時代の遺構と遺物	34
V. 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物	300
VI. 平安時代～中世の遺構と遺物	383
VII. 1. 市原市手永貝塚の動物遺体と骨角製品 金子浩昌	419
VII. 2. 菊間手永遺跡出土の赤色顔料関係遺物に用いられた赤色顔料 成瀬正和	429
VIII. 小 結	431
IX. 手永貝塚の植生について 田辺盛光	437
X. 市原市菊間手永貝塚出土人骨 森本岩太郎・小片丘彦・平田和明・吉田俊爾 ...	451

挿 図 目 次

第1図 遺跡の平面位置	3
第2図 地形と調査範囲	4
第3図 菊間手永遺跡調査前地形	5
第4図 菊間手永遺跡遺構分布	7～8

第5図	遺跡の位置	9
第6図	市原市主要遺跡	11
第7図	先土器時代	14
第8図	縄文時代貝塚遺跡分布	16
第9図	弥生時代集落分布	19
第10図	菊間古墳群	20
第11図	菊間手永遺跡周辺小字切図	21
第12図	菊間地域地形図	21
第13図	菊間手永遺跡トレンチ配置及びグリッド設定番号	25～26
第14図	第1トレンチ断面	31
第15図	第2トレンチ断面	32
第16図	第3トレンチ断面	33
第17図	菊間手永遺跡時期別遺構分布	35～36
第18図	縄文時代遺構分布	45～46
第19図	056号住居跡	47
第20図	043号住居跡	49～50
第21図	055号住居跡	51
第22図	縄文時代晩期中葉住居跡群	51
第23図	03号住居跡	52
第24図	011・020・021号住居跡	53
第25図	縄文時代晩期前半住居跡群	54
第26図	α 30・ α 15号住居跡	55
第27図	07・08号住居跡	56
第28図	053号住居跡	57
第29図	06・ α 25・054号住居跡	58
第30図	09・010号住居跡	59
第31図	057・ α 24号住居跡	60
第32図	01・02号住居跡	61
第33図	65・66号住居跡	62
第34図	67・68・69・70号遺構	63
第35図	傾斜地住居跡群	64
第36図	縄文時代出土人骨位置	71～72

第37図	縄文時代人骨群	73～74
第38図	縄文時代墓域と周囲	75
第39図	縄文時代人骨出土状態	76
第40図	縄文時代墓域外・人骨出土状態	77
第41図	集落形成前土器群	79
第42図	集落形成前土器群（昭和58年度調査）	80
第43図	03号住居跡出土遺物	82
第44図	1号埋甕	84
第45図	2・3号埋甕	86
第46図	67号住居跡出土遺物	90
第47図	68号住居跡出土遺物	91
第48図	69号住居跡及びグリッド出土遺物	92
第49図	貝層出土及び主要縄文土器	93
第50図	N27グリッド出土縄文土器	95
第51図	O25・O24グリッド出土縄文土器	97
第52図	O23グリッド出土縄文土器	98
第53図	O22・O17グリッド出土縄文土器	99
第54図	O27グリッド出土縄文土器及び把手等土器部分	100
第55図	58年度包含層出土縄文土器	102
第56図	58年度包含層出土縄文土器	103
第57図	58年度包含層出土縄文土器	104
第58図	58年度包含層出土縄文土器	105
第59図	58年度包含層出土縄文土器	106
第60図	58年度包含層出土縄文土器	107
第61図	58年度包含層出土縄文土器	108
第62図	58年度包含層出土縄文土器	109
第63図	58年度包含層出土縄文土器	110
第64図	58年度包含層出土縄文土器	111
第65図	58年度包含層出土縄文土器	112
第66図	58年度包含層出土縄文土器	115
第67図	58年度包含層出土縄文土器	116
第68図	58年度包含層出土縄文土器	117

第69図	58年度包含層出土縄文土器	118
第70図	58年度包含層出土縄文土器	119
第71図	土製品及び土器の一部	126
第72図	土製品	127
第73図	土製品	128
第74図	土製品	129
第75図	土製品	130
第76図	土製品及び土器	131
第77図	石器	150
第78図	石核・剥片	151
第79図	石器	152
第80図	石核・剥片	153
第81図	石核・剥片	154
第82図	石剣・石棒	155
第83図	石斧・その他	156
第84図	石器	157
第85図	磨石・敲石等	158
第86図	台石・敲石・磨石	159
第87図	石皿	160
第88図	石皿	161
第89図	石皿・凹石	162
第90図	石皿等	163
第91図	石製品	164
第92図	骨角器	170
第93図	骨角器	171
第94図	貝製品	172
第95図	骨角貝製品	173
第96図	破壊骨	174
第97図	破壊骨	175
第98図	破壊骨	176
第99図	破壊骨及び骨格図	177
第100図	包含層出土縄文土器	180

第101図	包含層出土縄文土器	181
第102図	包含層出土縄文土器	182
第103図	包含層出土縄文土器	183
第104図	包含層出土縄文土器	184
第105図	包含層出土縄文土器	185
第106図	包含層出土縄文土器	186
第107図	包含層出土縄文土器	187
第108図	包含層出土縄文土器	188
第109図	包含層出土縄文土器	189
第110図	包含層出土縄文土器	190
第111図	包含層出土縄文土器	191
第112図	包含層出土縄文土器	192
第113図	包含層出土縄文土器	193
第114図	包含層出土縄文土器	194
第115図	包含層出土縄文土器	195
第116図	包含層出土縄文土器	196
第117図	包含層出土縄文土器	197
第118図	包含層出土縄文土器	198
第119図	包含層出土縄文土器	199
第120図	包含層出土縄文土器	200
第121図	包含層出土縄文土器	201
第122図	包含層出土縄文土器	202
第123図	包含層出土縄文土器	203
第124図	包含層出土縄文土器	204
第125図	包含層出土縄文土器	205
第126図	包含層出土縄文土器	206
第127図	包含層出土縄文土器	207
第128図	包含層出土縄文土器	208
第129図	包含層出土縄文土器	209
第130図	包含層出土縄文土器	210
第131図	包含層出土縄文土器	211
第132図	包含層出土縄文土器	212

第133図	包含層出土縄文土器	213
第134図	包含層出土縄文土器	214
第135図	包含層出土縄文土器	215
第136図	包含層出土縄文土器	216
第137図	包含層出土縄文土器	217
第138図	包含層出土縄文土器	218
第139図	包含層出土縄文土器	219
第140図	包含層出土縄文土器	220
第141図	包含層出土縄文土器	221
第142図	包含層出土縄文土器	222
第143図	包含層出土縄文土器	223
第144図	包含層出土縄文土器	224
第145図	包含層出土縄文土器	225
第146図	包含層出土縄文土器	226
第147図	包含層出土縄文土器	227
第148図	包含層出土縄文土器	228
第149図	包含層出土縄文土器	229
第150図	包含層出土縄文土器	230
第151図	包含層出土縄文土器	231
第152図	包含層出土縄文土器	232
第153図	包含層出土縄文土器	233
第154図	縄文時代後期斜面貝層の位置	238
第155図	斜面貝層とグリッド・トレンチの設定位置及び土壌墓	239
第156図	斜面貝層断面○23区～○26区	240
第157図	斜面貝層断面・南斜面	241～242
第158図	斜面貝層断面・東斜面	243
第159図	貝層サンプル採取位置	244
第160図	主要後晩期貝塚遺跡	245
第161図	弥生時代の集落	307
第162図	弥生時代環壕内の集落	308
第163図	弥生時代環壕外の集落	309
第164図	溝4（環壕）内貝層	310

第165図	弥生時代後期～古墳時代前期集落 1	314
第166図	弥生時代後期～古墳時代前期集落 2 及び遺構	315
第167図	38・39号住居跡	316
第168図	40・32号住居跡	317
第169図	58年度32・38号住居跡出土遺物	318
第170図	58年度39号住居跡出土遺物及び47年度出土遺物	319
第171図	47年度出土弥生土器	320
第172図	47年度出土弥生土器	321
第173図	47年度出土弥生土器	322
第174図	47年度出土弥生土器	323
第175図	47年度出土弥生土器	324
第176図	47年度出土弥生土器	325
第177図	47年度出土弥生土器	326
第178図	47年度出土弥生土器	327
第179図	47年度出土弥生土器	328
第180図	47年度出土弥生土器	329
第181図	α 1・ α 2・ α 3号住居跡及び井戸	330
第182図	α 5・ α 6号住居跡・4号溝	331
第183図	α 7・ α 8・ α 9・ α 10・ α 11・ α 14号住居跡及び溝 3	332
第184図	α 12・ α 13・ α 31号住居跡	333
第185図	α 19・ α 20・ α 33号住居跡	334
第186図	α 21・ α 22・ α 23号住居跡	335
第187図	α 26・ α 28号住居跡・地下式土壇墓	336
第188図	α 29号住居跡・土壇15（住居跡）	337
第189図	溝 5・方形周溝 2・ α 17・ α 18・他遺構	338
第190図	046・045・040号住居跡	339
第191図	049・019・05号住居跡	340
第192図	023・035・052号住居跡	341
第193図	018・024・025号住居跡	342
第194図	017・016・015号住居跡	343
第195図	034・04号住居跡 溝21	344
第196図	027・028・029・031・032号住居跡	345

第197図	030・033・050・051号住居跡	346
第198図	036・037・044号住居跡	347
第199図	039・038・026・021B号住居跡	348
第200図	041・042号住居跡	349
第201図	菊間古墳群とその位置	353～354
第202図	5号遺構（菊間天神山古墳）	355～356
第203図	74号（古墳）・43号（大型住居跡）遺構	357
第204図	58年度43号住居跡・41号周溝及び47年度出土遺物	358
第205図	47年度2号溝（周溝）出土遺物（第225図参照）	359
第206図	47年度出土2号溝（周溝）及び古墳時代遺物	360
第207図	47年度出土古墳時代遺物	361
第208図	47年度出土古墳時代遺物	362
第209図	47年度出土古墳時代遺物	363
第210図	47年度 α 10号住居跡出土遺物	364
第211図	47年度 α 10号・ α 20号住居跡出土遺物ほか	365
第212図	47年度出土古墳時代以降遺物	366
第213図	47年度古墳関連出土遺物	367
第214図	石製品及び金属製品	369
第215図	菊間天神山古墳（5号遺構）出土遺物	370
第216図	菊間天神山古墳（5号遺構）出土遺物	371
第217図	菊間天神山古墳（5号遺構）出土遺物	372
第218図	菊間手永台2号墳（74号遺構）出土遺物	373
第219図	菊間手永台2号墳（74号遺構）出土遺物	374
第220図	菊間手永台2号墳（74号遺構）出土遺物	375
第221図	菊間手永台2号墳（74号遺構）出土遺物	376
第222図	α 4・ α 32・土壇1号遺構	377
第223図	溝13号周溝	378
第224図	1号溝（周溝）・2号溝（周溝）	379
第225図	2号溝（周溝）周溝内土器出土状態	380
第226図	3号（周溝）・1・2号溝遺構	381
第227図	41号周溝（1号溝周溝）・42号道路遺構	382
第228図	平安時代住居跡と墓域	385

第229図	中世の墓域周囲	386
第230図	中世人骨出土状態	387
第231図	012・014号住居跡	388
第232図	013・022・048号住居跡	389
第233図	48G焼土群・8G焼土及びピット	390
第234図	土壌16・17・18・19・α27号住居跡	391
第235図	35・36・37号遺構平安時代遺物・その他	392
第236図	47年度013号住居跡出土及びその他平安時代遺物	393
第237図	23号人骨共伴及びその他平安時代遺物	394
第238図	古 代 瓦	395
第239図	古 代 瓦	396
第240図	古 代 瓦	397
第241図	古 代 瓦	398
第242図	平安時代土壌墓群	399
第243図	中世及び時期不明遺構	404
第244図	中世土壌墓群	405
第245図	〇12区ピット群及び30号土壌墓	406
第246図	6・7・8・9・10号土壌墓	407
第247図	11号土壌墓～24号土壌墓	408
第248図	25号土壌墓～28号土壌墓	409
第249図	中世土坑群	410
第250図	54・55・59号土坑	411
第251図	60号地下式坑及び位置図	412
第252図	51号土坑	413
第253図	中世土坑群	414
第254図	61・62・63・64号土坑	415
第255図	56号溝状遺構・57・58号土坑	416
第256図	中世土坑出土遺物・その他	417
第257図	中世土坑出土遺物	418
第258図	菊間手永遺跡出土ウミガメ製品部位・イノシシ製品部位 (Ⅶ. 市原市手永貝塚の動物遺体と骨格製品)	425
第259図	シカの四肢骨にみる打割り点の位置(同上)	428

第260図	手永貝塚植生図（Ⅸ．手永貝塚の植生について）	439
第261図	墓域部分出土人骨配列図（Ⅹ．市原市菊間手永貝塚出土人骨）	461

目 次

第1表	菊間手永遺跡縄文時代遺構	43
第2表	縄文時代出土人骨一覧（3枚表つづき）	67
第3表	菊間手永遺跡土製品一覧（5枚表つづき）	121
第4表	菊間手永遺跡石器一覧（15枚表つづき）	135
第5表	菊間手永遺跡骨角貝製品一覧（2枚表つづき）	168
第6表	貝層サンプル一覧	244
第7表	貝層サンプル内容物組成（3枚表つづき）	246
第8表	軟体動物出現一覧（3枚表つづき）	249
第9表	魚類遺存体出土量（昭和47年度）魚骨ピット外（5枚表つづき）	252
第10表	魚類遺存体出土量（昭和47年度）魚骨ピット（3枚表つづき）	257
第11表	魚類遺存体出土量（昭和58年度）貝層サンプル（13枚表つづき）	260
第12表	爬虫類・鳥類遺存体出土量（昭和47年度）（3枚表つづき）	273
第13表	ほ乳類遺存体出土量（昭和47年度）（3枚表つづき）	276
第14表	Sus（イノシシ）遺存体出土量（昭和47年度）（3枚表つづき）	279
第15表	菊間手永（昭和47年度）セ11（昭和58年度） イノシシ歯牙出土量上顎（2枚表つづき）	282
第16表	菊間手永（昭和47年度）セ11（昭和58年度） イノシシ歯牙出土量下顎（2枚表つづき）	284
第17表	Cervus（シカ）遺存体出土量（昭和47年度）（3枚表つづき）	286
第18表	菊間手永（昭和47年度）セ11（昭和58年度）シカ歯牙出土量上顎（2枚表つづき）	289
第19表	菊間手永（昭和47年度）セ11（昭和58年度）シカ歯牙出土量下顎（2枚表つづき）	291
第20表	Cervus・Sus（シカ・イノシシ）遺存体出土量（昭和47年度）（2枚表つづき）	293
第21表	爬虫類・獣類遺存体出土量（昭和58年度）貝層サンプル	295
第22表	鳥類・ほ乳類遺存体出土量（昭和58年度）（4枚表つづき）	296
第23表	菊間手永遺跡弥生時代遺構（環壕外）（環壕内）（2枚表つづき）	303
第24表	菊間手永遺跡弥生時代後期～古墳時代前期1・2までの遺構（2枚表つづき）	305

第25表	V字溝環壕内廃棄貝組成（弥生時代中期宮ノ台式期）（3枚表つづき）	311
第26表	菊間手永遺跡古墳時代後期～平安時代遺構	352
第27表	菊間手永遺跡金属製品一覧	368
第28表	菊間手永遺跡中世遺構一覧（2枚表つづき）	402
第29表	上段 菊間手永遺跡クロダイ前上顎骨長の階級の百分率表 中段 菊間手永遺跡包含層クロダイ前上顎骨長の階級の百分率表 下段 菊間手永遺跡マダイ前上顎骨長の階級の百分率表	424
第30表	菊間手永貝塚シカ歯牙分析	426
第31表	1. 2 シカ 齢査定関連 （Ⅶ. 1. 市原市手永貝塚の動物遺体と骨格製品）	427
第32表	赤色顔料分析の結果 （Ⅶ. 2. 菊間手永遺跡出土の赤色顔料関係遺物に用いられた赤色顔料）	430
第33表	手永貝塚植物目録（2枚表つづき）（以下Ⅸ. 手永貝塚の植生について）	443
第34表	－ 1. 1. イヌシデ林 － 2. 1. イヌシデ林の林床	445
第35表	－ 1. 2. ハンノキ林 － 2. 2. ハンノキ林の林床	446
第36表	－ 1. 3. クヌギ林 － 2. 3. クヌギ林の林床	447
第37表	－ 1. 4. アカマツ林A － 2. 4. アカマツ林Aの林床	448
第38表	－ 1. 5. アカマツ林B － 2. 5. アカマツ林Bの林床	449
第39表	6. マツ伐採跡	450
第40表	7. 耕 地 跡	450
第41表	縄文時代主要人骨の性別・年齢ならびに出土時の頭位と姿勢 （以下Ⅹ. 市原市菊間手永貝塚出土人骨）	455
第42表	中世人骨の性別・年齢ならびに出土時の頭位と姿勢	456
第43表	縄文時代人頭蓋の計測値と示数	456
第44表	縄文時代人の風習による抜歯型とその出現個体数	457
第45表	縄文時代人の風習により抜歯された歯の種類とその数	457
第46表	縄文時代人頭蓋における形態小変異の頻度	457
第47表	縄文時代人上腕骨の計測値と示数	458
第48表	縄文時代人橈骨の計測値と示数	458
第49表	縄文時代人尺骨の計測値と示数	458
第50表	縄文時代人大腿骨の計測値と示数	459
第51表	縄文時代人脛骨の計測値と示数	459

第52表	縄文時代人腓骨の計測値と示数	459
第53表	中世人骨3体の頭蓋計測値と示数	460
第54表	中世人骨頭蓋における形態小変異の頻度	460
第55表	中世人骨（男1体、女3体）の四肢骨計測値および示数	461

図 版 目 次

（遺物図版中の番号は挿図番号と符合）

図版 1	市原市菊間地域空中写真（昭和36年当時）（1：10,000）
図版 2	菊間手永遺跡（中央左）と菊間古墳群（1：5,000）
図版 3	菊間手永遺跡全景（昭和47年度 冬）
図版 4	上段 菊間手永遺跡から南東方向俯瞰 下段 菊間手永遺跡東方向俯瞰
図版 5	縄文時代住居跡及び遺物出土状態（8カット）
図版 6	縄文時代住居跡及び遺物出土状態（8カット）
図版 7	縄文時代住居跡及び遺物出土状態（8カット）
図版 8	縄文時代住居跡及び遺物出土状態（8カット）
図版 9	縄文時代埋甕・包含層遺物出土状態（8カット）
図版10	縄文時代人骨出土状態（7カット）
図版11	縄文時代人骨出土状態（8カット）
図版12	縄文時代人骨出土状態とイノシシ幼体出土状態（7カット）
図版13	縄文時代人骨出土状態と中世人骨出土状態（8カット）
図版14	縄文時代後期斜面貝層グリッド断面（8カット）
図版15	縄文時代後期斜面貝層グリッド断面（8カット）
図版16	弥生時代環壕及び遺物出土状態（8カット）
図版17	弥生時代住居跡及び遺物出土状態（8カット）
図版18	弥生時代住居跡及び遺物出土状態（8カット）
図版19	弥生時代住居跡及び遺物出土状態と方形周溝墓（8カット）
図版20	弥生時代～古墳時代前期住居跡（8カット）
図版21	古墳時代溝及び住居跡（8カット）
図版22	古墳時代住居跡及び2号周溝と土壌墓その他（8カット）
図版23	天神山古墳（5号遺構）及び3・13・5・1号周溝（8カット）

- 図版24 手永台2号墳（74号遺構）及び35・30・44土墳墓と40号住居跡（8カット）
- 図版25 古墳時代中期・平安時代住居跡及び遺物出土状態（8カット）
- 図版26 中世土坑墓群（8カット）
- 図版27 中世土坑墓群と中世造成凹地（8カット）
- 図版28 03号住居跡出土遺物
- 図版29 68号住居跡出土遺物・貝層及び包含層出土遺物
- 図版30 1・2・3号埋甕
- 図版31 縄文土器把手部分及び土製品
- 図版32 縄文土器片錘
- 図版33 土偶・耳飾・縄文土器片錘
- 図版34 縄文土器片錘・縄文土器片円盤・縄文赤彩土器・縄文土器蓋
- 図版35 縄文時代剥片石器と剥片及び石核
- 図版36 縄文時代石核・大型剥片・石棒・石剣・赤彩貝
- 図版37 縄文時代打製石器・磨製石器・石製円盤・磨石等
- 図版38 縄文時代磨石・石皿・凹石等
- 図版39 縄文時代磨石・石皿・凹石・大型砥石
- 図版40 縄文時代骨角貝製品
- 図版41 縄文時代シカ角加工品・オオハクチョウ上腕骨・貝刃・破壊骨
- 図版42 縄文時代破壊骨
- 図版43 縄文時代破壊骨
- 図版44 クジラ・ウミガメ・イルカ出土骨格
- 図版45 縄文土器把手・縄文時代晩期土器
- 図版46 縄文晩期安行3b式土器
- 図版47 縄文晩期安行3b式土器
- 図版48 縄文時代安行3b式土器～安行3d式土器
- 図版49 縄文時代安行3b式土器～前浦式土器
- 図版50 縄文時代安行3b式土器～前浦式土器
- 図版51 縄文時代安行3b式土器～前浦式土器及び弥生土器
- 図版52 弥生時代中期土器
- 図版53 弥生時代中期土器
- 図版54 弥生時代中期土器及び後期土器と古墳時代土器
- 図版55 古墳時代前期から中期土器

- 図版56 古墳時代前期から中期土器
 図版57 古墳時代中期から後期土器
 図版58 石製品・銅鏃・勾玉・鉄製品・弥生時代石器・平安時代土器・須恵器
 図版59 菊間天神山古墳（5号遺構）出土埴輪
 図版60 手永台2号古墳（74号遺構）出土埴輪
 図版61 手永台2号古墳（74号遺構）出土埴輪
 図版62 平安時代土墳墓及び住居跡出土土器・中世カワラケ・陶器
 図版63 中世陶器・茶臼片・五輪塔部分

以下 X. の「市原市菊間手永貝塚出土人骨」の挿入図版

- 図版64 1. 5号人骨（女）とイノシシの子（ウリボウ） 2. 51号人骨（女）
 図版65 3. 52-1号人骨（女） 4. 53号人骨（女）
 図版66 5. 60-1号人骨（男） 6. 63号人骨（女）
 図版67 7. 64号人骨（男）
 8. 73-1号人骨（女）、74号人骨（男）および75号人骨（女）
 図版68 9. 79号人骨（女） 10. 80号人骨（男）
 図版69 11. 83号人骨（女） 12. 84号人骨（男）
 図版70 13. 25号人骨（女）中世 14. 28号人骨（男）中世
 図版71 15. 76号人骨（女）中世 16. 82号人骨（女）中世
 図版72 17. 2号人骨（男）の上顎骨の前面観 18. 4号人骨（女）の頭蓋前面観
 図版73 19. 51号人骨（女）の頭蓋前面観 20. 52-2号人骨（女）の頭蓋前面観
 図版74 21. 52-2号人骨（女）の頭蓋右側面観
 22. 52-2号人骨（女）の上・下顎骨の左前面観
 図版75 23. 64号人骨（男）の頭蓋前面観 24. 73号人骨（女）の下顎骨の前面観
 図版76 25. 73号人骨（女）上顎骨の下面観 26. 78号人骨（男）の頭蓋前面観
 図版77 27. 78号人骨（男）の頭蓋右側面観 28. 79号人骨（女）の頭蓋前面観
 図版78 29. 79号人骨（女）の頭蓋左側面観
 30. 80号人骨（男）の上・下顎骨の前面観
 図版79 31. 79号人骨（女）の両側膝蓋骨関節面
 32. 66号人骨（男）の両側膝蓋骨関節面
 図版80 33. 28号人骨（男）の頭蓋前面観（中世）
 34. 28号人骨（男）の頭蓋左側面観（中世）

I. 調査に至る経緯

昭和57年11月30日付で、市原市下水道部下水道建設課は市原市菊間字北野谷貝塚台2,162番地ほか、字手永2184-2番地ほかの終末処理場関連工事に伴い、「埋蔵文化財の所在有無およびその取り扱いについて」の照会を、千葉県教育委員会教育長及び市原市教育委員会教育長に行った。それを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会文化課が現地調査した結果により、昭和58年1月20日付で「縄文時代散布地1カ所」の回答がなされた。回答に基づき、三者協議の結果、全域を記録保存する方針が決定された。

発掘調査は、財団法人市原市文化財センター理事長星野一郎が受託事業とし、本調査を昭和58年12月5日より昭和59年3月31日まで実施し、並行して整理を開始した。

また例言において触れたとおり、菊間手永遺跡は昭和47年度に菊間手永台貝塚として調査されている。それは千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報-47・48年版-（千葉県教育庁文化課）として掲載されている。それを再録し貝塚の貝種を追加するかたちで、千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書として昭和58年3月に千葉県教育委員会から手永貝塚として紹介されている。

一般向けには日本歴史地図（原始・古代編〈上〉）1982年のなかに、縄文時代主要貝塚の分布-南関東-の地図上に手永（縄文後期・鹹水）（1）として紹介され、縄文土偶の展開では手永は加曽利B様式に伴う山形土偶（2）が出土していることになっている。また縄文時代抜歯人骨の分布において、手永は抜歯様式Ⅰとして抜歯例数が5例（3）としている。弥生時代各期主要遺跡の分布-関東地方-〈1〉-は手永台貝塚（4）として地図上にある。これらの出版物があるが正式報告が未刊であるため、昭和59年5月20日付けで前任者と財団法人市原市センターが引継書を交わし、昭和47年度と昭和58年度の調査成果をあわせて整理報告することになった。 註（1）～（4）参照

注釈 引用参考文献

- （1）堀越正行ほか／解説・作図 「縄文時代主要貝塚の時期別分布」『日本歴史地図（原始・古代編〈上〉）』
1982.10 柏書房株式会社
- （2）植木 弘／作図・永峰光一／解説「縄文土偶の展開」 同上
- （3）春成秀爾／作図・解説「抜歯」 同上
- （4）熊野正也／作図・解説「関東の弥生式土器」 同上

Ⅱ．遺跡の地理的位置と歴史的環境

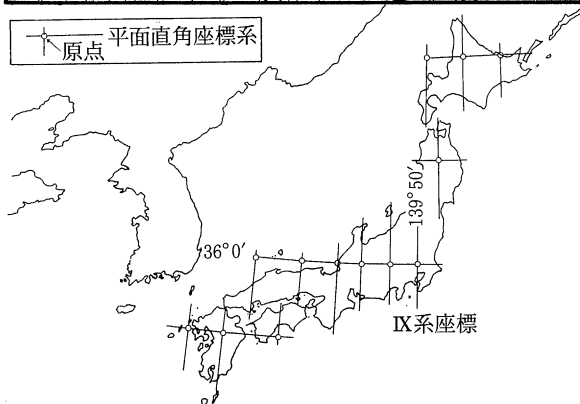
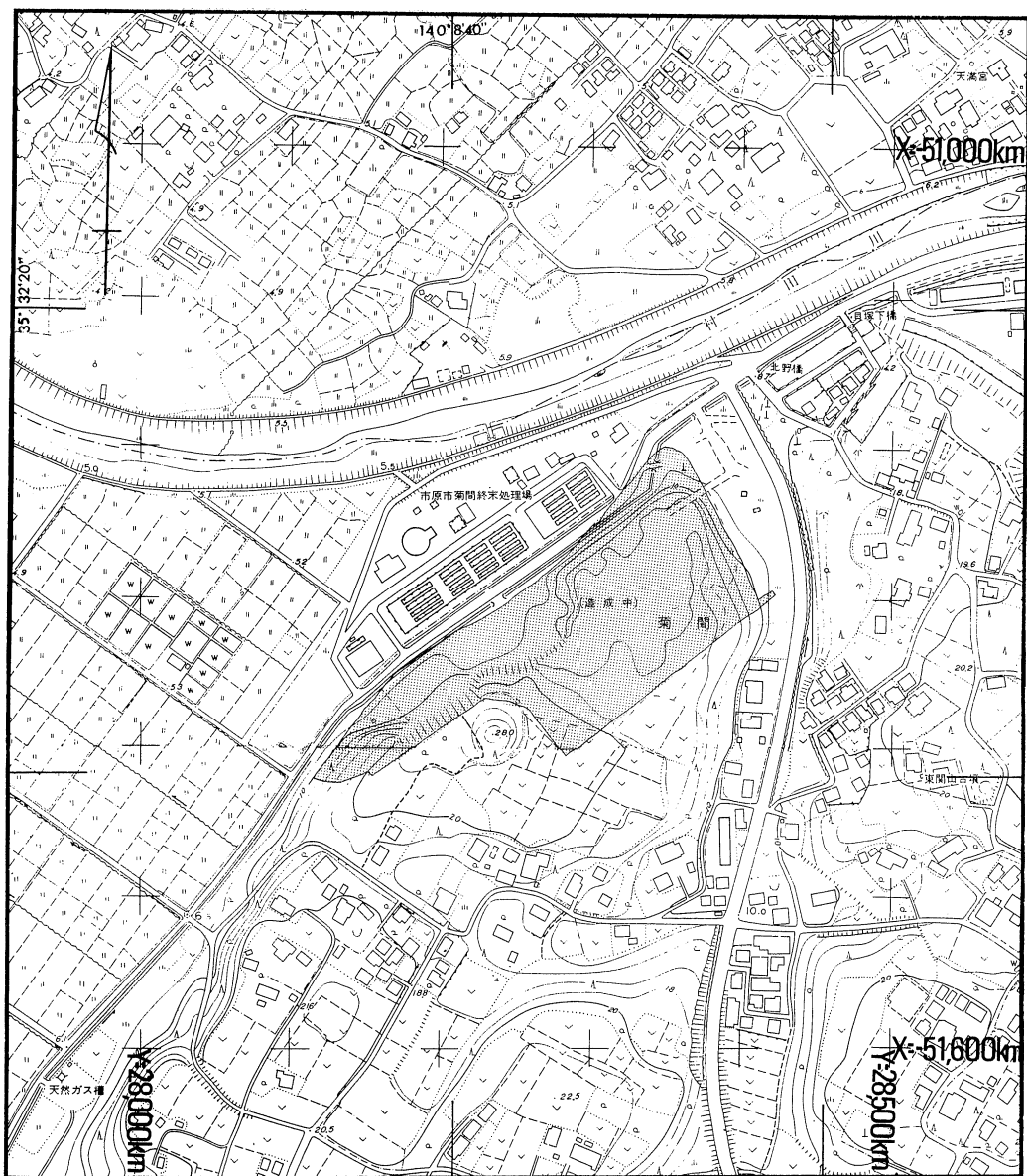
市原市は東京湾東岸、房総半島の西側中央、千葉県中央南西寄りに位置している。市原市北部地域は、北方向に千葉市・船橋市の東京湾東岸を望みながら筑波山が見える。西方向は東京湾を挟んで、丹沢山系大山の肩越しに富士山が遠望できる。(第1図参照)

市原市の中央部を南北に清澄山から養老川が流れ、北側の千葉市と市原市との間には村田川が古代の上総国と下総国の境界を沿って流れている。その養老川と村田川に挟まれた北部台地が市原台地とされている(5)。市原台地は東京湾東岸部分で縄文海進時に波蝕台を形成し、現在は海岸平野に面している。菊間手永遺跡は村田川左岸に位置し、市原台地の最北端の海岸平野を見下ろす標高16mから20mの関東ローム層の堆積する台地上にある(第2・3図参照)。台地上はローム面ではやや北方向に下り南側は高くなっている。これは台地東側に溺れ谷と呼ばれる侵刻谷が深く入り込み舌状の台地になっているためである。この台地上も先端部や両側縁部分には、浅い谷が切れ込んでいる(第4図)。それらは縄文時代集落住居遺構の立地を規制しており、くぼ地を避けて住居跡が展開している。

菊間手永遺跡の標高5mの海岸平野波蝕台面側は、比高差10mから15mと高く急峻である。東側は狭い幅の侵刻谷を挟んで、台地があり300mから200mの距離に菊間遺跡(第5図①)が存在する(6)。村田川の支流神崎川左岸の大厩遺跡(第5図②)や、右岸台地低位段丘上の潤井戸西山遺跡(第5図④)が弥生時代中期時期の遺跡では知られている(7・8)。弥生時代後期から古墳時代には、下鈴野遺跡(第5図⑤)や千原台ニュータウン遺跡群の草刈遺跡(第5図⑥)・草刈遺跡B地点(第5図⑦)・南二重堀遺跡(第5図⑩)等が存在する(9～12)。平安時代9世紀以降では千草山遺跡(第5図⑬)が南方向4kmにあり、国分寺台遺跡群とともに上総国府の外縁遺跡群を形成している。

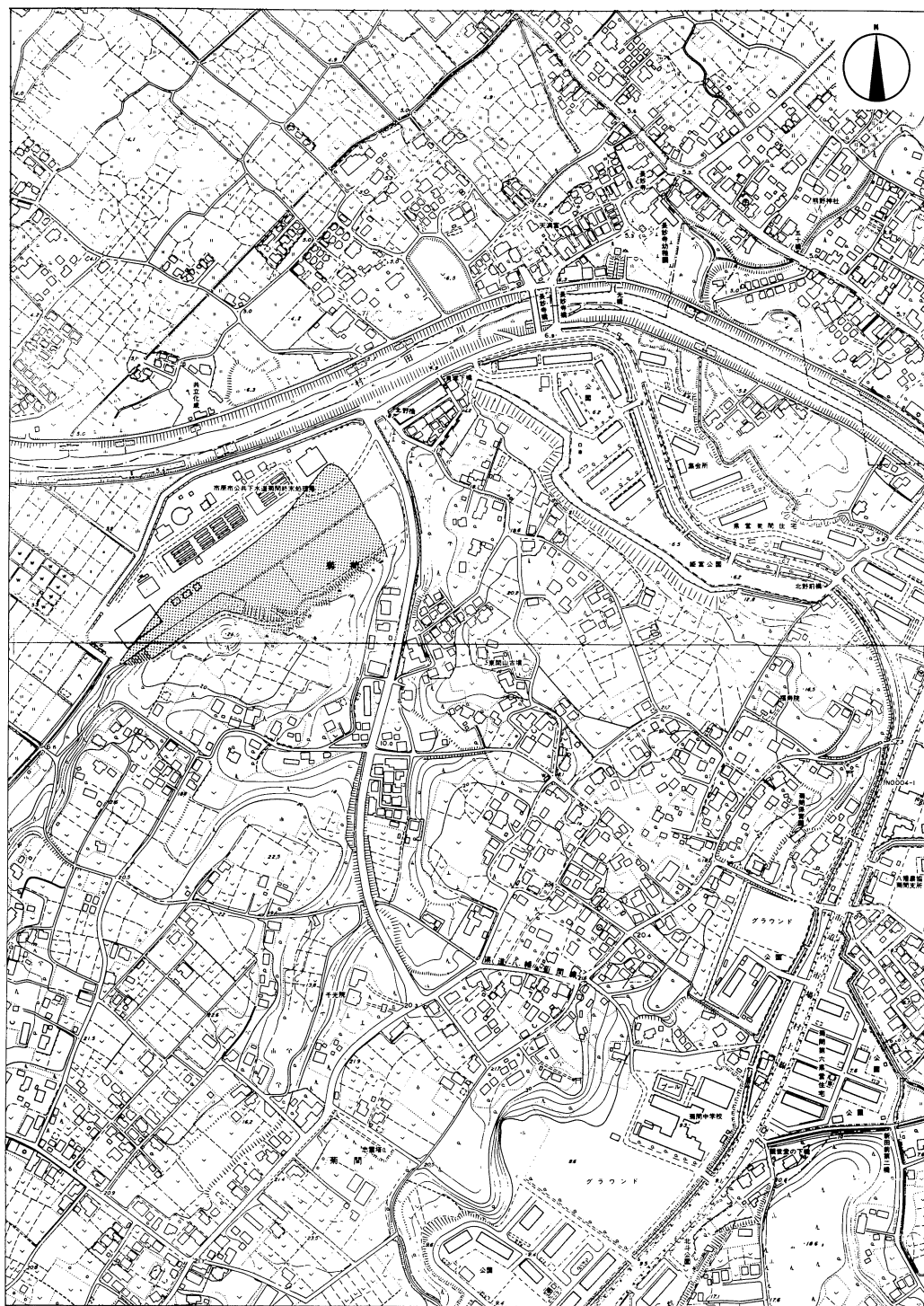
海岸平野部分の現村田川下流右岸には、現標高2.3m～2.5mある遺物検出面では0.6m～0.8mとなる低湿性遺跡の村田服部遺跡(第5図11)が古墳時代前期の資料を提供している(14)。この海岸平野を見渡す位置に菊間手永遺跡はある。国造本記に記されている菊麻国造の村田川左岸部分の墓域が現菊間古墳群となり、右岸地域の墓域には大覚寺山古墳(第5図12)や七廻塚古墳(第5図13)がある。

縄文時代後期の貝塚遺跡としては、村田川右岸下総台地の谷口から0.8km入ったところに木戸貝塚(第5図⑨)がある。同じ谷奥と別支谷との分水界には六通貝塚が位置している。これらは海岸平野から数百メートルから数キロ谷奥に入り込み、海が当時でも目視できない位置にある。その点では菊間手永貝塚は海岸線に非常に近い立地にあると言える。



- ・掲載地形図は昭和55年測図市原市地形図A 6・B 6による。(1:2500の1/2縮尺)
- ・網点トーンは調査範囲
- ・座標は平面直角座標系の関東地区第IX系座標による。
- ・左図は平面直角座標系の配点図
関東IX系座標は北緯36度0分(X座標0 km)
東経139度50分(Y座標0 km)

第1図 遺跡の平面位置 (1:5000)



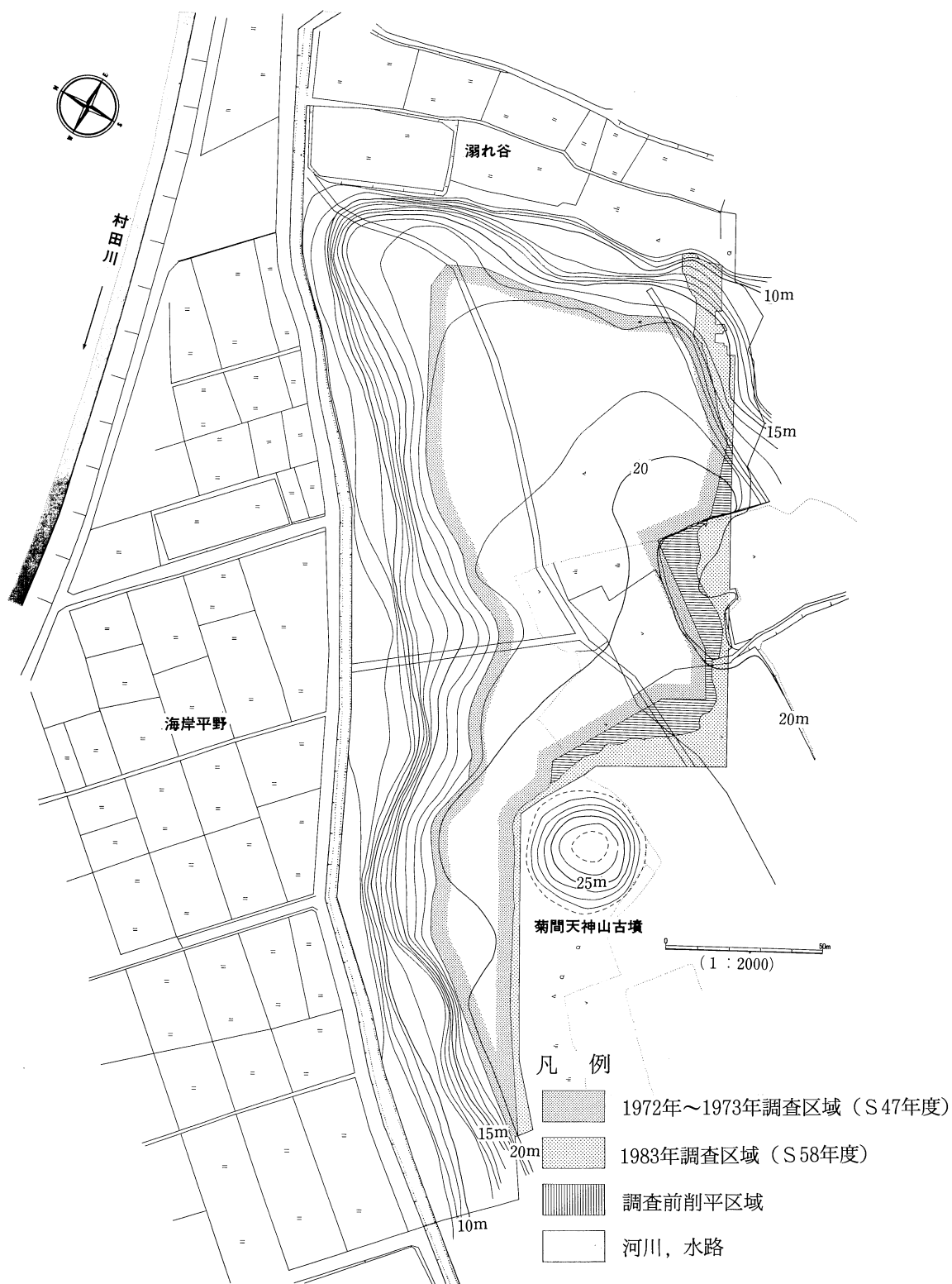
網目トーン菊間手永遺跡 (1985年当時)

0 100 200m

(1 : 7500)

(市原市地形図(1:2500) A 6, B 6)

第2図 地形と調査範囲



第3図 菊間手永遺跡調査前地形



第5図 遺跡の位置

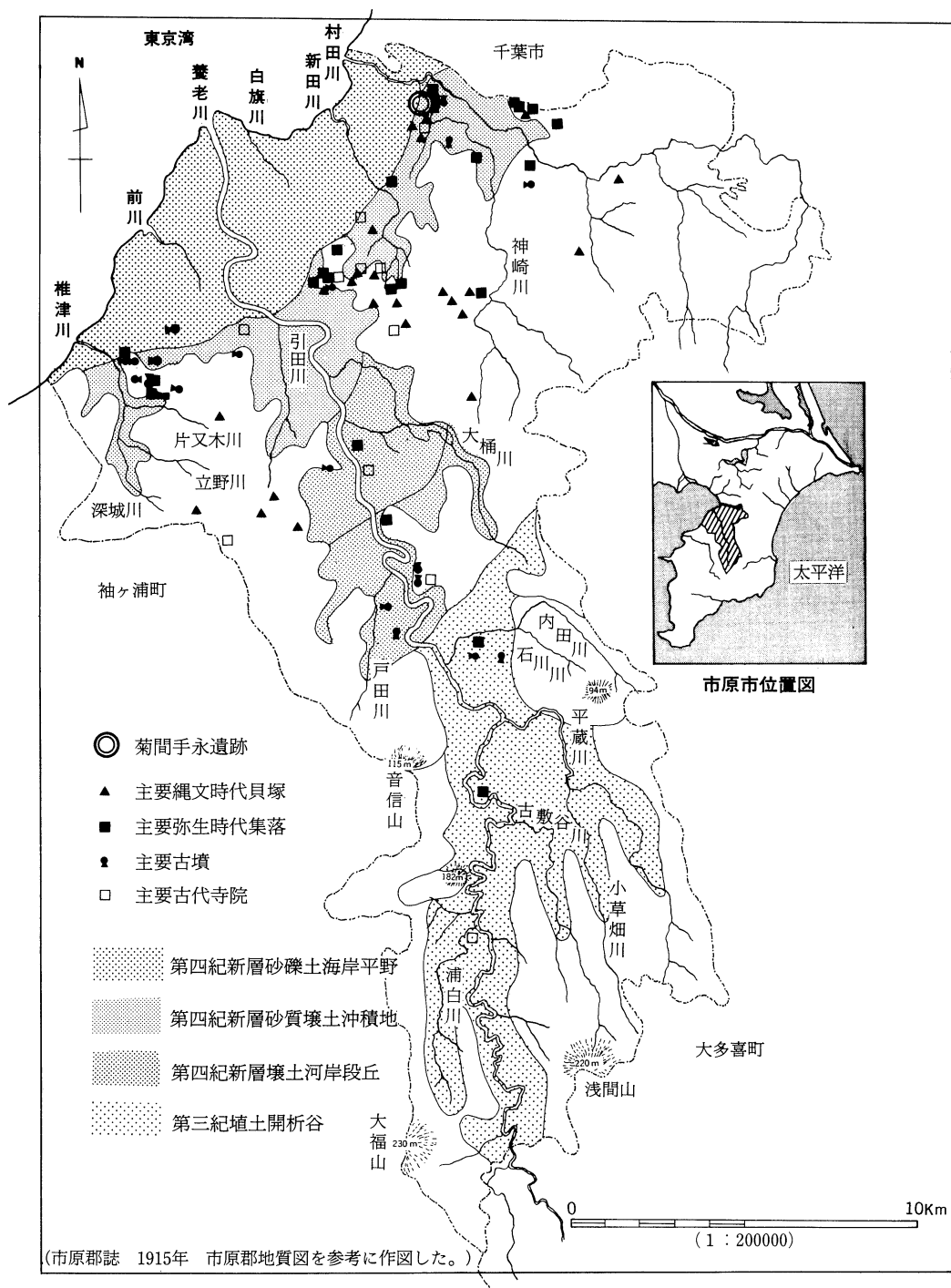
市原市の主要遺跡（第6図参照）

市原市の面積は366.631㎢あり、関東地方では横浜市に次いでひろく、南北距離35.93km、東西距離22.25kmある。市北部東京湾岸の地域は、養老川と村田川の三角洲と縄文海進時形成された海岸平野となっている。中央の養老川の西側左岸地域の姉崎台地の波蝕台は、ほぼ東西方向に形成され、海退時に砂堆を細長く東西方向5条以上残している。養老川東側右岸地域の市原台地の波蝕台は、北方向から東方向に約45度傾き、北東、南西方向に形成されている。これらの波蝕台は台地縁辺下において現標高5mあり、海岸部に向かって次第に低くなり現在のJR内房線付近の砂堆上では標高3m程になっている。

海岸平野の砂堆上では上海上国造の墓域であろう姉崎古墳群中最大領域の姉崎二子塚古墳や君塚古墳群が形成され、5世紀以降は地形的にかなり安定した状態になると思われる。養老川は海退後形成された砂堆と後背湿地のラグーンを埋積しながら破壊し、三角洲を形成しながら蛇行を繰り返し現在の位置になったもので、前川や白旗川は蛇行の跡と考えられる。これら蛇行や埋積を繰り返した部分には砂堆が認められず、失われてしまったようである。市原市域では現地表標高7m～8mまでは海進海退の影響を受けているようである。

養老川中流域においては姉崎、市原台地とも、養老川の開析蛇行によって河岸段丘が形成されている。標高80mを超える台地上は上位段丘面である姉崎面、やや下ると中位段丘面の市原面である。下位段丘面には南総面があり立川段丘面と比定されている。縄文時代後期の上高根貝塚はこの面に位置している（16）。ロームの堆積がない沖積層の段丘面現標高16mの山田大宮遺跡（17）では、弥生時代中期宮ノ台式期の方形周溝墓群が検出されており、集落の存在が想定される。

養老川上流と中流の境界には、谷口集落として成立したであろう上総牛久地域がある。養老川の支流、内田川の左岸標高50mの台地上、字江子田に南総中学遺跡がある（18）。海岸部から約30kmに弥生時代中期の集落遺跡と方形周溝墓群が形成された。水稻耕作の集団は水系を通じて早い段階に拠点集落を形成している。土器資料が少なく確定的ではないが、更に上流部に高滝ダム関連で調査された番後台遺跡（19）では、弥生時代中期には集落を展開している可能性がある。牛久地域には江子田古墳群（20）もあり、地域の首長墓が早い段階に形成される。弥生時代後期以降は、中流域上流域ともに集落が存在し、古墳時代集落へつながっていくことになる。



第6図 市原市主要遺跡

注釈 引用参考文献

- (5) 杉原重夫・細野 衛・桃木徳博「国分寺台周辺の自然地理」『南向原―上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ―』
1976.1 市原市教育委員会
徳橋秀一・遠藤秀典 1984.「姉崎地域の地質」『地域地質報告』地質研究所
- (6) 斎木 勝・種田斉吾・菊池真太郎ほか「菊間遺跡」『市原市菊間遺跡』1974.3 千葉県都市部・(財)千葉県都市公社
- (7) 三森俊彦・阪田正一・沼沢 豊・矢戸三男・菊池真太郎ほか「市原市大厩遺跡」1974.2 (財)千葉県開発公社・(財)千葉県都市公社
- (8) 鈴木英哲「潤井戸西山遺跡」1986.3 (財)市原市文化財センター
- (9) 大村 直「下鈴野遺跡」1987.3 (財)市原市文化財センター
- (10) 高橋康男「草刈遺跡」1985.3 (財)市原市文化財センター
- (11) 高田 博ほか「草刈遺跡B区」『千原台ニュータウンⅢ』1986.3 (財)千葉県文化財センター
- (12) 伊藤智樹「南二重堀遺跡」『千葉東南部ニュータウン10』1983.3 (財)千葉県文化財センター
- (13) 安藤鴻基・千草山遺跡発掘調査団「千草山遺跡」1979.3 市原市教育委員会
- (14) 金丸 誠・小宮 孟「千葉市村田服部遺跡」1985.3 (財)千葉県文化財センター
- (15) 郷田良一・小宮 孟「木戸作遺跡(第2次)」『千葉東南部ニュータウン7』(財)千葉県文化財センター
- (16) 近藤 敏「市原市の先土器時代」『市原市文化財センター研究紀要Ⅰ』1987.3 (財)市原市文化財センター
- (17) 米田耕之助「山田大宮遺跡」1986.3 (財)市原市文化財センター
- (18) 倉田芳郎・相京建史・岡村和子「千葉・南総中学遺跡」1978.7 市原市教育委員会
- (19) 藤崎芳樹ほか「市原市番后台・神明台遺跡」1982.3 (財)千葉県文化財センター
- (20) 金丸 誠「市原市雪解沢遺跡」1984.3 (財)千葉県文化財センター

先土器時代（第7図参照）

調査前にナイフ形石器が表採されていたので、上層遺構のない部分に2×4mのテストピットを8地点設定したが、包含層の存在は確認できなかった。テストピットの確認立坑のAとB（第7図）について図示した。AのⅠ層は灰褐色耕作土層、Ⅱ層は暗褐色土層になっており弥生時代の土器を含んでいた。BのⅠ層は黒色土層、Ⅱ層はなくⅢ層の黄褐色ソフトロームとなっている。Ⅲ層以下はA Bとも同じ層序を有している。Ⅳ層は褐色ハードローム層、Ⅴ層は暗褐色ローム層になっており第1黒色帯と考えられるがやや色が薄い。Ⅵ層は明褐色ローム層なので始良カルデラ起源のA T火山灰が多く含まれている層と考えられる。Ⅶ層は暗褐色ロームとなり黒みが強いので第2黒色帯に比定したい。Ⅷ・Ⅸ層は褐色ロームとなっている。

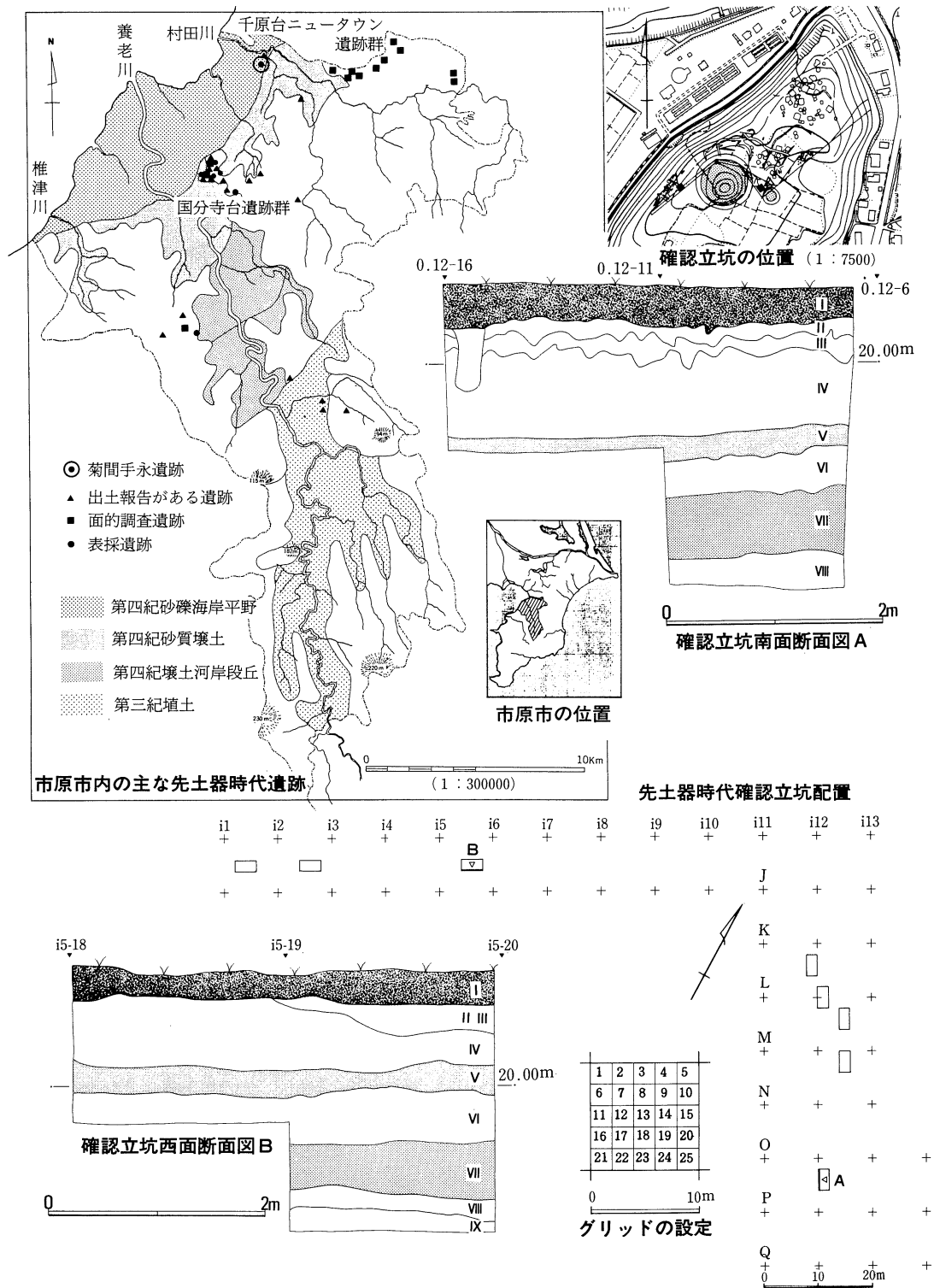
市原台地の関東ローム層の層序は基本的には、武蔵野台地と似通っている（16）。市原市内の先土器時代の調査（第7図上左）は、養老川下流右岸の市原台地西端域の国分寺台遺跡群と、(財)千葉県文化財センターが中心となって調査を進めている村田川中流右岸の千原台ニュータウン遺跡群の調査成果の一部が紹介されている（21）。

縄文時代（第8図参照）

市原台地及び手永貝塚周辺の貝塚遺跡の分布図（第8図）を示した。縄文早期条痕文系土器群の時期に1の村上諏訪台遺跡（22）と20の浜野川神門遺跡（23）がある。前期には遺跡が少ないが1の諏訪台には関山式期の環状集落が存在している。中期には環状貝塚とされる14の草刈貝塚（11）や5の山倉貝塚（24）、惣社南中ノ台貝塚（25）がある。後期になると国分寺台遺跡群の小支谷の台地上に、根田祇園原貝塚（26）や西広貝塚（27）があり、特に西広貝塚は晩期前浦式期の貝層も検出されている（28）。これら国分寺台遺跡群の貝塚は養老川右岸に位置しながらも、白旗川水系の小支谷に海岸部への接続連絡路を有していると思われる。

新田川は市原台地中央部の小河川で八幡方面に流れている。西側支谷水系の7は、門前貝塚（29）、6は山田橋亥ノ海道貝塚（30）となる。東側支谷水系では最奥部に8の能満分区貝塚と9の烏掘込貝塚（31）がある。この部分は村田川支流神崎川の支谷との分水界となっており、キサゴの貝ブロックがまとまって検出された10の小谷吹上遺跡や11の小田部貝塚がある。

村田川流域の右岸草刈貝塚の上流、支川村田川左岸に12の喜多多竜台貝塚が中段段丘上にあり、支川村田川と村田川の分岐部分の台地上に13の番場西鹿ノ原貝塚がある。現在の千葉市村田川下流右岸地域には細流のみであり下総台地の支谷が発達している。通称茂呂谷の南側支谷には15の杉ノ台貝塚と16の大膳野貝塚があり、北側支谷では17の六通貝塚と18の小金沢貝塚がある。通称イズミ谷の南側支谷では木戸作貝塚（15）がある。これら一連の貝塚群は東南部ニュータウン遺跡群として、(財)千葉県文化財センターが長期にわたる発掘調査と整理報告作業を続け



第 7 図 先土器時代

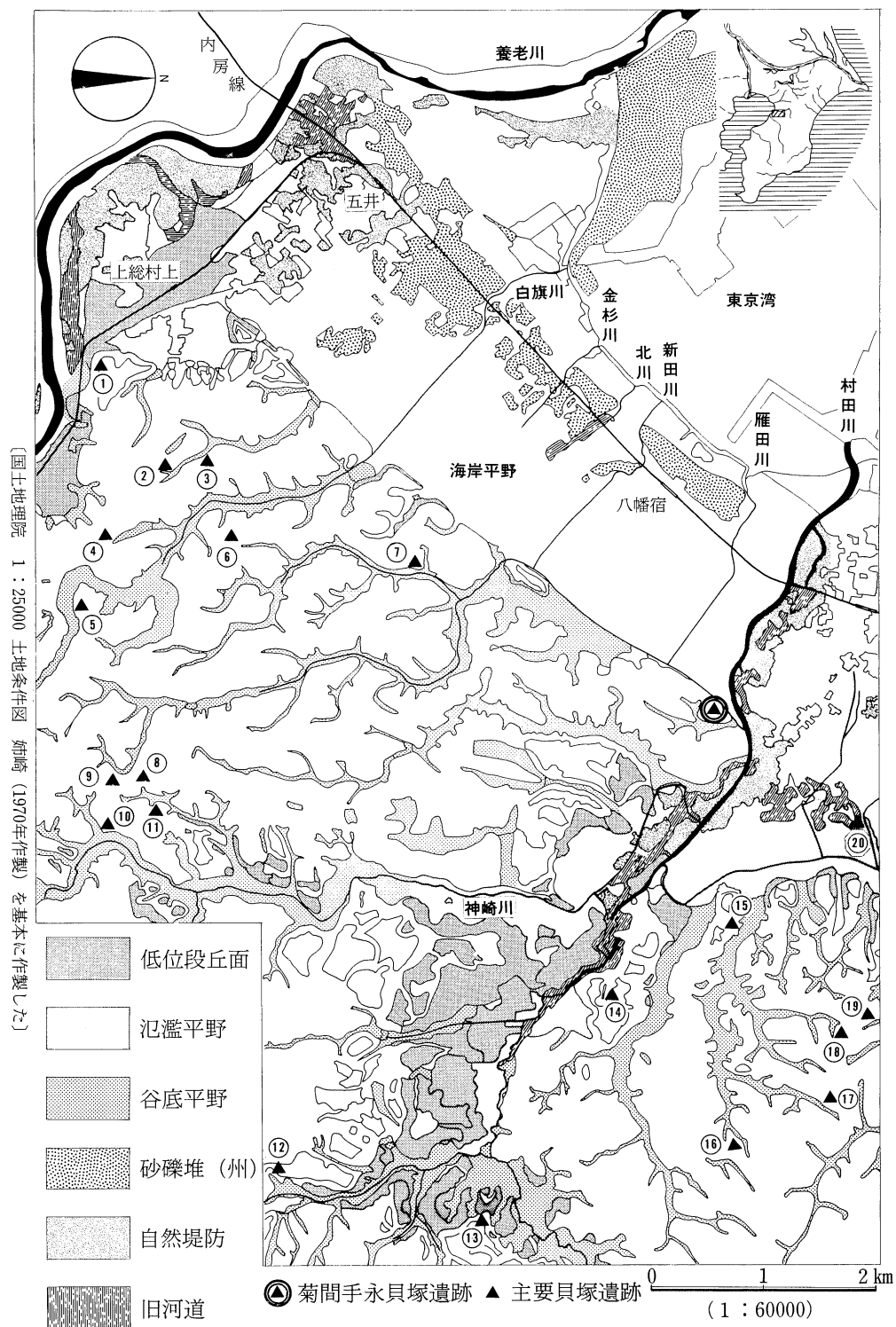
ている。特に詳細な木戸作貝塚の報告のなかで、縄文時代中期と後期の貝塚遺跡及び貝塚を有しない遺跡の比率において後期貝塚が多いことなど、千葉市都川水系との差異を指摘している。また沖積低地の支谷について調査をし古環境の復元をも試みている(32)。木戸作貝塚の形成された時期の貝塚の貝種と同じ貝が生息する地域は、各支谷が谷口が開く地域であり、木戸作貝塚より約1kmほど下ったところになる。

菊間手永貝塚の形成時期は、木戸作貝塚と比べると同時期かやや後になると考えられるが、縄文後期前半の堀ノ内1式期から2式にわたっていると考えられる。木戸作貝塚と手永貝塚は出土貝種もほぼ同種である。手永貝塚の立地は海浜に近いであろうが、手永貝塚の貝の捕獲地域は似たような立地ということになるだろう。

手永貝塚のラグーンを眼下に見渡す立地は市原台地の多くの貝塚の立地と大きく異なる。また海浜部に近いといっても、伊皿子貝塚(33)のように住居跡や遺物量が極端に少ないキャンプサイトではなく、遺物遺構もかなりあるので遺跡自体木戸作貝塚と性格は同じと思われる。

注釈 引用参考文献

- (21) 田村 隆・橋本勝雄「先土器時代」『房総考古学ライブラリー1』1984.3 (財)千葉県文化財センター
- (22) (財)市原市文化財センターが昭和61年度調査した。
- (23) (財)千葉県文化財センターが昭和61年度調査した。
- (24) 金子浩昌ほか「市原市山倉貝塚調査報告」1969.3 千葉県教育委員会内山倉貝塚調査団
- (25) 田中新史・宮本敬一「国分寺台周辺の環境および遺跡」『東間部多古墳群』1974.10 上総国分寺台遺跡調査団
- (26) 西村正衛「山倉貝塚、根田祇園貝塚、分廻貝塚」『千葉県史跡名勝天然記念物調査報告 第一輯 市原遺跡発掘調査概報』1949.3 千葉県教育委員会
- (27) 米田耕之助ほか「西広貝塚」1977.3 上総国分寺台遺跡調査団
- (28) 樋泉岳二「西広貝塚4次調査」『上総国分寺台発掘調査概報抜刷』1983.3
- (29) 市原郡教育会編纂「市原村誌」『千葉県市原郡誌』復刻 1985.7
- (30) 金子浩昌ほか「千葉県内貝塚一覧」『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』1983.3 千葉県教育委員会
- (31) 高橋康男「鳥堀込貝塚」『市原市文化財センター年報昭和60年度』1986.12 (財)市原市文化財センター
- (32) 松島義章「木戸作貝塚周辺の沖積低地」『千葉東南部ニュータウン7ー木戸作貝塚(第2次)ー』1979.3 (財)千葉県文化財センター
- (33) 中村若枝「微地形の復元」『伊皿子貝塚遺跡』1981.3 港区伊皿子貝塚遺跡調査会



第8図 縄文時代貝塚遺跡分布

弥生時代（第9図参照）

弥生時代は中期、宮の台式期以降の遺跡から散見される。中期の多く集落跡は海岸平野に近い沖積平野を見下ろす位置にあるか、中小河川のある台地の先端、開析谷の入り口部分台地上に位置している。その多くは環壕と呼ばれる断面V字形の溝状の遺構を有している。その中で養老川への独立丘状な台地先端部に位置している1の根田代遺跡は、環壕長短軸距離100m以上の大規模な集落である（34）。そこから東へ開析谷を隔てる状態に位置する2と3の加茂台遺跡も断面V字形の溝状の遺構を有している（35）。養老川右岸沿岸に北から根田代・加茂台遺跡があり、南に4の加茂御林跡遺跡がある（36）。7の上総国分僧寺域（37）を挟んで5の村上諏訪台（惣社天神台）遺跡へつながっている（39）。国分寺台遺跡群の弥生時代中期はこの部分を中心である。また、後期になると集落は、西広神社裏の西広貝塚遺跡まで広がっている（40）。ここは白旗川水系の開析谷の最も奥にあたる。養老川と白旗川水系との間に根田の開析谷があり、最奥部に8の惣社南中台遺跡（34の付記参照）と9の祇園原貝塚遺跡（41）が開析谷内の立地でありながら弥生中期から後期まで集落として存続する。根田の小支谷入り口の東側に11の郡本向原台遺跡（34）があり、一連の遺跡群と考えられる。

白旗川水系は国分寺台遺跡群地域と市原台地東側地域を分ける開析谷を形成している。10は山田橋巳ノ輪遺跡（25）であるが詳細は未整理なので不明である。12の山田橋宮前遺跡には後期の住居跡が検出され、15の山田橋表通遺跡（43）や19の能満東千草山・能満千草山（44）などに弥生時代後期の住居跡があり広い範囲に集落が広がる様子である。山田橋地区は白旗川と新田川の分水界となり各所に湧水がみられる。開析谷は開発前までは谷津田として利用されていた。新田川右岸の開析谷上の台地には17の能満唐崎台遺跡（45）、台地と海岸平野の接点付近には16の白船城跡遺跡（46）と20の若宮遺跡B地区（47）があり、遺跡群を形成している。

市原台地と下総台地の境界に村田川が流れており、左岸の海岸平野との接点に菊間手永貝塚と21の菊間遺跡（6）がある。村田川支流神崎川左岸の村田川の広い開析谷を見下ろす位置に22の大厩遺跡（7）があり、神崎川開析谷中流に23の小田部新地遺跡（48）が位置している。村田川右岸には海岸平野に出る直前に、下総台地の草刈の支台上に草刈遺跡群がある。その先端部に草刈遺跡F区がある（50）。中期に断面のV字溝と後期にも環壕らしき溝が検出されている。住居跡は先端部には中期後半の時期が多く、台地奥にいくにしたがって後期時期の集落が形成される。25は草刈遺跡（10）と26の草刈遺跡B区（11）である。27は草刈六之台遺跡（51）である。この部分は弥生後期以降の時期のみの集落形成であり弥生中期はない。28は草刈川焼台遺跡（52）で村田川右岸の広い中流域を見下ろすが、沖積平野ではなく氾濫原と低位河岸段丘面が広がった部分である。草刈遺跡群は弥生中期では有角石斧や環状石斧、弥生後期では小銅鐸が複数出土し、中核的要素を有した大拠点集落群を形成している（53～55）。

同じ村田川流域でも千葉市になる下総台地側の東南部ニュータウン遺跡群では、弥生時代遺跡が見当たらない。29はバクチ穴遺跡、30は御塚台遺跡であるが古墳時代以降の遺跡（56）であり、市原台地のように台地の侵刻谷奥深い地域まで弥生時代後期の集落が形成されるのと違い、千葉市下総台地南側は、弥生時代の様相が異なっている。

古墳時代以降（第10図参照）

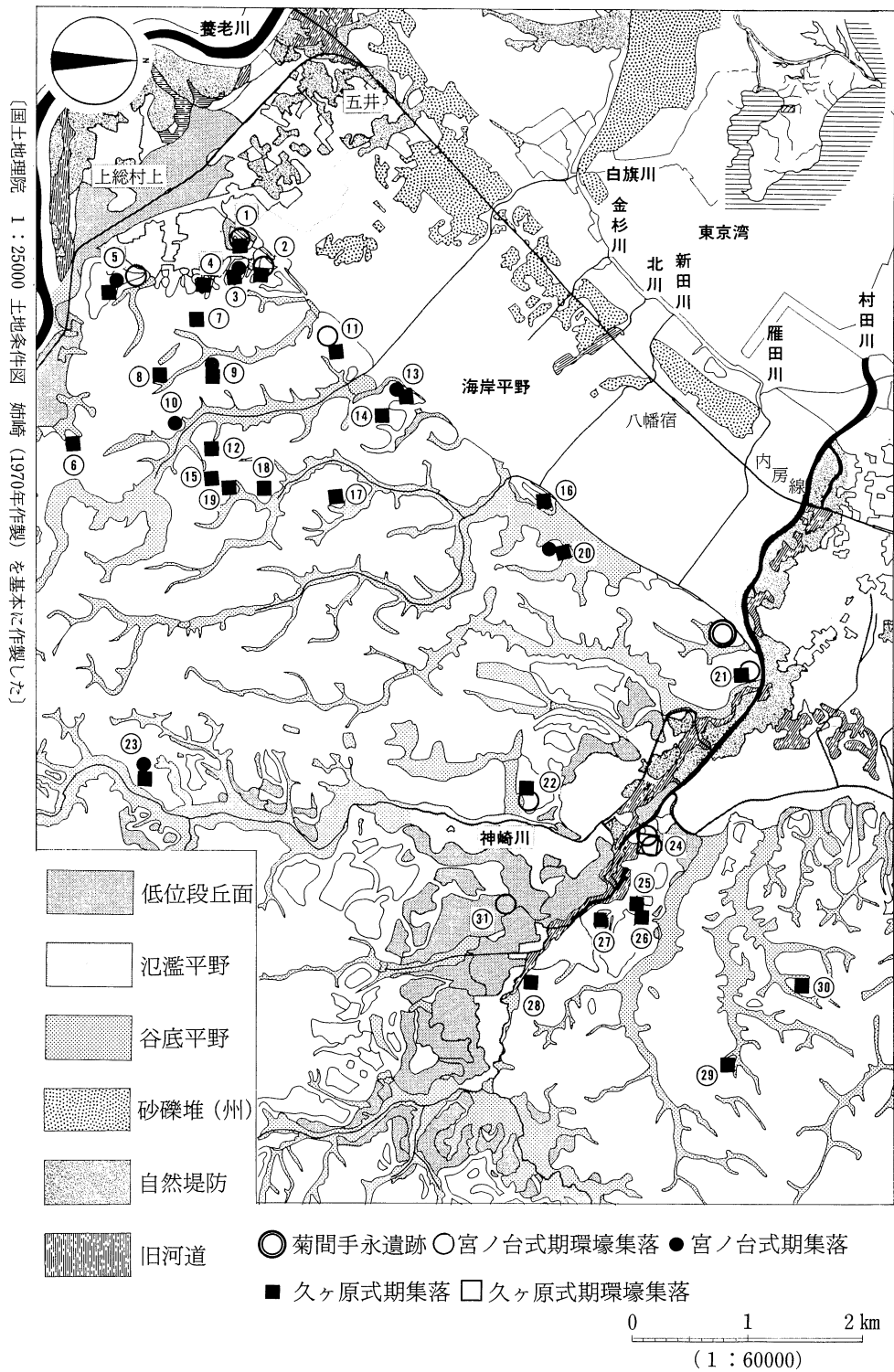
菊間手永遺跡調査当時の1/2,500基本図を縮小した現況図が第10図である。市原台地北端部村田川左岸の大字菊間地域が狭義の菊間古墳群であり、第10図の部分となる。5の新皇塚古墳は4世紀の前方後方墳と考えられるが、図の主軸は推定であり不明な点でもある（57）。菊間遺跡群の菊間古墳群は菊間遺跡（6）において3基検出され、そのうち5号周溝は埴輪を有し6世紀前半と考えられる。菊間手永遺跡は菊間遺跡から西方向へ開析谷を隔てて位置する。菊間字手永（第10図参照）に位置するのが菊間天神山古墳である。第9図の等高線区分によれば水利的には独立した台地に天神山古墳は選地され、台地下の海岸平野を見下ろす場所にある。出土した埴輪から5世紀後半の時期と考えられる。

当調査において検出された第74号遺構は、手永台2号墳として周知されている。古墳時代前期の大型住居跡に周溝の一部がほとんど重複している。埴輪が出土しており、菊間遺跡5号周溝と凸帯の形状が似ている。また富津市富士見台遺跡2号墳出土の埴輪とハケ調整の交差が類似している（58）。74号遺構は6世紀前半の時期と考えられている。菊間手永遺跡内には円形周溝状の遺構がほかにも複数検出されたが、これらを積極的に古墳とする資料がない。

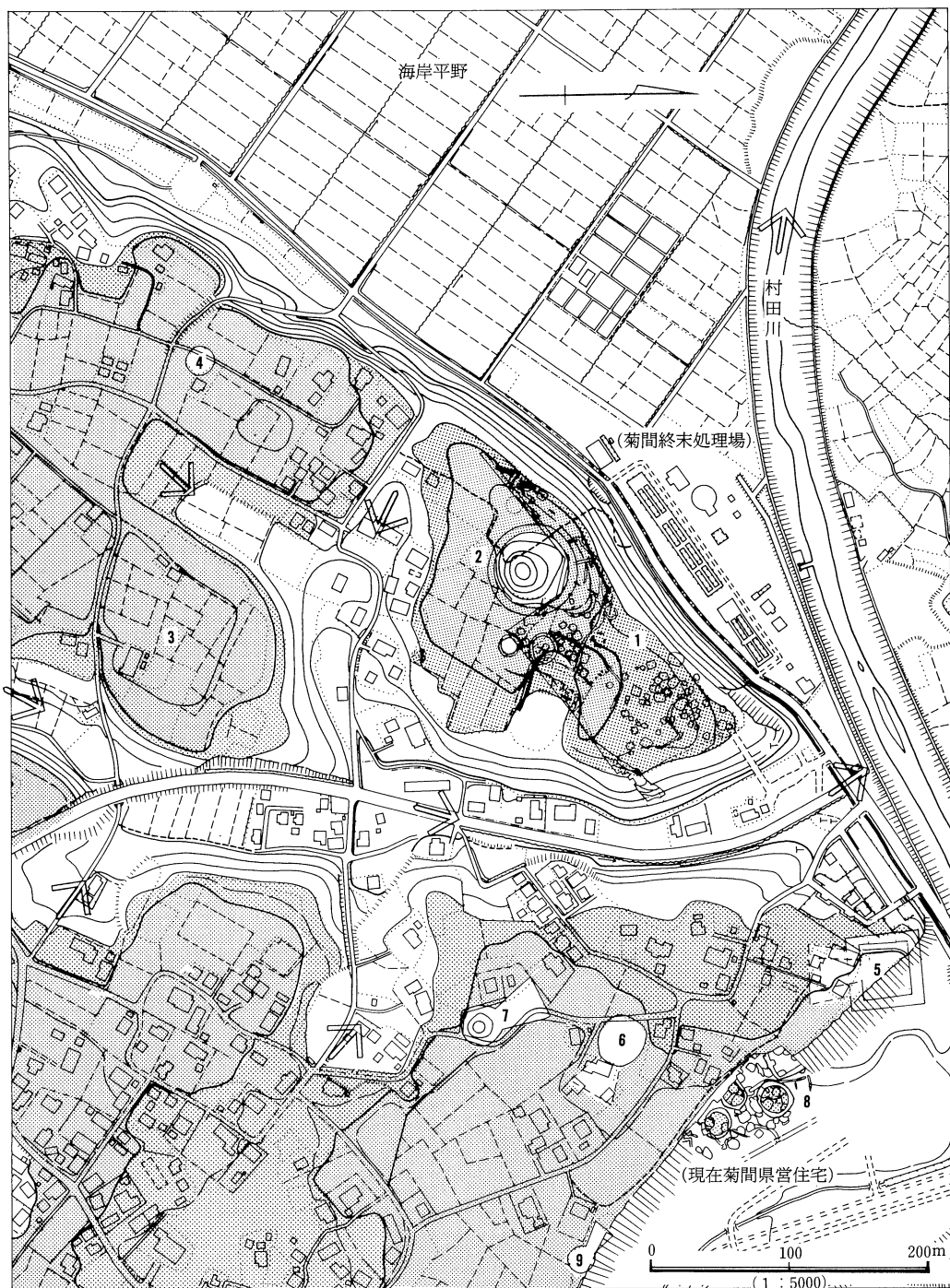
連続する台地上の侵刻谷奥部に瓦積基壇を有すると推定される菊間廃寺跡がある。現在でも布目瓦の平、丸瓦が採集でき、耕作者の話では機械が耕作できないほどの瓦の集積場所があると言う。上総国分寺と同型式の軒丸瓦を付近で採集している。菊間古墳群は削平された古墳が多いが、第11図の子字地番切り図で診る限り、第11図以外の大型の古墳は認められない。

菊間遺跡の東側は第11図では字刑部田となっており、村田川の蛇行跡のメアンダーとなっている。天王原は氾濫原であると考えられるが、地形の成立時期は不明である。菊間は台地上に近世以来集落が立地しており（第12図）、幕末の大政奉還後の沼津からの水野氏の転封のため菊間藩が明治初年に設置され藩庁が置かれた。そのためあってもか地形変化が多いと思われる。

菊間地域は位置的には現茂原街道の旧道の脇であり、それが近世の伊南往還であり古代では上総下総の境界線であった。菊麻国造の本拠地に比定されるのは、「キクマ」の「音」として菊間が残り、5世紀と考えられる古墳が集中するためである。しかし菊麻の国造の支配領域は村田川右岸部にも及んだと考えられ、千葉市の大覚寺山古墳や七廻塚古墳、上赤塚古墳群等が出土遺物や規模等から5世紀前後以降の意味ある古墳であろう。



第9図 弥生時代集落分布



標高20m内平坦地

標高19m内平坦地

水利方向

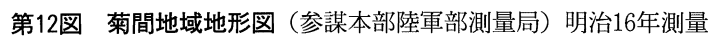
- | | | |
|------------|-----------|----------|
| 1. 菊間手永遺跡 | 4. 手永台1号墳 | 7. 東関山古墳 |
| 2. 菊間天神山古墳 | 5. 新皇塚古墳 | 8. 菊間遺跡 |
| 3. 菊間廃寺推定地 | 6. 権現山古墳 | 9. 姫宮古墳 |

〈市原市地形図A 6, B 6を基礎とした〉

第10図 菊間古墳群

-
2. 菊間天神山古墳
3. 菊間手永台古墳第1号墳
4. 新皇塚古墳
6. 権現山古墳
7. 東関山古墳
8. 姫宮古墳

第11図 菊間手永遺跡周辺小字切図



引用参考文献

- (34) 浅利幸一「根田遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』1981.3 市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団
- (35) 半田堅三「台遺跡A地点の調査・台遺跡B地点の調査」1977・「台遺跡A地点の調査」1978.3『上総国分寺台調査概報』市原市教育委員会 上総国分寺台遺跡調査団
- (36) 谷島一馬「御林跡遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』1979.3 同上
- (37) 須田 努「上総国分僧寺跡」『上総国分寺台発掘調査概要IX』1982.3 同上
- (39) 平野元三郎・谷島一馬ほか「天神台遺跡発掘調査概報」1975.3 同上
- (40) 米田耕之助「西広貝塚第2次調査」『上総国分寺台発掘調査概報』1981.3 同上
- (41) 鷹野光行・小川静夫ほか「祇園原貝塚・祇園原貝塚Ⅱ」『上総国分寺台発掘調査概要V』1978.3・1979.3 上総国分寺台調査団・市原市教育委員会
- (42) 對馬郁夫ほか「宮前遺跡第1次・第2次調査報告」1976.3 市原市教育委員会・国分寺台土地区画整理組合
- (43) 近藤 敏「山田橋表通遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』1986.12 (財)市原市文化財センター
- (44) 田中清美「千草山遺跡」『市原市文化財センター年報昭和60年度』同上
- (45) 鈴木英哲ほか「唐崎台」1981.3 唐崎台遺跡発掘調査団 市原市教育委員会
- (46) 高橋康男ほか「白船城跡第1次」1987.3 (財)市原市文化財センター
- (47) 市毛 勲・滝山昌彦「若宮遺跡(B地区)」『市原市文化財調査報告書第3冊市原市周辺の調査』1967.3 市原市教育委員会
- (48) 山口直樹「小田部新地遺跡」1984.3 (財)市原市文化財センター
- (49) 鈴木英哲「潤井戸西山遺跡」1986.3 (財)市原市文化財センター
- (50) 「草刈(F区)遺跡」『千葉県文化財センター年報No.10・No.11』1985.9・1986.12 (財)千葉県文化財センター
- (51) 「草刈六之台遺跡」『千葉県文化財センター年報No.6』1982.3 同上
- (52) 「草刈古墳群」「草刈川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報No.9・No.10・No.11』1984.9 1985.9 1986.12 (財)千葉県文化財センター
- (53) 榊原弘二・山口典子「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」『研究連絡誌第7・8合併号』1984.3 (財)千葉県文化財センター
- (54) 榊原弘二・土屋潤一郎・宮城孝之「市原市草刈遺跡出土の有角石斧について」『研究連絡誌第12号』1985.3 (財)千葉県文化財センター
- (55) 相京邦彦・白井久美子・金子 進「川焼台遺跡出土の2号銅鐸について」『研究連絡誌第15・16号』

1986.3 勸千葉県文化財センター

(56) 千葉県埋蔵文化財分布地図(2)―千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区― 1986.3 千葉県教育委員会

(57) 斎木 勝ほか「新皇塚古墳」『市原市菊間遺跡』1974.3 千葉県都市部・勸千葉県都市公社

(58) 君津郡市文化財センター諸墨知義氏よりご教授

諸墨知義「富士見台遺跡」1987.3 勸君津郡市文化財センターより刊行予定

Ⅲ. 調査の方法

1. 調査の経過

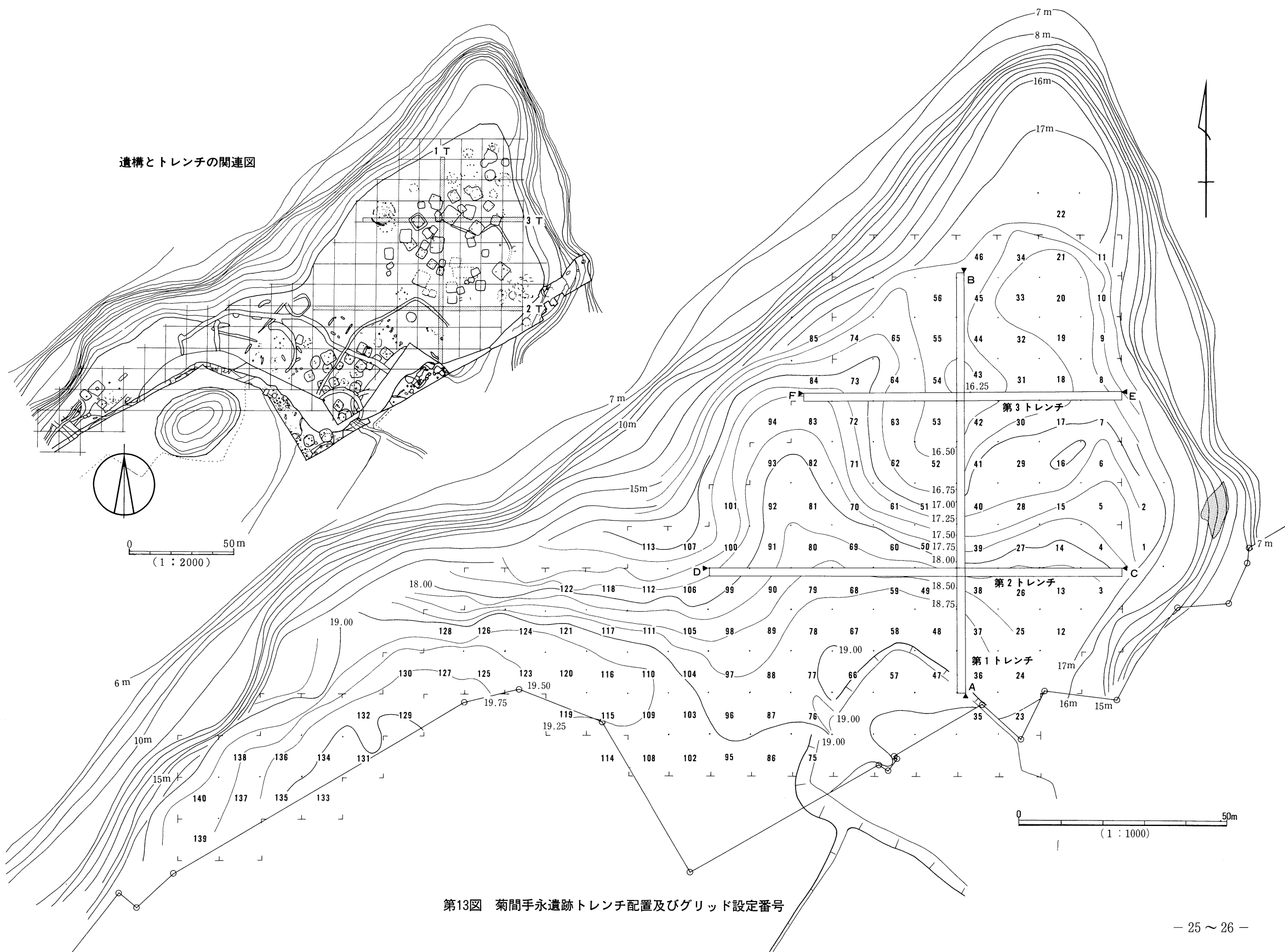
調査に至る経緯については、第Ⅰ章に簡単に述べたが、ここでは調査方法について説明する。昭和47年度調査は発掘調査前に昆虫の蝶類・多足類の調査や、削平される台地部分の植生調査を行なっている。10年あまり経過しての調査報告書の作成なので編集者が当時の調査担当者に連絡確認し、昆虫については調査者の意向で今回割愛し、植生調査は当時の原稿を調査者の田辺盛光氏によって一部手直しして頂き、Ⅸ章に掲載されることになった。また出土人骨調査については発掘調査途上から調査参加をお願いしてあった、森本岩太郎・小片丘彦・平田和明・吉田俊爾各氏に原稿作成をお願いし、昭和58年度出土人骨等もあわせてⅩ章に掲載されている。貝塚出土の動物遺存体等は、昭和47・58年度を合わせた整理分析の段階から金子浩昌氏にお願いし、貝類・ほ乳類・魚類と骨角貝製品にわたるまで、分類作業・同定作業一部作図まで関わって頂いた。その成果は挿図・分類分析表その他に反映され、Ⅶ章の1に掲載されている。

2. 発掘調査の方法

調査対象地域は、菊間手永遺跡全体では約15,000㎡あり、そのうち2,984㎡が昭和58年度の調査対象面積であった。調査対象地区には昭和47年度の1、2次調査時に10m方眼と昭和58年度の3次調査時に10m方眼の調査用グリッドが設定されたが、公共座標位置の数値を有していない。そのため遺跡の位置は第1図における2,500分の1の精度の市原市地形図に填め込まれたものが全てである。恐らく昭和47年度調査時は磁北方向に南北のX軸を設定し、それに直行した東西のY軸を設定し、第13図の調査区グリッドを配置したものと思われる。昭和47年度調査遺物は注記においてこれに従っている。

昭和58年度調査は菊間手永遺跡47年度調査対象地域に対する南側縁辺の外周道路建設であり、既に昭和47年度調査地区は土取り造成工事後のため約10mの比高差のある崖状下に削平されていた。そのため昭和58年度調査対象地域は、約8m幅ほどの延長350mと細長い調査区となったため、工事区間中央の道路用地直角クランクにあわせて第4図のようにX軸が磁北から西へ約40°傾いた状態のX・Y軸を設定した。そしてX軸を北からA～Qのアルファベット、Y軸を西から1～30のアラビア数字として、西側調査区では第7図のグリッド調査区を設定した。また東側調査区の貝層部分と斜面包含層では第155図の設定において遺物等を取り上げている。中央部については調査中の帰属不明の遺物を設定調査区名によって取り上げを行なった。58年度調査遺物は注記においてこれに従っている。

昭和47年度調査は第13図にある第1トレンチA～B・第2トレンチC～D・第3トレンチE



～Fを表土除去前に設定し、遺跡の断面図（第14図～第16図）を作成している。その後、関係者の話によると、重機のブルドーザーによる表土除去を行なっている。また発掘調査中にも小型のハンドブルドーザーによって調査区外に排土の除去をしていたようである。昭和58年度は昭和47年度の調査結果をもとに確認調査なしで本調査を開始し、0.4のバックホーとホイールキャリアによる表土除去を中央部と西側調査区において行ない、斜面貝層が存在する東側調査区は人力による表土除去を行なった。

昭和47年度調査の引き継ぎ資料の中には、表土除去に先行するトレンチ調査の土層断面図は含まれていたが、各遺構の土層断面図は皆無であった。平面図には各遺構のエレベーションポイントとそれに伴う立断面図はあるので、各遺構の埋積状態を示す土層断面図は無いものとして判断した。そのため第1トレンチから第3トレンチの土層断面図は重要なので、第14図～第16図は調査時作成図1/10スケールではあるが1/100縮尺によって集成し掲載した。

第1トレンチは調査区東半分の1次調査区域中心の南北に設定され、南側Aから北側Bに向かっている。第14図の第1トレンチ断面図の説明をする。上段Aから2の混貝黒色土層、3はやや黒褐色土層で若干貝が混じる。4は黒褐色土層、4の番号下の2基あるピット状落ち込みの右側の充填土は褐色である。2層中のやや浮いた標高19.5m付近のものは焼礫である。この付近は中世時期の焼土や土坑が多い地区である。5は褐色土層であり、1は貝層となっている。1の貝層下にある溝状遺構の断面は平安時代から中世時期と考えられる3号溝である。溝内は黒褐色土覆土と茶褐色・褐色土に中位まで埋められている。下位はローム粒まじりの褐色・黒褐色土となり、最下部はロームブロックまじりの褐色土となっている。

3号溝から北側の2の貝層部分は貝が密になっている。3は混貝黒色土層、4は黒褐色土層である。第14図2段目の6は混貝褐色土層で下位に褐色土層がある。2は混貝黒褐色土層である。7・8はロームブロック入りの褐色土層、7は褐色土層である。7の上位には黒褐色土層が覆う。8はロームブロック層、9は固く締まった褐色土層であり、上位に褐色土層が覆う。4は黒褐色土層である。第14図3段目は変わらず2の混貝黒色土層が表土状に覆い、その下位に混貝やや黒褐色土がある。4は黒褐色土層であり、下位に褐色土がある。029号住居跡の8はロームブロックとなり、その上位に黒褐色土が覆い、その上にレンズ状にロームブロック入りの黒褐色土が遺構を完全に埋没させている。029号住居跡は古墳時代前期を想定している。9の固く締まった褐色土層は029号に切られている。029号の遺構確認面は、表土上面より約130cmとなり、表土層以外に中位に黒褐色土層と下位に褐色土層が覆うことになる。

第14図4段目には前トレンチまであった1層の貝層、2層の混貝黒色土層がなくなっている。これは貝層を形成していた手永貝塚の貝が第1トレンチ南側周辺に偏在していたことを示し、後世に台地中央部の凹地拡散したためであると考えられる。また4層の黒褐色土の層序中に貝

の混入がないことを考えると4層の黒褐色土層堆積以後に貝塚の貝層が拡散したと考えたい。

貝塚の形成時期は、4層の黒褐色土の形成時期後となるわけであるが、この4層は古墳時代住居跡の上位になることから、時期に矛盾が生じてしまう。同様な黒褐色土が2時期あるならばその分離をしなくてはならない。

第14図4段目には弥生時代と想定した023号住居跡がある。その上の表土は黒色土層があり、下位に北側から10層の貝層が広がっている。貝層下は4層の黒褐色土層である。7層は褐色土であり023号住居跡の覆土となっている。貼床は茶褐色土である。ここで古墳時代の029号と弥生時代の023号において、7層の褐色土のあり方について時期が矛盾している。

第14図5段目には4層上にある貝層のつづきとその貝層を攪乱した穴がある。攪乱坑は表土上から4層の黒褐色土及び7層の褐色土からローム層まで達しているため新しい時期のものであろう。ローム層上の9の固く締まった褐色土層の上の褐色土に5層名をつけた。7層の褐色土に矛盾が生じるため褐色土も2時期以上設定した。南から北方向にローム上面は第13図の等高線が示すとおり19.3mから16.5mと3m近く下った。表土上面も2mほど傾斜している。標高において高位な地点でも低位な地点でもローム・褐色土・黒褐色土の順番は変わらず、凹地部分に時期が異なる褐色土が存在すると思われる。その褐色土堆積部分に029号・023号住居跡が立地するが、7層の褐色土層が土層切りあい認定が難しい新期テフラ層ではないかと考えられる。しかし7層を新期テフラ層とすると上位の4層の黒褐色土層と貝層の関係を明らかにする必要がある。

第2トレンチは第13図のC～Dの台地上の高位部分の東から西方向の遺跡断面となる。第15図の1段目の始まりCは、4グリッド中にあるので縄文時代の人骨集中地区の南端にあたる。そのため第37図に断面図を再録している。網点部分は貝が混じる土層を示す。1は混貝土層、2はソフトローム漸移層である。部分的に攪乱と思われる落ち込みがあり、ソフトロームと貝が混じり合う。調査時の写真に4グリッドの混貝土層から出土した加曽利B式期の小型の浅鉢がある。

第15図2段目の1は混貝土層となっており、大きく落ち込むが遺構とは伴っていない。落ち込みの西側にはやや乱れた層に4の軟質の茶褐色土があり、2段目西端の5は固い赤褐色土なので攪乱層である。その東隣に1の混貝土層が分離されて、上下に分かれ上位に貝層、下位に混土貝層がある。第15図3段目の6は貝層でありまとまりがありそうである。6の下位の西側は褐色土でありその下はソフトロームとなっている。6の上位は微量の貝を含む固く締まった茶褐色土であるので、広く攪乱された部分であろう。

第15図3段目の7は2段目から続く上位の攪乱層であり、固く締まった混ローム茶褐色土である。貝層は含まず部分的に下位のソフトロームまで攪乱が及んでいる。しかし一部に焼土や

混土貝層、混貝土層が残存している。8は褐色土層である。

第15図4段目の7は2段目から続く上位の攪乱層であり、固く締まった混ローム茶褐色土である。下位にソフトロームがあるが広く攪乱されており、7付近は深い攪乱がある。第2トレンチ西側残り5m付近は4の茶褐色土層、2のソフトロームとなっており、第1トレンチの下部の土層状態と似ている。

第3トレンチは第13図のE～F間の遺跡の立地する台地上の北部分あたり、東西に配置されている。そして北から入る凹地の最低部を横断する。第16図1段目の始まりEは遺跡の立地する台地上東側の傾斜変換部分にあたり、斜面に向かって貝層が厚く堆積する様子が見られる。Eは第154図の貝層より北方向へ30mほどにあたるため、緩斜面部から急斜面部にかけての貝層が東側斜面部にかけて広がっていたと考えられる。

第3トレンチの第16図1段目の1は混貝茶褐色土層になっており、その貝層内において上位にロームまじりの混貝茶褐色土層と混貝茶褐色土層に分離されている。2は茶褐色土層、3はロームまじりの茶褐色土層になっており、3層下はローム漸移層になる。2の茶褐色土層下はロームへの掘込みが多く、微量に貝を含む褐色土層がある。4は混貝表土層になり、その下に1の混貝茶褐色土層、その下位に微量に貝を含む褐色土層になり、よく締まった茶褐色土層がその下にある。

第16図2段目は4の混貝表土層、その下1の混貝茶褐色土層、その下位に5の微量に貝を含む褐色土層、その下によく締まった茶褐色土層があるという層序が安定する状態に見えるが、その下に連続して弥生時代と想定される018号、023号住居跡がある。018号住居跡中8の覆土は軟質の褐色土である。018号、023号住居跡の覆土上部には完全によく締まった茶褐色土層が存在している。

第16図3段目は混貝土層が漸移的に消えていく。層序の切り合い関係が明確でないため、網点部分に線書がないのであろう。貝層の分布主体が東側に偏在することの表れであらう。7の軟質茶褐色土の下位は褐色土、その下に焼土が堆積しており052号住居跡の床面の壁近くであらう。034号住居跡は弥生時代中期の宮ノ台式期の拡張された住居跡である。覆土上部は7の軟質茶褐色土層、覆土下部は8の褐色土層となっている。7は遺構内にレンズ状に堆積したことがわかる。その上に広く茶褐色土層がほぼ水平に堆積している。

第3トレンチ西端Fの直前に縄文時代晩期中葉の前浦式期の大型住居跡043号がある。調査写真を見ると住居跡の床を抜く深さでトレンチが入っている。4段目の右側5mの断面図下位は、ハードローム層である。6の表土下に2の茶褐色土がありそのままロームに移行する。ロームの若干の高まりの西側は043号住居跡と考えられ、6の表土下に黒褐色土層があり覆土と考えられるが明確な壁状の立ち上がりが無い。その黒褐色土層下に軟質の茶褐色土が一部分存在

する。その上に8の微量の貝を含む茶褐色土がある。8はピット状の窪みを経てハードロームの壁を有している。043号は直径10mを超えるほぼ楕円形プランの住居跡であり第20図にトレンチと共に住居跡平面図を掲載している。

上記のように遺跡の土層断面図だけでは遺構の住居跡や貝層の時期は決定し難い。南辺部分は編者が調査し第155図～第158図の斜面貝層は編者が作成したので、第16図1段目の斜面貝層のはじまる状態は理解できる。隣接地域の袖ヶ浦町山野貝塚(59)や千葉市木戸作貝塚(15)でも同様な所見である。当該時期の貝層のあり方に共通するものがある。

ソフトロームより上位の褐色土・茶褐色土については千葉県内でも検出例が多く、印旛郡白井町復山谷遺跡(60)では、引用すると「Ⅰ層 表土層として扱われる土層、黒味の強い腐植土であるが、焼土粒子を混入し、乾燥すると灰褐色に変化する軟質の旧耕作土と、幾分しまりのある下半分とに区別される。上部をⅠa層、下部をⅠb層とする。Ⅱ層 所謂漸移層に一括される土層であるが、本質的に異質な2枚の土層から構成される。上部約3分の1が黄褐色の軟質火山灰層である。平均して10cm内外の層厚を示す。遺存状態の良好なところでⅢ層との区別が難しい。新期テフラと呼んでいるが、正体が良く分らない。弥生以降の遺構は例外なく本層を切っている。また本層を切る縄文期の遺構は未だ検出されていない。これをⅡa層とする。Ⅱa層を抜くとにわかには土色が暗くなる。すなわちⅡb層に到達する。本層は暗褐色で軟質の土壌で縄文各期の遺物を含んでいる。Ⅲ層 ソフトロームと言われる黄褐色の軟質火山灰層である。・・・略・・・」となっている。市原市でも祇園原貝塚(41)小田部新地遺跡(48)等において検出されている。新期テフラは土層中の土壌や層序に普遍的な時期があり、その認定するための方法や手段が開発されれば、遺跡の形成や時期判定に有力な作業となるだろう。

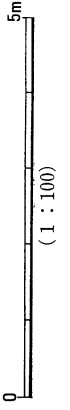
第16図の菊間手永遺跡時期別遺構分布については、上記の事情や遺構と遺物の帰属関係が不明確な部分や、遺物台帳等の不詳部分があり、断定できないものも多いが、編集者の責任において挿図化した。なお、昭和58年度調査時の観察から診ても、菊間手永遺跡の西半分部分は、菊間天神山古墳造成や中世時期の大規模な墓地造成によって、ソフトロームまで土壌が動いている様子がみえる。そのためか中世以降の土壌も少なく、耕作土からすぐソフトロームや褐色ロームに土壌が移行する。昭和58年度調査の弥生時代中期の32・38・39号住居跡も、遺構確認面はソフトロームや褐色ロームになり、遺構覆土も薄い状態であった。(第167図～第168図)

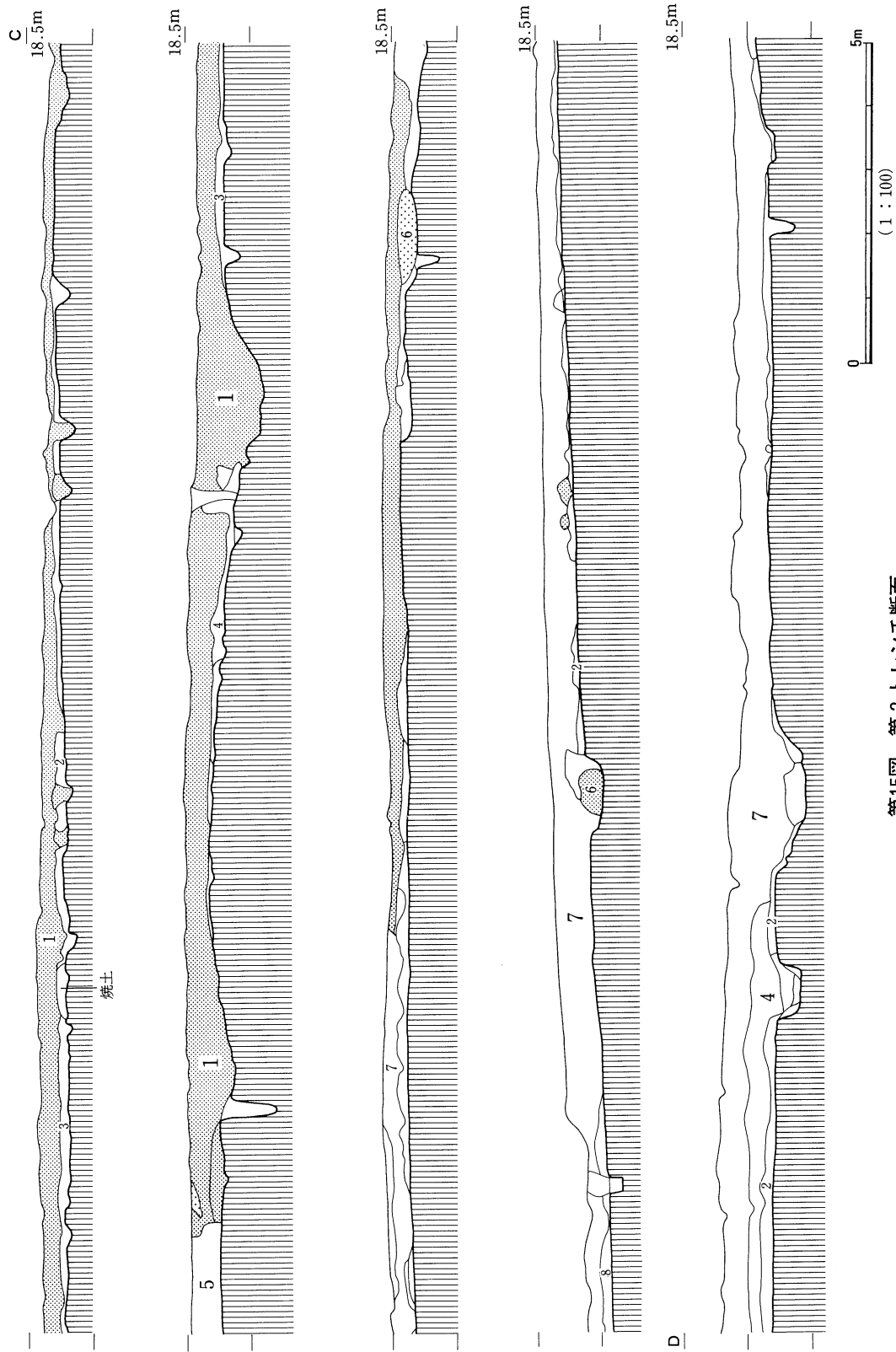
(59) 野村幸希・千葉建造・西山太郎「袖ヶ浦町山野貝塚」1973.12 財団法人千葉県都市公社

(60) 古内 茂・田村隆・菊池真太郎ほか「復山谷遺跡」1982.2『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』財団法人千葉県文化財センター

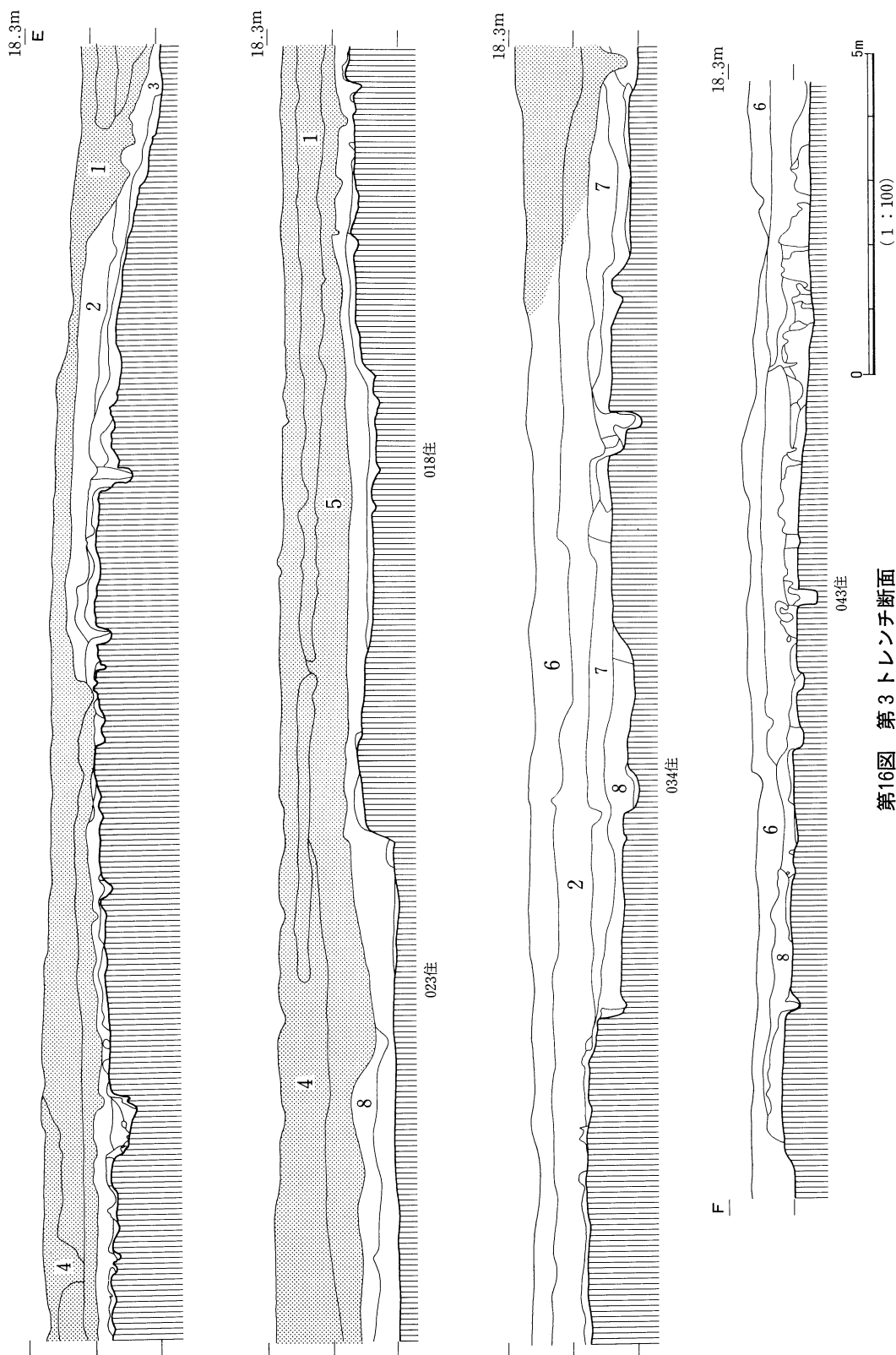


第14図 第1トレンチ断面





第15図 第2トレンチ断面



第16図 第3トレンチ断面

IV. 縄文時代の遺構と遺物

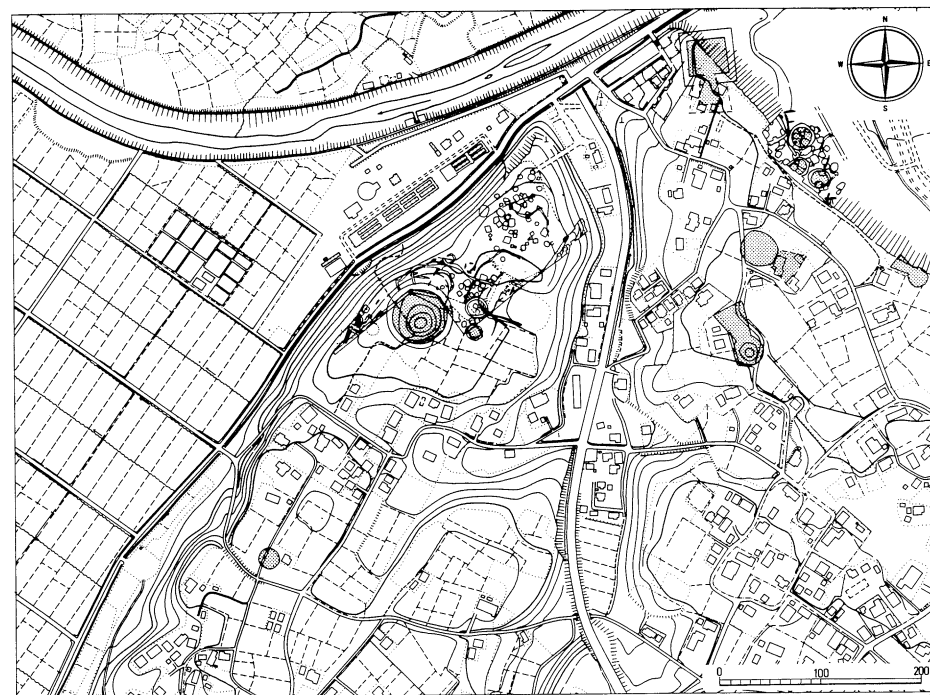
1. 縄文時代の遺構分布

縄文時代の遺構は、第17図において濃い網点によって表現されているように、遺跡が立地する台地上の北東側調査区域東半分に限られている。しかし α 30号住居跡のみ調査区中央部の87グリッド（第26図）に位置している。その他縄文時代と考えられる住居跡26基中25基は、全て第18図中に位置している。縄文時代の全ての遺構は第1表を参照してもらいたい。

また台地上の貝層も第1トレンチ・第2トレンチ・第3トレンチの断面を見る限り、第18図中に分布していたと考えられる。分布したであろう貝層は環状を呈し馬蹄形に北方向の開口部を有していたと思われるが、調査成果では断定し難い。また、調査範囲に昭和47年度当時含まれなかった斜面部分は、昭和58年度調査では台地南東側斜面部においてのみ調査され、台地南東側斜面から東側斜面部分についても貝層が存在した可能性が明らかになった。

南東部斜面貝層を除去すると、65号～69号住居跡、70号土坑状遺構が第154図にある状態で検出された。65号・66号住居跡は時期が不詳であるが、67号～69号住居跡は堀ノ内2式期になると考えられ、その遺構覆土には混貝土層、住居跡壁柱穴には混土貝層が堆積していたため住居廃絶後も、貝層となる貝の廃棄が行なわれたと考えられる。昭和47年度調査はそのすぐ背後で行なわれ、第2トレンチでは混貝土層が一面に広がっていたことを意味している。台地上貝層の時期は、遺物から堀ノ内2式期以降から加曽利B式期が相当すると考えられる。

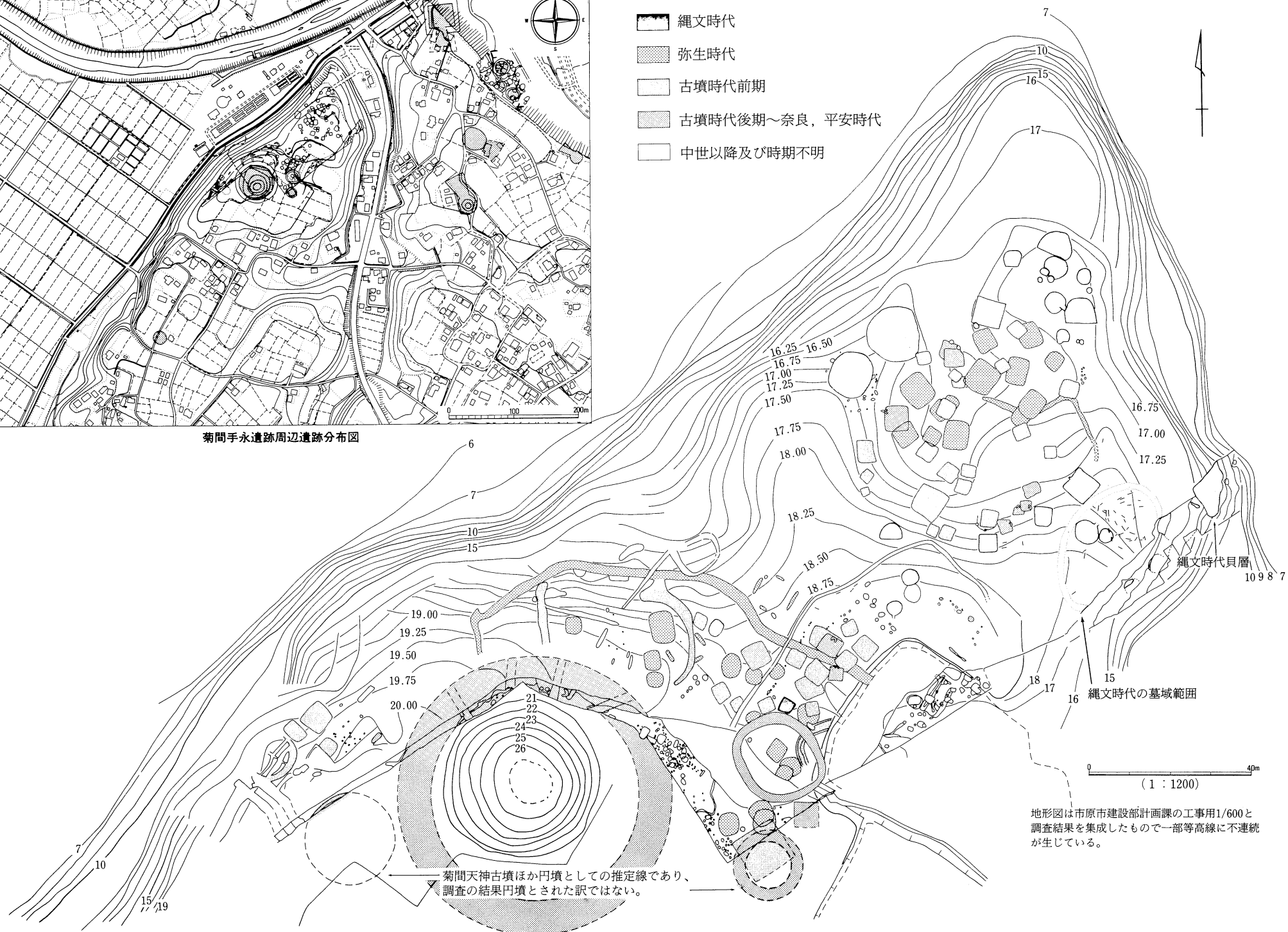
第18図を一見すれば縄文時代の住居跡は、中央の凹地を取り巻くように立地していることが解かる。第18図の等高線はトレンチ断面図によれば、褐色ローム層上面と考えられるので完新世以後の時代の地山となる。地山の基盤層の窪みは北方向に開いており、雨水等の水利はこの方向に流れるものと思われる。偶然ではあるが住居跡は南北方向の第1トレンチと東西方向の第3トレンチ設定のX軸Y軸によって、数学上の象限に4分割されるかのように見える。第1象限群は06・07・08・09・010・053・054・055号住居跡である。第2象限群は01・02・03・011・020・021A号住居跡である。第3象限群は α 24・ α 25・ α 30・057号住居跡である。第4象限群は043・056号住居跡である。時期的にまとまりがあると考えられるのは、縄文後期前半において第1象限群の06・07・08・09・010・053・054号住居跡と、第3象限群の α 24・ α 25・057号住居跡である。縄文後期後半から縄文晩期前半の安行式期は、第2象限群の03・011・020・021A号住居跡である。縄文晩期中葉では第4象限群は043・056号住居跡である。時期設定は第1表の備考にあるように不詳な条件が多いが敢えて試みた。台地東南斜面部には65号～69号の縄文時代後期堀ノ内式期の住居群が5基あるが、恐らく台地東側斜面部にも数多く存在していたと考えられる。



菊間手永遺跡周辺遺跡分布図

凡例

- 縄文時代
- 弥生時代
- 古墳時代前期
- 古墳時代後期～奈良，平安時代
- 中世以降及び時期不明



第17図 菊間手永遺跡時期別遺構分布

台地斜面部に立地する堀ノ内式期の住居跡は、市原市内でも調査例が増加しており、祇園原貝塚や西広貝塚に同じような状態で検出されている(61～64)。これらの調査は菊間手永遺跡調査の前後にされている。遺跡の立地についても手永貝塚の縄文時代は、祇園原貝塚に良く似ている。祇園原貝塚も縄文時代集落跡の中心に南北方向に埋没谷があり同じような遺跡の層序を有する。引用すると「台地平坦部では表土層の直下にローム層がくる場合が殆どである。埋没谷ではこれとは異なり、表土層(Ⅰ層)、黒色土層(Ⅱ層)、茶褐色土層(ⅡA層)、黒褐色土層(ⅡB層)、ローム層を基本層序とする。この埋没谷はⅡA層の上面では殆ど埋まりきっており、以降のⅡ層、Ⅰ層はほぼ水平堆積になる。これらの層の堆積時期は遺構・遺物との関連から見ると次のようになる。ⅡB層の中、上部を中心として撚糸文土器が検出されており、上層のⅡA層中に縄文時代後期の貝層が形成されている。一方、歴史時代の住居跡がⅡA層を切って構築されているのが確認されている。また弥生時代中期の住居跡はⅡ層より古く、ⅡA層と同様の土が覆土となっている。上述した様に、縄文時代後期には埋没谷はゆるやかに凹んだ状態であり、その部分に貝層が形成されている。しかしながら台地平坦部には耕作がローム層に達しており、表土層に多量の破砕貝を混じていた事実や、西側斜面部に二次堆積と見做される破砕貝を主とする貝層の存在することなどから考えると、耕作による攪乱を免れた埋没谷部の貝層の他、貝層は台地平坦部にも広がっていたと見た方が良い。これは台地平坦部の住居跡の多くで壁及び床面を確認できない事実とも関連するであろう。」(62)と、なっている。祇園原貝塚は、集落形成時期が縄文時代後期前半の堀ノ内1式から縄文時代晩期前半までとほぼ菊間手永遺跡と同じである。層序の堆積の様子も似ており、弥生時代中期の覆土も似通うものがある。ローム層以降の褐色土は茶褐色土などと称されながら、見た目の土層状態は似通うが2時期存在するらしい。その2時期とは縄文時代後期と弥生時代中期から後期と考えられる。

(61) 米田耕之助・鷹野光行・小川静夫「祇園原貝塚」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅴ』1978.3 上総国分寺台発掘調査団 市原市教育委員会

(62) 米田耕之助・小川静夫「祇園原貝塚Ⅱ」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅵ』1979.3 上総国分寺台発掘調査団 市原市教育委員会

(63) 小川和博・中野修秀・菅谷通保「祇園原貝塚Ⅲ」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅺ』1983.3 上総国分寺台発掘調査団 市原市教育委員会

(64) 米田耕之助・田所 真「西広貝塚第4次調査」1983.3 上総国分寺台発掘調査概報抜刷

菊間手永遺跡縄文時代中葉の住居跡は、ほとんど壁を有しない。第20図73グリッドの遺存状態の良い043号住居跡を勘察すれば、住居形態は円形または楕円形を呈し、図版5-1のようにやや外に向かって広がるハの字形の連続する柱穴を有する出入り口遺構を楕円部隅に有する。地焼炉は出入り口奥にあり住居跡のほぼ中央に位置する。柱穴が多いため建て替え等も考慮しても10mを超える大型住居である。帰属遺物が明確ではないが、平面図において亀ヶ岡式等の遺物名がありそれらは第76図-140-141と考えられ、第82図-48などの石剣の柄また図版5-2の土器の文様から前浦式期と考えた。043-1の地点は第77図-1の有茎石鏃であり、同一母岩と考えられるチョコレート色チャートの石器やサイコロ状石核・剥片等が数多く出土している。そのため第78図に同一母岩と考えた石核・剥片を掲載した。また住居西側近接部に51号人骨土壙がある（第40図下段）。土壙には第74図-70の耳飾り形土製品が共伴する。

第19図65グリッドの056号住居跡は、ピットが多数存在しある程度のまとまりがある。また魚骨を大量に包含したピットが存在し生活痕がある住居跡であり、043号住居跡の東側に近接している。魚骨ピットと記されたすぐ右下側東西一対の小穴のうち丸い西側ピットは検出面からマイナス35cmの深さ、東側不整形ピットは検出面からマイナス24cmの深度であった。魚骨の分類は後記に掲載する。その他遺物等是不詳である。

第21図44～45グリッドの055住居跡は第22図を見ると解かるように、043・056号住居跡と凹地をはさんで15mほど離れる。積極的に縄文時代晩期中葉にする根拠がないが、第21図055-2付近は石器製作跡か石核貯蔵施設であった可能性が高い。44～46グリッドには第4表石器一覧に示すように16点のチャート製サイコロ状の石核が多く採集されている。また石器製作に伴う敲石・剥片等の出土も多い。これらの原礫面を残すサイコロ状石核は祇園原貝塚の調査でも大量に検出され、ある一時期を特定する石器になるであろう。付帶的ではあるが、055-1では第214図-3の弥生時代の銅鏃が検出されているが、遺構が近接しているので混入と判断した。

菊間手永遺跡の晩期中葉と考えられる住居跡は、西広貝塚のE4区晩期包含層地点下遺構と同じような状況で検出された（27）と思われ、形態が円形で規模が径10mを超え壁の立上りが不明確など、当該時期の住居跡検出時発掘調査の参考になるだろう。これらは、近隣の栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡において安行Ⅲc～安行ⅢdされるJ9・J10号住居跡とほぼ同時と考えられる。

（65）三沢正善ほか「1. 縄文時代の住居跡」『小山市文化財調査報告第11集 乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告』1982.3 小山市教育委員会

縄文時代晩期前半の住居跡群は、5・15・14・39グリッドの凹地を中心とすると東～南側部分にあたる（第25図）。中でも5グリッドの第23図03号住居跡は、一辺7mの方形プラン住居の北西辺中央に出入口の遺構を有する。住居中央より出入口寄りに地焼炉があり、壁溝が巡っており調査者はA-A'の壁外の深度1mの土坑を貯蔵穴と考えている。

遺物が豊富に出土し、03-1は石剣、03-2は浅鉢、03-3は異形脚付土器出土位置を示す。写真では石剣は壁に沿って横位状態に出土し、浅鉢は逆位、異形脚付土器は脚と器が折れて壁近くで出土した。その他第43図に掲載した遺物は、住居跡覆土中に出土したと思われる。遺物から03号住居は縄文時代晩期前半の安行3a式期にあたると考えられる。

第24図011号住居跡は15・14グリッドに位置し、03号の西側約10mにある。一辺4.5mの方形プランを呈し、恐らく南側辺に出入口がある。地焼炉は住居跡中央に位置し、床面より20cmの深さまで焼土化している。調査者は住居内の長軸130cm、短軸145cm、深さ45cmの土坑を貯蔵穴と考えている。出土遺物は安行式土器・敲石等があるが住居形態から03号と同じ晩期としたい。

39グリッドの第24図020号住居跡は壁が明確でないが、011号と同じ規模を有している。中央に地焼炉があり柱穴はまばらである。検出遺物は土器・敲石・獣骨等である。時期は確定できないが、住居形態等から03号と同じ縄文時代晩期前半としたい。

第24図の021A号住居跡は、021B号と022号住居跡に複合し切られている。そのため規模も明確でなく炉の位置も不明である。020号住居跡のすぐ南隣に位置しており住居方向は020号と同じと考えられる。時期等明確でないが、形態等により03号と同時期としたい。

第26図α30号住居跡は87グリッドに位置し、凹地周辺の縄文集落とは距離的に50mほど西側となり台地奥部にあたる。一辺約4mの方形プランとなり柱穴が巡る状態の中央に地焼炉がある。その他遺物等はなく不詳である。

第26図α15号住居跡は105グリッドに位置し、α30号住居跡と同じように凹地周辺の縄文時代集落とは距離的に西へ50m以上離れている。約3mほどのアルファベットCの字形にピットが並び、地焼炉も無いが調査時に住居跡にしているため住居としておく。α30・α15号住居跡周辺は、古墳等が多く後世に土壌が動かされているため遺構の遺存状態は皆悪い。

住居形態については、根田祇園原貝塚の調査（61・62・63）成果を基に住居形態の時代的変遷が明らかになって来ている（66）。そのため遺物が無い場合など時代時期決定判断に住居形態を利用する。地域差や遺跡自体の個性も考慮しなければならないが当報告については米田氏の論考を準用したい。

（66）米田耕之助「縄文時代後期における住居形態の一樣相」『伊知波良3』1980.5 伊知波良刊行会

第27図07号・08号住居跡は、縄文時代後期の住居跡が平坦部において最も集中している台地北端部に位置している。07号と08号は08号住居跡の出入口遺構部において複合している。08号住居跡は明確な出入口遺構を東南方向に有し、その延長上に土坑を配している。土坑の深さは93cmあり、出入口遺構部の柱穴の深度は向かって左45cm、向かって右54cmや、一対の溝右30cm、左31cmよりかなり深い。床の掘り込みは10cmと浅く、地焼炉は住居跡中央よりやや出入口部に近くに位置している。長短軸5mとほぼ円形プランとなり、出入口から付属土坑まで約3mである。住居床面から堀ノ内式土器が検出されている。住居跡の覆土は混貝黒色土層になっておりその中に、第40図上の79号人骨が頭位ほぼ南方向伸展で埋葬されており、住居外のX5号人骨が頭位南東方向に伸展葬されている。

07号住居跡は壁は検出されず、床は強く締まっていた。外周する柱穴を結合すると一辺が直線のアルファベットDの字形になる。Dの字形住居プランを考慮すると、出入口方向は南方向となる。その中央より直線一辺寄りに2カ所焼土の堆積があり地焼炉と考えられる。住居外北東部分に深度50cmの径1.5m円形プランの土坑があるが関連は不詳である。2カ所以上の地焼炉があるので複合か建て直しを検討する必要があるが、遺物等条件に不確定要素が多く判断できない。住居形態から縄文時代後期中葉ではないかと思われる。

第28図の053号住居跡は、北端位置の遺構になり北にむかって台地が傾斜を始める傾斜変換線上に位置する。壁は検出されず、住居プランは判然としないが地焼炉を中心に柱穴が密集し、意図的にDの字形の補助線を入れた。Dの字形住居プランを考慮すると出入口は南方向を向くことになる。南側は09号住居跡と接っている。遺物等は不詳であるが住居形態から縄文時代後期中葉と考えたい。

第29図06号住居跡は19グリッドに位置し、住居の壁は検出されない。住居プランは径3mの円形であり、南西方向に出入口を有すると考えられる。地焼炉は中央より出入口部分に寄った位置にあり、径3mほどの小型住居であるがまとまっている。遺物の検出は無く、東側に径1mの土坑が2基ある。

第29図054号住居跡は34グリッドに位置し、住居の壁は検出されない。住居プランは径4.5mの円形であり南西方向に出入口を有すると考えられる。地焼炉は中央よりやや出入口方向に寄っている。遺物の検出はなく付近に土坑等も存在しない。

第29図α25号住居跡は59グリッドにあり、凹地の外縁南側部分に位置する。柱穴等の検出が無く径4mの円形プランを呈し、中央に地焼炉がある。西側の壁が高低差約10cm程度残るのみなので覆土も薄く遺物なども無い。状況からは出入口方向は不明である。

第30図010住居跡は10グリッドにあり、縄文時代集落の北端部東側に位置し、住居跡東側は台地斜面となる。柱穴は明瞭になく地焼炉が中央にある。出入口は状況から東方向の台地斜面

を向くと考えられる。出土遺物は堀ノ内式土器と敲石がありその他は少ない。

第30図09号住居跡は21グリッドにあり、凹地の外縁北側部分に位置する。柱穴等の検出が無いが、溝状の小型ピットは周囲を巡っていたようだ。径約6mの円形プランを呈し、中央地焼炉がある。地焼炉は焼土混じりの白色灰層が充填されたもので当該期の炉に特徴的に現れる。住居跡床面の09-2より、堀ノ内式土器の深鉢底部と胴部片が出土している。図版8にあるように047号土壇からは、047-1の堀ノ内1式土器の口縁部と底部が出土している。047号土壇は深さ110cmと深く、09号住居跡に伴う出入口の延長部の土坑と考えられる。09号住居跡の出入口遺構部は深さ20cmのやや浅い土坑に複合して明確ではないが、向かって右側の出入口遺構は深さ40cmのL字状に確認できる。出土遺物は他に敲石や軽石などがある。09-1は堀ノ内式土器が図版8のように検出されている。

第31図α24号住居跡は58グリッドにあり、凹地外周住居群の南端に位置する。住居跡南側に連続して土坑があるが後世の時期であり住居跡と関連はない。柱穴の検出はないが、出入口遺構の溝状に連続するピットが円形プランの住居跡の南側にあり、深度30cm前後のハの字状を呈する。また出入口付近に堀ノ内式土器片と石皿片が出土している。

第31図057号住居跡は60グリッドにあり、凹地外縁部の南辺部の西端にあたる。壁は検出されず、中央に地焼炉と思われる焼土と中心に柱穴がある。炉を中心にして補助線に円形を描いたが、方形プランとしたほうが良さそうである。炉の北側にコの字状の出入口が存在し、出土遺物に骨片が多く、覆土中に骨が多い縄文晩期前半の住居を想起させる。また縄文晩期住居群が東から03・011・021A・020号住居跡と東西に連続して凹地外周南辺に並び、057号がその西端となる。縄文土器片・礫などが出土している。

第32図01号住居跡は4グリッドにあり、凹地中央から外れて南東端に位置する。縄文時代墓域の西辺部と複合し、72号・84号人骨が住居上に横たわるが両者とも住居壁を跨ぐ様に壁を切って埋葬されているため関連は無いだろう。住居プランは円形径3mと規模が小さい。西半分の壁が残り、東側は無い。地焼炉が円中心より恐らく出入口方向によると考えられるので北東方向に向く住居となるだろう。出土土器は堀ノ内式があり、その他貝輪や髪飾り（第93図25）が覆土中より出土している。

第02号住居跡は4・14グリッドにあり、01号住居跡と東側において接している。壁は検出されないが壁柱穴が巡り、北東方向に出入口遺構の溝状ピットが深度約60cm前後に掘られている。ほぼ円形プランの径約6.5m住居跡になり、中央に地焼炉が2基出入口方向に並んでいる。出土遺物是有孔牙製品や鹿角などがあり、時期を決定する土器がないが住居形態から縄文後期前半と考えられる。また第32図のB-B'のB部分において86号人骨である胎児骨が入った埋納土器が浅く掘られた状態に検出された。墓域内であるので02号住居跡とは関連は薄いだろう。

第33図65号住居跡は菊間手永遺跡の立地する台地の南側斜面の、傾斜変換線よりやや下った標高16.5m付近に位置する（第35図参照）。住居跡は円形プランであり斜面に掘り込まれるが、台地側の床面の1/4を残した状態で残りは流失している。残存した地焼炉を中心とした左右一対の柱穴が床面を失った状態で検出され、奥壁は壁柱穴が巡る。その他の深度が浅いピットは失われたようだ。状況から出入口は南方向にあったと考えられる。

表土除去から人力に拠ったが状態の良い遺構覆土、包含層は検出されなかった。斜面貝層検出のため、表土除去時から斜面方向に幅1mのトレンチを設定した（第155図参照）。65号住居跡はO24グリッドのカキクケコ列にあたり、それに合わせて遺物が採集されている。

第33図66号住居跡は65号の東5mに位置し、65号と同じく標高16.0m付近の傾斜変換線よりやや下った斜面に掘り込められた径4m円形プランの壁柱穴が巡る住居であったらしい。台地側の壁を残して残りはすべて後世の削平によって失っている。

第34図67号住居跡は傾斜変換線標高17mに奥壁を位置しており、遺跡が立地する台地斜面が南斜面から東斜面に移る部分に立地している。ほぼ同じ場所に67・68・69号住居跡があり、新旧関係は古67→68→69新となっている。最新の69号住居跡も奥壁を残して後世の削平により大部分を失っている。3軒とも壁柱穴が巡り径約4.5mの円形プランと考えられるが、炉も失っており確定できない。

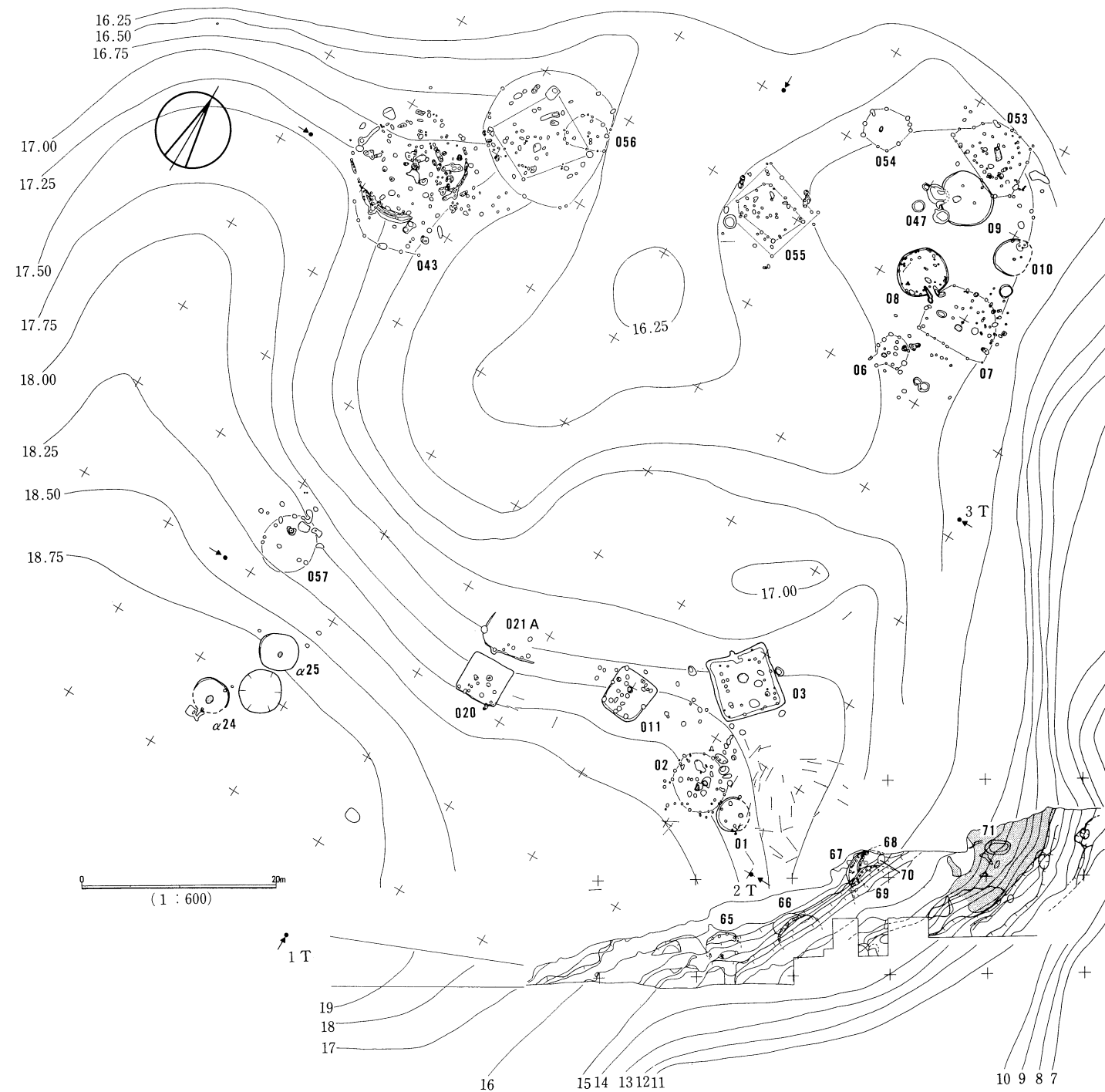
出土遺物は67号住居跡は第46図、68号住居跡は第47図、69号住居跡は48図1～12となっている。出土土器からこれら3軒の住居跡の時期はすべて縄文後期堀ノ内2式期となる。68号住居跡に完形に近い状態で出土した深鉢は68-1の位置で横倒しの状況に検出された。また68号住居跡覆土の壁近くから、解体されたシカの頭蓋骨の天頂が部分的に出土している。69号住居跡の69-1は鉢形土器で床におかれた状態で出土したが、調査途上段階で紛失している。覆土は混貝土層を基本としてみな自然堆積であるが、69号住居跡は住居廃絶時の火に拠る、なんらかの堆積に変化がある。

第34図70号遺構は68号床面に掘削された径1m深さ1.5mの土坑である。縄文時代の小竪穴状の形態を有すが、遺物の出土がなく時期が不明であるが、住居跡に近い時期であると考えられる。68号との新旧関係は明確ではないが68号より新しいと考えている。

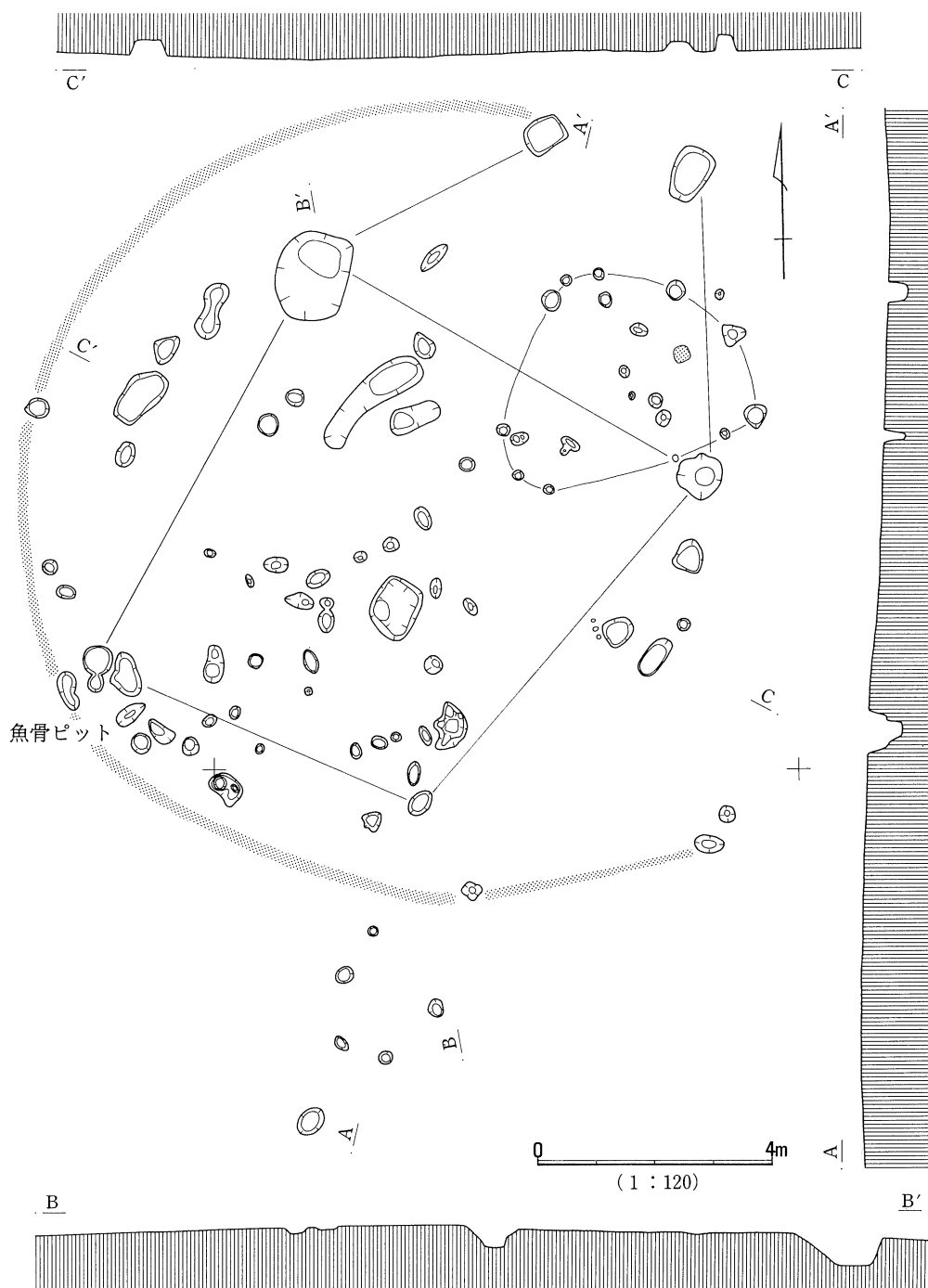
南斜面は表土に大量の貝を観察できることから、大規模な斜面貝層が想定されたが表土の1層が厚く堆積し、1層下面は宝永火山灰が堆積していた。それらは流動した2次堆積の貝層であった。1層中からは近現代の空缶や空瓶など陶器類も混じり、石油ランプのガラス火屋等民俗資料になりそうな物品も出土した。いわゆる屋敷裏のゴミ捨て場の状態であったと思われる。第35図のN26・N27・026・027グリッド堀之内式期貝層の東斜面については一部に貝層が残存したため調査を行なった。その成果は別記後述することにする。

第 1 表 菊間手永遺跡縄文時代遺構

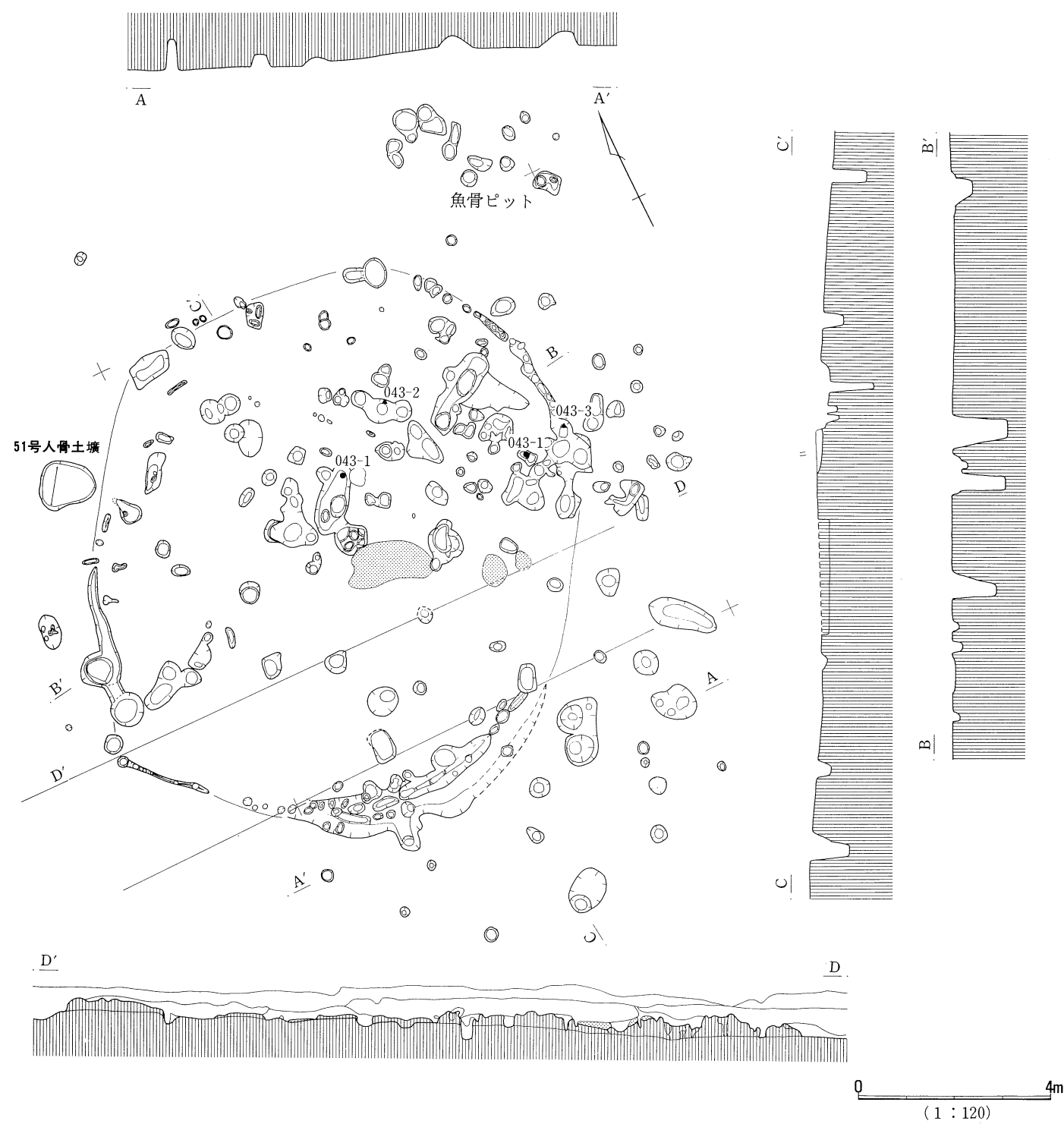
番号	挿図番号	遺構番号	名称	形状	規模 (m)	面積 (㎡)	時期	備考
1	21図	055	住居跡	方形 ?	6.5 × 6.0	39.0	晩期	立地形状から時期判定、北東隅ピットから銅鏃出土
2	19	056	住居跡	円形	14.0 × 14.0	153.9	晩期	立地形状から時期判定、南西隅ピットに魚骨多数出土
3	20	043	住居跡	円形	12.0 × 10.0	95.0	晩期前補式期	大洞式出土
4	23	03	住居跡	方形	6.5 × 6.5	42.3	晩期安行 3 a	異形脚付土器他遺物多数
5	24	011	住居跡	方形	4.0 × 4.8	19.2	晩期安行 3 a	
6	24	020	住居跡	方形	4.2 × 4.3	18.1	晩期安行 3 a	立地形状より時期判定
7	24	021	住居跡	方形	5.5 × (5.0)	(27.5)	晩期安行 3 a	立地形状より時期判定、中央に五領式期住居有
8	26	α30	住居跡	方形	4.0 × 4.5	18.0	後期後半 ?	立地形状より時期判定
9	26	α15	住居跡	円形 ?	3.0 × 2.5	5.9	後期中葉 ?	形状より時期判定
10	27	07	住居跡	D 字形	8.0 × 6.5	41.3	後期中葉 ?	形状より時期判定、小竪穴隣接、010号と同じ
11	27	08	住居跡	円形	5.1 × 5.0	20.0	後期堀ノ内式期	79号人骨が後に埋葬される
12	28	053	住居跡	D 字形	7.5 × 5.5	16.5	後期中葉 ?	形状より時期判定
13	29	06	住居跡	円形 ?	3.5 × 3.0	8.3	後期	形状より判定
14	29	α25	住居跡	円形	4.0 × 4.0	12.6	後期	立地形状より判定
15	29	054	住居跡	円形	4.5 × 5.2	18.4	後期	立地形状より判定
16	30	09	住居跡	円形	5.5 × 5.5	23.7	後期堀ノ内式期	出入口部南西方向
17	30	010	住居跡	円形	3.9 × 3.7	11.3	後期	小竪穴に隣接09号と同じ
18	31	057	住居跡	方形 ?	5.5 × 6.0	33.0	晩期	出入口部北方向
19	31	α24	住居跡	円形	4.0 × 3.5	11.0	後期	出入口部南方向
20	32	01 (㊦11)	住居跡	円形	3.5 × 3.5	9.6	後期堀ノ内式期	出入口部東方向
21	32	02 (㊦11)	住居跡	円形	5.7 × 7.0	31.7	後期	出入口部北東方向
22	33	65 (㊦11)	住居跡	円形 ?	5.0 × (5.0)	(19.6)	後期堀ノ内式期	緩斜面半壊
23	33	66 (㊦11)	住居跡	円形 ?	7.6 × (7.6)	(45.3)	後期堀ノ内式期	緩斜面半壊
24	34	67 (㊦11)	住居跡	円形 ?	5.4 × (5.4)	(22.9)	後期堀ノ内式期	緩斜面68号に切られる
25	34	68 (㊦11)	住居跡	円形 ?	4.8 × (4.8)	(18.1)	後期堀ノ内式期	緩斜面69号に切られる
26	34	69 (㊦11)	住居跡	円形 ?	5.4 × (5.4)	(22.9)	後期堀ノ内式期	緩斜面68号を切る
27	34	70 (㊦11)	小竪穴	円形	0.8 × 0.8	0.5	後期	緩斜面69号に付属する可能性大
28	30	047	小竪穴	円形	1.2 × 1.3	1.2	後期堀ノ内式期	09号住居跡に付属する
29	38	71 (㊦11)	土坑	橢円形	6.1 × 3.7	18.8	後期堀ノ内式期	85号人骨出土
計		29基						



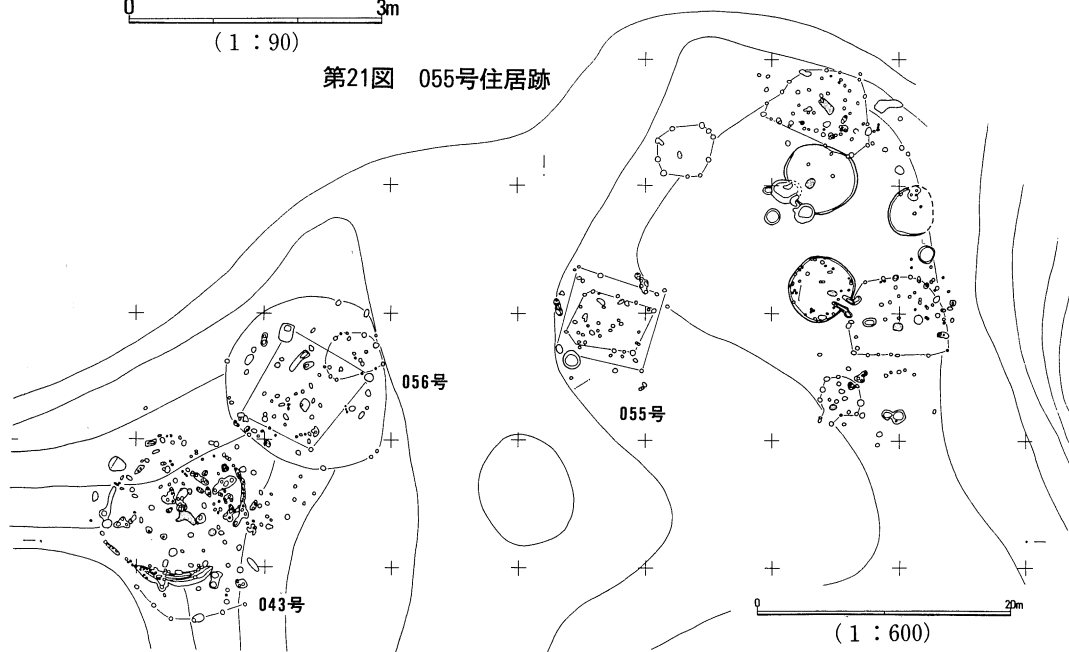
第18図 縄文時代遺構分布



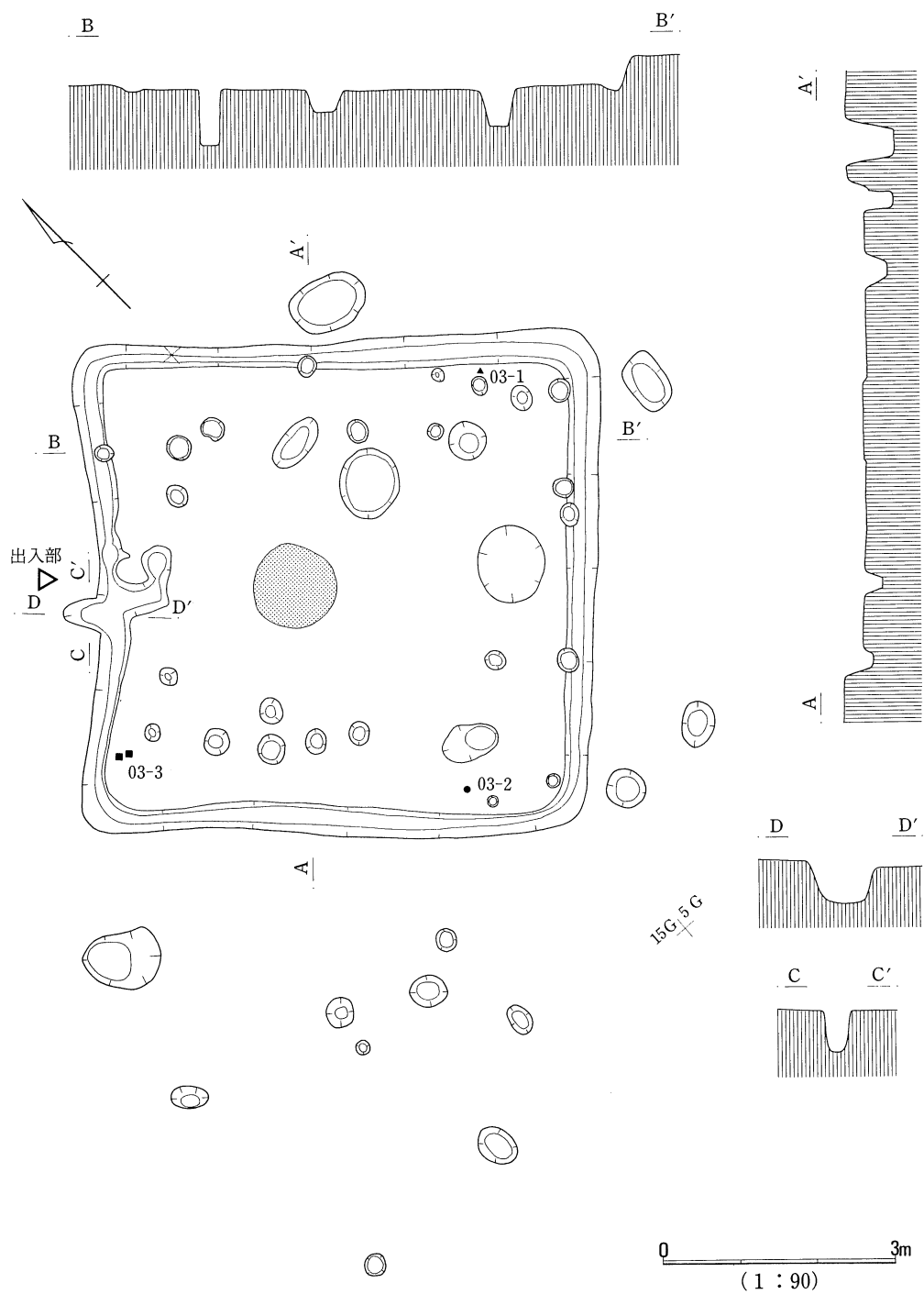
第19図 056号住居跡



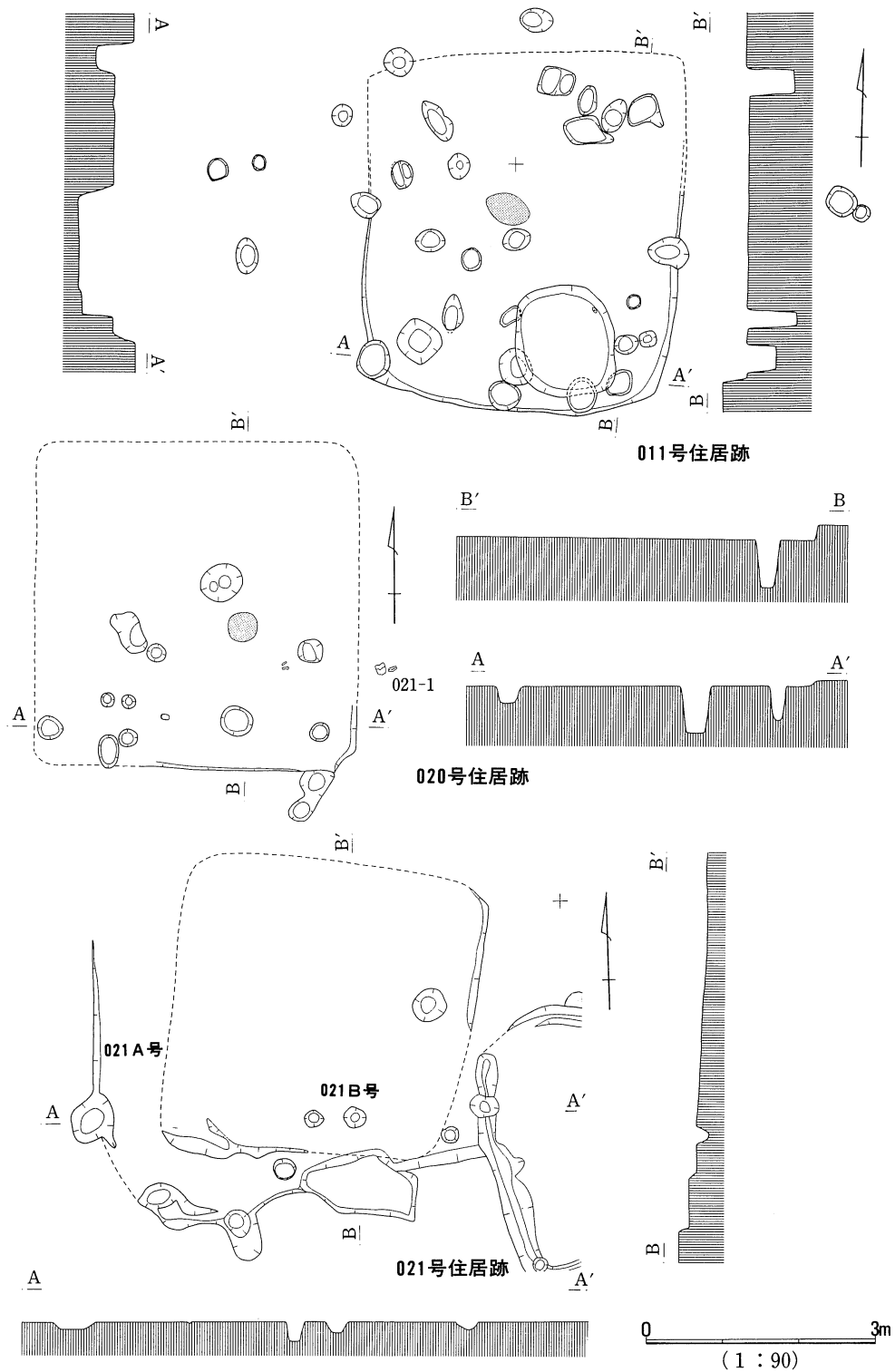
第20図 043号住居跡



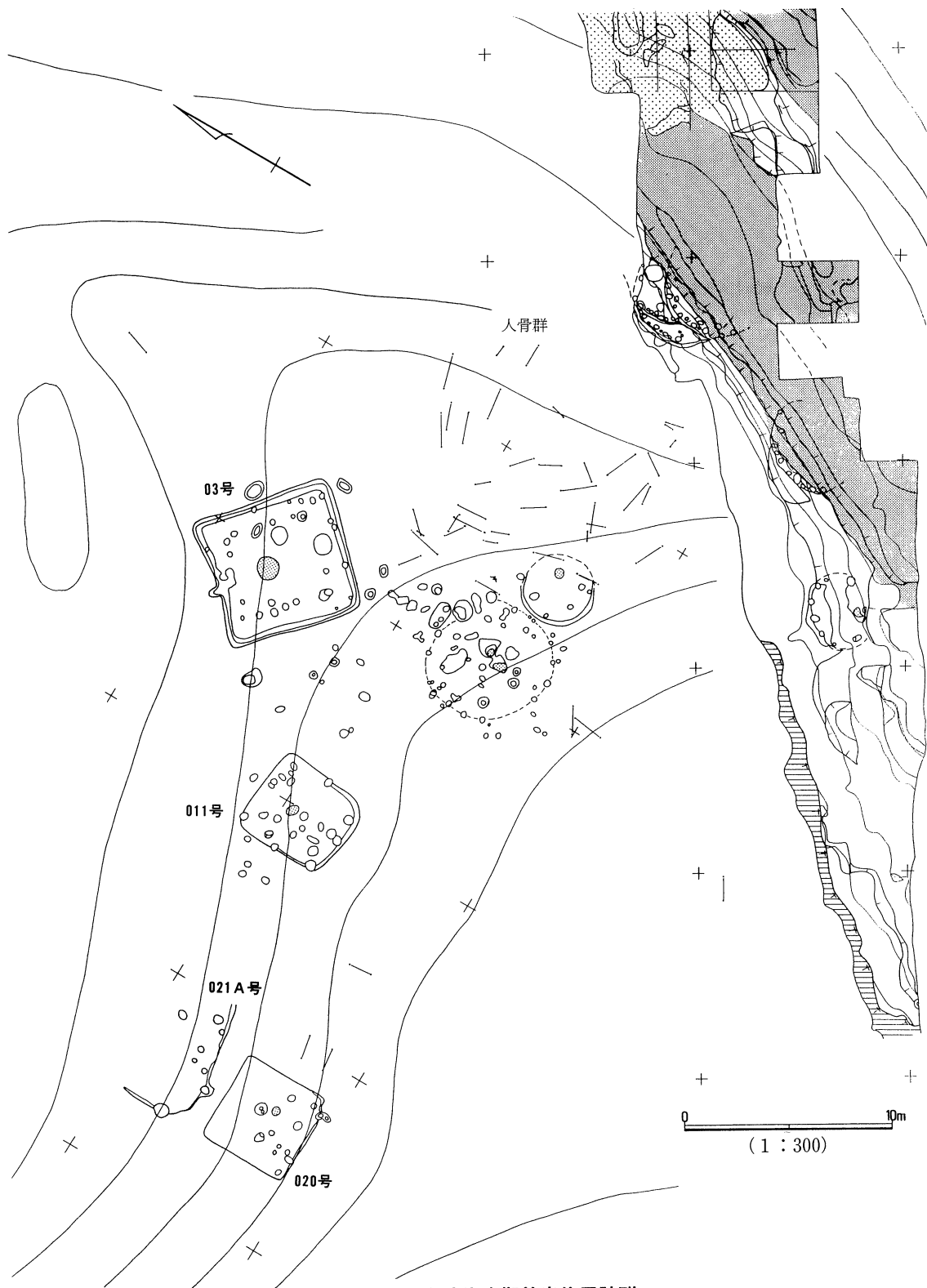
第22図 縄文時代晩期中葉住居跡群



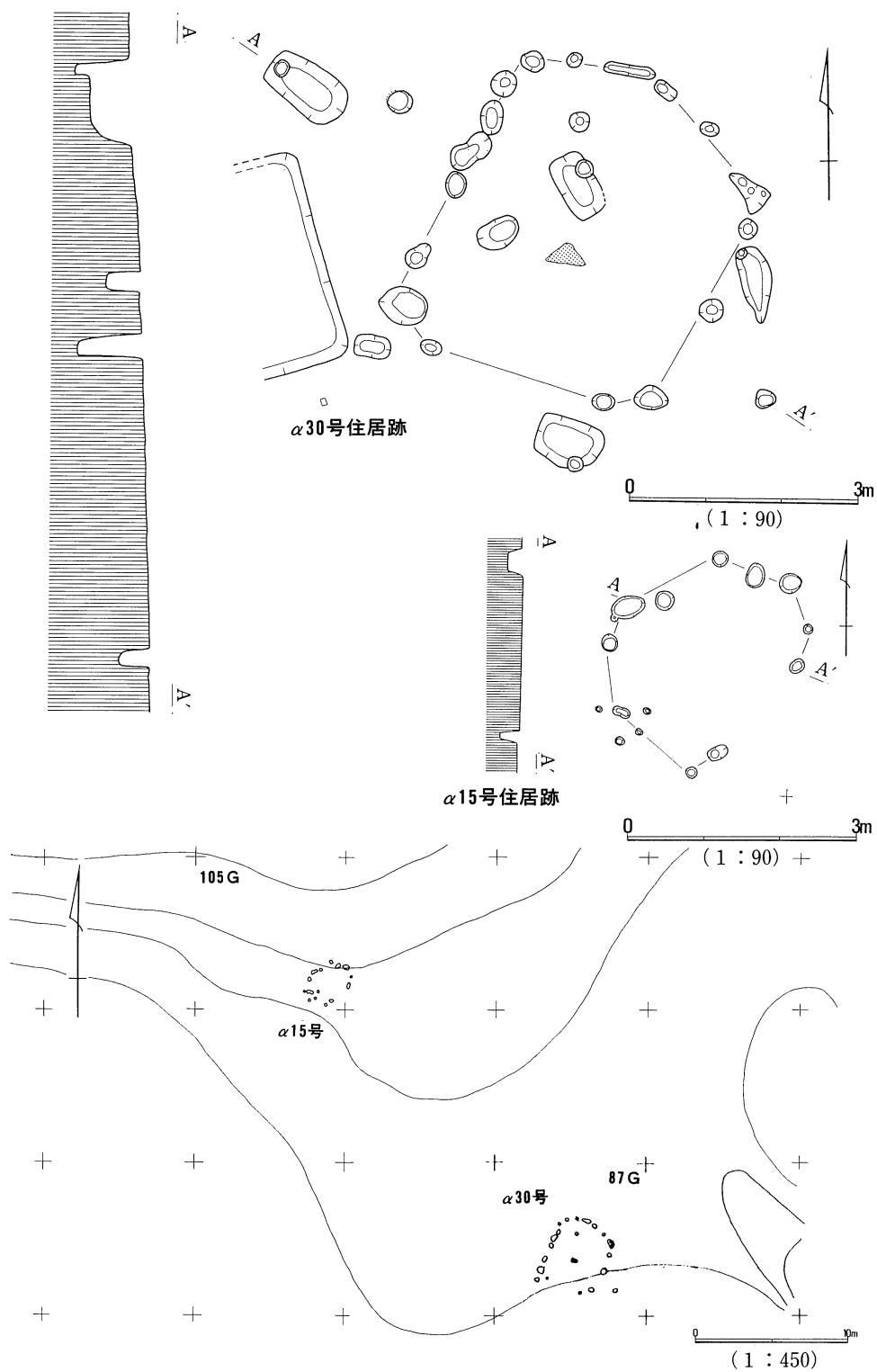
第23図 03号住居跡



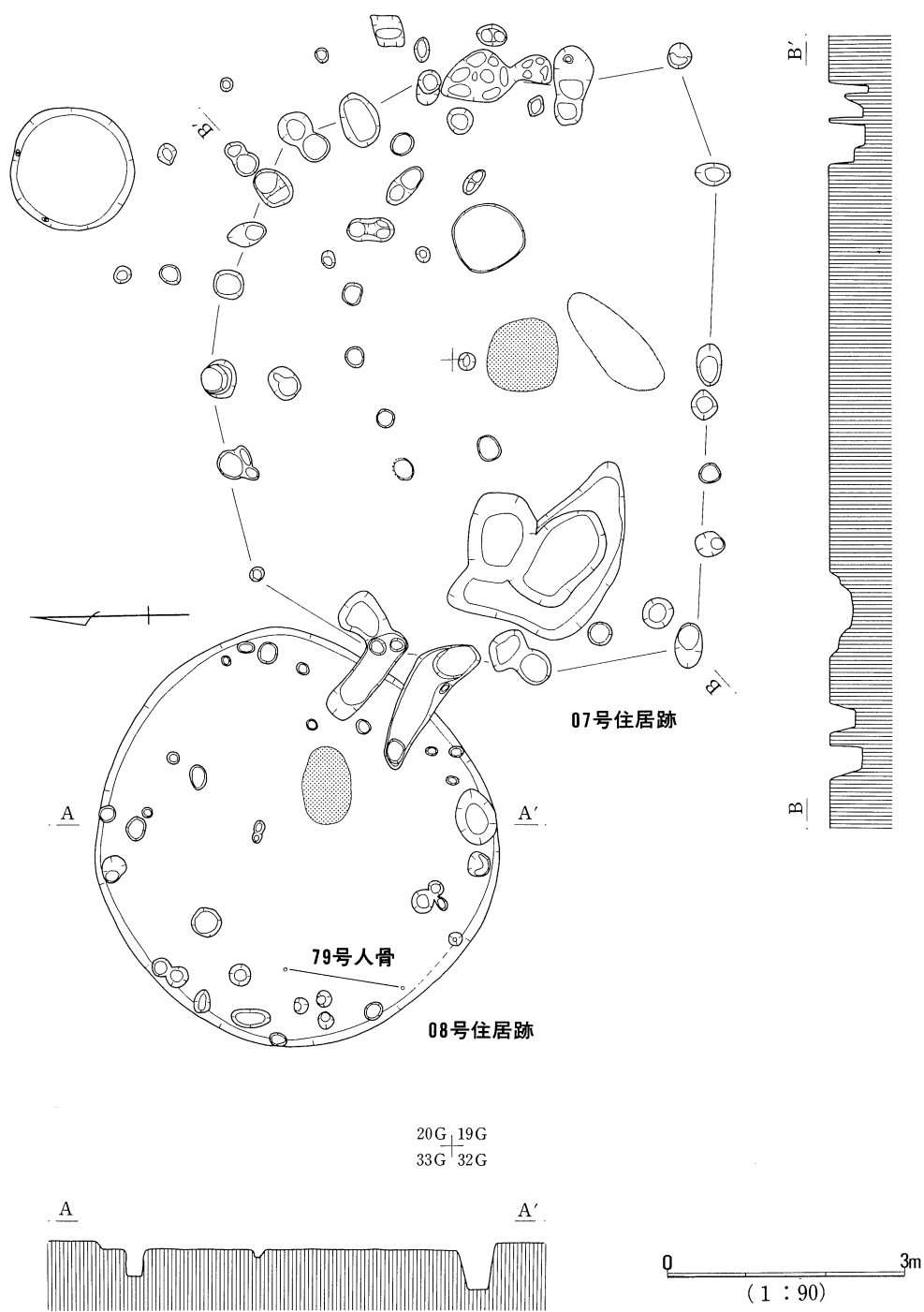
第24図 011・020・021号住居跡



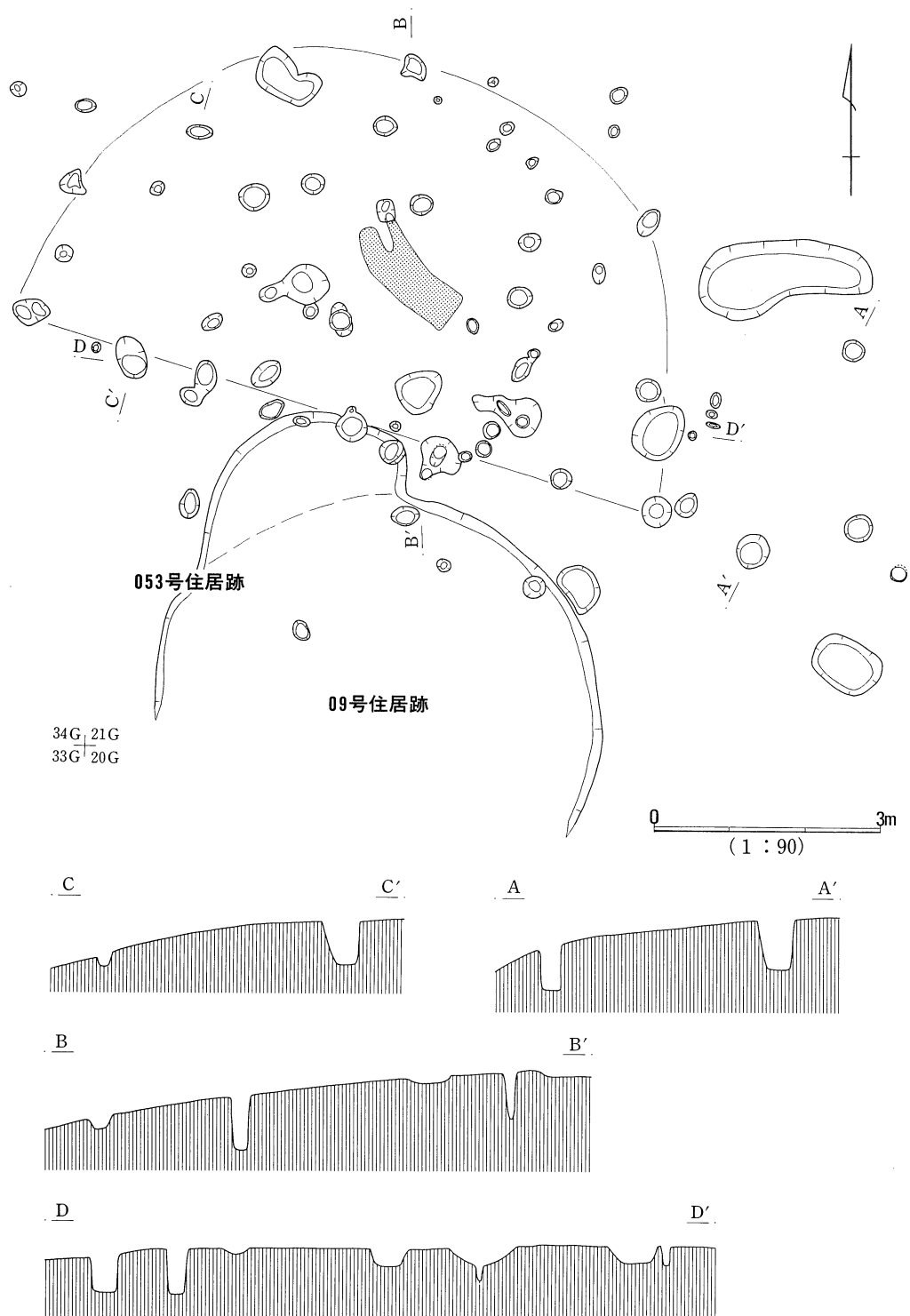
第25図 縄文時代晩期前半住居跡群



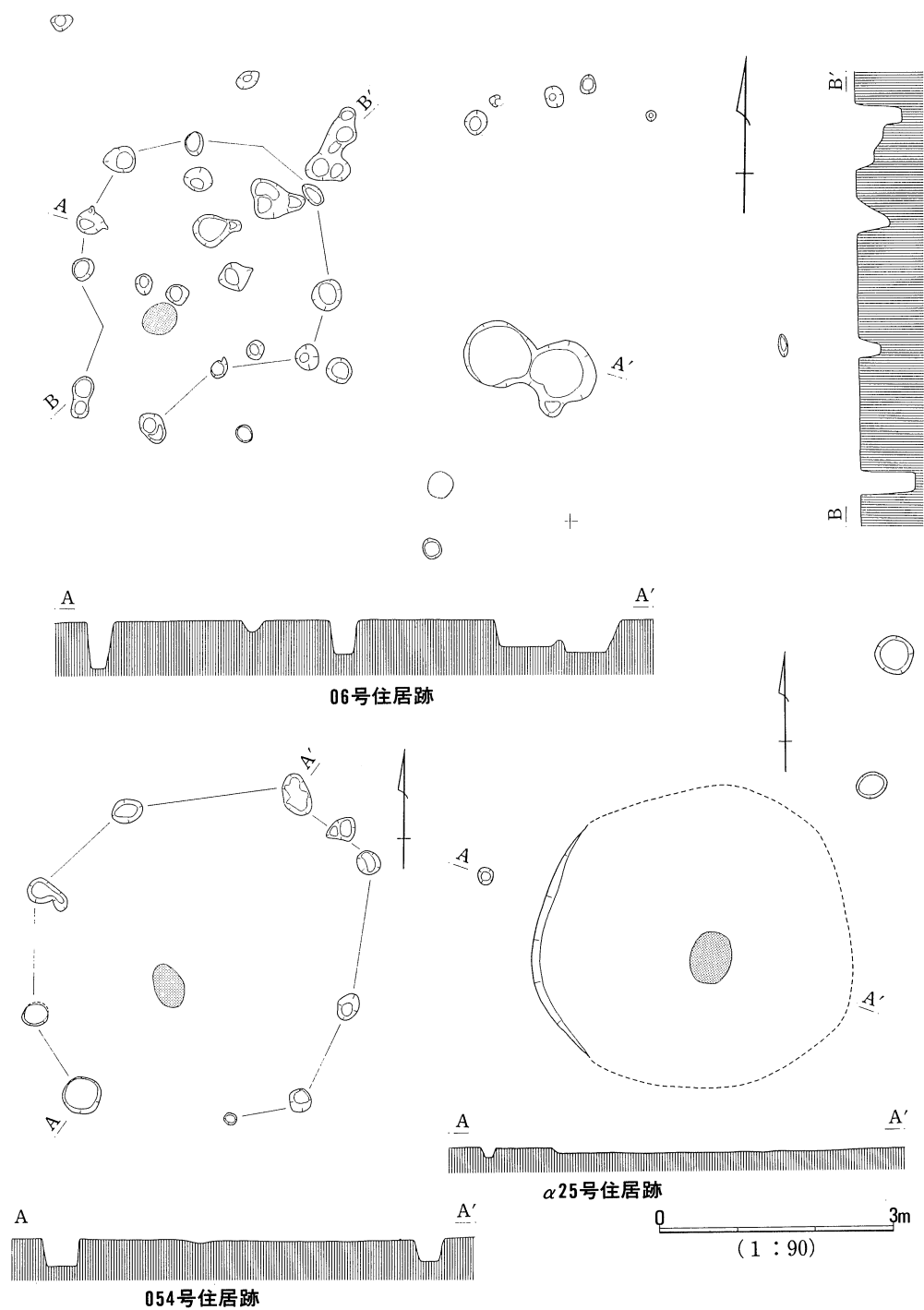
第26図 α30・α15号住居跡



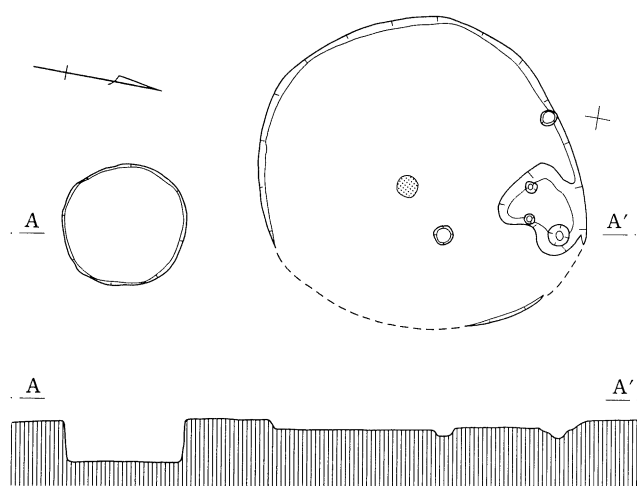
第27図 07・08号住居跡



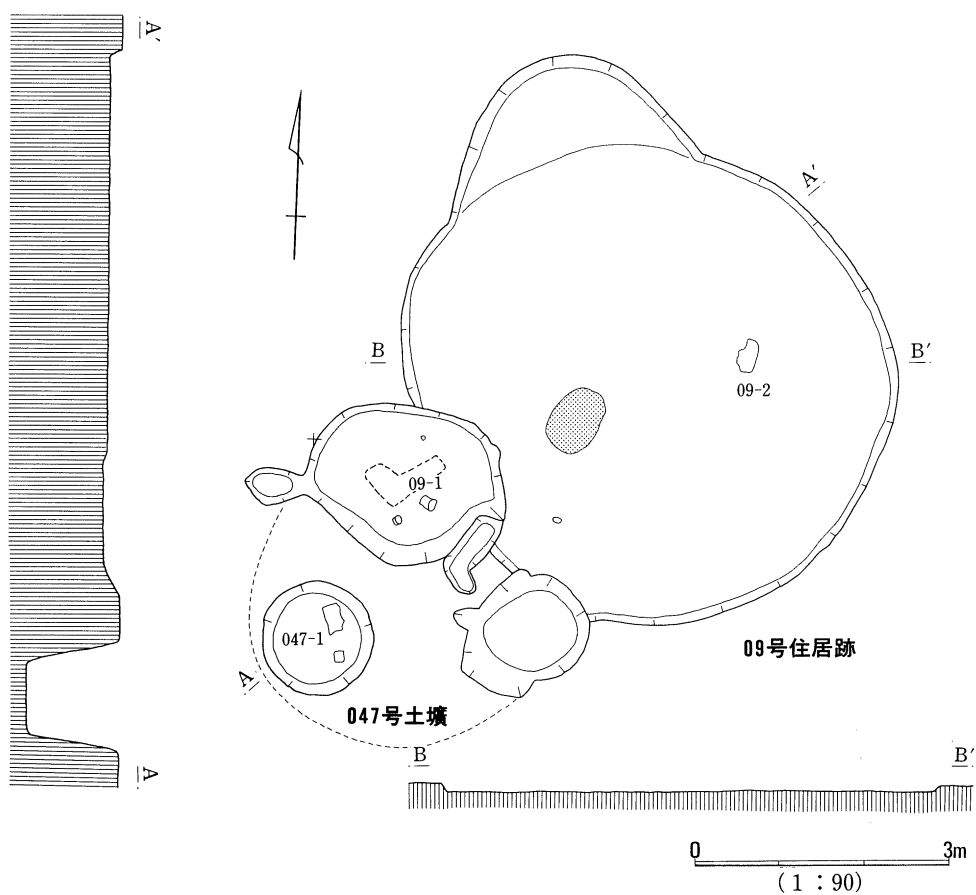
第28図 053号住居跡



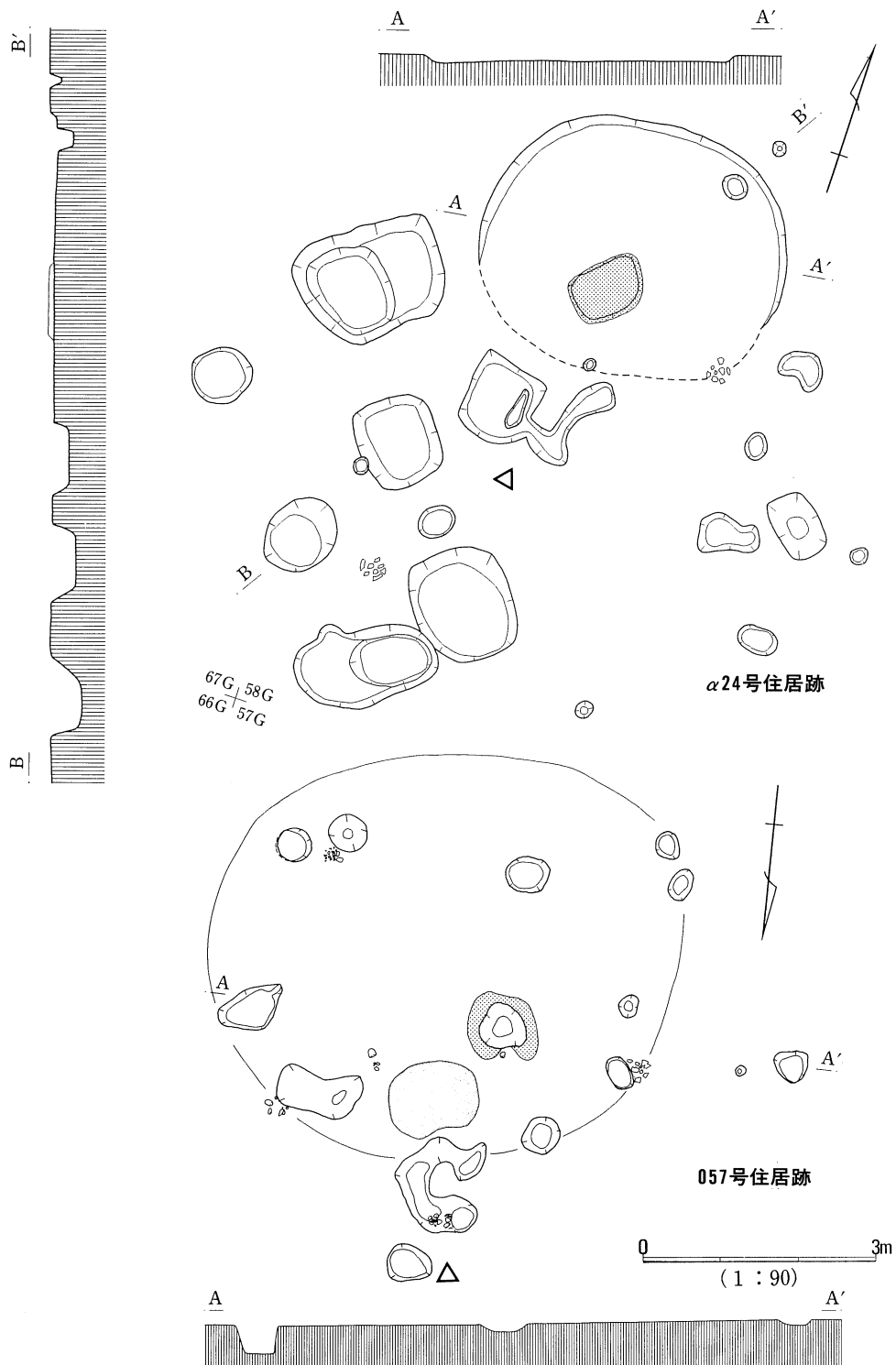
第29図 06・α25・054号住居跡



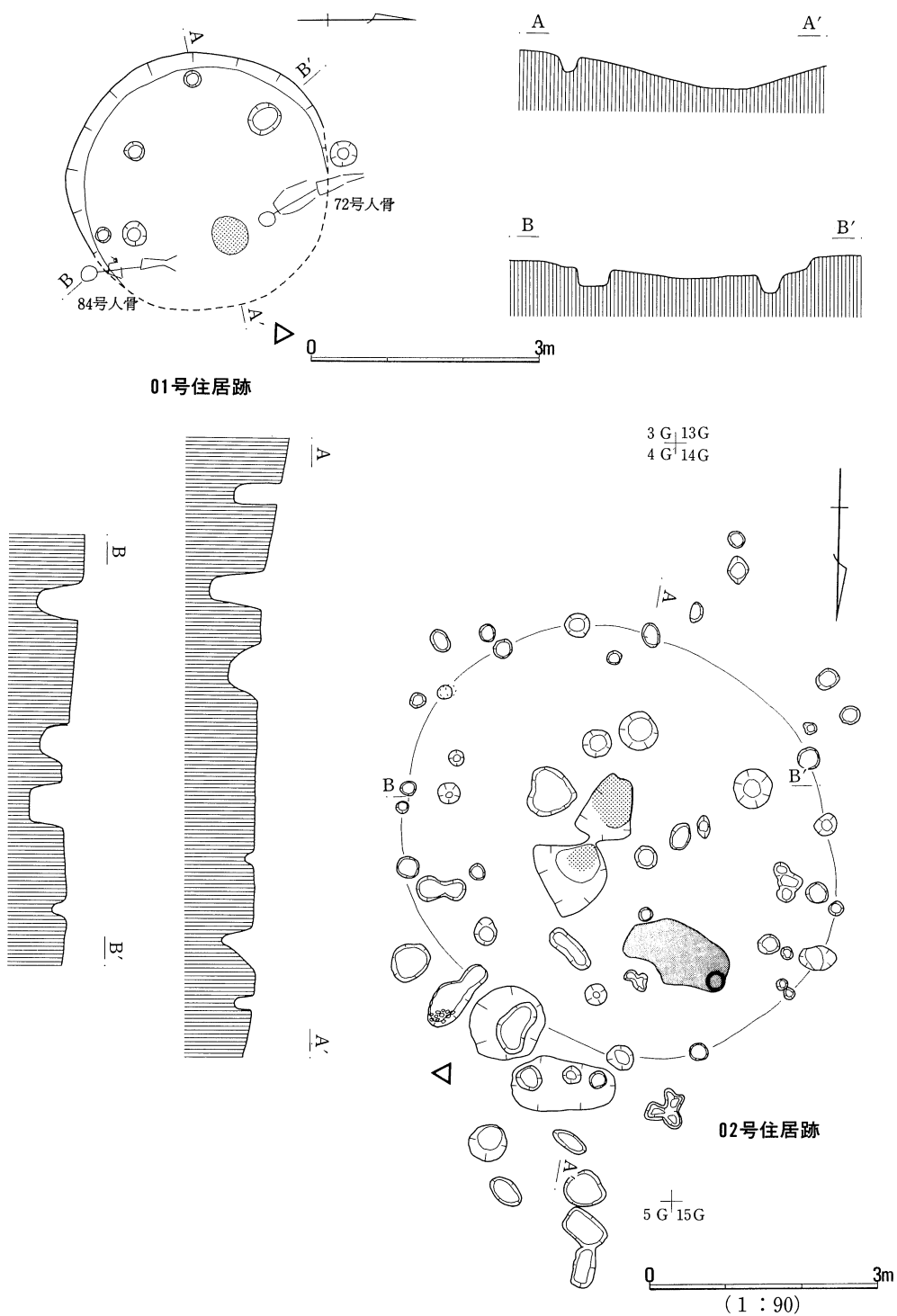
010号住居跡



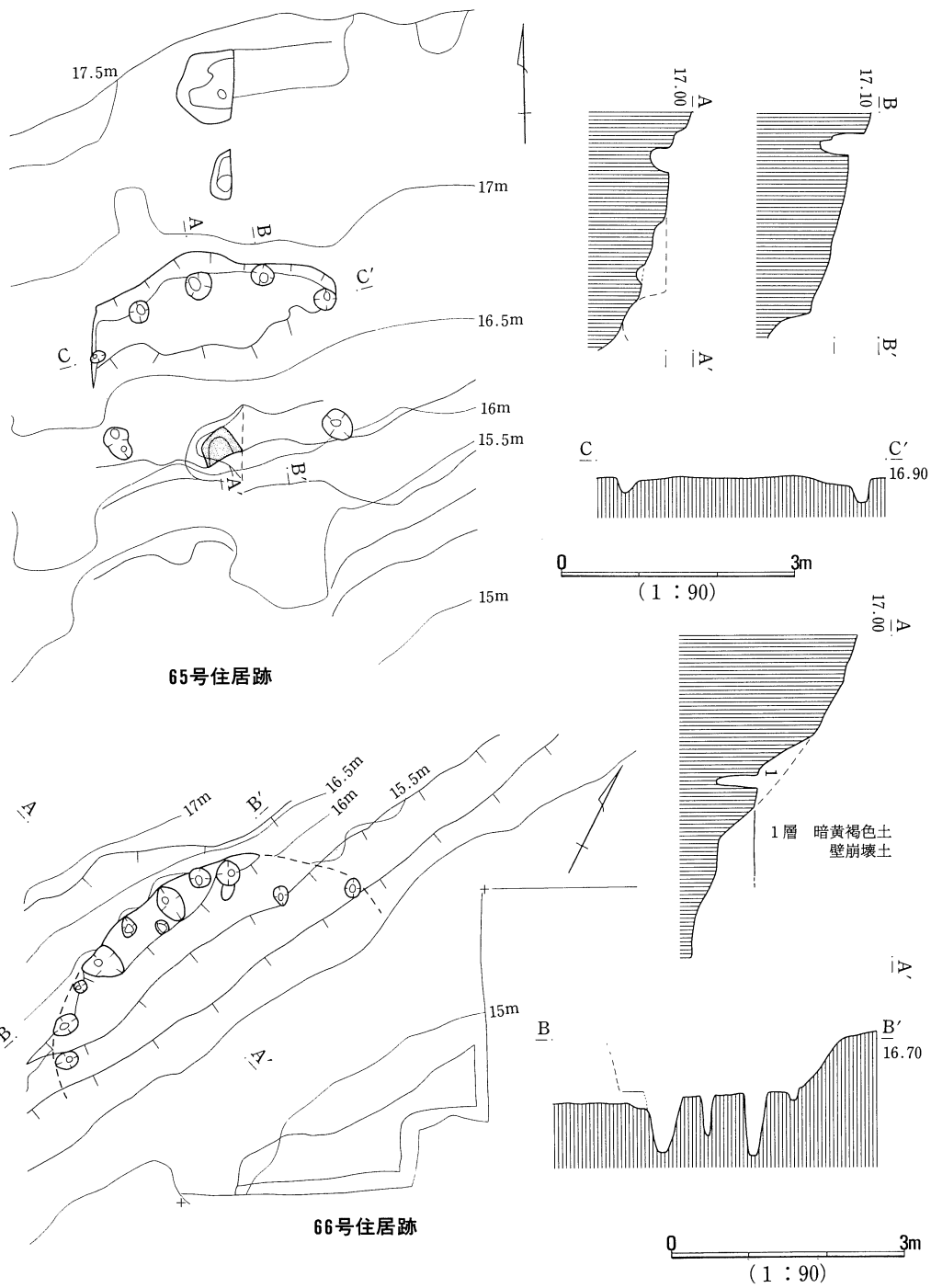
第30図 09・010号住居跡



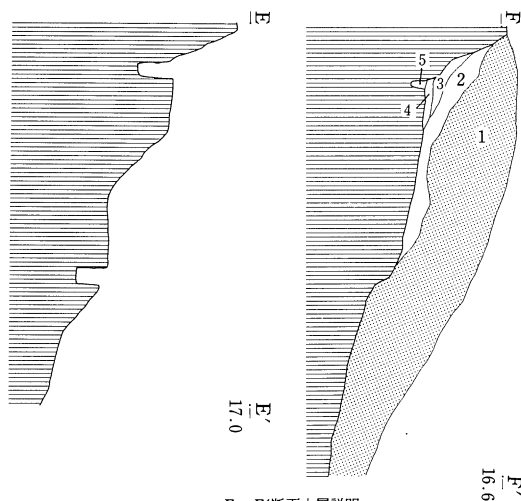
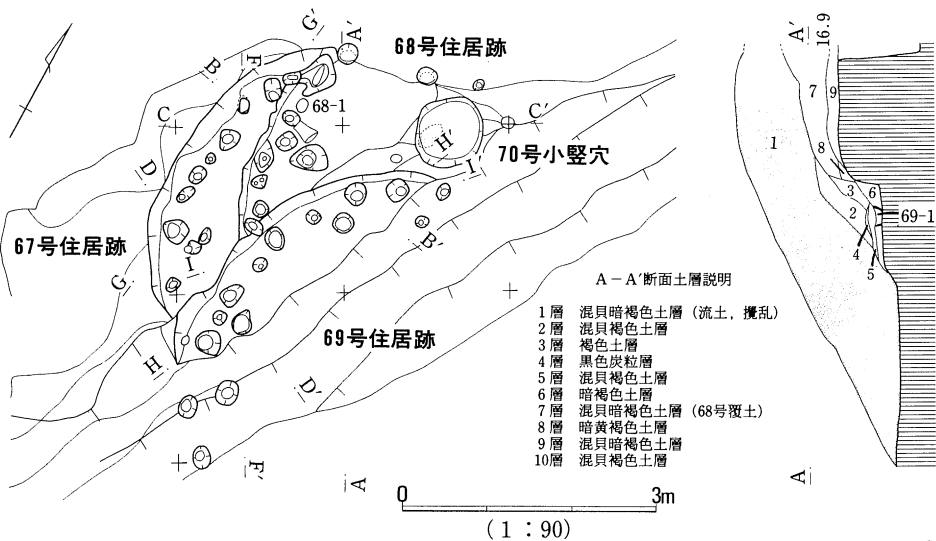
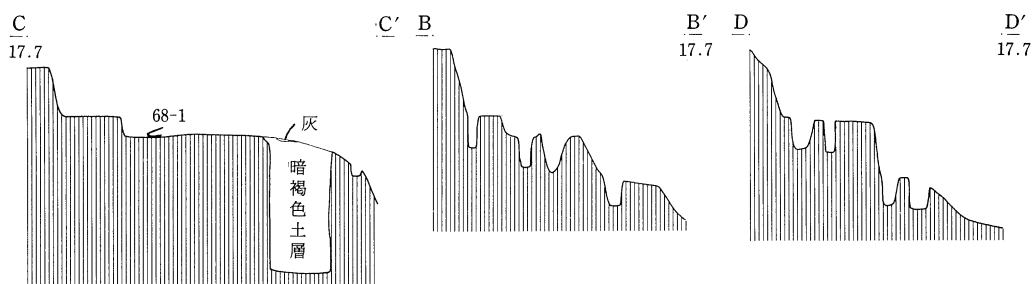
第31図 057・α24号住居跡



第32図 01・02号住居跡

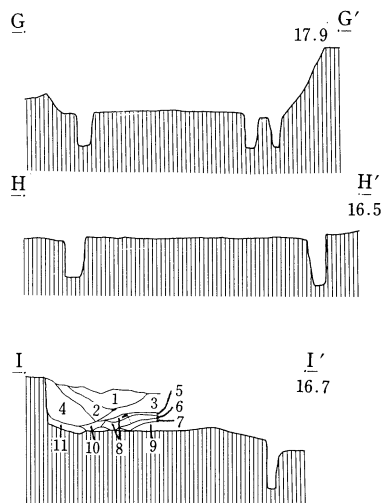


第33図 65・66号住居跡



F-F'断面土層説明

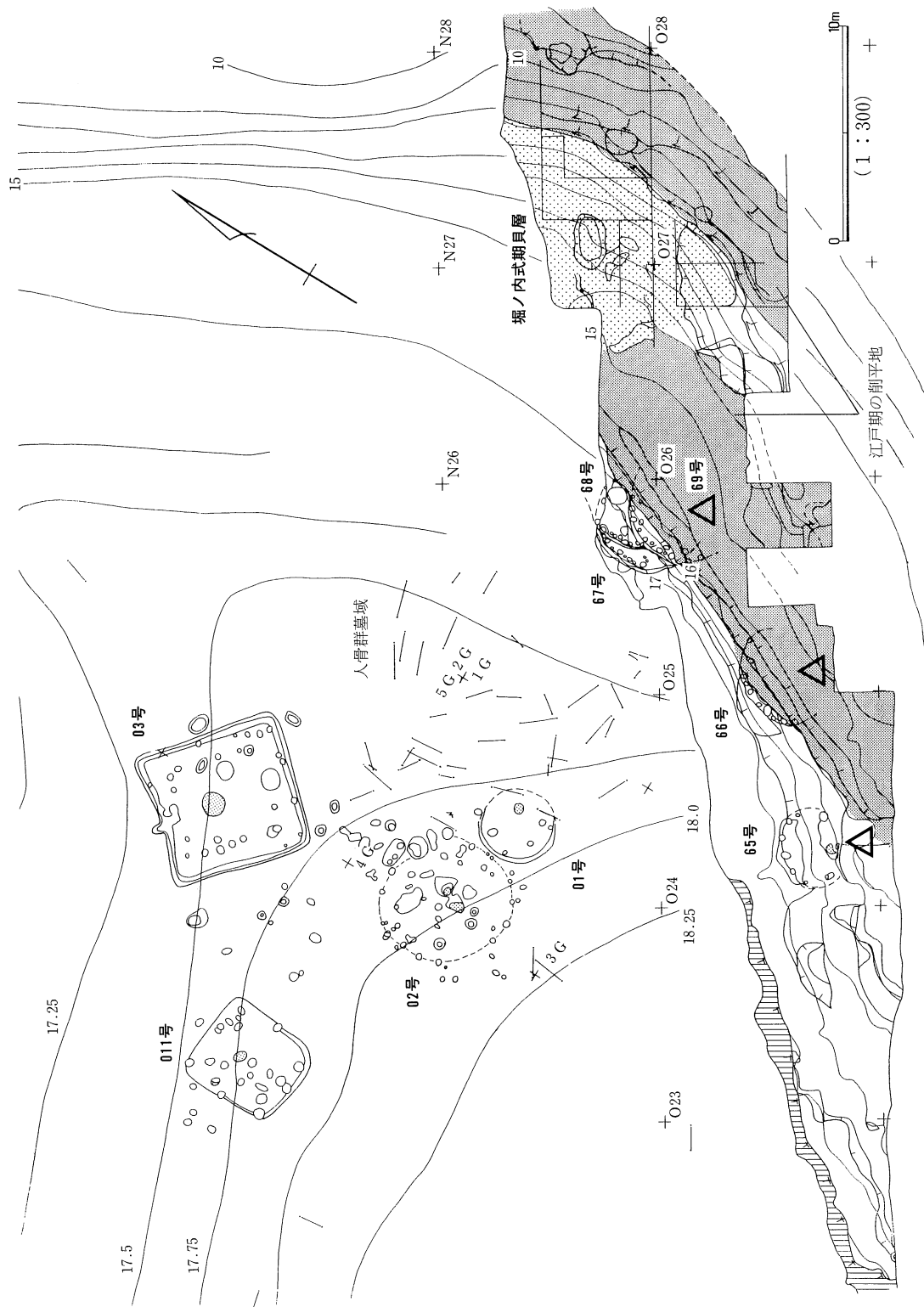
- 1層 混貝暗褐色土層 (流土, 攪乱)
- 2層 混貝褐色土層
- 3層 混貝褐色土層
- 4層 ローム粒混入混貝褐色土層
- 5層 混貝黄暗褐色土層 (ロームが多い)



I-I'断面土層説明

- 1層 ローム粒・焼土粒・細片貝を含む暗褐色土層
- 2層 暗褐色土層
- 3層 混貝褐色土層
- 4層 混貝暗褐色土層
- 5層 橙色焼土粒と炭粒を多く含む暗褐色土層
- 6層 橙色焼土と炭粒層
- 7層 5層と似る
- 8層 橙色焼土層
- 9層 混細貝片暗褐色土層
- 10層 混炭暗褐色土層
- 11層 混貝暗褐色土層

第34図 67・68・69・70号遺構



第35図 傾斜地住居跡群

2. 縄文時代出土人骨と墓域

菊間手永遺跡は手永貝塚が縄文時代後期に形成されたため、それ以降の時期は貝塚の貝層によるカルシウムの供給により、土壌中の埋葬された結果の人骨の遺存状態が良好である。調査の結果回収された縄文時代の人骨数は82体である。人骨の調査報告にあたっては森本岩太郎先生をはじめ多くの先生にご協力をお願いした。人骨調査の成果については、X. 市原市菊間手永貝塚出土人骨に掲載されているので、考古学的所見をここでは加えたい。また考古学的成果についても人骨の出土状態にいたるまで、克明に記録されていた森本先生のメモに拠るところが大きい。ここで改めて現地まで調査に来られた先生方に感謝を申し上げたい。

第36図を診ると縄文時代人骨と考えられる内に043・08・020号住居跡、1・8・16号人骨のようにほぼ単独または数体の集まりの埋葬と、方形の網点部分のかなり密集した墓域を形成する埋葬形態があるのが解かる。先に方形の網点部分についての墓域埋葬を記載する。

第36図正方形網点部分はほぼ14m四方の部分であり、第37図に拡大して埋葬姿勢を示した。この墓域内に埋葬され調査で位置確認して回収された人骨は49体である。仮に13号人骨から60号人骨までの14mを一辺として正方形を設定すると第37図の1号・8号人骨を除く全ての人骨がその方形区域に納まる。またその中には第36図■印のイノシシの幼体の埋葬が一体混ざることになる（X章図版64-1・概略図第36図下段）。

第37図には第2トレンチ断面図再掲載した状況では、人骨は全面に混貝土層に覆われていたことになる。そして01号住居跡が堀之内式期にあたるため、墓域の設定はそれ以後であろう。墓域に縄文時代の遺構が重複することはそれ以降無かった。

昭和47年度調査時の引継ぎ資料と森本先生の調査メモX章第261図とX章第41表を加えて、また推測を含めて敢えて墓域の説明を続ける。回収された人骨49体中、埋葬姿勢や頭位置が不明な人骨は14体である。それらの不明原因は埋葬密集のための攪乱であろう。埋葬密集のための攪乱人骨は、11-2・12-2・13-2・52-2・55-2・56-2・60-2・61-2・71-2・72-2・73-2・78-2・78-3・78-4号人骨の14体であると推測される。それらは「-1」番号に付随した状態に検出回収され、整理分析の際に別個体と判断された人骨であろう。

調査当時人骨の検出にあわせて埋葬状態の人骨標本にするために、地面から取り上げ作業を行なっている。そのため保存状態の良い83・84号人骨を選んで標本にした。そのため取り上げ作業後に調査に入った森本先生のメモの第261図には83・84号人骨が無く、83号人骨に隣接するX1・X2・X4号人骨も記載されていないのである。83号人骨の取り上げ作業の際移動、取り上げられた人骨3体はまとめられて保管された為一括回収され、14号人骨の-1・-2・-3・-4になったものと考えられる。つまり14号-4は小児なので混入したと考えて、そのため位置特定はできないが、墓域に4体増やして、方形墓域内は53体の埋葬があったことにしたい。これ

は遺存して回収された人骨の方形墓域内総数となる。83・84号人骨は標本として処理され、標本ケースに保管されておりその出土状態は第39図にある実測図である。

第37図の02号住居跡南側3m付近に1・8号人骨がある。1号は1-1・1-2号の2体分あるがこれも埋葬密集攪乱と考えられる。1号人骨においてはトレンチ土層の状態によるとローム上面までの若干の掘り込みがありそうである。

第38図16号人骨は、12グリッドと13グリッドの境界付近に位置する。縄文時代の遺構65号住居跡から13m西方向になり、南斜面の傾斜変換線から3mと近い位置にある。

第40図上段08号住居跡内に79号人骨はある。出土状態は写真よりトレースした。住居跡床をやや掘り込み、住居内埋葬といわれる状態になっている。その08号住居跡の南西1mの19グリッドにX5号人骨がある。

第40図下段043住居跡北西1mの土壌に51号人骨はある。第74図70の耳飾りが人骨と伴に検出された。土壌は1mほどの不正形をしており深さは23cmある。頭頂点と足先点は作図されているので、それを基に写真をトレースして挿図に入れた。79号人骨もそれに従っている。

第38図03号住居跡の北方向10mの6グリッドの位置にX3号人骨はある。X5・X3号ともに作図されているが、人骨番号の特定ができなかった。出土位置が明確であるが人骨番号の特定のできない人骨を「X」としている。推測の域を出ないが、7号人骨の-1・-2のいずれかをX3号人骨としたい。また81号人骨をX5号人骨としたい。それはX5号人骨は唯一1/5の縮尺によって作図されており、1体で出土した可能性が高い。81号人骨も1体のみで記載がありX5号に該当する可能性が高いのである。残りの単数番号では7号があるのでX3号を当てたい。85号人骨は第38図東側斜面貝層下の71号土壌から破片状態で検出されている。86号人骨は第36図Aの▲の位置に甕棺葬とした深鉢の底を外した状態で出土した。

X章の第41表「縄文時代主要人骨の性別・年齢ならびに出土時の頭位と姿勢」から上記を除くと、17～24号人骨の5体が残ることになる。これらは各個別番号が付されているので、人骨調査回収時には個別識別が可能な状態であったと推察できる。第4図は昭和47年度調査時の作図に昭和58年度調査の結果を加えた全体図である。昭和47年度調査時に作図の棒状人形が描かれているものが人骨出土位置である。第4図は細かく判別し難いが、拡大した第38図の020号住居跡東側の27グリッドに3体の番号不明の人骨が存在する。これらが17～24号人骨5体分の可能性がある。作図人骨より回収された人骨数が多いことは既に述べたことで有り得ることである。特に24号人骨は性別まで明らかなので遺存状態が悪いことを意味している。以上が82体中の人骨の69体分の出土状態である。整理中には貝塚から検出した獣骨分類に際し、数多くの人骨を発見している。人の四肢骨は獣骨と混入すると判別は難しく、破片となり骨端を失うとさらに分類が困難になる。以上の判断を第2表縄文時代出土人骨一覧にまとめた。

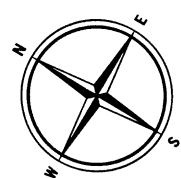
第2表 縄文時代出土人骨一覧

※ 印の屈位は膝関節だけを屈曲し、股関節を伸展しているもの (番号等 X. 市原市菊間手永貝塚出土人骨の第41表に従っている)

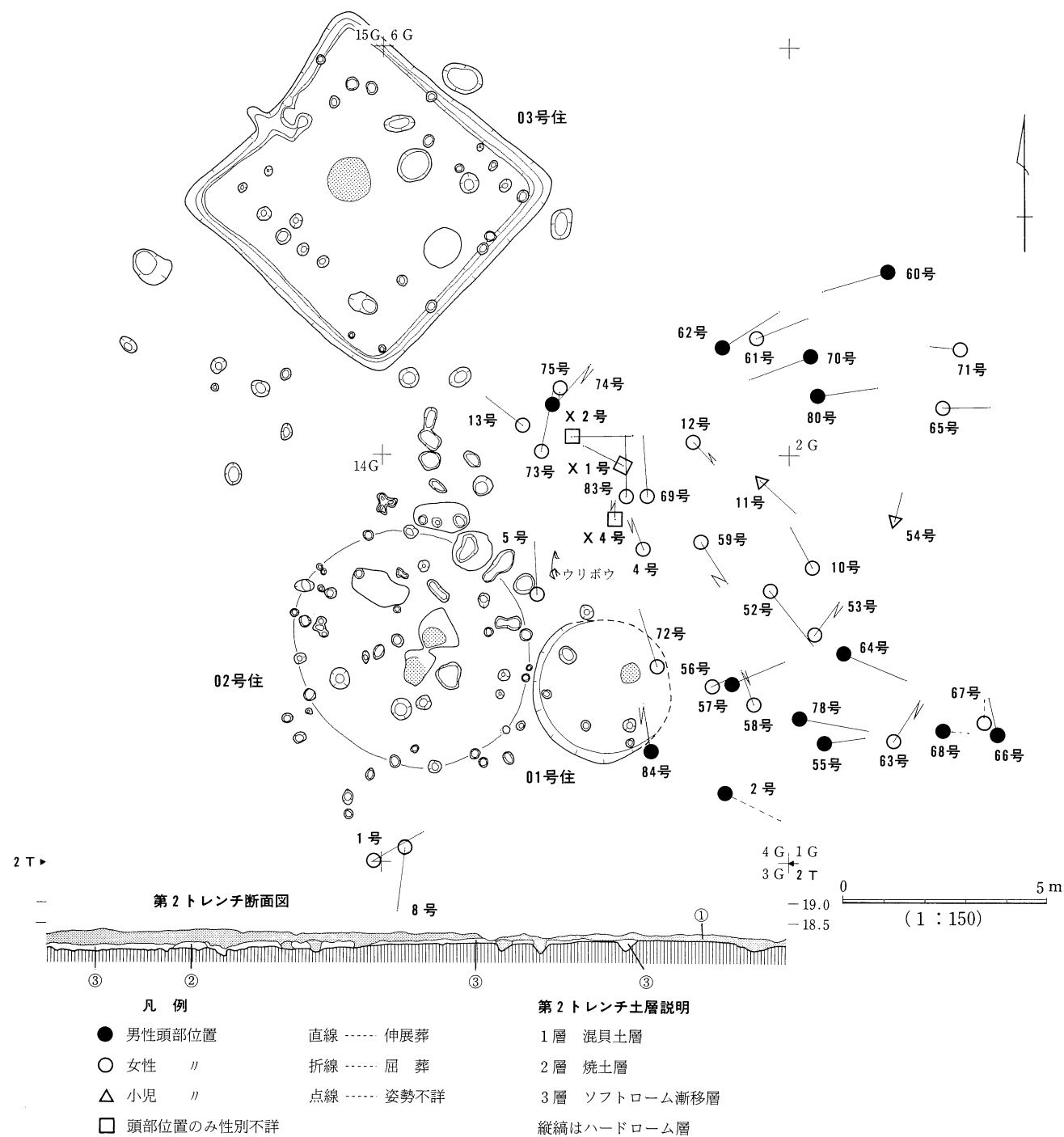
No.	人骨番号	性別年齢	頭位方向	埋葬姿勢	埋葬位置	副葬品	抜歯方法	図版補図番号	備	考
1	2	男	W25° N	仰臥伸展位	4 G 方形墓域内		3 3	図版 72-17		
2	4	女	S19° 50' E	左側臥屈位	5 G "		32	" 72-18		
3	5	"	S 2° 50' E	仰臥伸展位	4 G 方形墓域内			図版 64-1	イノシシの幼体が隣接して埋葬してある	
4	10	"	S28° 50' E	右側臥屈位	1 G "					
5	11-1	小児	W41° 50' N	仰臥伸展位	"					
6	11-2	成人			"				埋葬密集攪乱	
7	12-1	女	N41° 50' W	左側臥屈位	1 G "					
8	12-2	男		"	"				埋葬密集攪乱	
9	13-1	女	E37° 50' S	仰臥伸展位	2 G "					
10	13-2	小児			"				埋葬密集攪乱	
11	52-1	女	N38° 50' W	仰臥伸展位	"			図版 65-3		
12	52-2	"			"		23 2	" 73-20 74-21-22	埋葬密集攪乱	
13	53	"	S37° 50' W	仰臥屈位	1 G "			図版 65-4		
14	54	小児	S13° 50' W	仰臥伸展位	"					
15	55-1	男	W 8° S	"	"					
16	55-2	女			"				埋葬密集攪乱	
17	56-1	"	W23° 50' S	仰臥屈位	"					
18	56-2	男			"				埋葬密集攪乱	
19	57	"	W23° S	仰臥伸展位	"					
20	58	女	S21° 50' E	仰臥屈位	5 G "					
21	59	"	N32° W	仰臥屈位※	"					
22	60-1	男	E16° N	仰臥伸展位	2 G 方形墓域内					
23	60-2	女			"				埋葬密集攪乱	
24	61-1	"	W21° 50' S	仰臥伸展位	"			図版 66-5		
25	61-2	男			"				埋葬密集攪乱	
26	62	"	W22° S	仰臥伸展位	"					
27	63	女	S32° 50' W	右側臥屈位	1 G "			図版 66-6		

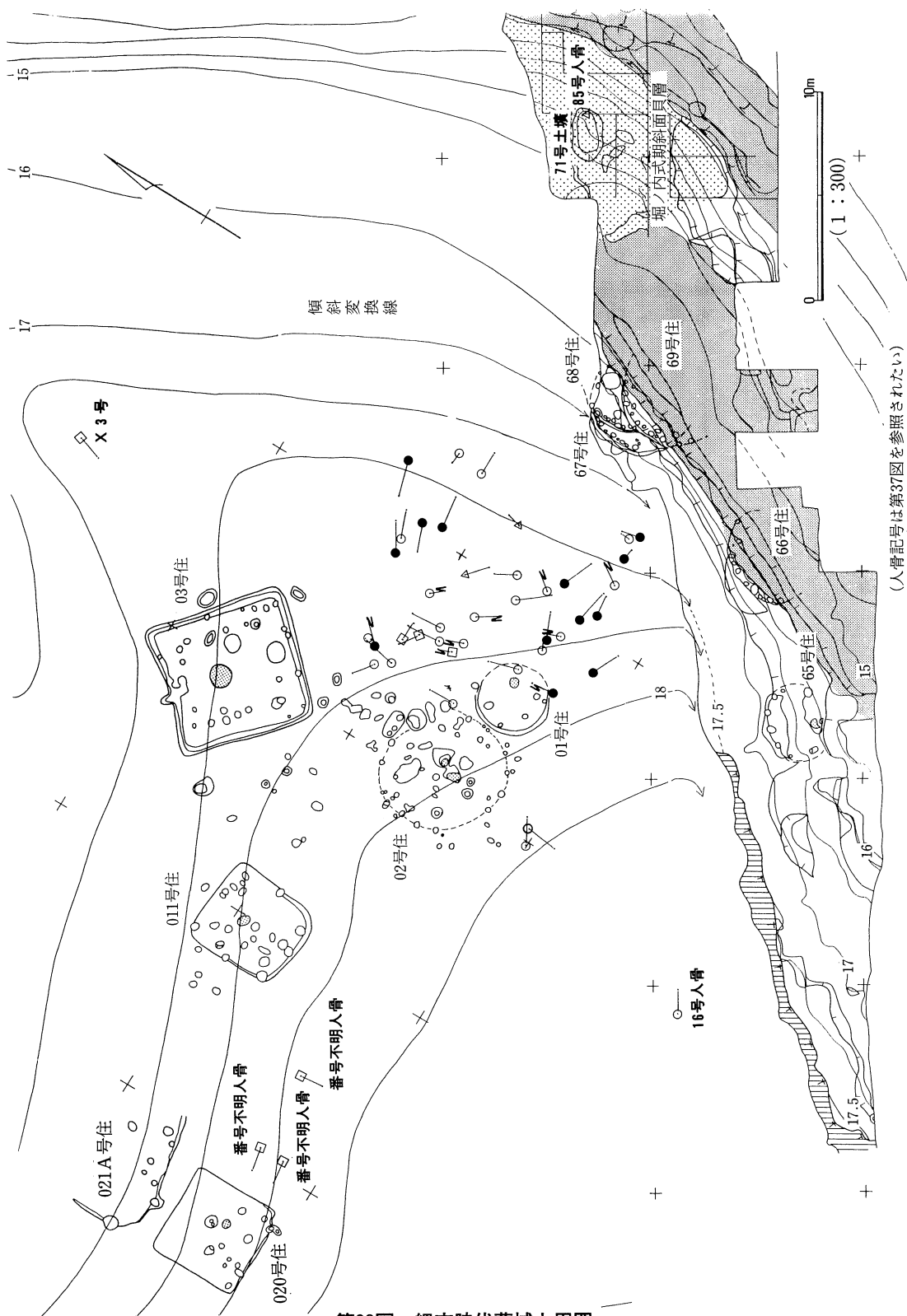
No.	人骨番号	性別年齢	頭位方向	埋葬姿勢	埋葬位置	副葬品	抜歯方法	図版補図番号	備	考
28	64	男	W22° 50' N	俯臥伸展位	方形墓域内		2 2	図版 67-7 73-23		
29	65	女	W50° S	仰臥屈位	2 G					
30	66	男	S12° 50' E	仰臥伸展位	1 G			図版 79-32		
31	67	女	S 2° 50' W							
32	68	男	W 5° 50' N						遺存不良	
33	69	女	S 4° 50' E	仰臥伸展位						
34	70	男	E20° 50' N	"	2 G					
35	71-1	女	E 6° 50' S	右側臥屈位	2 G	方形墓域内				
36	71-2	男				"			埋葬密集攪乱	
37	72-1	女	S17° 50' E	仰臥伸展位		"			01号住居跡を切る	
38	72-2	男				"			埋葬密集攪乱	
39	73-1	女	S11° W	仰臥伸展位	3 G	"	3 3 2 2	図版 67-8, 76-25 73-24		
40	73-2	"				"			埋葬密集攪乱	
41	74	男	S41° 50' W	右側臥屈位	5 G	"				
42	75	女	N 9° 50' E			"				
43	78-1	男	W 9° 50' N	俯臥伸展位	1 G	"	2	図版 76-26 77-27	埋葬密集攪乱	
44	78-2	"				"				
45	78-3	"				"			"	
46	78-4	女				"			"	
47	80	男	W 7° S	俯臥伸展位	2 G	"	2 2 2	図版 68-10 15-30		
48	83	女	W 4° 50' N	仰臥伸展位	1 G	"		図版 69-11	土壌が深い	取り上げ標本
49	84	男	S 7° E	左側臥伸展位		左手首に貝輪1点		" 69-12	01号住居跡の上	"
50	14-1	女	x 1			"			14-1~14-4はx 1, x 2, x 4号人骨の	
51	14-2	男	x 2			"			可能性が高い	
52	14-3	成人	x 4			"				
53	14-4	小児				"				
54	1-1	女	W30° S		13, 14, 4 G				8号人骨に隣接	
55	1-2	"							埋葬密集攪乱	
56	7-1	男	x 3 N24° E						x 3号人骨の可能性が大きい	
57	7-2	女							埋葬密集攪乱	

No.	人骨番号	性別年齢	頭位方向	埋葬姿勢	埋 葬 位 置	副 葬 品	抜歯方法	図版挿入番号	備 考
58	8	女	N 7° E		4 G				1号人骨に隣接
59	16	"	W 30° S						020号住居跡と011号住居跡間の
60	17	"			27、39 G				人骨群と推定される
61	18	男			"				
62	20	女			"				
63	21	"			"				
64	24	成 人			"				
65	51	女	N 15° E	右側臥屈位		土製耳飾 1 点	□ 1	図版 64-2 73-19	043号住居跡・東北隣接
66	79	"	S 16° W	仰臥伸展位			2 23	" 68-9 76-39 77-28 79-31	08号住居跡内埋葬
67	81	"	χ 5 S 35° 50' E						08号 " 南西隣の χ 5 の可能性大
68	85	小 児			71号土壇内				東斜面貝層内人骨片のみ
69	86	胎 児		甕棺葬 (小土壇)	住居跡隣接 4 G				02号住居跡と01号住居跡の間のピット
70	χ - 1								
71	χ - 2								14-1 ~ 14-4 のいずれかの可能性大
72	χ - 3		N 24° E						
73	χ - 4								14-1 ~ 14-4 のいずれかの可能性大
74	χ - 5		S 35° E						

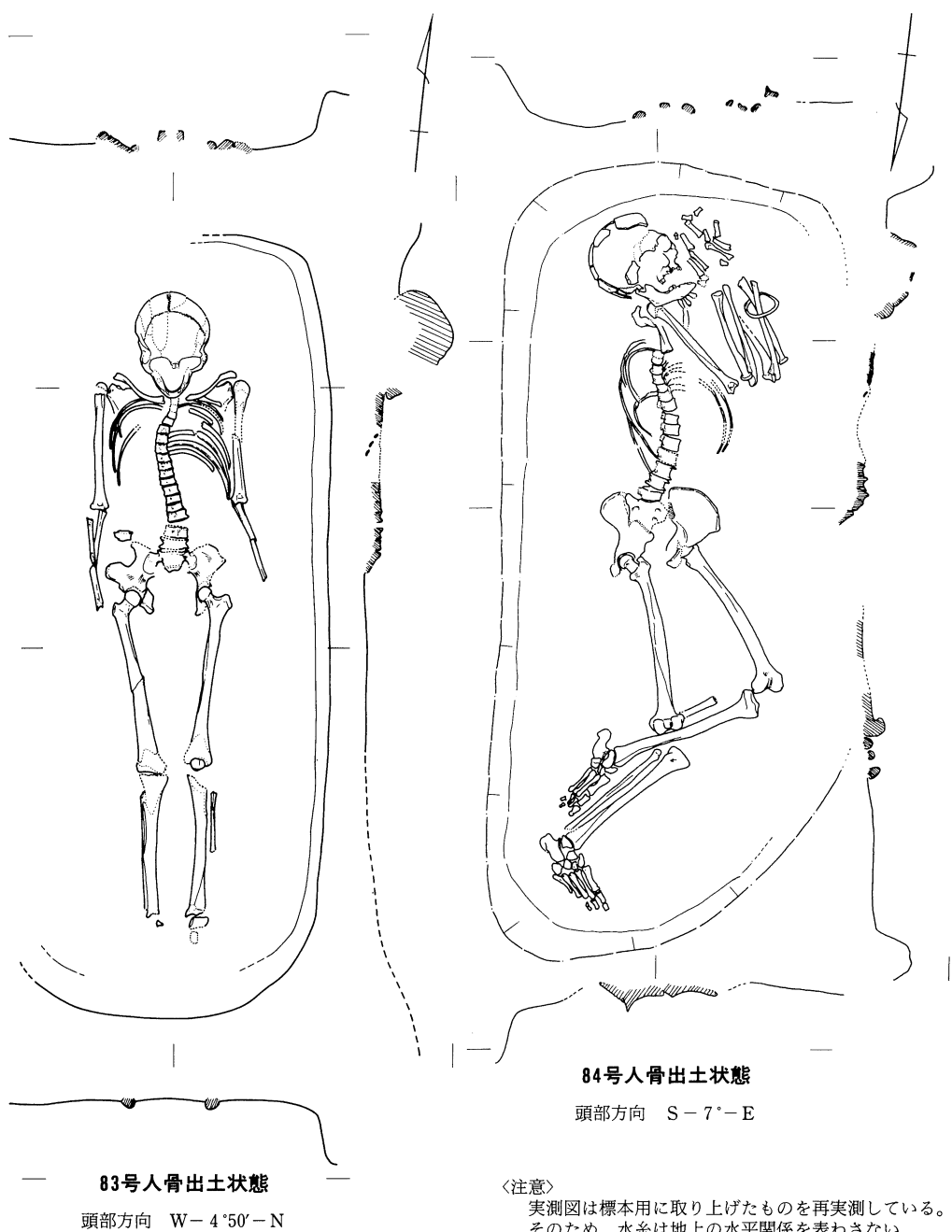


第36図 縄文時代出土人骨位置

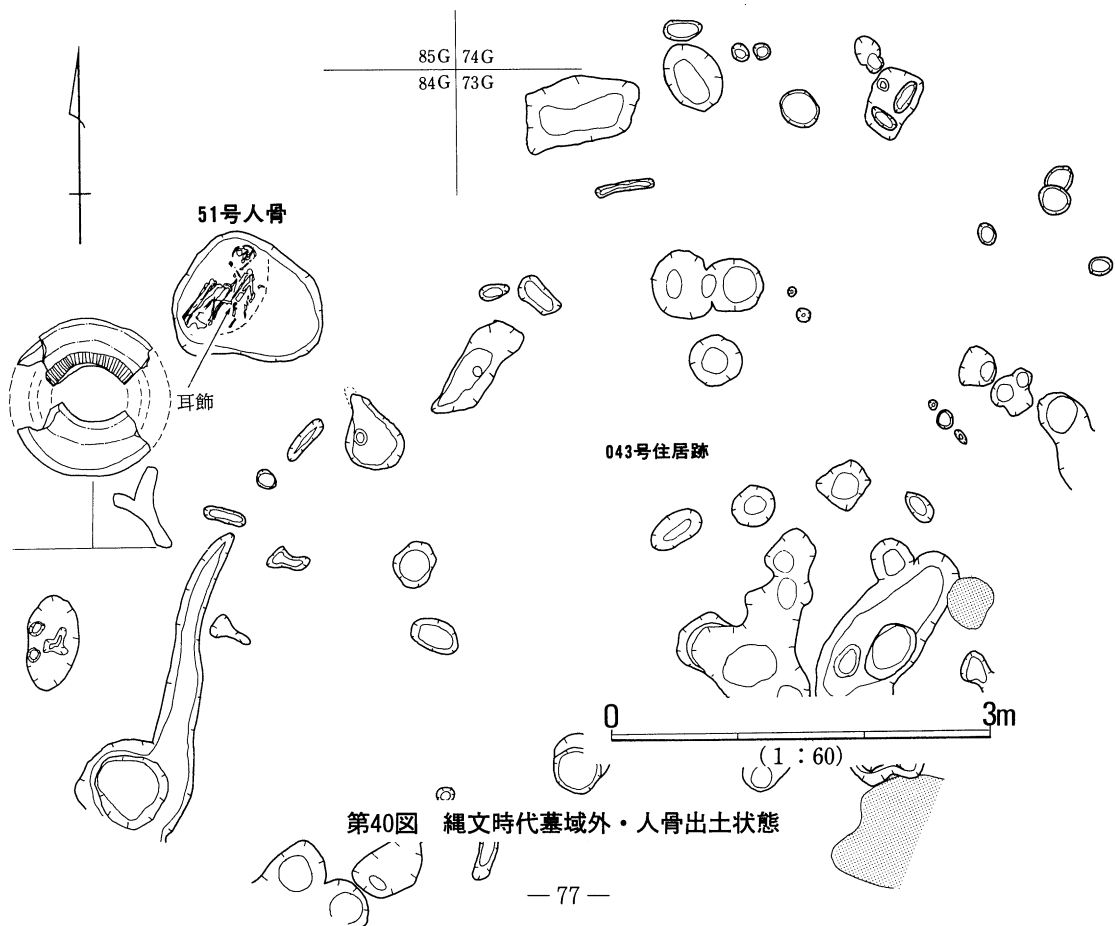
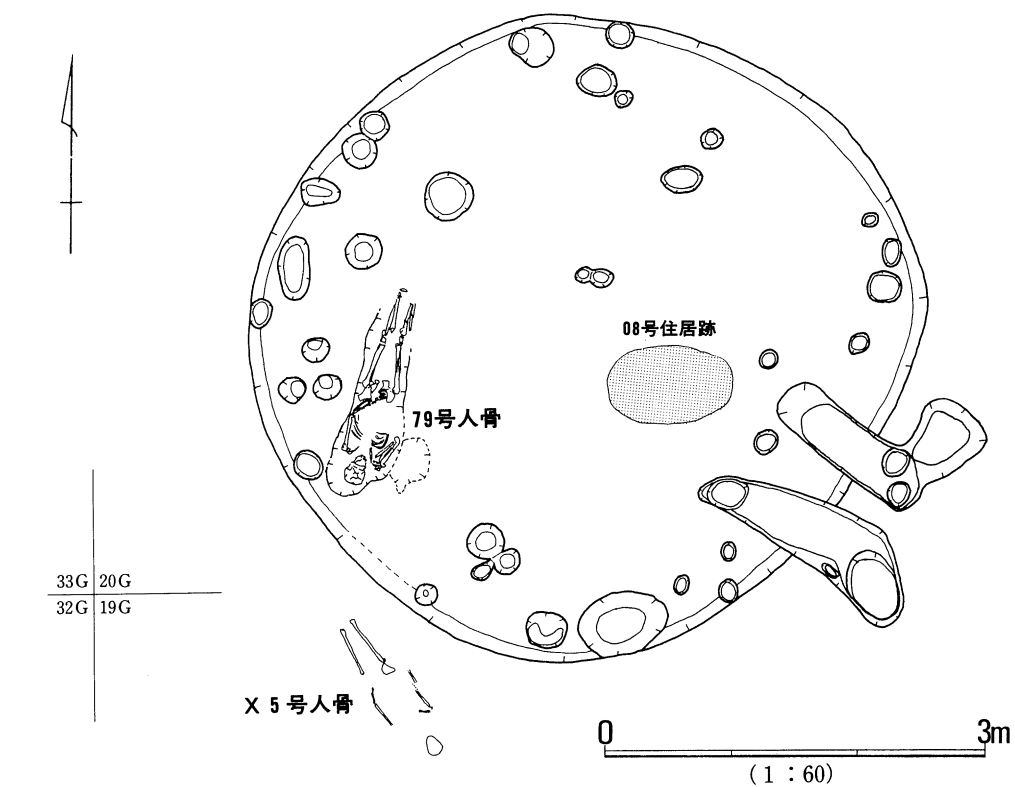




第38図 縄文時代墓域と周囲



第39図 縄文時代人骨出土状態



第40図 縄文時代墓域外・人骨出土状態

3. 縄文時代の遺物

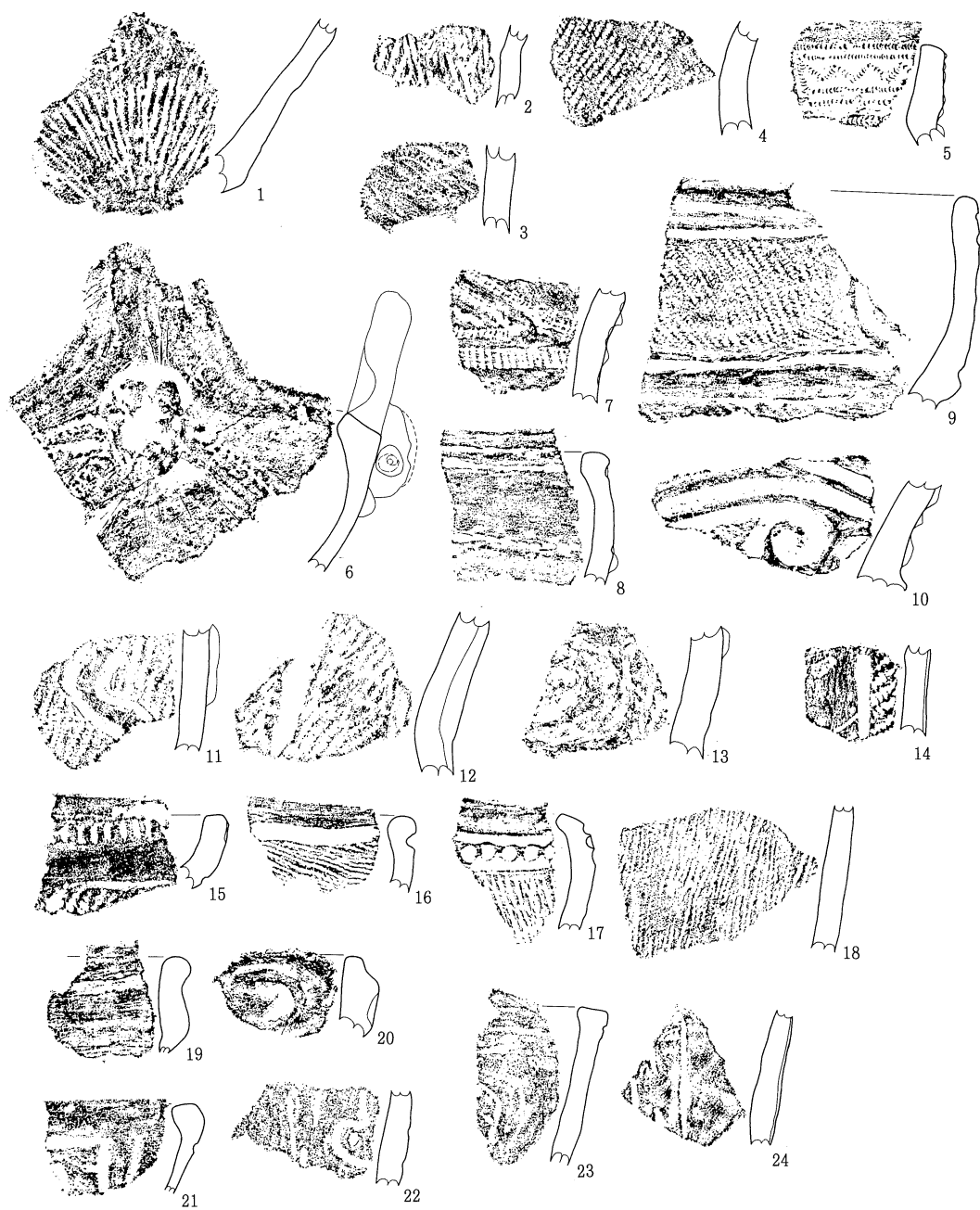
(1) 集落形成前遺物

菊間手永遺跡は「1. 縄文時代の遺構分布」において説明した通り、縄文時代の住居跡それに伴う土坑等の遺構は後期以後に形成される。そのため縄文時代集落は後期になってから成立する。住居跡に伴うであろう遺物の土器においては縄文時代後期堀ノ内1式が最初である。出土遺物の縄文土器においても堀ノ内1式から多量に検出された。しかし堀ノ内1式以前の縄文式土器も若干ではあるが出土している。第41図及び第42図は集落形成前の縄文土器資料として掲載した。第41図は昭和47年度調査時に採集され、第42図は昭和58年度調査時に採集された。すべて当該期の遺構に伴うものはない。整理時に分類された堀ノ内1式より古い時期とした土器は掲載されたものが全てである。15,000㎡の台地上の調査としては少ないと思われるので、当遺跡の立地や性格に起因する傾向を現わしているだろう。

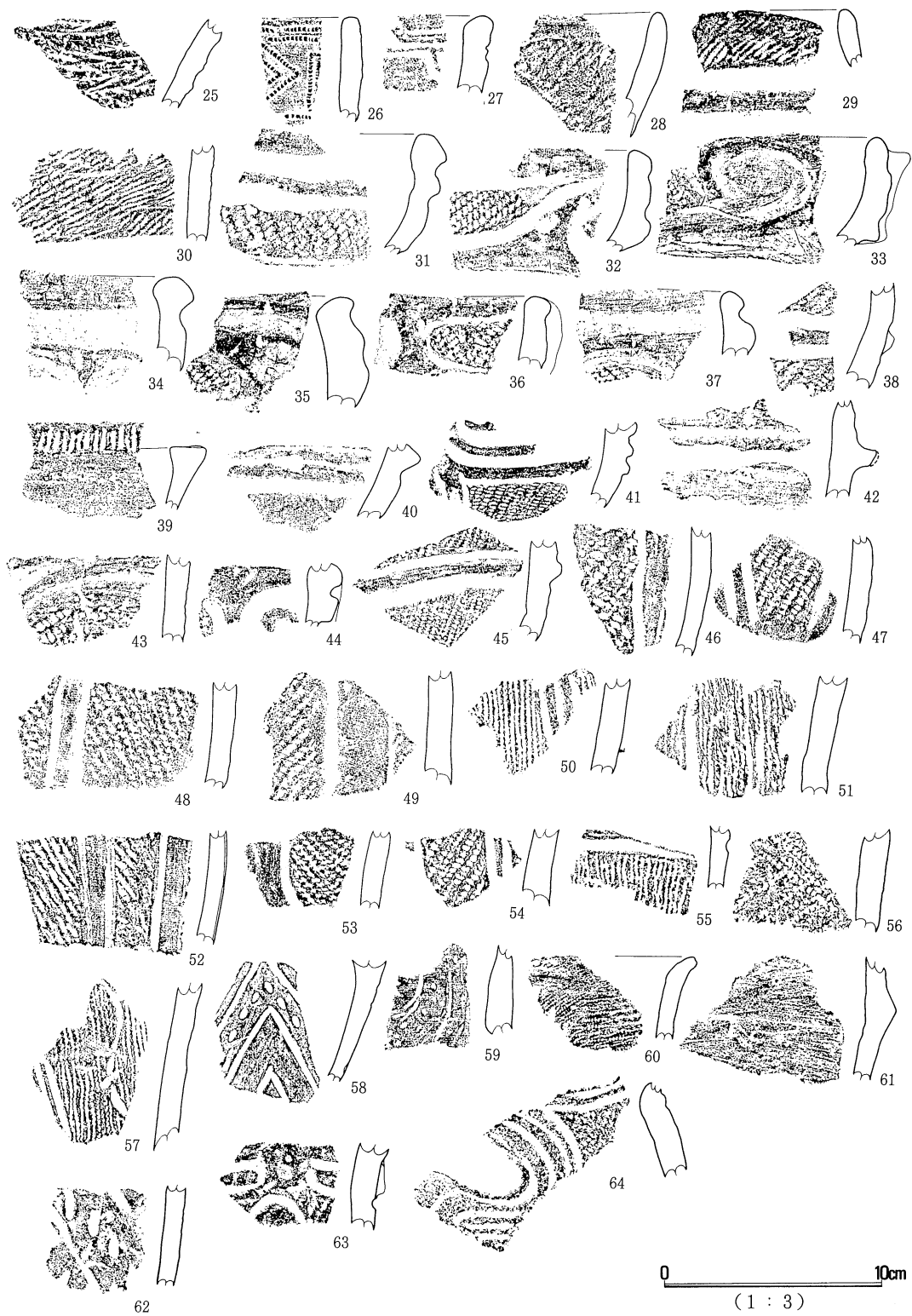
以下第41図掲載土器の記載をする。1・2は貝殻条痕文土器で繊維を含んでおり、1は先底部近く、2は胴部片である。3は1・2と胎土は似るが、擦痕文となっている。以上は縄文時代早期末の土器である。4は分厚い繊維土器で胴部の屈曲部分になり縄文の単節を転がしている。5は胎土に白色の長石・方解石・金雲母を含む、角棒状口唇部の口縁部である。半裂竹管文を巡らした十三菩提式土器である。以上が縄文時代前期の土器である。6は胎土に金雲母を含む阿玉台式波状口縁部、7は赤くしまった胎土の勝坂式土器の胴部片である。8は6・7の中間的胎土を有する口縁部である。9～18は加曽利E式土器の範疇に入るとされる。以上が縄文時代中期の土器である。19・20はいずれも口縁部である縄文中期の土器群に分類した。21・23は口縁部片、22・24は胴部片である。沈線と列点等の構成から縄文時代初頭の称名寺式土器とした。遺構が検出されないので伴関係は不明である。以上が第41図である。

以下第42図掲載土器の記載をする。前後するが、61は胎土に繊維を含み器面は擦痕があり胴部上半に屈曲がある縄文早期の鶉ガ島台土器の胴部片である。第41図1・2・3は恐らく当該時期であろう。25は胎土に細角礫を含み黄白色を呈する。地文に縄文があり貼り付け粘土紐を細沈線によって区画する縄文前期後半の諸磯b式の胴部片である。28・56は胎土に繊維を含み縄文を施文する。26・27は口縁部であり第41図5に胎土が似ており施文も同様なので同時期としたい。30は地文に縄文の無節を転がし、小型の三角文を施文することから縄文時代中期初頭の土器としたい。31～55までは加曽利E式の土器である。第41図と合わせ点数が一番多い。58・59・62は称名寺式土器である。以上が集落形成前と考えている土器である。

29は割れ部分に沈線が水平に入り、傾きが逆である。60は口唇上にも縄文が入る。29・60は弥生時代と思われる。63・64は堀ノ内式である。混じって掲載した。63は深鉢の頸部、64は注口土器の頸部下の部分であろう。



第41图 集落形成前土器群



第42図 集落形成前土器群（昭和58年度調査）

(2) 遺構に伴う遺物

第43図以降は遺物出土状態が判る遺物から掲載する。第43図は第23図03号住居跡から出土したと考えられる遺物であり、調査当初は5グリッドの区域によって取り上げられていた。

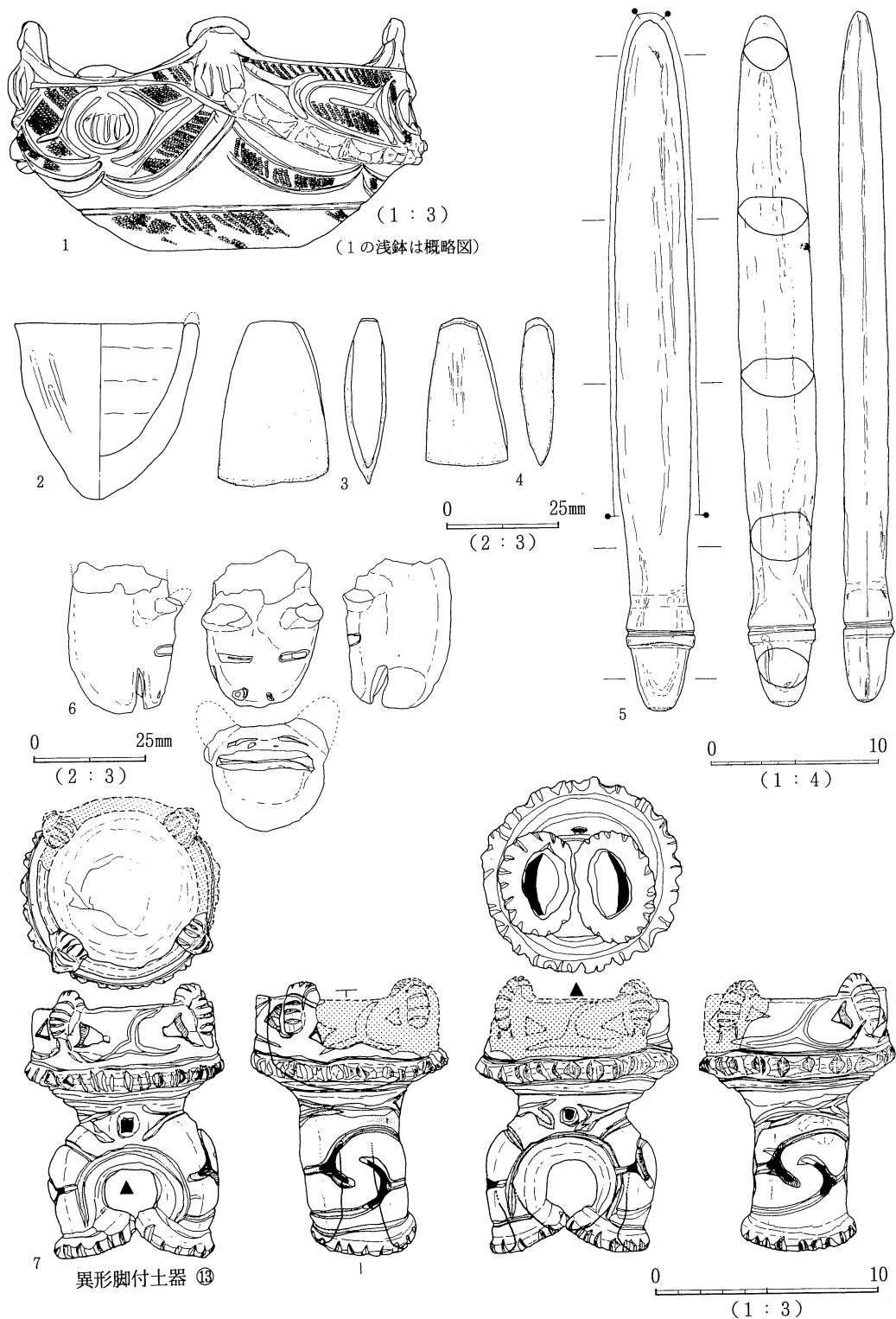
第43図1は03-1から出土し、伏せてある状態で覆土下部から出土したことが写真によって判明した。図は写真からおこした概略図であるため断面がないが1/4スケールはほぼ合っている。2は黑色研磨されたミニチュアの底が尖る形態をしており胎土は茶褐色を呈し、口縁部に一カ所のみ突起があったようである。3・4は小型の定角式の磨製石斧であり刃部はやや摩耗している。5は緑泥片岩製の石剣であり完形となっている。第23図03-1より床からやや浮いた状態で出土した。作りは良く、柄は石棒状の有段があり断面アルファベットU字状の条線が彫られている。柄頭は頂部が叩かれて敲打痕がある。断面形状は握り部分は丸みがあるが、刃先部分は両刃状に長六角形となる。片岩の摂理は長軸に平行しており器面は滑らかである。

6は動物形土製品である。両目・鼻孔・口を同じ棒状篋施文具によって沈線・刺突によって表現している。両耳は貼り付けているが欠損しており形状は不明である。胎土は土器と似ており脆くはない。器面は滑らかになっており、胴部へ貼付ける部分で欠落している。動物を模しているが動物は特定できない。敢えて特定すればイヌ科であろう。同じ市内の西広貝塚SM1出土の動物形土製品に似ている。また時期も当該期に近く縄文時代晩期としている。

7は第23図03-3より脚と器に2つに割れた状態で床近くに出土している。上部の器は恐らく4単位の突起があり当該期の土器とおなじ刻みのあるコブが縦長に口縁部に貼り付けられる。そのコブ状突起の間に一对の三角形の透かしの切り込みが入り、切り込みの間に漢字「人」字形の三叉文の沈線がある。器上半と下半は刻みのある水平隆帯によって分離され、下半は脚部まで絞られる。器と脚部の接合部は前後一对の貫通しない尖孔穴を中心に三叉文沈線が抱く様に前後に周回する。脚部は中空になっており、O形状に不安定な内股形になる。側面は中空脚のため2段前後交互の三叉文が透かしとなり、入れ子状の構成を示している。脚の足下端は器部と同じ方法によって刻みの粘土紐を輪状にして作出している。刻み・沈線・器面にも赤色顔料が塗布されており全面に彩色されていたと思われる。従来の異形台付土器と趣き形が異なることから異形脚付土器としたい。類例は、銚子市の余山貝塚にあり時期も縄文時代晩期安行3a式である。そこでは異形土器として紹介されている(68)。

(67) 米田耕之助「動物形土製品に関する一考察」『古代第74号』1983.6 早稲田大学考古学会

(68) 余山貝塚資料図譜編集委員会「172 異形土器・余山貝塚の回想」『余山貝塚資料図譜』1986.3 国学院大学考古学資料館



第43図 03号住居跡出土遺物

(3) 埋 甕

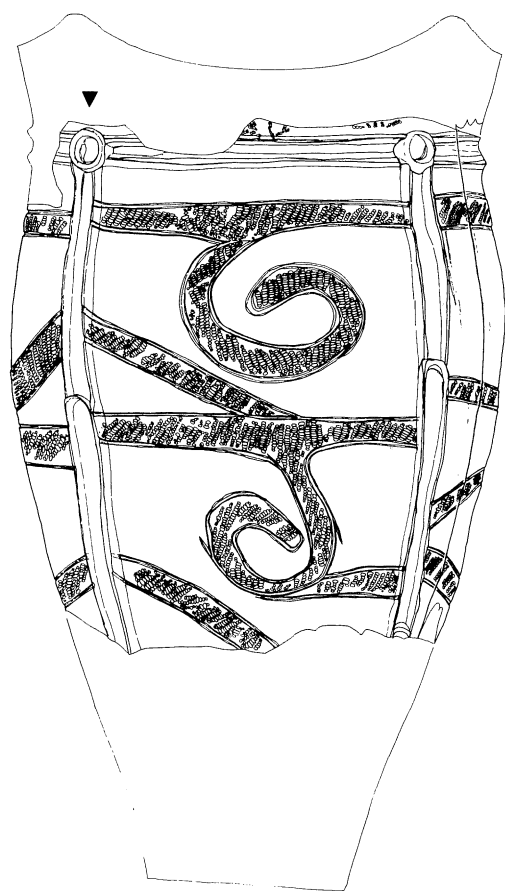
第44図の1号埋甕は昭和47年度調査に出土し、出土地点が不明であるが、写真によって出土状態が判明した。底部が当初から欠損した状態で正立しており、口縁部は表土除去時に散逸したらしい。土層がないが状態は埋甕として埋納されたことが予測されるので埋甕とした。

埋甕は深鉢であり、粘土紐の2線平行貼付けによって頸部と胴部を区画し、胴部を縦位に4単位構成で同じ手法によって区画している。頸部には僅かに、縄文原体の圧痕文がありループ状の結節と横位の縄文圧痕が一条認められる。4単位に区画された胴部は基本は上下2段に沈線区画されており、沈線施文前に単節縄文が転がされている為、充填縄文のようにみえる。水平の沈線に区画された2段の縄文帯の上段の垂下渦巻は左巻になり、下段の垂下渦巻は右巻となる。渦巻の他に、斜行する平行沈線の充填縄文がある。ここでは沈線が先に施文されている。A・B・C・D 4面各基本構成は同じだが、斜行沈線部分は施文順位や位置・有無が異なるので、各面が別個の構成をもっていることになる。隆線区画外では沈線区画の連続性が無くなっている。区画文様施文前は縦位に荒く篋整形をし、器面を整えておりその後粘土紐により区画している。胎土は黄白色の細粒砂礫を含み、焼成は良く内面は平滑に整形され黄褐色を呈している。1号埋甕は特殊な土器であり、昭和47年度調査時資料には類例が発見できなかったが、昭和58年度調査時資料では別個体破片ではあるが2点検出された。2点とも中世遺構に混入しており、菊間天神山古墳に近くかなり土壌が移動されていることが予測されるため、出土地点の確定には至らなかった。1号埋甕の帰属は、頸部の縄文圧痕や粘土紐貼付けの区画及び文様構成から、縄文後期前半の東北地方北部地域にあると考えたい(68・69)。

同様の2点は第76図166・168として掲載されている。166は口縁部の波状部分で、口唇部は貼付けした有段になっている。裏面は波状に沿って三角状に貼付け隆帯がある。胎土は白色の長石の細礫がまじり、黄褐色を呈し焼成は良好である。168は166と胎土は同じであるが茶褐色を呈する。角棒状の口唇部となり平縁の口縁部ではないかと思われる。縦位に粘土紐の貼付けがあり、その上を縄文の原体圧痕が斜位に2条以上あり、粘土紐を器面に圧着している。口縁部には原体圧痕が水平方向に3条平行にある。内面整形は横位のナデ整形により平滑である。以上が1号埋甕と同型式と考えられる出土遺物である。

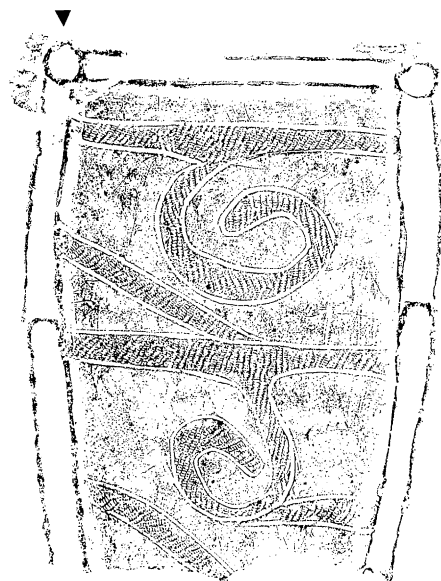
(68) 本間 宏「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古第3号』1985.7 よねしろ考古学研究会 上記土器について本間氏にはご教授を頂いた、感謝申し上げる。

(69) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集「第3分冊縄文時代遺構外出土遺物編Ⅱ、まとめ」『駒板遺跡発掘調査報告書』1986.3 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



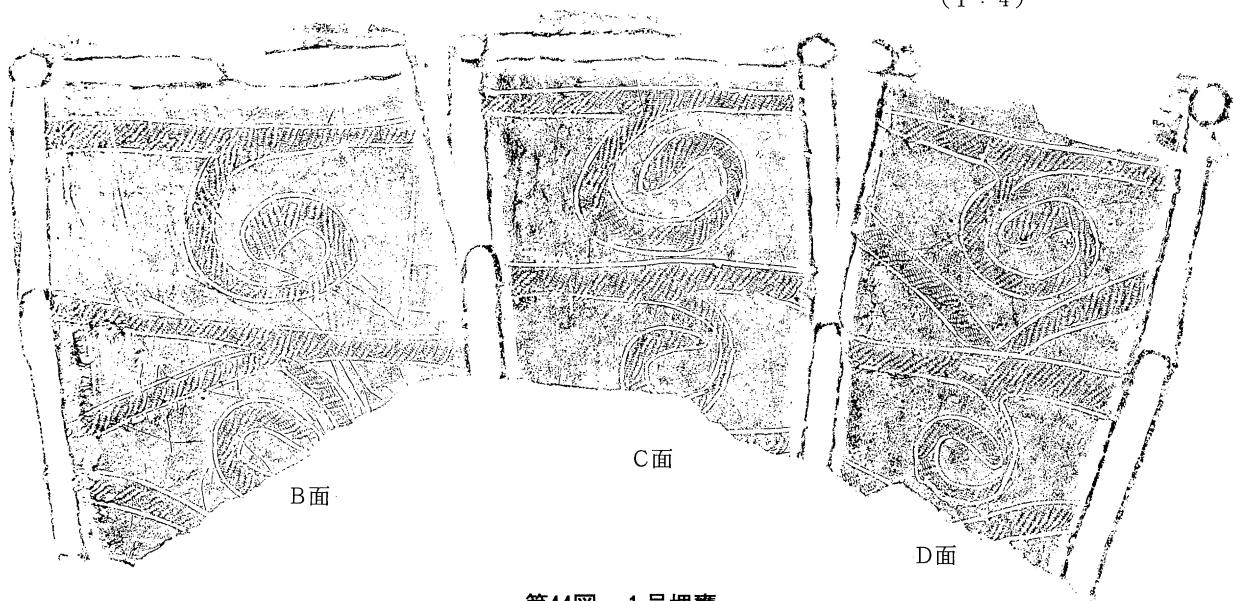
1

1号埋甕



A面

0 10cm
(1 : 4)



B面

C面

D面

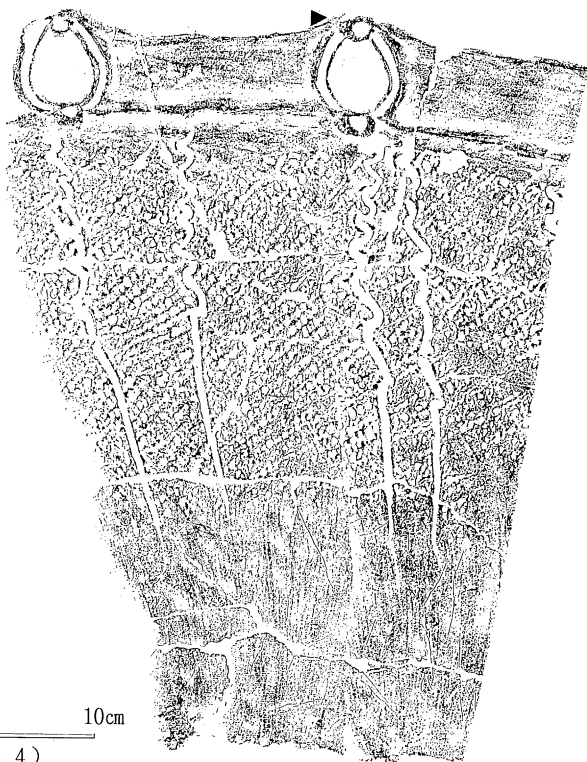
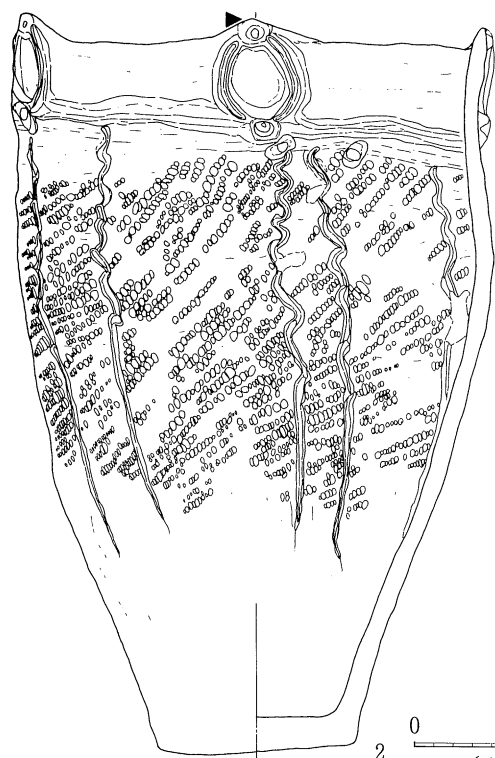
第44图 1号埋甕

第45図の2号埋甕は昭和47年度調査時に検出され、1号埋甕と同じく出土地点が判然としな
い。写真からは倒立した状態で埋納され、空洞の内部に底部から潰れ割れ込んだと推測される。
内部に人骨等の遺物があった記載はない。口縁部から頸部は無文帯となっており、太い粘土紐
の貼付け隆線によって区画されている。口縁部は4単位の小さい突起状の波状になっており、
突起部分に円形貼付刺突文があり頸部区画隆線上と上下一対となる。本来釣鉤文端部になる円
形貼付刺突文が上下一対になることで、釣鉤文が一周し楕円形となっている。これが頸部無文
帯に4単位ほぼ直交する位置に貼付される。胴部文様は地文に荒い単節斜行縄文を転がし、4
単位釣鉤文下に垂下する蛇行沈線を4条とその中間に1条づつに4条配しているが、図のと
おり一単位のみ1条多く9条となっている。また1条多い蛇行沈線部分に亀裂が入ったために補
修孔が一对ある。胎土は褐色、白色細粒の砂状の粒子を含み焼成は良い。在地の胎土と変わら
ず堀之内式1式の古い段階の深鉢土器ではあるが、東北地方の綱取式の影響を受けている。ま
た昭和58年度調査時に第55図1がO27グリッドの斜面貝層調査時に検出されており、これは前
者より时期的に新しいので綱取式の影響が当遺跡では連続して濃いことが土器に現れている。

第45図の3号埋甕は昭和47年度調査に検出されている。出土グリッドは38になっており、020
号住居跡の南側にあたる。付近には縄文時代の遺構はなく単体の埋甕である。写真では混貝土
層中に正立底部欠損にて調査されている。3号埋甕はやや括れを有する深鉢形土器になり、平
縁な口縁部となるが、一カ所のみ突起と段差を設け土器正面を規定し、文様構成を作出してい
る。地文は無節縄文を斜行し、半裂竹管による平行沈線によって文様を作っている。胎土は砂
礫を含まず黄褐色を呈し、焼成は良い。时期的には堀之内1式の新しいものだろうから、埋甕
1・2とは時期差がある。

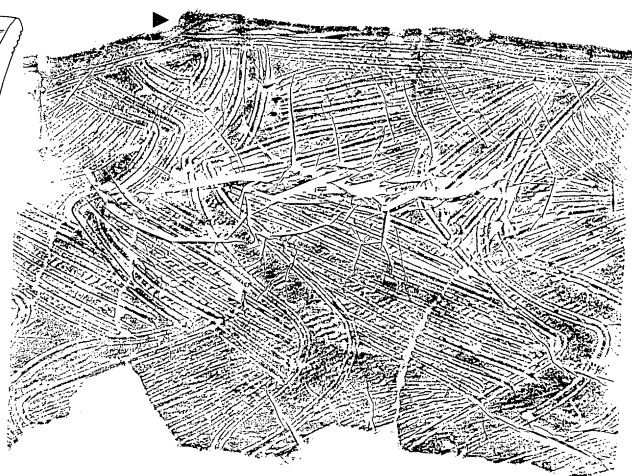
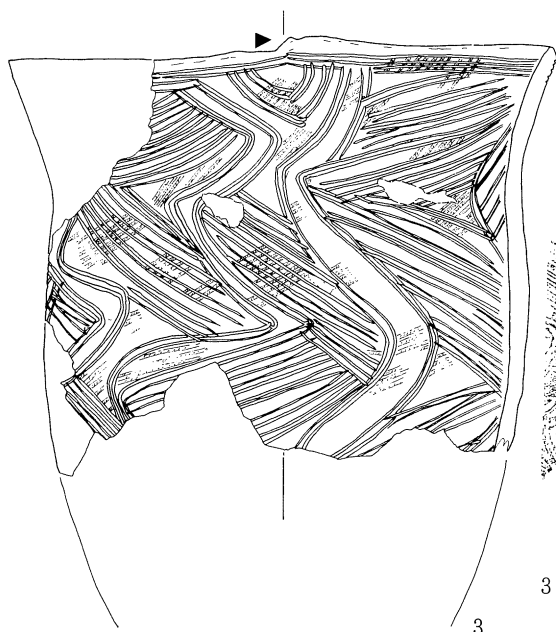
埋甕とされる遺物は86号人骨甕棺を除き以上3点である。埋甕は人骨埋納のための甕棺と考
えられるが、3点には人骨は検出がなかった。時間幅はあるが堀之内1式の古い段階から新し
い段階のものである。それは「IV. 2の縄文時代出土人骨と墓域」において、53体埋葬の方形区
画墓域の設定が堀之内式期01号住居跡が廃絶した後であることと合致する。また当該時期は住
居跡もあるため甕棺による埋葬があったと考えられる。しかし方形区画墓域外の人骨も30体以
上検出されていることから、甕棺のみの埋葬に限定することはできない。また08号住居跡の79
号人骨埋葬は住居跡が堀之内1式とするならば、当該時期に近い埋葬時期を考慮する必要があ
る。同じく近隣埋葬のX5号人骨埋葬も検討しなければならない。西広貝塚には堀之内式期の
埋葬が数多く検出されており、今後多くの事例研究が必要になるだろう(70)。

(70) 米田耕之助・三森喜知子「第5章人骨」『西広貝塚』1977.3 市原市教育委員会



0 10cm
2 (1 : 4)

2 号埋甕



3 号埋甕

0 10cm
(1 : 4)

第45图 2・3号埋甕

(4) 住居跡出土遺物

昭和58年度は縄文時代の住居跡を5軒調査したが、「1. 縄文時代の遺構分布」に触れたとおり斜面貝層調査時に検出され、流失し攪乱した貝層下に発見されたものであり、遺構の遺存状態は極めて悪い。そのため住居跡の覆土も残りが悪く、住居に伴う遺物の特定が困難である。特に65・66号住居跡は僅かに住居跡の床面を確認できたが、住居跡の伴出する遺物は第155図の斜面貝層とグリッド・トレンチの設定図によって遺物を回収した。そのため第50図～第54図までの遺物に住居跡遺物は含まれることになる。

第46図は67号住居跡の出土遺物である。第34図のように3軒の住居跡が重複し、F-F'の断面を診る限り覆土は僅かである。1～11までは堀之内1式の新しい土器であり、12～32は堀之内2式の土器となるので、67号住居跡は堀之内2式の時期になることだろう。堀之内2式の中でも21は三角形の沈線区画が単純化され地文は無く、口唇部内面に沈線状の屈曲が周回し、新しい要素を持つ、25～28の胴部縄文も新しい要素の施文である。

第47図は68号住居跡の出土遺物である。68号は67号を遺構として切る。第34図A-A'を診る限り、67号の床は68号上になく、また68号は69号に切られている。第47図の1は68号の壁沿いに出土し流れ込み状態にやや浮いて出土し、2は68-1の位置に横倒し状態になって混貝土層中に出土した。2は拓本のとおおりほぼ完形であり、実測図に示す黒三角印部分の口唇部に、指頭による凹状の潰しが有る。その部分は口唇部内面の沈線も半円を描いて逃げており、意匠的である。沈線の三角区画文はその部分を起点として構成されている。地文に単節縄文を浅く転がした後、篋状施文具によって浅く沈線区画している。磨り消し縄文ははっきりせず、胴下半部はヘラナデ整形をして余分な縄文は消しているが中途半端な仕上げである。底部に網代痕はなく、端部は擦り減っている。覆土が薄く、攪乱も考えられ13・14は新しいので混入としたい。8は1と同一個体であり、3～5も堀之内1式とおもわれる。残りは堀之内2式なので2と同時期として68号住居跡は、当該時期であろう。

第48図の1～12が69号住居跡出土遺物である。1・2・4は口縁部片であり口唇部内側に沈線状の屈曲を有する。断面三角状に貼り付けられた粘土紐が口縁部を周回し、棒状施文具によって刻まれている。1と2は沈線区画した縄文と磨り消し縄文がはっきりしている。4は紐線下の沈線より下にやや荒い浅い縄文が施文されている。以上は堀之内2式と考えられ、3・11・12はやや古く住居への混入である。7は胴部片になり無節の斜縄文を転がした後、細めの半裂き竹管を浅く、縄文とは逆方向に斜行させ交差させている。8と10は同一個体と考えられ、地文は無く異なる施文具によって交差沈線を作成している。5と9は沈線区画と縄文充填及び磨り消し縄文が組合わせてある。出土土器では堀之内2式が69号住居跡の時期となる。一土器型式内にほぼ同じ場所で3回の住居の作り直しがあったことになる。

第48図13～37は66・67・68号住居跡の南側付近の、削平された台地斜面のO26グリッド出土土器である。攪乱層内であるので縄文後期から晩期の時期までの土器がある。13・14は大型の口縁部破片である。13は内反りの口唇部、滑らかな器面浅く断面丸棒状の平行沈線は縄文晩期の土器かも知れない。14は内反りの口唇部、全面の細かい単節縄文があるので後期の安行式土器の可能性はある。しかし口唇部形態が内反りであることは検討しなければならない。

15・16・17は地文縄文の紐線指頭貼り付けの加曽利B式の粗製土器である。18～25は加曽利B2・B3式に相当するとおもわれる。29・30・31は口縁部に帯縄文を有し、後期安行式土器である。24・32・34・35は安行式の粗製土器である。26・27は波状口縁部になり26は安行3a式、27は安行3b式である。28・33・37は口縁部または口縁部付近の破片であり、晩期安行式の浅鉢形土器である。36は口縁部であり壺形土器の部分と考えられ晩期安行に入る可能性がある。

堀之内2式時期の住居跡付近であるが、当該期の土器がない。台地上は縄文晩期時期の集落が近いので流れ込みの包含層があったと考えられる。加曽利B式の存在も同じく台地上に加曽利B式期の集落または包含層があったとしても良いだろう。それは廃絶した67・68・69号住居跡には貝層を伴う混貝土層が覆っており、貝等が台地平坦部から傾斜変換線下斜面部分に廃棄されていると考えられる。

第49図の1はN27グリッド21区の貝層下面から下部に一括出土している。1の深鉢土器は斜行する撚の弱い単節縄文が施文され、胴下半は軽くナデ整形されている。底部は粘土板を底部分として作成した後、輪積みによる胴部製作をしている。口唇部は軽くナデ整形され、内面は縦位の磨き整形をしている。

第49図の2はO26グリッド5区の貝層下面から出土している。浅鉢形土器であり遺存状態は底部が1／2程度、胴部から口縁部が1／4である。幅の違う半裂き竹管による平行沈線によって文様を作出している。1と同じく底部を板状粘土で作り輪積みを重ねている。

第49図の4はO27グリッドの貝層上面から出土しており、後にO26グリッド出土の土器と接合している。4は胴部半ばに屈曲があるやや口縁部が開く深鉢形土器である。口唇部は折り返し状にやや屈曲し内面に沈線状に周回する。文様は沈線による三角区画文の連続であり区画沈線内の磨り消し縄文である。縄文は浅く単節を転がし、中心の三角形部分を磨り消している。胴下半はナデ整形になり平滑である。内面は横位に整形磨きしており底部は板状底が剥がれて欠損している。以上の3点の土器によって斜面貝層の下半部分は堀之内2式の時期になる。

第49図の3は深鉢形土器である。口唇部分内面に浅く沈線が周回する。地文に浅く単節縄文を斜行に転がし、それに交差する状態の半裂き竹管施文具による平行沈線を全面に施文する。

5は口唇部外面に太い断面皿状の沈線を周回し、内面も同ような沈線を口唇上に周回させ

て受け口状の段を設けている。土器の形態が無頸壺状になっており、特殊である。胴部のほぼ全面に密な単節縄文が転がり、底部近くにナデ整形が診られる。底裏に網代痕があり、一部をナデによって消している。5に類似の土器が中野僧御堂遺跡の遺物包含層から出土している。その他の遺物から堀之内1式の新しい時期か、2式に入ると考えられる(71)。

6は浅鉢形土器である。胎土は赤褐色を呈し黒色研磨され内外面とも黒灰色にしている。口縁部は恐らく2単位のゆるい波状を呈し、それを起点に4分割された胴部の平行沈線が6条周する。起点部と中間の分割部に平行沈線が直角に折れ戻す文様を作出する。底部裏は網代痕があるが指頭整形によって潰れてははっきりしない。6は加曽利B1式と考えられ、出土は4グリッドである。4グリッドは他に混貝土層から加曽利B2式の浅鉢が出土していることが調査時の写真から明確なので、ここには加曽利B式期の包含層が存在したとして認められるだろう(72・73)。しかし加曽利B1式とB2式が混在するのか、地点ごとに分離されるのかは不明である。4グリッドは人骨53体が集中出土する方形区画墓域の約半分の面積を範囲とするので、埋葬時の包含層の攪乱や埋葬時の埋納遺物が混じる可能性がある。

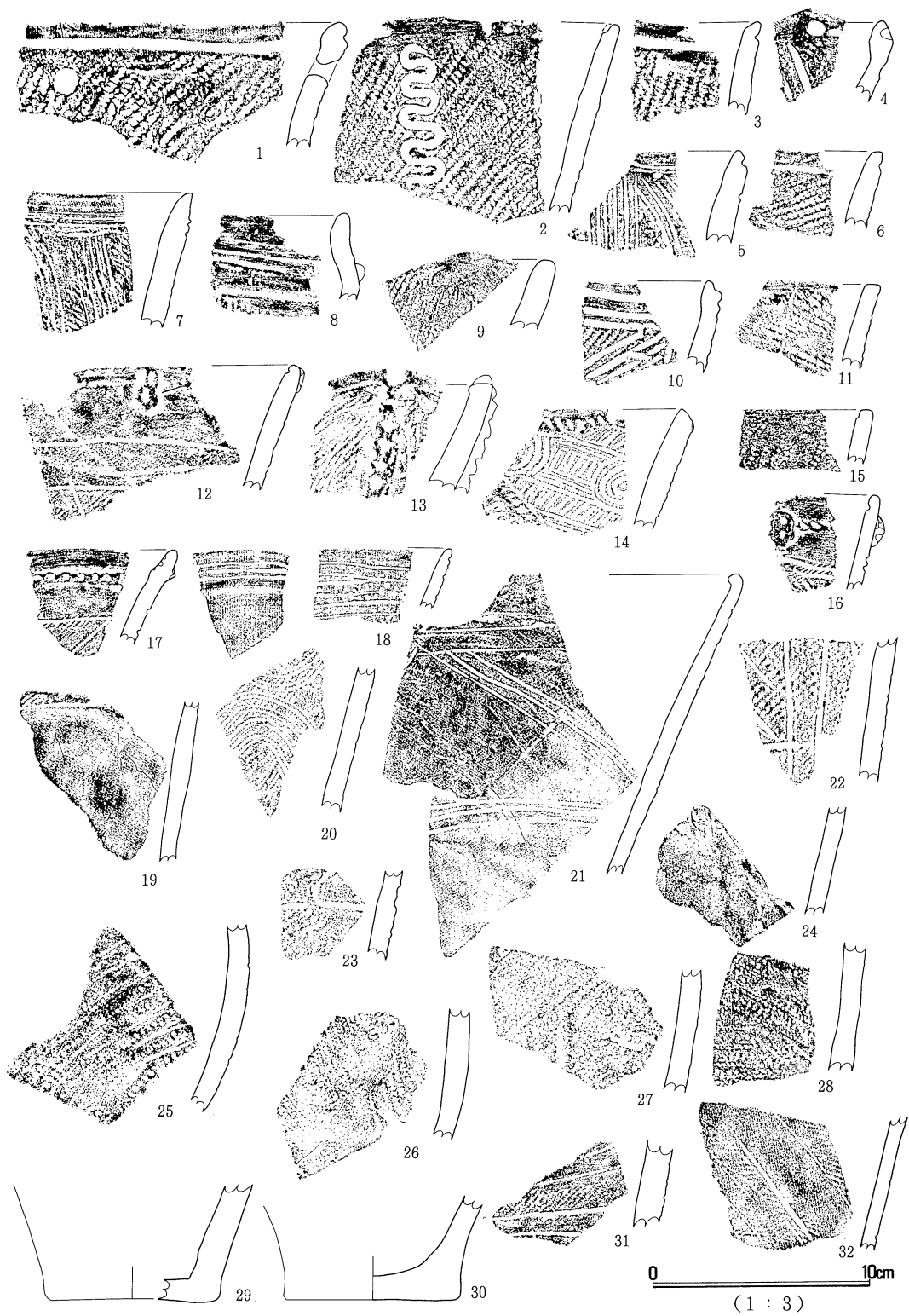
7は深鉢土器の底部であり、輪積みの接合部分からきれいに割れている。接合部は接合面の断面に篋状工具によって刻み状の凹凸が入り接合面を助けている。底は板状粘土からでなく手づくねに粘土塊を皿状までしてから輪積みを始めた底部である。作りから堀之内1式の時期と考えられる。以上が菊間手永遺跡調査時に回収された縄文時代遺物の土器について、完形またはある程度復元図示できる一部の小型土器を除く土器の全てである。第50図から第153図までは、縄文時代遺物全般の挿図である。

(71) 中村恵次ほか「第170図1」『千葉市中野僧御堂遺跡』1976.3 財団法人千葉県文化財センター

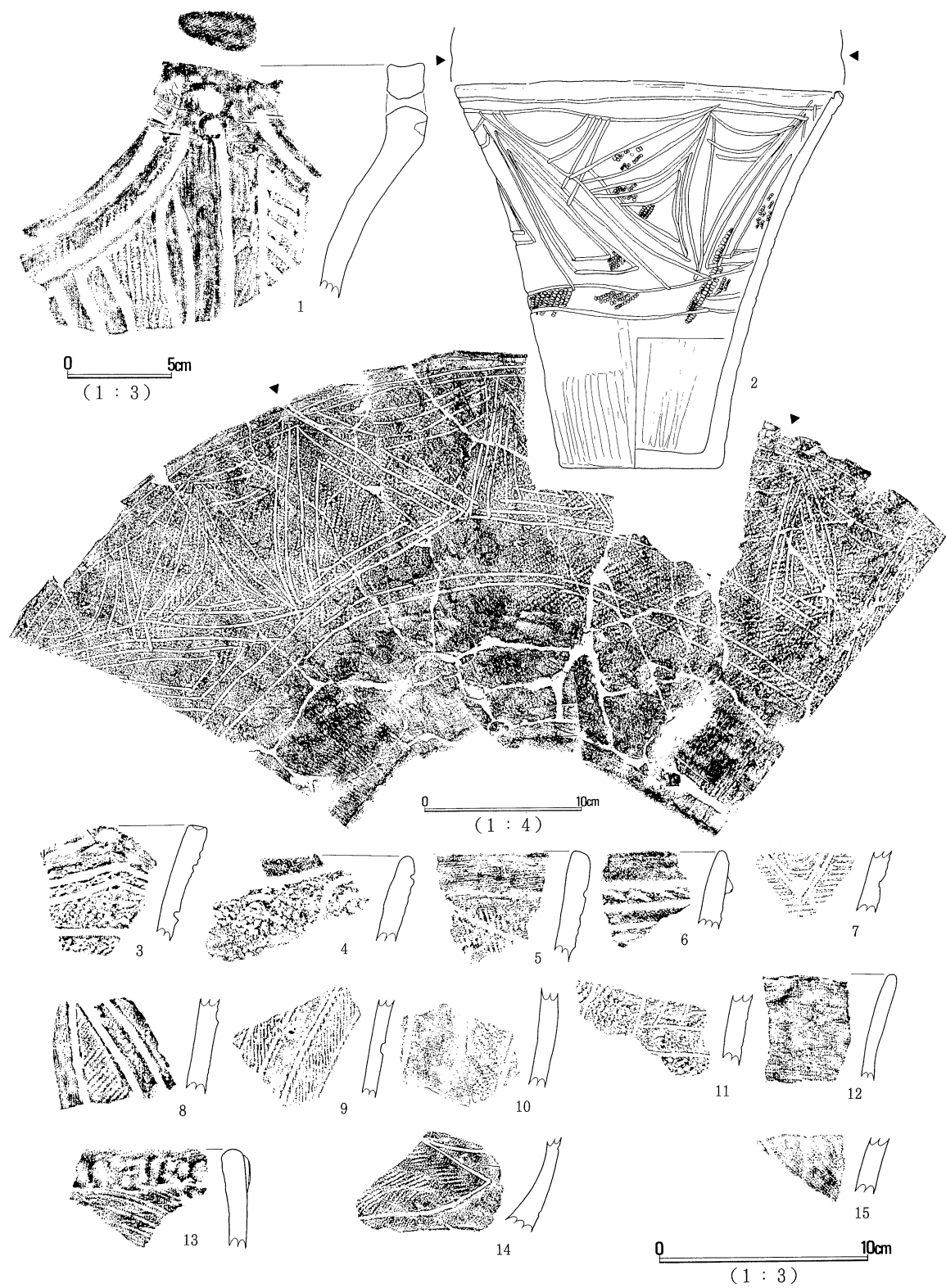
(72) 市川 修ほか「図版編、図版97・図版16」『高井東遺跡調査報告書』1974.3 埼玉県遺跡調査会 高井東遺跡の図版97の10は第49図6と同時期であり、また高井東遺跡の図版180の16が当遺跡図版9・4と同時期である。

(73) 新屋雅明・大塚達朗「加曽利B式期第5・第6地区出土土器」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』1984.3 埼玉県立博物館・埼玉県教育委員会

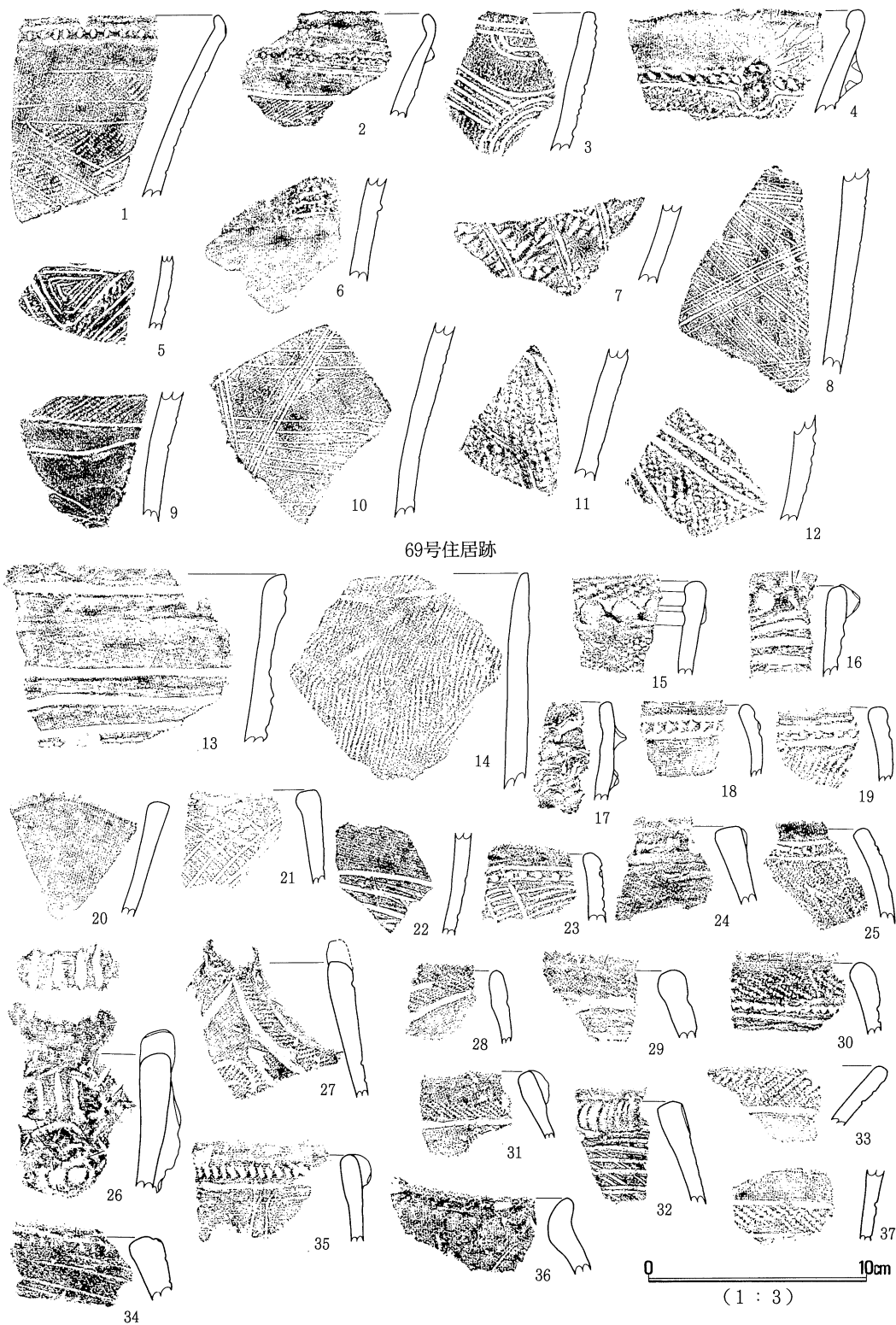
ほぼ同時期と考えられる遺物の出土状況に関しては、区画をある程度限定された住居跡等の遺構内出土遺物も、物理的な住居の壁がない開かれた包含層との遺物の広がりについても、住居や遺構に確実に帰属する遺棄の確認がなければ、基本的に同じ物理的な廃棄状態として把握できると考えられる。つまり住居跡の覆土上部と遺存良好な包含層はほぼ同じ物理的な状況の出土状態を示すのではないかとと思われる。



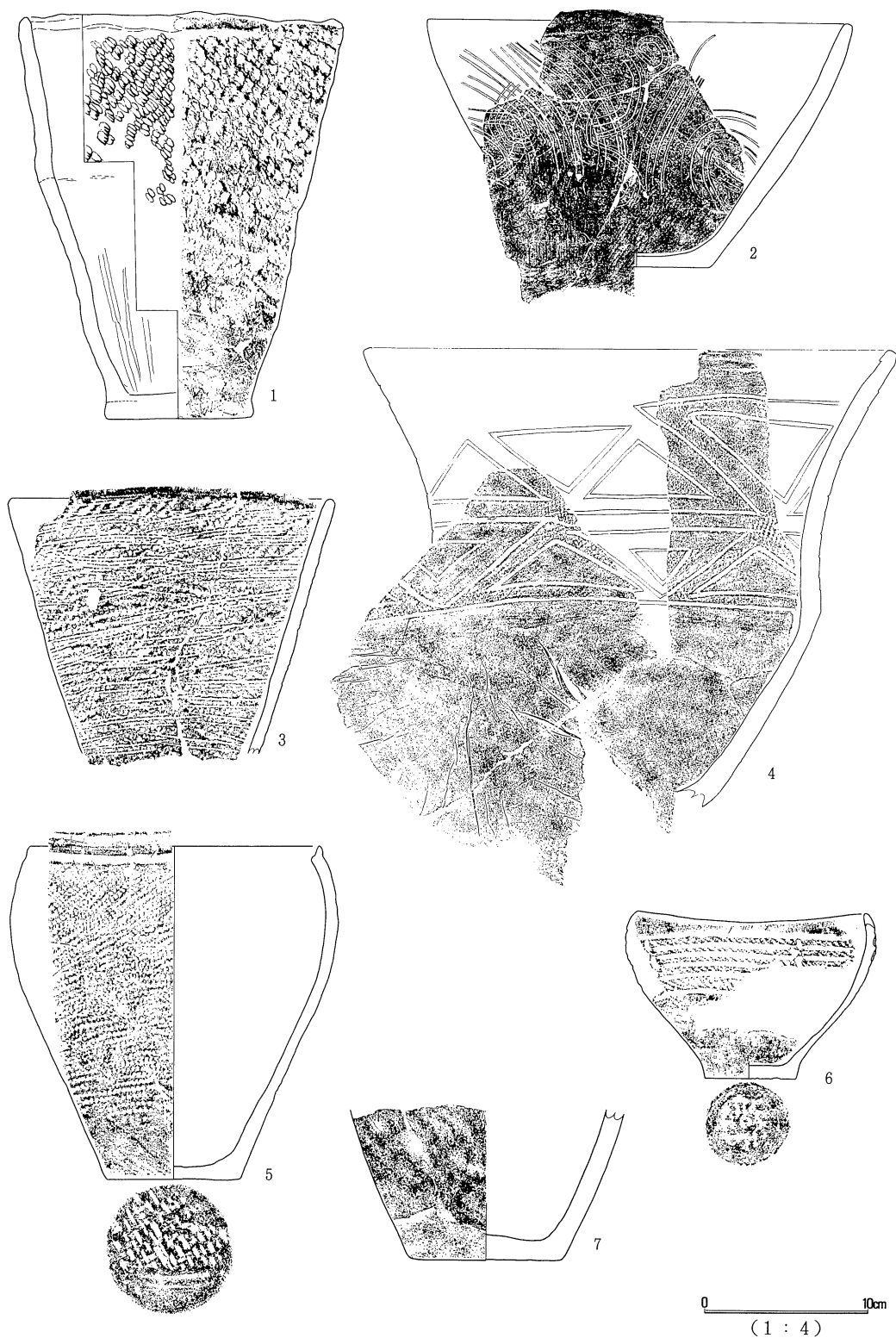
第46图 67号住居跡出土遺物



第47图 68号住居跡出土遺物



第48図 69号住居跡及びグリッド出土遺物



第49図 貝層出土及び主要縄文土器

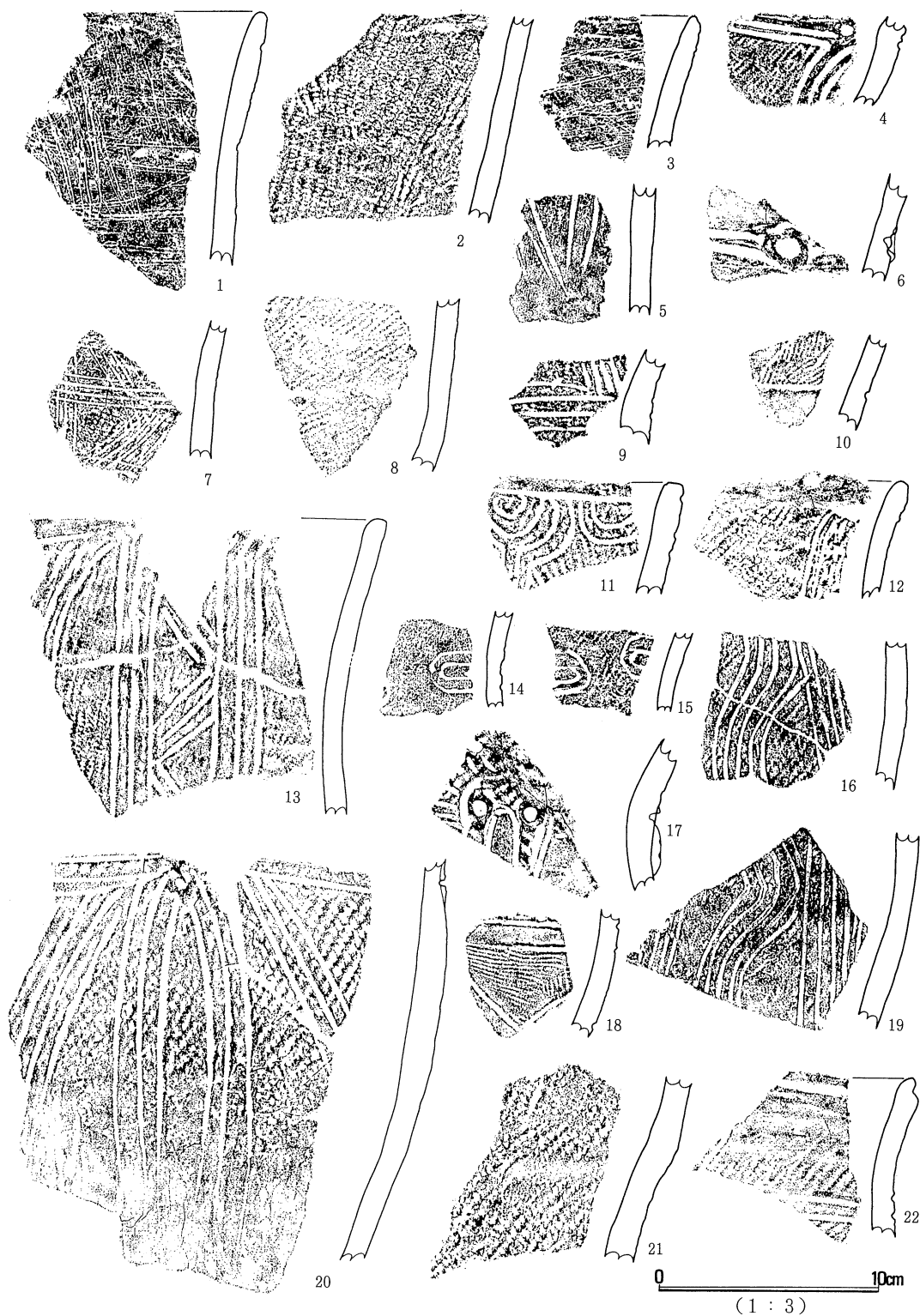
(5) 貝層・包含層出土遺物

第50図はN27グリッドの貝層から出土した土器を記載する。第154図縄文時代後期斜面貝層の位置をみると、台地の平端部から傾斜変換線の標高は17m～16mとなっており、貝層残存部分は標高15m以下である。傾斜変換線下の堀之内式期の住居跡は、床面の標高が17m・16.5m・16m付近である。現在の地形の16m～15m付近は江戸時代中期頃に階段状に削平された状態が見てとれる。住居は台地平坦部から少し下りた場所、つまり傾斜変換線下すぐに竪穴式住居跡状の掘り込みをして、台地斜面の下り方向に入口を有する条件で選択されたと思われる。67・68・69号住居跡はほぼ同じ場所に選地され、時期が新しくなる度に住居位置が下るのは斜面上に構築する住居として当然の結果であろう。それは竪穴の土砂を前に押し出すことによって、出入口スペースを確保する為に他ならない。住居の選地場所は斜面傾斜を考慮して緩傾斜面を選択していると考えられる。斜面が住居の選地から外れた段階には、緩斜面地も貝等の廃棄場所になる。緩斜面から急斜面に変換する標高が15m以下の部分であり、菊間手永貝塚では50cm前後の貝層堆積が遺存していた。調査対象が南斜面部分のみと偏りがあるが、東斜面部分に若干貝層が残っていた。N27グリッドの貝層は緩斜面から急斜面に移る範囲であり最も貝層が残っていた部分である。

貝層中に出土したのは第50図1～10までで、11～22は貝層下部出土である。堀之内1式の新しい段階から堀之内2式の古い段階があるがほぼ貝層の時期を現わしていると考えられる(74)。第49図の1・2は貝層下部から出土している。その1と2の大グリッドはN27-21とO26-5となり、異なるが対角線方向では隣り合わせである。この部分の貝層は堀之内2式期の古い段階で良いだろう。また第50図の下部出土土器の15・18を除くとすべてN27-21の出土である。N27-21は土器の出土数が多い為である。同区の貝層サンプルNo.9(第159図第6表)の最下部から堀之内1式後半の口縁部が検出されている。貝層堆積前は堀之内1式期の後半段階の遺物が当時の地表にあり、廃棄された貝層堆積がはじまり堀之内2式期前半の遺物を包含した。その途上に完形に近い土器も貝層下部に包含され、貝層中に守られたものだろう。第50図1・3・7は粗製ながら堀之内2式期になると考えられ、斜面に残った貝層は当該時期になると考えられる。

縄文時代後期の斜面貝層内には、土器・石器・骨角貝製品等の遺物は少ない。これは関東地方の後期貝塚では通有な事例である。菊間手永貝塚もその一例であり、貝層中に含まれる魚骨獣骨類もさほど多くはない。貝層内の自然遺物については別項に記載するが、サンプル採取して回収すれば調査途上目視回収よりも確実に10mm以下の微細遺物等の回収率は高くなる。

(74) 鈴木徳雄「南関東東部(下総台地)」『シンポジウム堀之内式土器資料集』1982.11 市立市川考古博物館



第50図 N27グリッド出土縄文土器

第51図の1～24はO25グリッド出土、25～36はO24グリッド出土、第52図の1～48はO23グリッド出土、第53図の1～37はO22グリッド出土、38～41はO17グリッド出土、第54図1～8はO27グリッド出土、9～25は昭和47年度及び昭和58年度の各グリッドの土器の把手、注口土器の注口部分及び壺形土器である。把手の多くは堀之内1式の波状部分であり、注口土器の注口部が大きいのは古く、小さいのは新しい時期であり堀之内式期から安行式期までであるだろう。25は堀之内1式期後半の東北地方影響の小型壺の底部と考えられ、紐通しがある。

第51図は加曽利B式～曾谷式が主であるが15～17、20～22、29～31、35は晩期であろう、36は安行1式である。第52図はO23グリッドなので遺構はない部分であるが、1～5まで堀之内式期その後、後期安行式期から晩期安行式期まで破片であるが連続している。恐らく台地上平坦部の遺構からの影響であろう。第53図はO22グリッド出土であり、O23グリッドと同じ傾向を示す。しかし縄文晩期の土器の割合が増え、安行3b式や3c併行の前浦式土器が出土している。38・40・41はO17グリッド出土であるが、O17グリッドは中世時期の造成された凹地地形内であるので近隣付近からの移動である。第54図の上段はO27グリッド出土である。1・8は堀之内2式に相当し026に続くトレンチ内からの出土である。2～4は加曽利B式、6・7は安行式、5は底部になり断面図は寝かしてもらいたい、前浦式の浅鉢であろう。

以上昭和58年度調査区の南側斜面部分のグリッド出土土器の概観である。グリッドは第155図上段に設定図がある。グリッドごとの出土傾向は遺跡の立地する南斜面から東斜面に移行する部分に堀之内2式時期の斜面貝層があり、その10mほど西から堀之内2式期の住居群がある。攪乱部分が多いがそのためか、傾向として堀之内1～2式土器の出土量が多い。しかし台地上の流れ込みのためか加曽利B式期から曾谷式土器もみられる。調査区南斜面西側半分から堀之内式土器に混じって、後期安行式から晩期安行式土器の出土が少量だがみられるようになる。これも当該期安行式期の台地上の住居跡がある影響を受けていると考えればよいだろう。

昭和58年度調査時には遺跡南側斜面部分と台地上の南側部分のごく一部を残して遺跡はすべて削平されていたが、台地上の遺跡の時期内容はこぼれ落ちた遺跡周辺にある程度の情報を残していたことになるだろう。それは調査の6年後の遺跡踏査時採集の遺物にも反映されており、菊間手永貝塚採集遺物を紹介した鷹野光行氏は、「中期の土器がみられたことと、晩期も安行式だけでなく姥山Ⅱ式、姥山Ⅲ式、前浦Ⅰ式にまでに至る晩期前半の土器片がある・・・」ことを注目して、菊間手永貝塚を形成時期の分類として、袖ヶ浦町山野貝塚、千葉市築地台貝塚タイプとしている(75)。

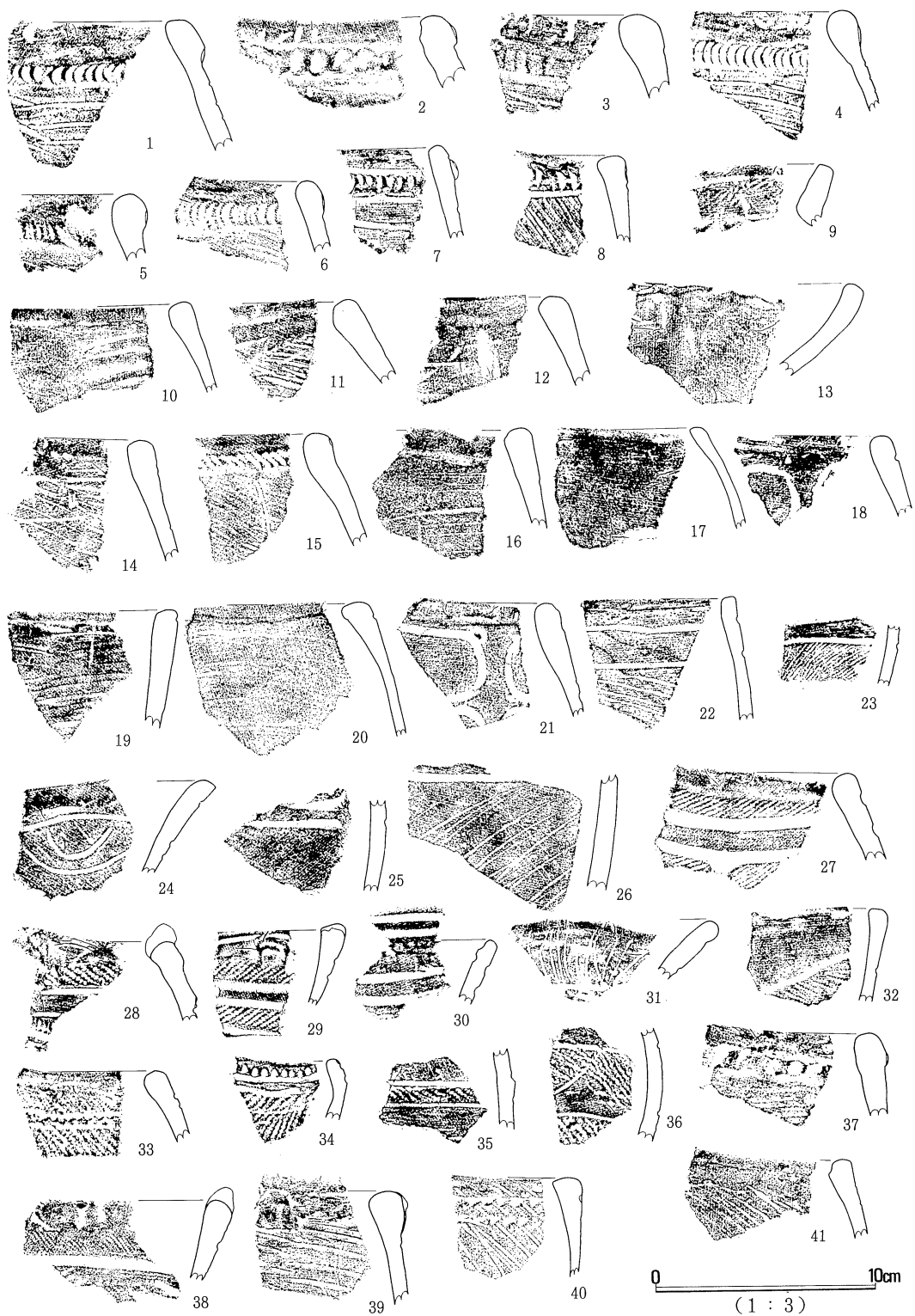
(75)鷹野光行「市原市菊間手永貝塚採集の土器片」『伊知波良3』1980.5 伊知波良刊行会



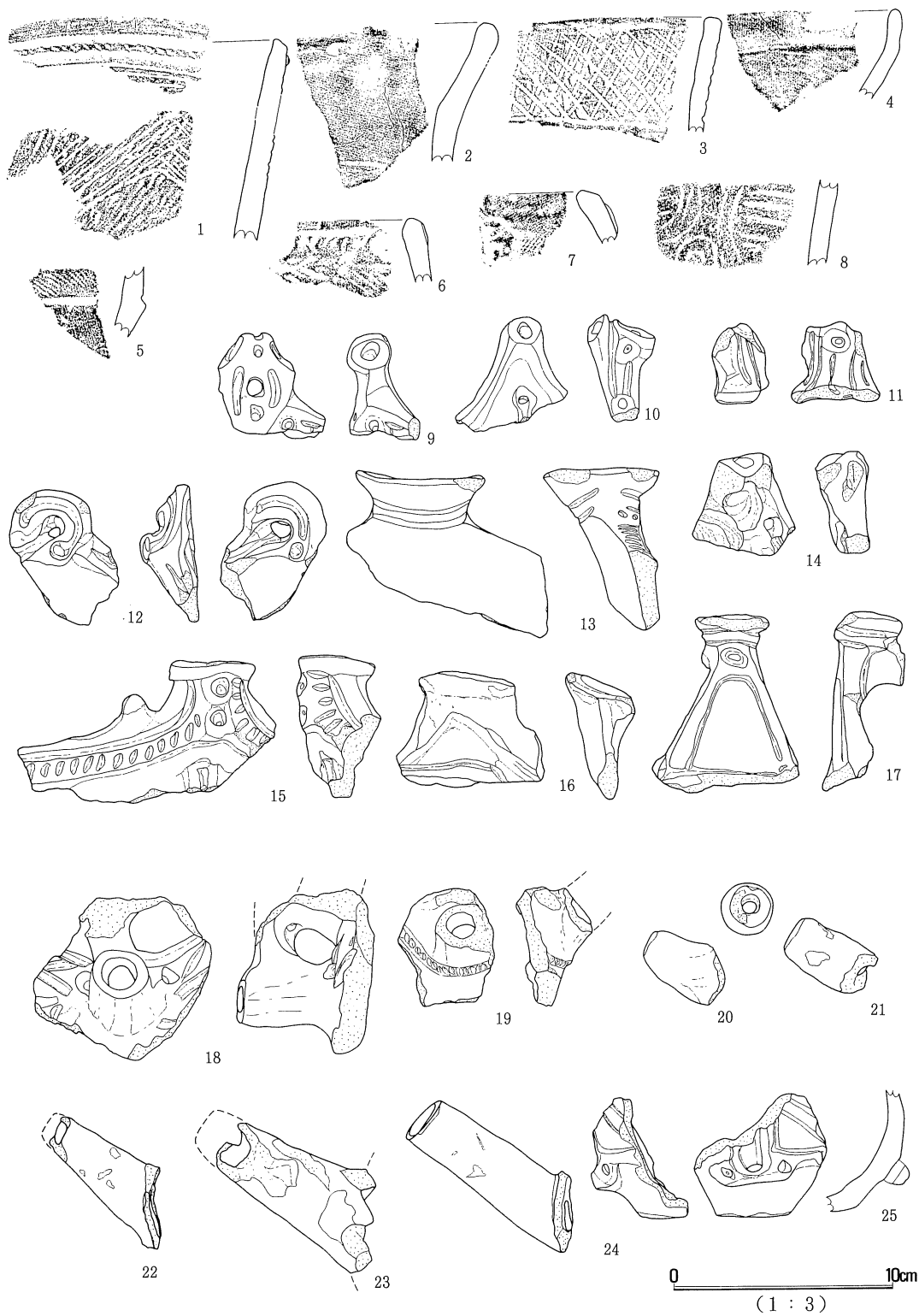
第51図 O25・O24グリッド出土縄文土器



第52図 O23グリッド出土縄文土器



第53図 O22・O17グリッド出土縄文土器



第54図 O27グリッド出土縄文土器及び把手等土器部分

第55図から第70図は昭和58年度調査時に出土した縄文時代土器を一括紹介したものである。原則時期別に並べたものであるが、紙面の都合で前後するものや部位等と異系統や非在地系土器と判断されたものは別に扱われている。また特記事項は別に記載した。

第55図の1は東北地方綱取式の影響を受けている。時期的には堀之内1式中葉以降になり同図ないの土器群と同時期である。頸部の無文帯はなく、地文の縄文に沈線文によって縦位の区画状の割り当てがある。第56図は前図に比べて変化が少ないが基本的施文は同じである。27・33・37は異系統の要素がある。

第57図は地文に縄文の施文は44・47・53・51・55・59である。56・57は縄文のみ、54・60・61は縄文のかわりに細い竹管か茎状の施文具によって刺突している。52は沈線のための施文構成による称名寺式からの文様である。59は東北地方の影響を受けた文様構成をしている。

第58図は堀之内1式と堀之内2式が混在する。紐線区画の80・81は2式、三角区画の始まりがみえる64・65は同一個体である。84は口縁部が広く開く形態の土器である。

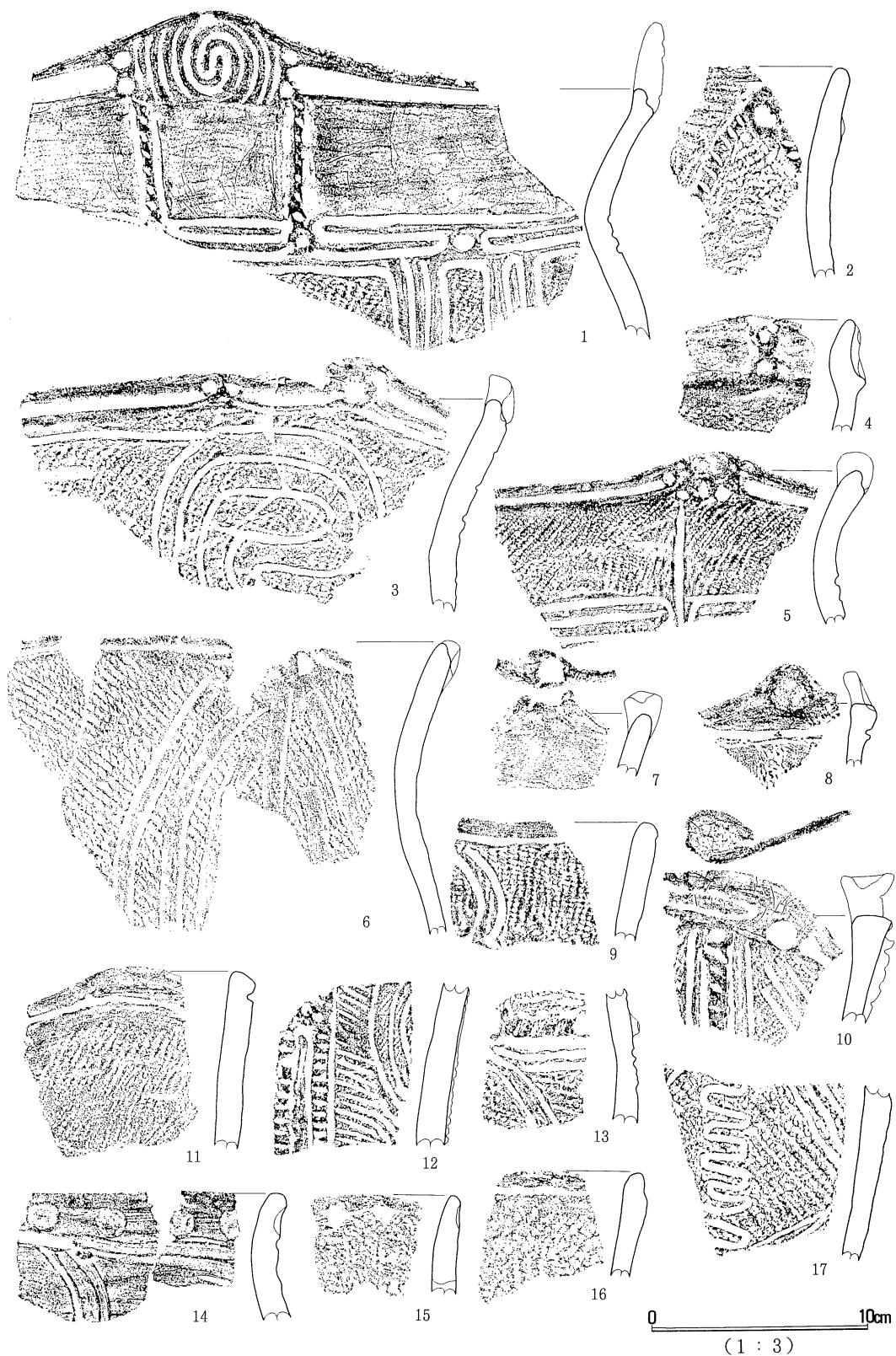
第59図から第64図は堀之内2式とした。第59図は沈線による三角とそれの伴う菱形の区画及び、沈線または紐線貼り付けによる胴部上下の分離がある。96・97は同一個体であり文様構成と胎土焼成がほかと若干異なる。第61図は粗製土器が多く時期限定ができないが堀之内式期の後半の土器群である。53は新しく加曽利B式の浅鉢口縁部である。

第62図は口縁部に紐線が貼り付けられ口唇部内側に沈線または沈線状の屈曲がある鉢形土器になる堀之内2式の新しい要素をもつ土器である。縄文のみでも口唇部内側に沈線を周回させるものや、84のように分厚い土器でありながら器面を磨き荒く沈線区画するものもある。第63図は第62図と同じ要素を有する。1・2は把手を有する同一個体である。12も把手のあるであろう胴部片である。第64図は沈線三角区画の胴部片と口縁部である。

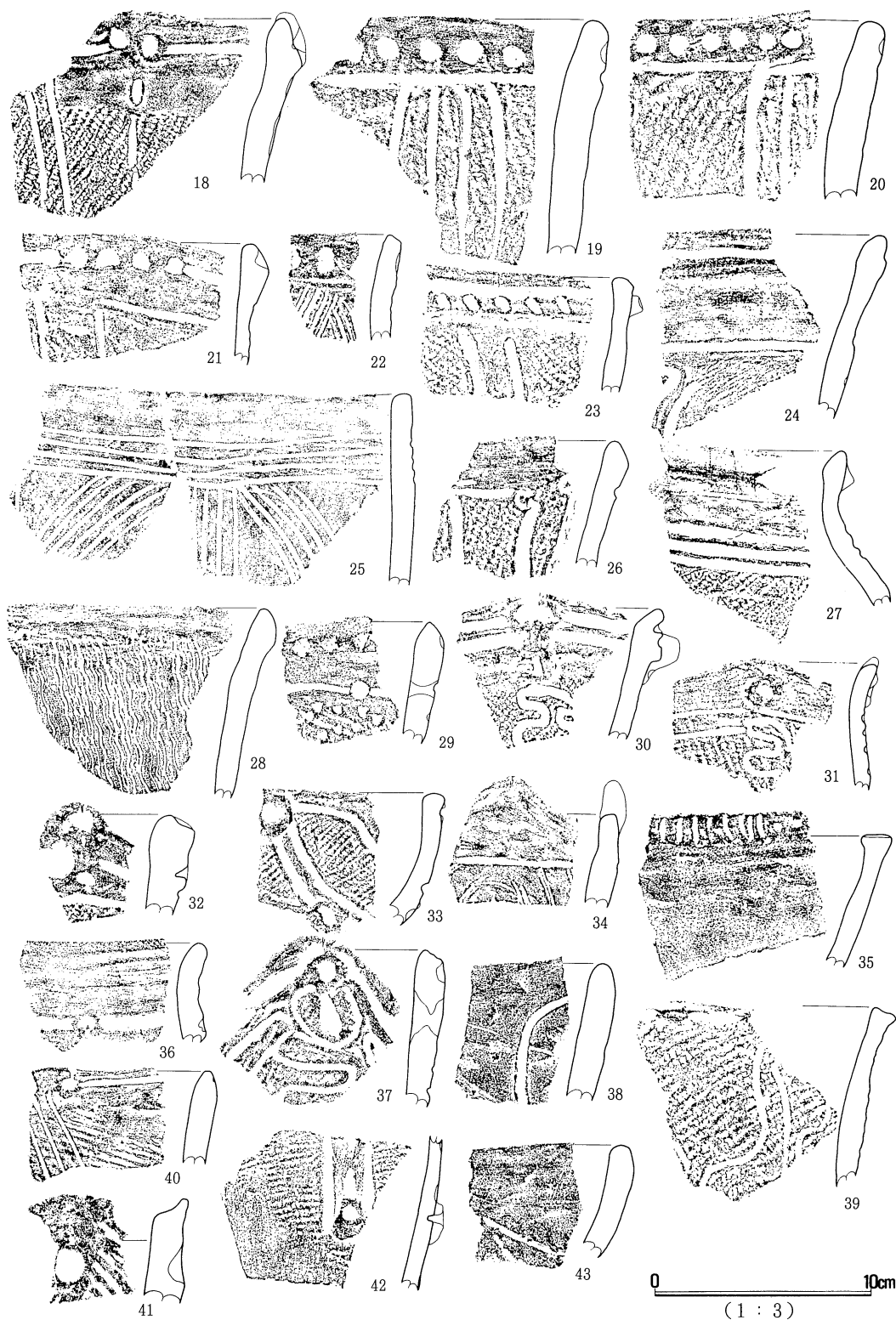
第65図は堀之内式期の底部片である。1・2式ともに混じるが、底部は技術的に新旧が分離できる(76)。堀之内1式土器の底部成型はてづくねであり、粘土塊をコップ状または皿状まで成型し、それから輪積みをして胴部に接合した。新しい成型は粘土板が底部となり、板状粘土から輪積みを開始し胴部に接続する技術形態になる。堀之内2式期から加曽利B式期の時期変化した。68・71・73～76・80～87・94～96・98～101が新しい底部の成型をしている。

以上が遺跡南斜面部分の包含層からの縄文時代後期堀之内式期の出土土器群である。繰り返しになるが、堀之内1式土器は堀之内2式の貝層内かその下層の包含層に出土層位がある。その他の斜面部分には出土層位が無いのである。恐らく堀之内式期以降に、斜面の土壌と共に包含層が失われたと考えられる。

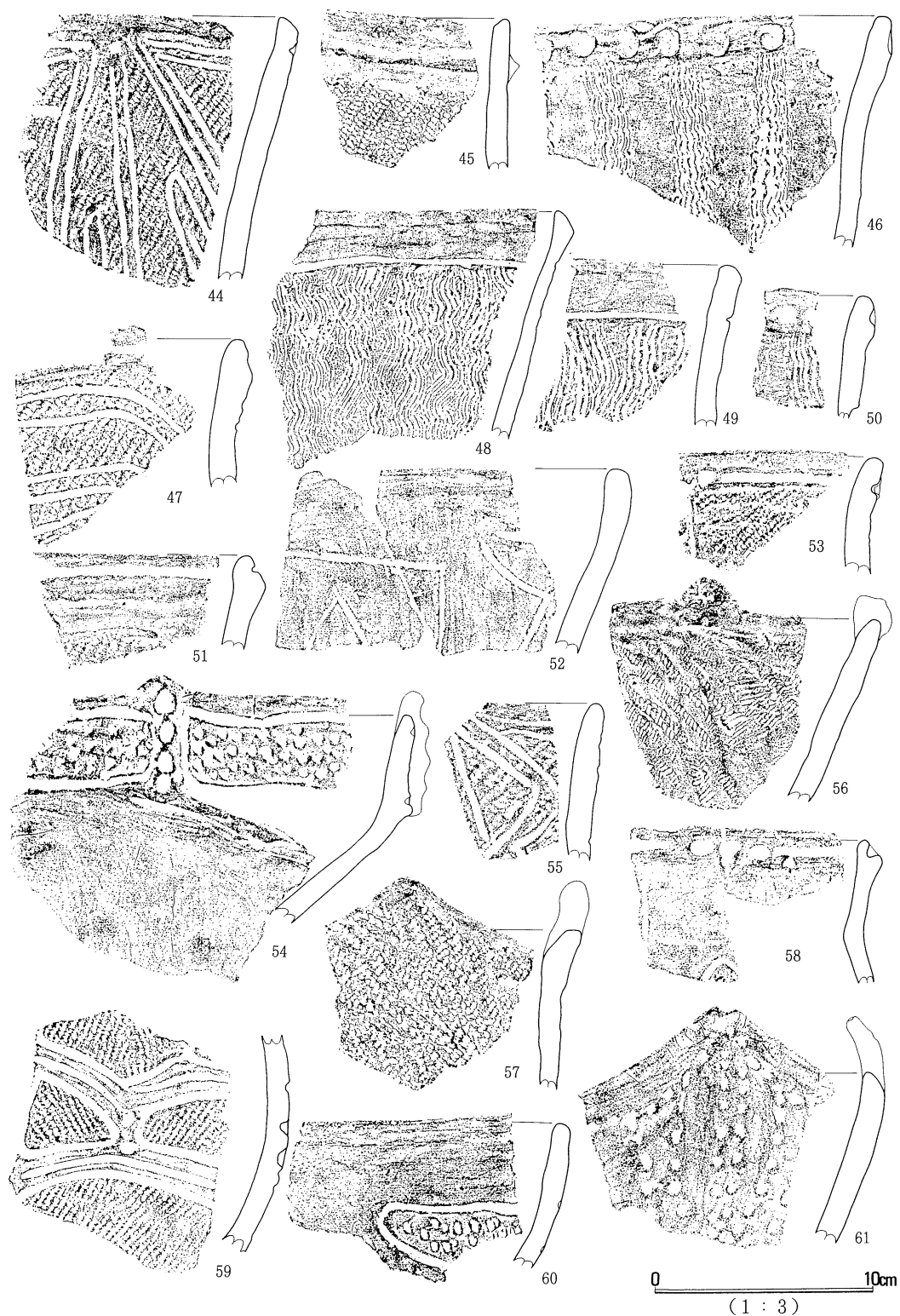
(76) 財団法人千葉県文化財センター調査研究員加納 実氏よりご教授を受けた。感謝申し上げます。



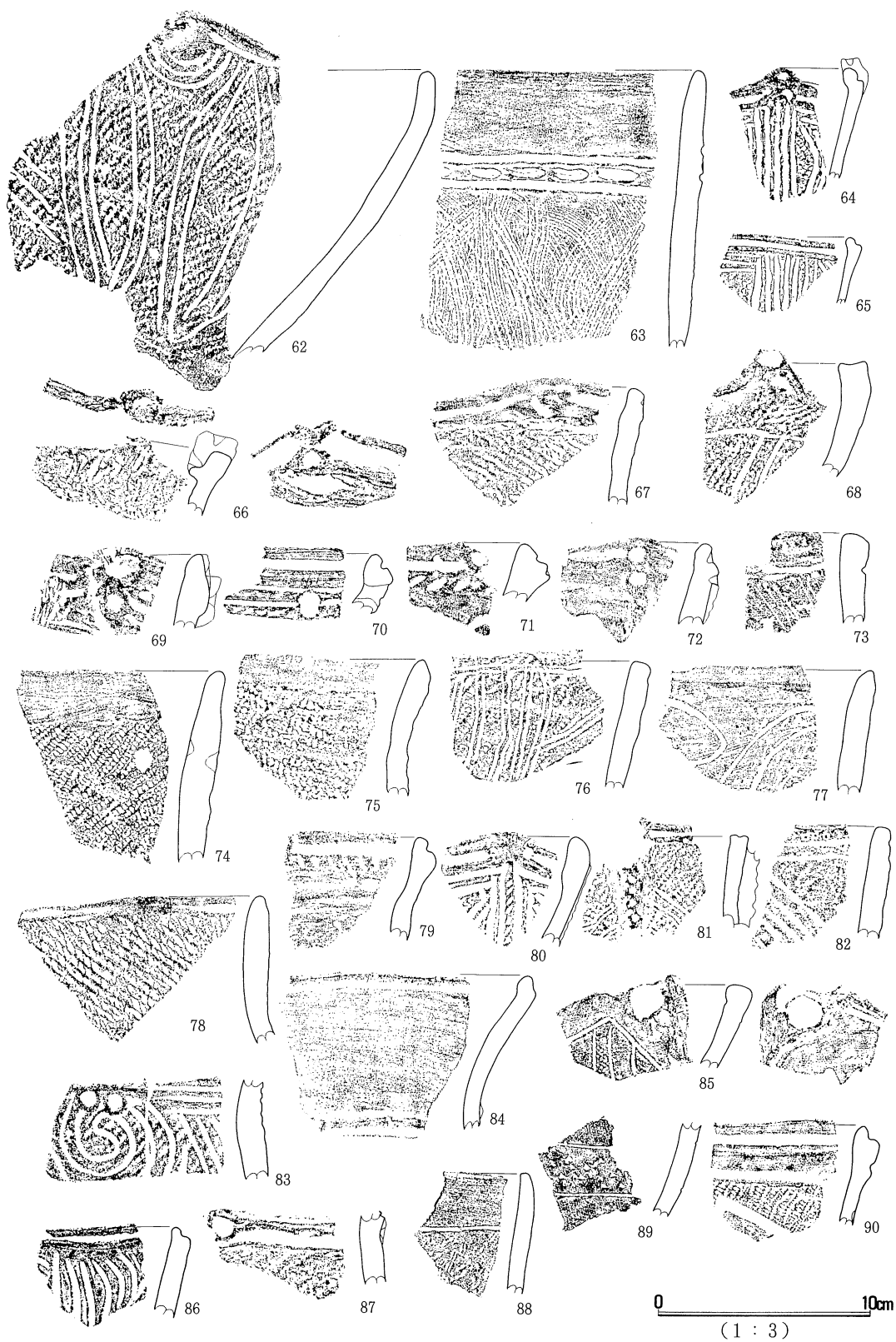
第55図 58年度包含層出土縄文土器



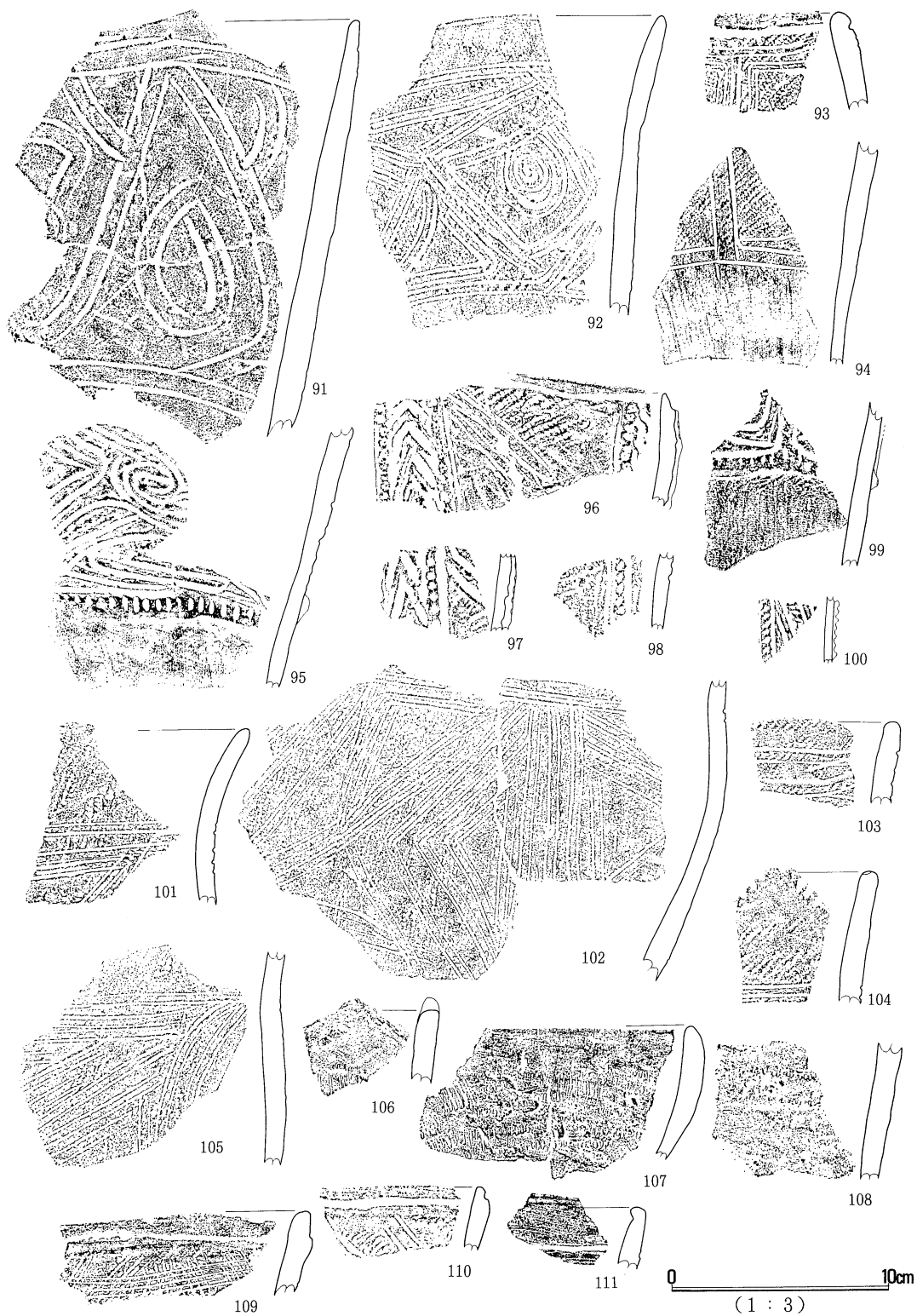
第56図 58年度包含層出土縄文土器



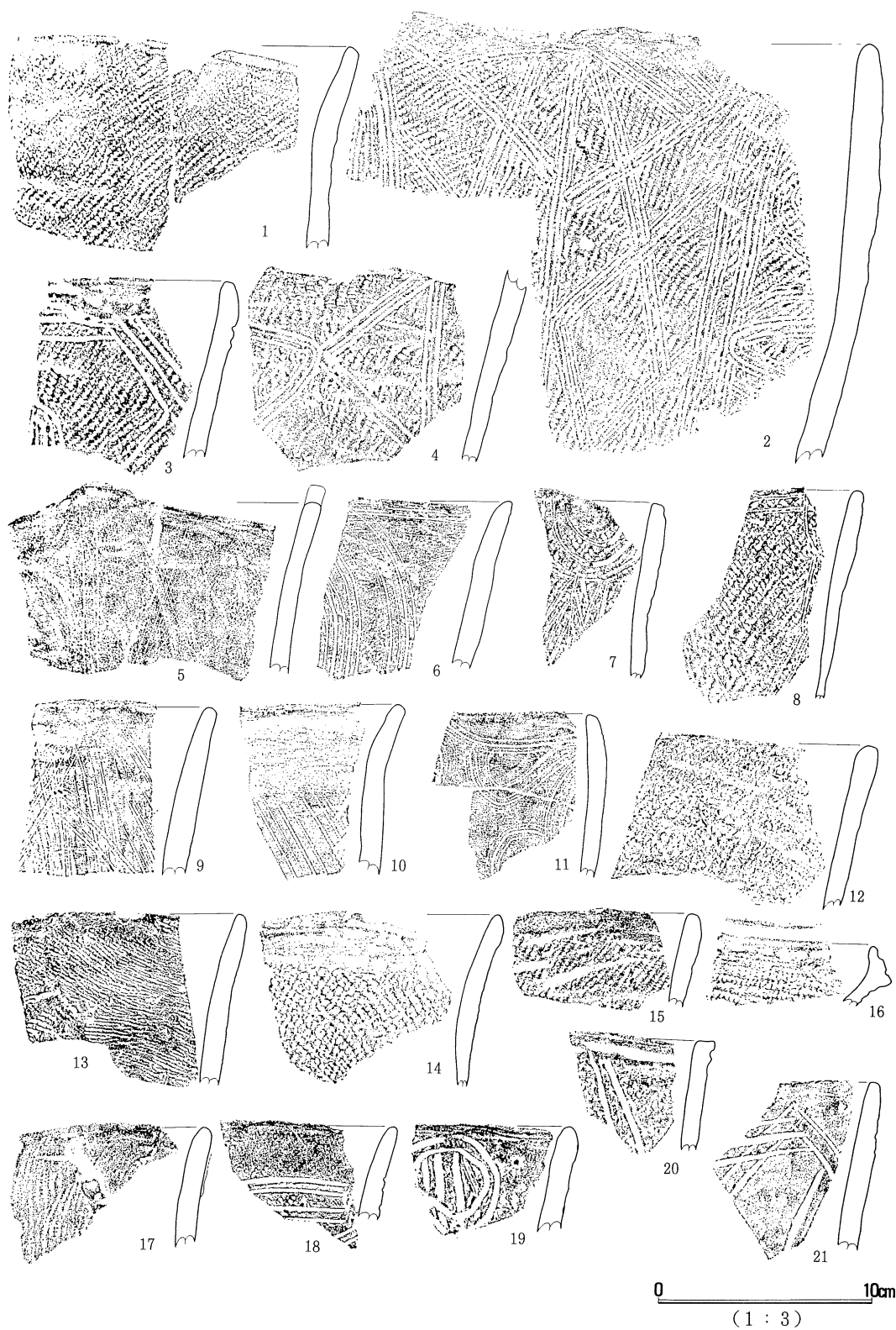
第57図 58年度包含層出土縄文土器



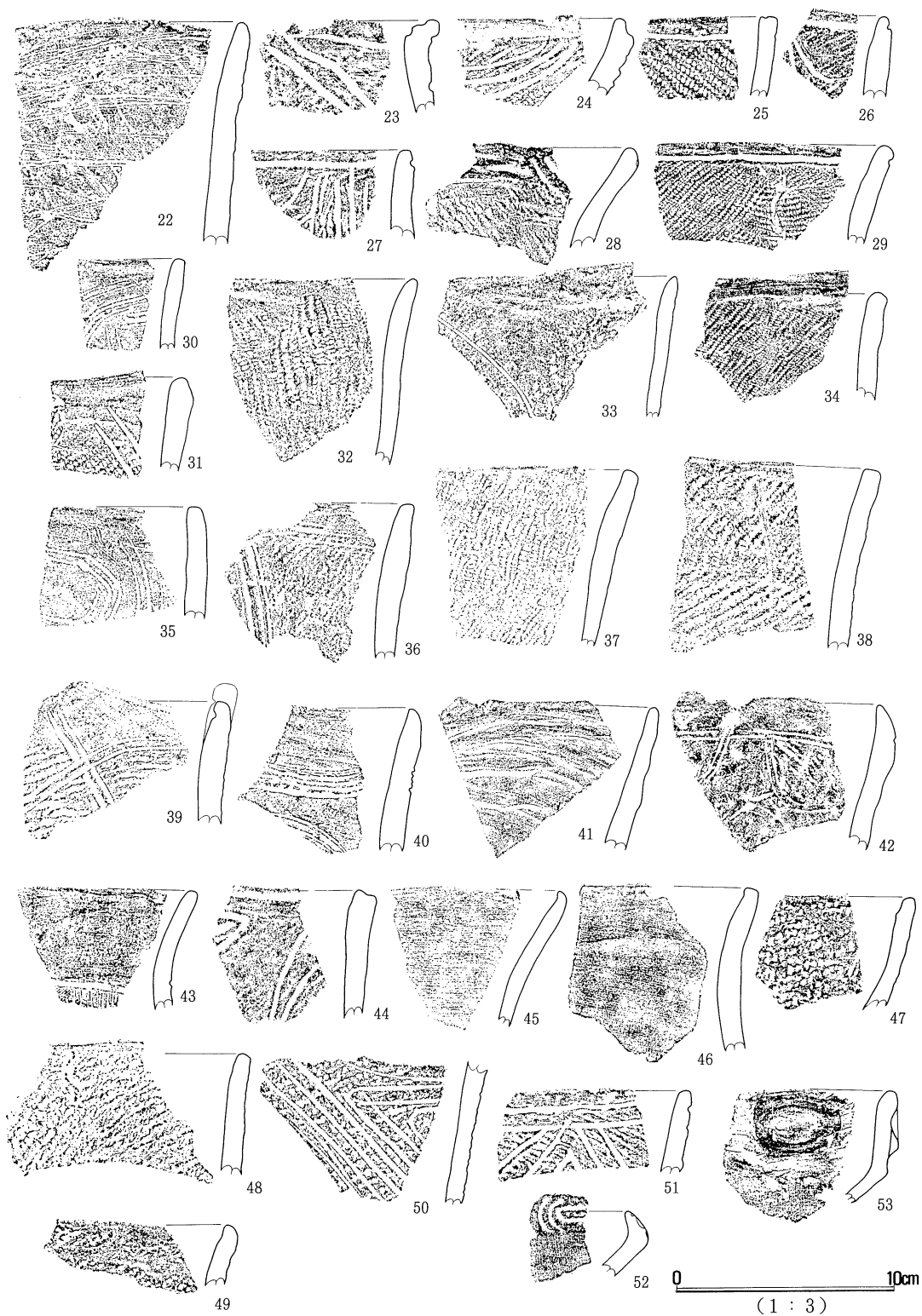
第58図 58年度包含層出土縄文土器



第59図 58年度包含層出土縄文土器



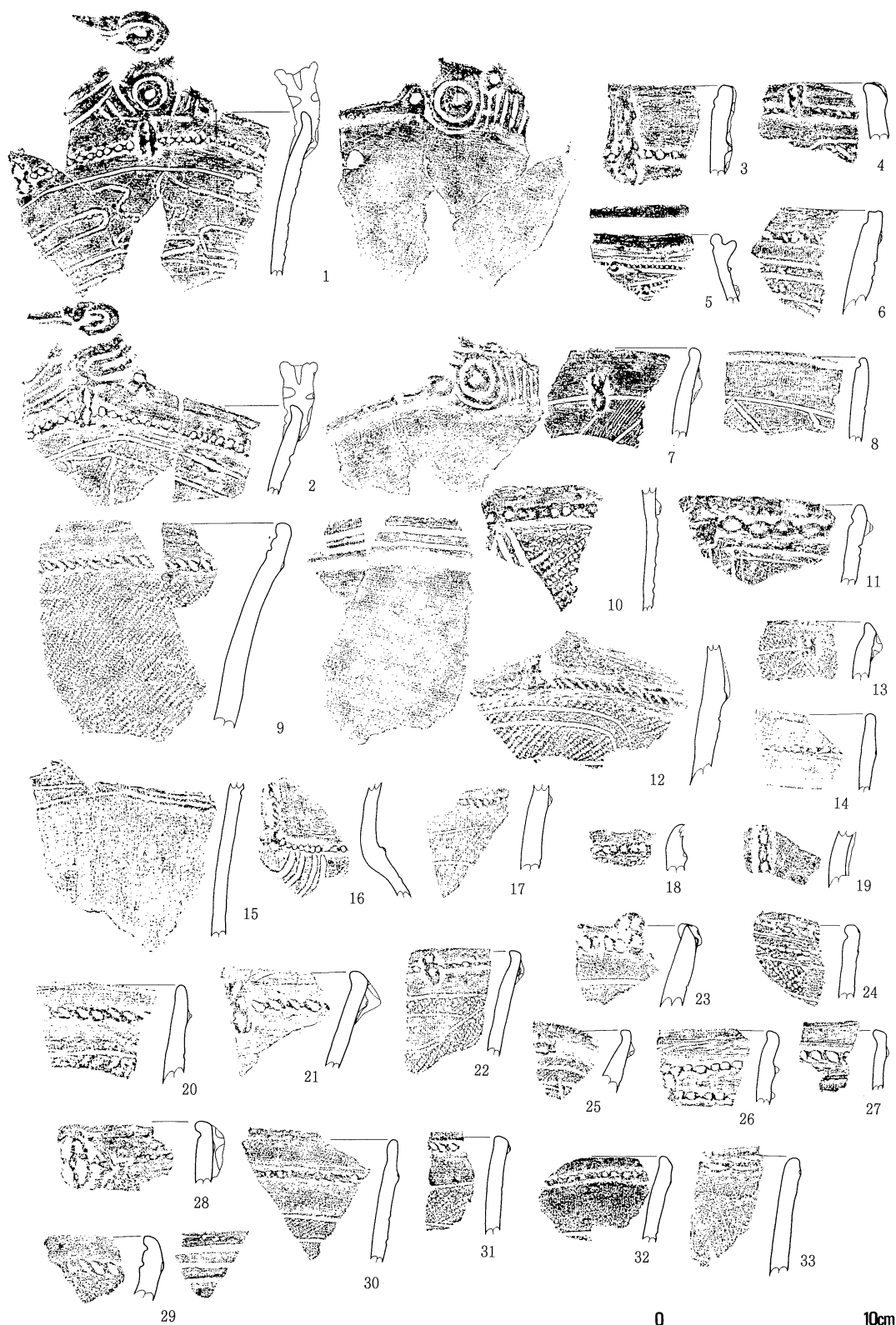
第60図 58年度包含層出土縄文土器



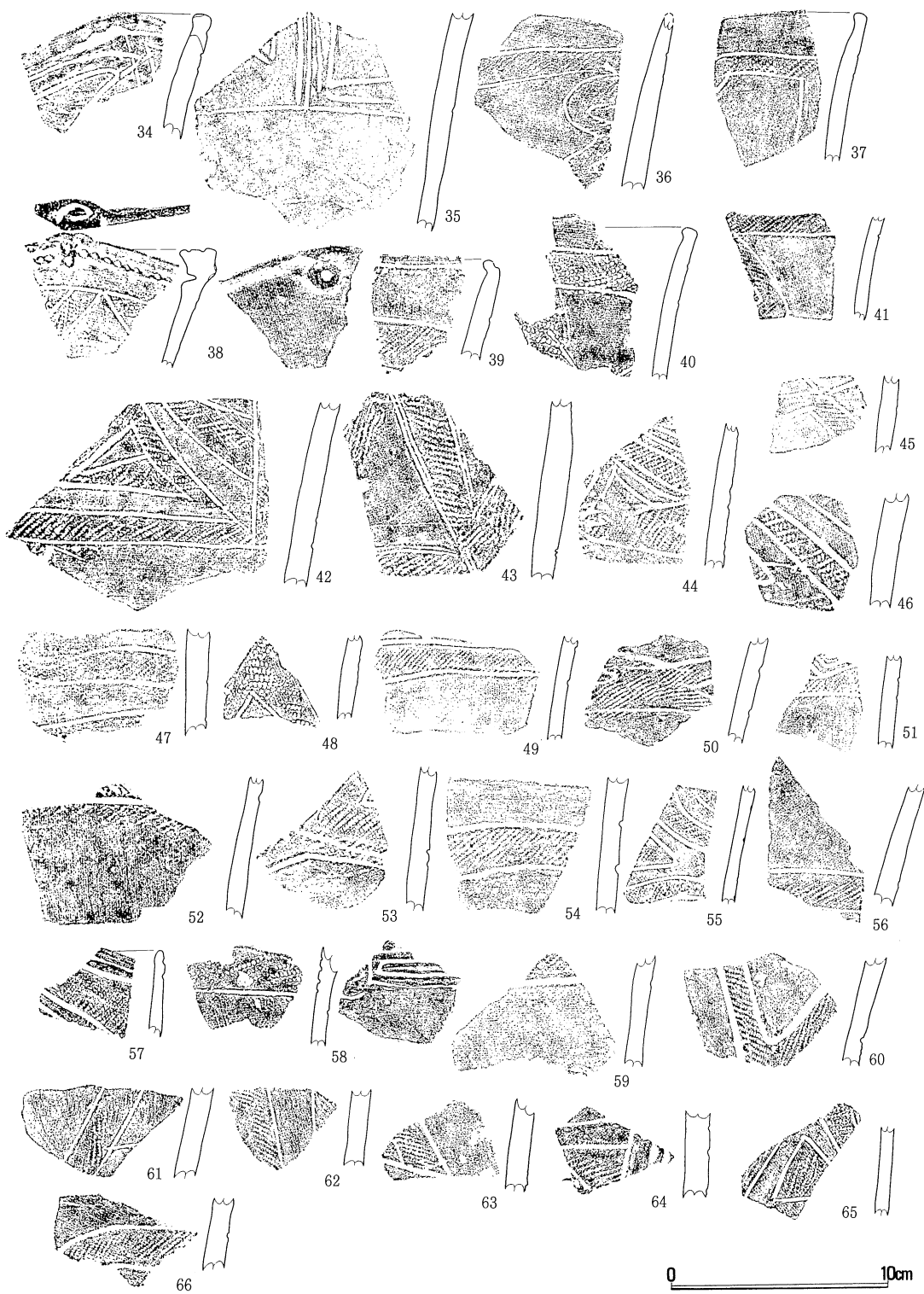
第61図 58年度包含層出土縄文土器



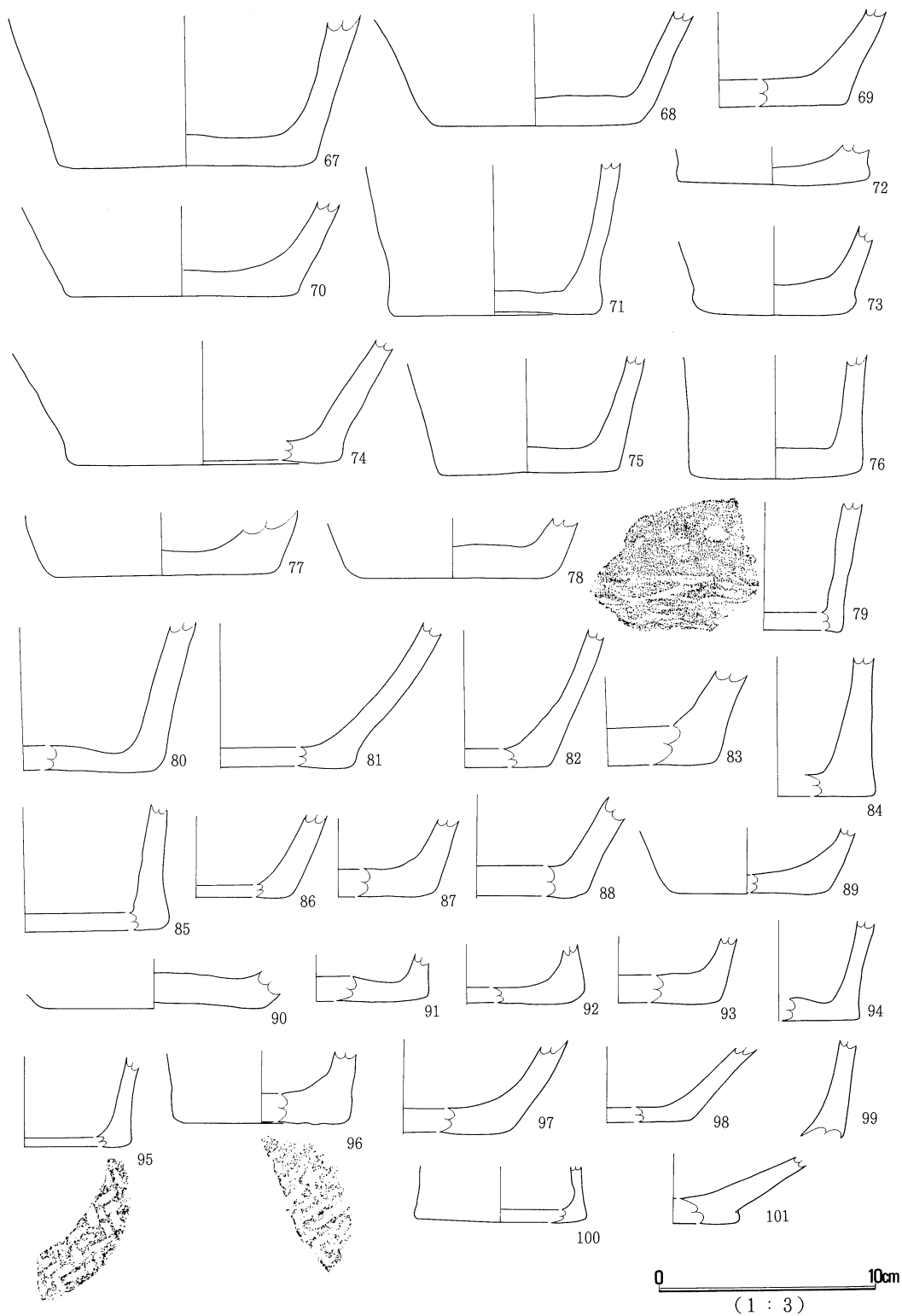
第62図 58年度包含層出土縄文土器



第63図 58年度包含層出土縄文土器



第64図 58年度包含層出土縄文土器



第65図 58年度包含層出土縄文土器

第66図は加曽利B式を主に掲載した。18～23は紐線貼り付けが顕著なもので堀之内2式である。口縁部からの平行沈線と沈線間の縄文（最上段は細沈線刻みのものもある）施文がある。口唇部内面には屈曲による沈線状の窪みが周回するか、沈線が一条または複数条周回する。平行沈線と充填縄文を区画する沈線が、平行沈線を跨ぐように横アルファベットU字状に数段施文される。

第67図は加曽利B式の粗製土器である。第68図は堀之内2式土器が混じる。底部は加曽利B式期であろう。第69図の1から21・25・26までは加曽利B式から曾谷式になり、22～24・27からは安行式である。昭和58年度出土区域内の加曽利B式は極めて少なく、5cm以上の土器片は掲載されたものが全てである。小片が多く当該時期は、遺跡南側斜面部分への影響が少ないのだろう。

第69図の22の安行式期の粗製土器は加曽利B式粗製土器に比べて、粘土紐線の潰しが効いていて平らに貼り付く状態になる。また口唇部の形態が角棒状から肥厚した隅丸棒状に変化する。そして口唇部によく潰れた粘土紐が貼り付くのである。34は安行1式の帯縄文が口唇部に巡る波状口縁部である。中心に縦位に粘土紐が貼り付き瘤状の突起が作出される。39を除く37～42は口縁部に帯縄文と沈線または刺突によって区画している。39は細かな縄文が施文され、口唇部分に内外面とも沈線がはいる。器形は碗状であるが口縁部分が少ないため判然としない。

第70図は45・46・48～51・53～56・62は安行1・2式の口縁部である。43・44・57は安行式粗製土器である。67・71・77・84・85は縄文晩期になる。特に85は縄文晩期終末である。70・73・74・81は弥生土器である。87は堀之内1式時期の東北地方北部の壺形土器片である。88は堀之内2式の注口土器片、93は釣手のある土器の釣手部分になる。89は爪によって摘み出した器面を文様化しており沈線によって縄文を区画している。それは仙台湾周辺にある文様と似通っている（77）。時期的には堀之内1式期の後半となるだろう。90～92は堀之内2式時期であり、90・91は在地土器であるが92は胎土に砂礫が若干入り、非在地土器の可能性もある。残りは加曽利B式期と加曽利E式72・86の小片が混じっている。

（77）芳賀良光「宮城県宮戸島貝塚梨木圀遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』1968.12 宮城教育大学歴史研究会 P50、梨木圀遺跡第5図8の拓影図が小さいので不詳な部分はあるが、器面から爪を押し立てる様に摘み出している様子が見取れる。同図の5は当遺跡の第57図60の口縁部と似ており、梨木圀遺跡第5図8と5の文様が当遺跡第70図89になる。梨木圀遺跡の第1群土器のIの土器は、当遺跡の第57図46・48～50の口縁部分と同じ施文であるが、梨木圀遺跡の胴部縄文の撚糸文が多条のジグザグ平行沈線文の垂下に置き換わっている。

第76図134～169は紙面の都合により離れるが土器なので続けて記載する。134・136～142は、土器器面に赤彩が診られるため、成瀬正和氏に分析をお願いしており、分析結果は別記する。

134～139は加曽利B 1 式から曾谷式期までの土器である。138は注口土器であり黒色研磨された上に赤彩されている。赤彩はどの土器も剥がれ、微量に残すのみである。

135は堀之内式期の土器の蓋である。165は西日本中国地方の福田K 2 式土器である。鉢形土器の口縁部の突起が付く部分である。堀之内 1 式と同時期である。昭和58年度調査時に、中世遺構の多いグリッドから出土している。166・168は第44図埋甕 1 の記載において説明済である。この東北地方北部の土器は関東地方の在地土器型式では堀之内 1 式の前半になり、福田K 2 式期と同じ頃である。165は太く深い沈線により渦巻文を作り、沈線間を先がやや尖って丸い施文工具によって刺突してある土器の胴部片である。内面は黒色に研磨されている。時期的には中期末の土器であろう。

144～146・149～151は東北地方の新地式土器であり、中葉の時期なので関東地方在地土器では安行 1・2 式期である。土器の胎土は赤褐色を呈し、144・145・150は表面を黒色処理している。151のみ文様が異なり注口土器だろう。

142・143・158・164・161は東北地方大洞B式であり、関東地方では安行 3 a 式と同じ時期となる。地文は細かな単節縄文となり篋状施文工具によって沈線を削り出している。胎土は黄白色と黒色があり、器面は黄白色を呈している。同時期の在地の注口土器片が167である。140は大洞B C 式の注口形土器の屈曲部分であろう。154・159・163も同じ時期の口縁部であり、関東地方在地では安行 3 b 式に相当する。141・152は壺か注口土器の屈曲部分であり、148・153は胴部片となる。東北地方の土器であり、時期は大洞C 1～C 2 式と考えられ、関東地方では安行 3 c～3 d 式となる。菊間手永遺跡では当該期安行式系の土器ではなく、前浦 1～2 式となる。155～157・169は細かな撚糸縄文がほぼ横位に施文された土器である。155は角棒状口唇部形態の口縁部分に 2 条の平行沈線と、それに並ぶ切れた沈線がやや深く施文されてる。時期は大洞C 1～C 2 式と考えられ、粗製土器だろう。

菊間手永遺跡においては、縄文時代後期から晩期中葉にかけての集落がある。量差はあるが土器型式ではほぼ間断なく出土しているので、その間集落は継続したと考えられる。その継続した結果が遠隔地の非在地土器の搬入であった可能性がある。土器の分類では「縄文土器大成」を参考にした(78)。また土器型式名は「縄文土器型式の編年」使用の呼称に従った(79)。

(78) 鈴木公雄「関東地方」『縄文土器大成 4 晩期』1981.4 講談社

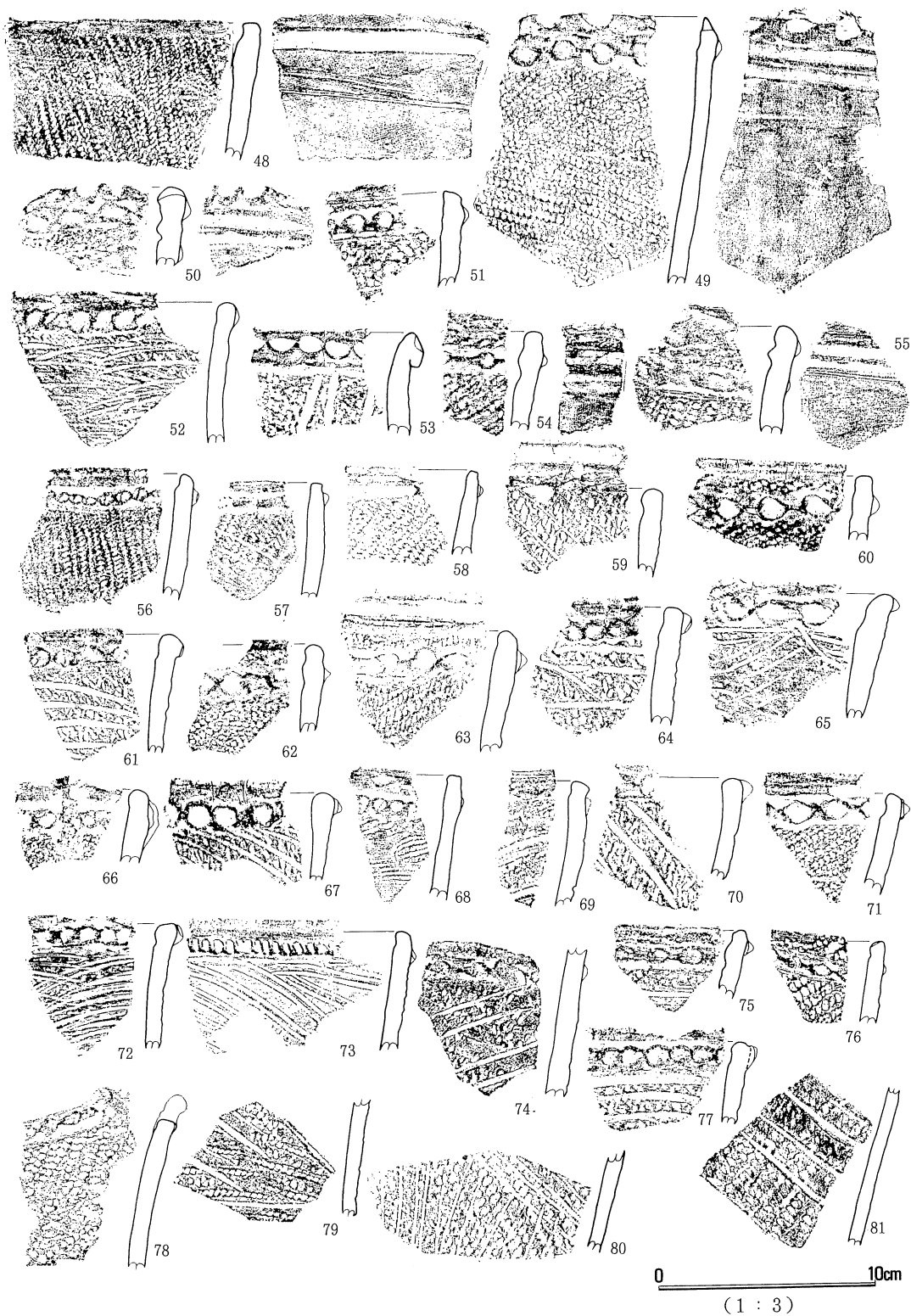
(79) 小林達雄・鈴木保彦ほか「縄文土器型式の編年」『縄文土器大成 5 続縄文』1982.5 講談社



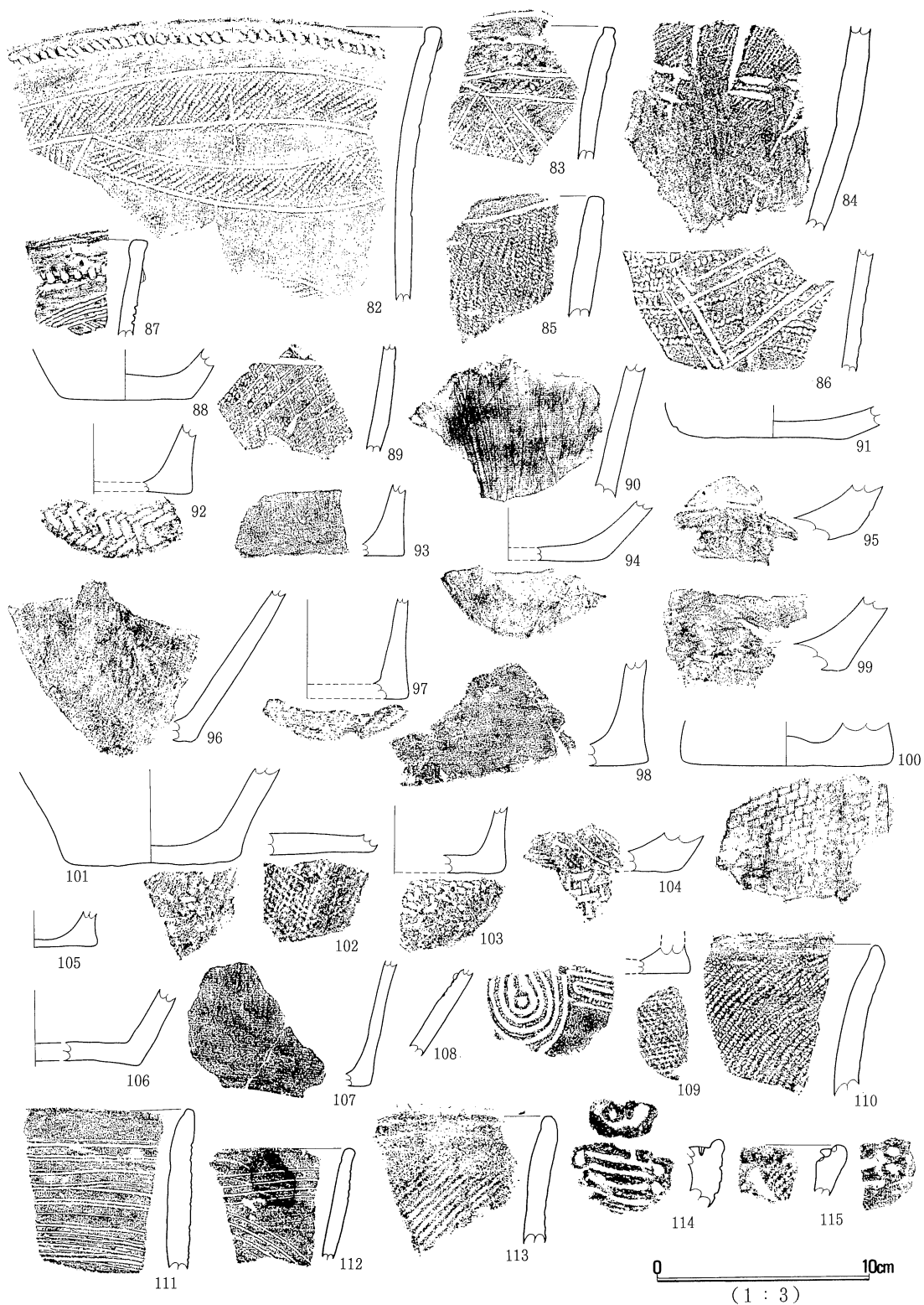
第66図 58年度包含層出土縄文土器

(1 : 3)

0 10cm



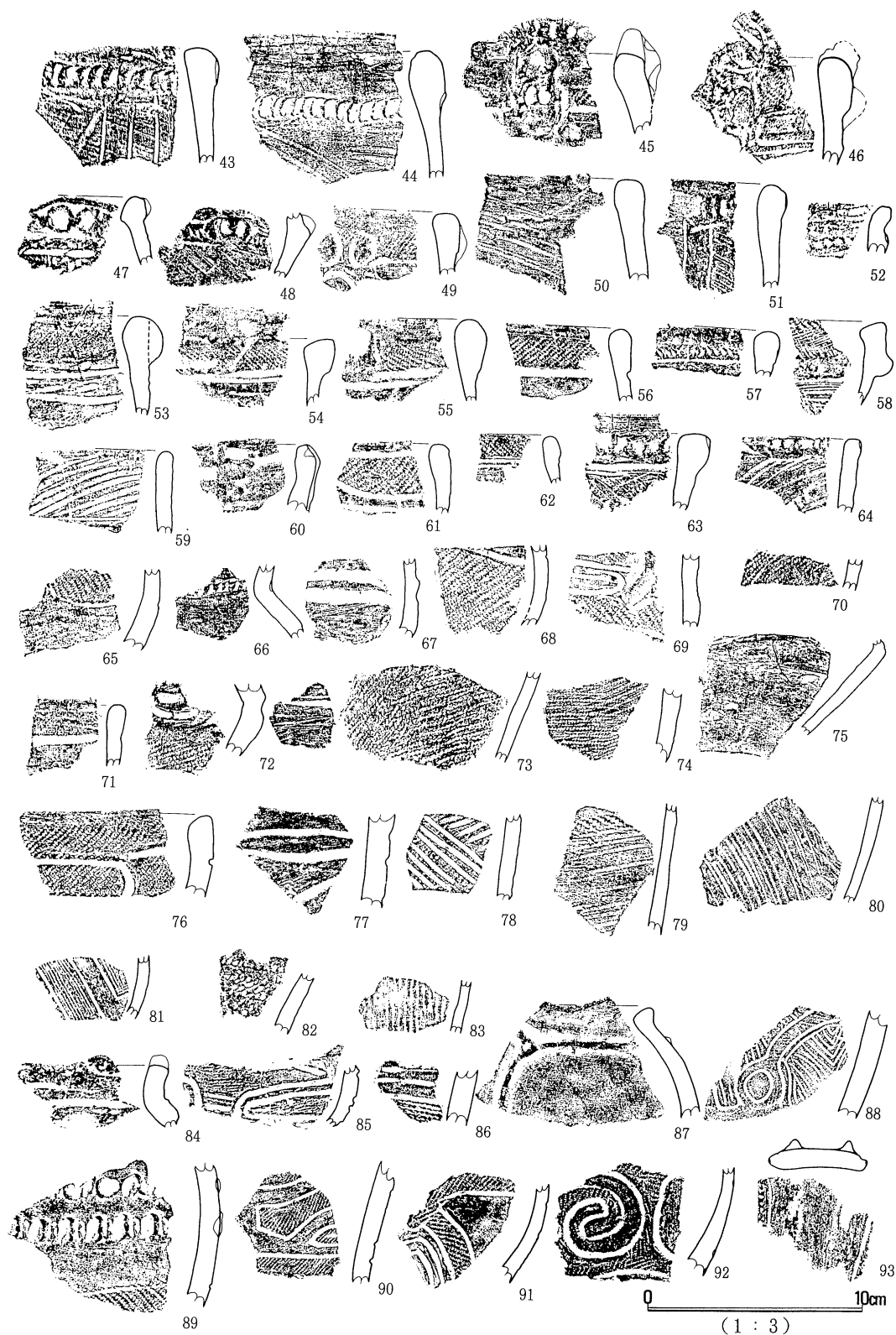
第67図 58年度包含層出土縄文土器



第68図 58年度包含層出土縄文土器



第69図 58年度包含層出土縄文土器



第70図 58年度包含層出土縄文土器

(6) 土製品

土製品については第3表菊間手永遺跡土製品一覧に、時代を問わず掲載してある。縄文時代が量的に非常に多いので、ここに一括に紹介する。一覧表の出土地点に「セ11」とあるのは昭和58年度調査時の出土資料であり、「手永」とあるものは昭和47年度出土資料である。紙面の都合上遺物が前後するが、分類上の分割ではない。挿図は第70図～第76図までである。

縄文時代の土製品である土偶は、第70図1～3・5と第73図61・63・65・67である。動物形土製品は第73図64と第43図6がある。縄文時代後期中葉加曽利B式期の山形土偶は、第71の1、第73図の61である。後期後半から晩期初頭の安行式期では破片の一部分のみであるが、第71図の2、第71の5、第73図の67である。その67は安行3a式期の住居跡である03号の覆土から出土している。縄文時代晩期では安行3b式期以降から前浦式期までが、第71図の3、第73図の63・65と考えている。どれも明確な遺構に伴わず出土状態は不詳である。

第74図の耳飾り70は縄文晩期043号住居跡脇の51号人骨に伴っていたことが、人骨の取り上げの際判明している。また昭和47年度調査時のグリッド1・2・4・5は人骨53体出土した墓域であり、第74図72・73・76等の耳飾りは出土が5グリッドあるため人骨に伴っていた可能性がたかい。そして第74図の82の円盤状の土製品は86号人骨の甕棺内にあった。同図83も同様な作りであり、1グリッド出土となっているから副葬品の可能性がたかい。

土版と考えられるのは第73図の66・68・69でありどれも欠損しており完形のものはない。ほかに有孔土製円盤が第74図74・75・77・78・80・81がある。いずれも中心部に大きめの孔があり、端部にやや小さめの孔が貫通している。これらも完形品はなく、破損している。

これら土製品は縄文時代後期後半の安行式期以降から縄文時代晩期前半まで盛行したと考えられている(80)。つまり菊間手永遺跡が当該期に集落としてあったことになる。土偶、土版は、市内西広貝塚に豊富に出土資料があり今後の比較資料となるだろう(81)。第43図の7の異形脚付土器は、千葉県余山貝塚資料に類似している。この余山貝塚の異形土器の脚部は埼玉県石神貝塚資料の台脚状の土製品と酷似している(82)。このことから石神貝塚の土製品が脚部となり、それに燭台形土器をのせたものが手永、余山貝塚遺跡の異形脚付土器と考えられる。縄文時代後期後半から晩期前半にかけては、土製品が多種多様になり、直接生産用具だけでなく器から饗前用具へ、さらに精神世界の呪術用具へ展開を始めるのである。

(80) 小野美代子「土版、石版」『土偶の知識』1984.4 東京美術

(81) 稲野明子「関東地方における岩版・土版の文様」『史学第52巻2号』1982.9 三田史学会

(82) 小田静夫・金子裕之・金子浩昌「埼玉県石神貝塚の調査(2)土製品」『埼玉考古第13・14号』1975.8

第3表 菊間手永遺跡土製品一覧

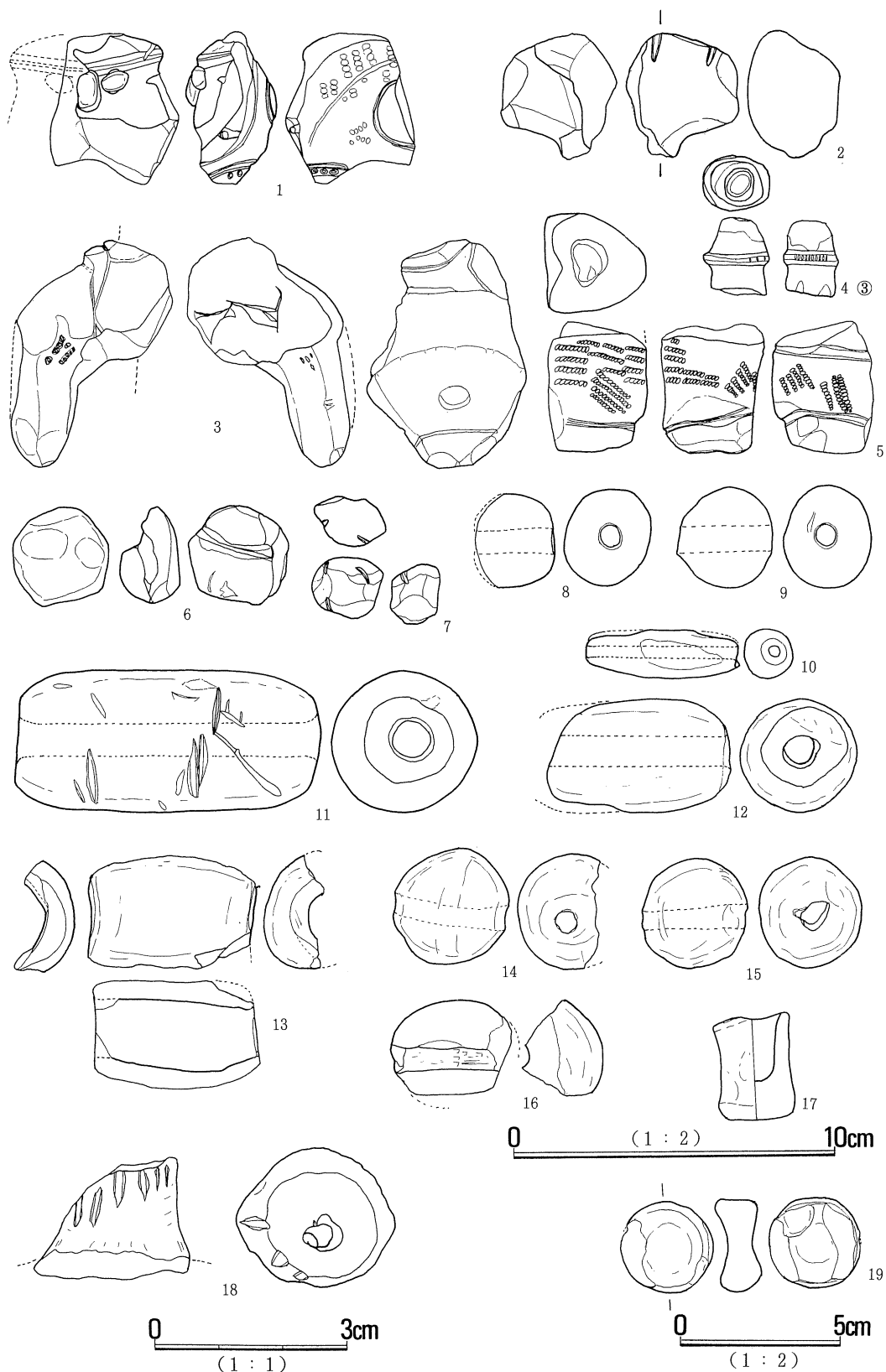
No	名称	形態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素材	時期	挿図番号	備考
1	山形土偶	人面	セ11-O25-1	46	50	30	36.4	焼成良	縄文時代後期	71図-1	頭部1/3残存
2	土偶	右手部分?	セ11-5.26-E	35	41	31	23.6	焼成良	縄文時代	71-2	基部剥離先端欠損
3	土偶	右腕部?	セ11-29	76	54	50	95.2	中空?焼成良	縄文時代晩期	71-3	表裏剥離
4	土器把手頂部	コップ状赤彩	セ11-39-8	27	21	21	7.8	焼成良黒色化	" 後期	71-4	福島地方の土器?
5	土製円版?	脚部	セ11-O25-1	45	35	33	41.5	焼成良・砂質	縄文時代	71-5	取り付け孔有半欠損
6	土製品	手づくね	セ11-O24-1	33	33	17	14.3	焼成良	弥生時代?	71-6	完形、指頭痕有
7	土製品	手づくね	セ11-5-5	18	22	17	6.0	焼成良	"	71-7	完形
8	土製品	有孔土玉	セ11-5-1	24	31	31	18.5	焼成良	古墳時代	71-8	1/5欠損
9	土製品	有孔土玉	セ11-L12-3	30	33	33	25.5	焼成良	"	71-9	完形
10	土器片	中太円筒状	セ11-39-7	38	42	9	8.4	焼成良やや砂質	縄文時代	71-10	両端部欠損有
11	土器片	端部細形	セ11-O13-1	51	19	15	207.6	焼成良	"	71-11	端部欠損
12	土器片	端部細形	セ11-O12-1	97	47	47	61.4	焼成良・砂質	古墳時代	71-12	1/2欠損端部摩耗
13	土器片	端部細形	手永-45G (71G)	51	34	11	25.3	砂質、焼成良	中世?	71-13	2/3欠損、縦割
14	土器片	有孔土玉	手永-9	36	37	37	27.7	焼成良	古墳時代	71-14	1/2欠損
15	土器片	有孔土玉	手永-12	32	33	32	35.3	焼成良	"	71-15	ほぼ完形、がじり有
16	土器片	有孔土玉	手永-周溝4	34	29	29	19.4	焼成良	"	71-16	3/4欠損、縦割
17	ミニチュア土器	コップ状	手永-表31	33	24	24	16.8	手づくね、焼成良	古墳時代?	71-17	完形
18	埴輪	形象埴輪部分	手永-	20	24	22	5.9	焼成良	古墳時代後期	71-18	はりつけ脱落端部欠損
19	円版	板状1対刻み	手永-5G-23	29	28	13	10.7	焼成良、手づくね	古墳時代?	71-19	若干欠損
20	土器片	鈺	セ11-L-12-2	47	48	14	33.1	堀之内1式	縄文時代	72-20	
21	土器片	鈺	セ11-L-12-3	57	47	13	46.2	加曾利E式	"	72-21	
22	土器片	鈺	セ11-O23.エ.9	60	61	14	39.7	堀之内1式	"	72-22	
23	土器片	鈺	セ11-L-12-3	58	66	10	41.3	堀之内1式	"	72-23	
24	土器片	鈺	セ11-O23.キ.26	45	44	16	23.2	堀之内2式	"	72-24	
25	土器片	鈺	セ11-O22.イ.4	47	45	10	23.7	堀之内1式	"	72-25	
26	土器片	鈺	セ11-O26-1	48	50	7	25.5	加曾利B式	"	72-26	
27	土器片	鈺	セ11-68-3	47	35	9	21.5	堀之内1式	"	72-27	
28	土器片	鈺	セ11-O23.エ.9	51	42	11	27.2	加曾利E式	"	72-28	
29	土器片	鈺	セ11-O26-9	29	36	9	11.4	?	"	72-29	
30	土器片	鈺	セ11-68-3	41	44	11	16.9	?	"	72-30	

No.	名 称	形 態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素 材	時 期	挿図番号	備 考
31	土 器 片 鍾	板状1対刻み	セ11-O25-1	49	37	11	22.5	?	縄 文 時 代	72-31	
32	土 器 片 鍾	"	セ11-74-5	44	35	11	21.5	?	"	72-32	
33	土 器 片 鍾	"	セ11-O23.ク.23	44	41	11	19.8	堀之内1式	"	72-33	
34	土 器 片 鍾	"	セ11-5-4	49	46	10	28.6	堀之内1式	"	72-34	
35	土 器 片 鍾	"	セ11-O23-33	43	37	12	17.3	加曾利B式	"	72-35	
36	土 器 片 鍾	"	セ11-O23.エ.9	41	50	14	20.7	堀之内内式	"	72-36	
37	土 器 片 鍾	"	セ11-O24-1	41	43	9	20.1	堀之内内式	"	72-37	
38	土 器 片 鍾	"	セ11-O25-1	37	34	10	11.3	?	"	72-38	
39	土 器 片 鍾	"	セ11-O27.4-1	25	34	11	11.4	?	"	72-39	
40	土 器 片 鍾	"	セ11-29	37	30	7	8.1	堀之内2式	"	72-40	
41	土 器 片 鍾	"	セ11-O26-9	36	35	9	11.7	?	"	72-41	
42	土 器 円 版	円	セ11-O25.5-077.53	43	44	6	14.8	加曾利B式	"	72-42	
43	土 器 円 版	円	セ11-O22.イ.4	52	52	8	26.5	安 行 式	"	72-43	
44	砥 石	形 方	セ11-O25.5-077.53	46	46	9	28.5	加曾利B式	中 世	72-44	右側縁部擦痕
45	砥 石	"	セ11-O24.ウ.エ	67	40	11	34.4	縄 文 土 器	中 世	72-45	全周擦痕
46	砥 石	"	セ11-O24.イ.列.5	57	30	11	24.9	"	"	72-46	"
47	砥 石	"	セ11-39-7	63	27	11	22.3	"	"	72-47	下端欠損
48	砥 石	不 整 形	セ11-N27.ク.1	47	52	16	38.5	陶 器 片	"	72-48	全周擦痕
49	土 器 片 鍾	板状1対刻み	手永-溝5	63	46	14	57.7	堀之内内式	縄 文 時 代	72-49	
50	土 器 片 鍾	"	手永-地下式竈1	58	40	10	31.6	加曾利E式	"	72-50	
51	土 器 片 鍾	"	手永-4H.トレ50	33	57	14	30.6	"	"	72-51	
52	土 器 片 鍾	"	手永-46住.1	52	42	11	34.3	堀之内1式	"	72-52	
53	土 器 片 鍾	"	手永-67	51	46	12	32.5	"	"	72-53	
54	土 器 片 鍾	"	手永-7G.11	52	42	12	33.7	"	"	72-54	
55	土 器 片 鍾	"	手永-161G	75	38	10	38.7	"	"	72-55	
56	土 器 片 鍾	"	手永-6	53	45	11	34.7	"	"	72-56	
57	土 器 片 鍾	"	手永-4T.16	59	46	7	22.4	?	"	72-57	
58	土 器 片 鍾	"	手永-46住.1	54	46	11	33.6	堀之内内式	"	72-58	
59	土 器 片 鍾	"	手永-38G.14	51	45	10	24.3	"	"	72-59	
60	土 器 片 鍾	"	手永-4	56	38	10	29.7	"	"	72-60	
61	土 器 偶	山 形 土 偶	手永-5G	72	63	28	101.8	焼 成 良	縄 文 時 代 後 期	73-61	頭部、両腕欠損
62	土 器 ?	円 盤 状	手永-表33	53	34	11	24.4	焼 成 良 黒色研磨、焼成良	"	73-62	作りは土器、形態は円盤

No.	名称	形態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素材	時期	挿図番号	備考
63	土器 把手	右腕	手永-溝18.3	35	48	33	61.7	焼成良、砂質	縄文時代晩期	73-63	端部欠損
64	動物形土製品	イノシシ頭部	手永-4T.6	38	24	22	24.3	焼成良耳部貼付	縄文時代	73-64	頭頂部 たて髪状貼付
65	土 偶	両脚部	手永-	34	89	37	134.8	焼成良	縄文時代晩期前式	73-65	資料No.75と胎土似る
66	土 版	糸巻形	手永-19G	70	55	16	73.8	焼成良、赤彩	縄文時代	73-66	3/4欠損 ⑮
67	土 偶	脚部	手永-83	48	23	21	23.3	焼成良	縄文時代晩期	73-67	木菟土偶の足
68	土 版	方形	手永-6G.15	62	68	22	119.8	焼成良、平滑	縄文時代	73-68	1/2欠損、がじり多数
69	土 版	方形	手永-6G.15	67	50	18	68.6	焼成良、赤彩	縄文時代	73-69	3/4欠損
70	耳 飾	有孔	手永-83	38	22	13	4.9	焼成良、赤彩	縄文時代晩期	74-70	3/4欠損
71	耳 飾	臼状	手永-	26	26	16	12.0	焼成良、黒色化	縄文時代	74-71	完形
72	耳 飾	臼状	手永-5G	14	14	8	1.3	焼成良	縄文時代	74-72	ほぼ完形 がじり有
73	耳 飾	耳栓	手永-5G	13	16	16	2.1	焼成良	縄文時代	74-73	完形
74	有孔円盤	板状	手永-8G住居	63	49	12	50.4	焼成良	縄文時代	74-74	2/3欠損
75	有孔円盤	板状	手永-4H.10	39	41	14	25.0	焼成良、黒色化	縄文時代	74-75	5/6欠損
76	耳 飾	臼状	手永-5G	46	46	19	41.1	焼成良、赤彩	縄文時代	74-76	1/10欠損 ⑯
77	有孔円盤	板状	手永-15G.3	54	77	17	67.0	焼成良、黒色化	縄文時代	74-77	3/4欠損
78	有孔円盤	板状	手永-大溝3	44	39	15	29.2	焼成良、平滑	縄文時代	74-78	6/7欠損
79	円盤	板状	手永-15G.4	54	20	7	8.2	焼成良	弥生時代?	74-79	3/4欠損
80	有孔円盤	板状	手永-7G.14	72	45	11	44.2	焼成良	縄文時代	74-80	2/3欠損
81	土 版	有孔、沈線入り	手永-6G.15	43	35	10	12.9	焼成良	縄文時代晩期	74-81	全体形状不明
82	土器波状口縁?	円盤状	手永-胎児	30	16	7	4.3	焼成良	縄文時代後期	74-82	土製円盤の可能性有
83	土器波状口縁?	円盤状	手永-1G.12	37	22	8	7.5	焼成良	縄文時代	74-83	土製円盤の可能性有
84	土器片 鍾	板状1対刻み	手永-V字溝4	56	32	9	25.8	堀之内 式	縄文時代	75-84	
85	土器片 鍾	"	手永-10	39	39	9	16.8	"	縄文時代	75-85	
86	土器片 鍾	"	手永-7G.11	43	38	11	22.1	"	"	75-86	
87	土器片 鍾	"	手永-1G.12	54	39	10	27.5	"	"	75-87	
88	土器片 鍾	"	手永-15住.1	46	49	9	26.1	加曽利B式	"	75-88	
89	土器片 鍾	"	手永-N05溝9	46	29	10	16.2	堀之内 2式	"	75-89	
90	土器片 鍾	"	手永-13G.6	27	38	10	12.6	"	"	75-90	1/2欠損
91	土器片 鍾	"	手永-22	43	32	10	18.2	堀之内 1式	"	75-91	
92	土器片 鍾	"	手永-42	43	39	10	19.8	?	"	75-92	
93	土器片 鍾	"	手永-70	55	47	12	29.3	堀之内 2式	"	75-93	
94	土器片 鍾	"	手永-N04.1	70	58	9	44.1	?	"	75-94	1/3欠損

No.	名 称	形 態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素 材	時 期	挿図番号	備 考
95	土 器 片 鉢	板状1対刻み	手永-35住.1	48	41	10	22.3	堀之内1式	縄 文 時 代	75-95	
96	土 器 片 鉢	〃	手永-45G(71G)3	45	47	12	31.9		〃	75-96	若干欠損
97	土 器 片 鉢	隅丸方形	手永-19G.1	43	49	7	20.1	宮ノ台式	弥生時代	75-97	欠損
98	土 器 片 鉢	〃	手永-トレ63	40	28	8	11.9	〃	弥生時代	75-98	完形
99	土 器 片 鉢	〃	手永-85	42	29	10	14.3	堀之内2式	縄 文 時 代	75-99	一部欠損
100	土 器 片 鉢	円 版	手永-3G.4	29	23	5	4.8	加曾利B1式	〃	75-100	
101	土 器 片 版	円	手永-V字溝.1	53	53	8	30.9	加曾利B式	〃	75-101	
102	土 器 片 版	円	手永-63G.1	42	39	5	13.9	〃	〃	75-102	
103	土 器 片 版	円	手永-5G.16	44	39	10	25.0	加曾利B式	〃	75-103	
104	土 器 片 鉢	方形	手永-23	38	53	12	31.2	堀之内1式	〃	75-104	
105	土 器 片 版	方形	手永-19G.1	52	33	8	16.8	?	〃	75-105	1/2欠損
106	土 器 片 版	円 盤	手永-6G.15	44	37	10	21.6	?	〃	75-106	
107	土 器 片 版	円 盤	手永-15G.5	44	38	8	18.6	?	〃	75-107	
108	土 器 片 版	円 盤	手永-4G.5	67	67	14	77.8	土器底部	〃	75-108	
109	土 器 片 版	円 盤	手永-59	49	45	11	28.6	堀之内1式	〃	75-109	
110	土 器 片 版	円 盤	手永-3	48	46	7	22.0	?	〃	75-110	
111	土 器 片 版	円 盤	手永-59	43	42	9	20.5	加曾利B式	〃	75-111	
112	土 器 片 版	円 盤	手永-7G	61	49	12	44.2	堀之内1式	〃	75-112	
113	土 器 片 版	円 盤	手永-13G.7	92	99	14	128.6	?	〃	75-113	
114	土 器 片 版	有孔円 盤	手永-4H.10	82	51	5	37.9	加曾利B式	〃	75-114	
115	土 器 片 版	円 盤	手永-13G.7	66	62	7	41.6	〃	〃	75-115	
116	土 器 片 版	円 盤	手永-表36	54	51	8	33.2	〃	〃	75-116	
117	土 器 片 版	円 盤	手永-83	37	35	9	13.2	〃	〃	75-117	
118	土 器 片 版	円 盤	手永-15G.12	36	37	6	11.3	〃	〃	75-118	
119	土 器 片 版	円 盤	手永-表25	36	34	8	13.9	?	〃	75-119	
120	土 器 片 版	円 盤	手永-B5	42	34	10	16.6	?	〃	75-120	欠損か土器片鉢か不明
121	土 器 片 版	円 盤	手永-B	44	44	6	20.1	加曾利B式	〃	75-121	
122	土 器 片 版	円 盤	手永-4G.22	42	20	10	22.7	?	〃	75-122	
123	土 器 片 版	円 盤	手永-N04	51	53	8	28.8	加曾利B式	〃	75-123	
124	土 器 片 版	円 盤	手永-表7	52	58	8	33.3	〃	〃	75-124	
125	土 器 片 版	円 盤	手永-59	48	46	9	29.2	?	〃	75-125	
126	土 器 片 版	円 盤	手永-35住.1	28	26	7	7.3	堀之内1式	〃	75-126	

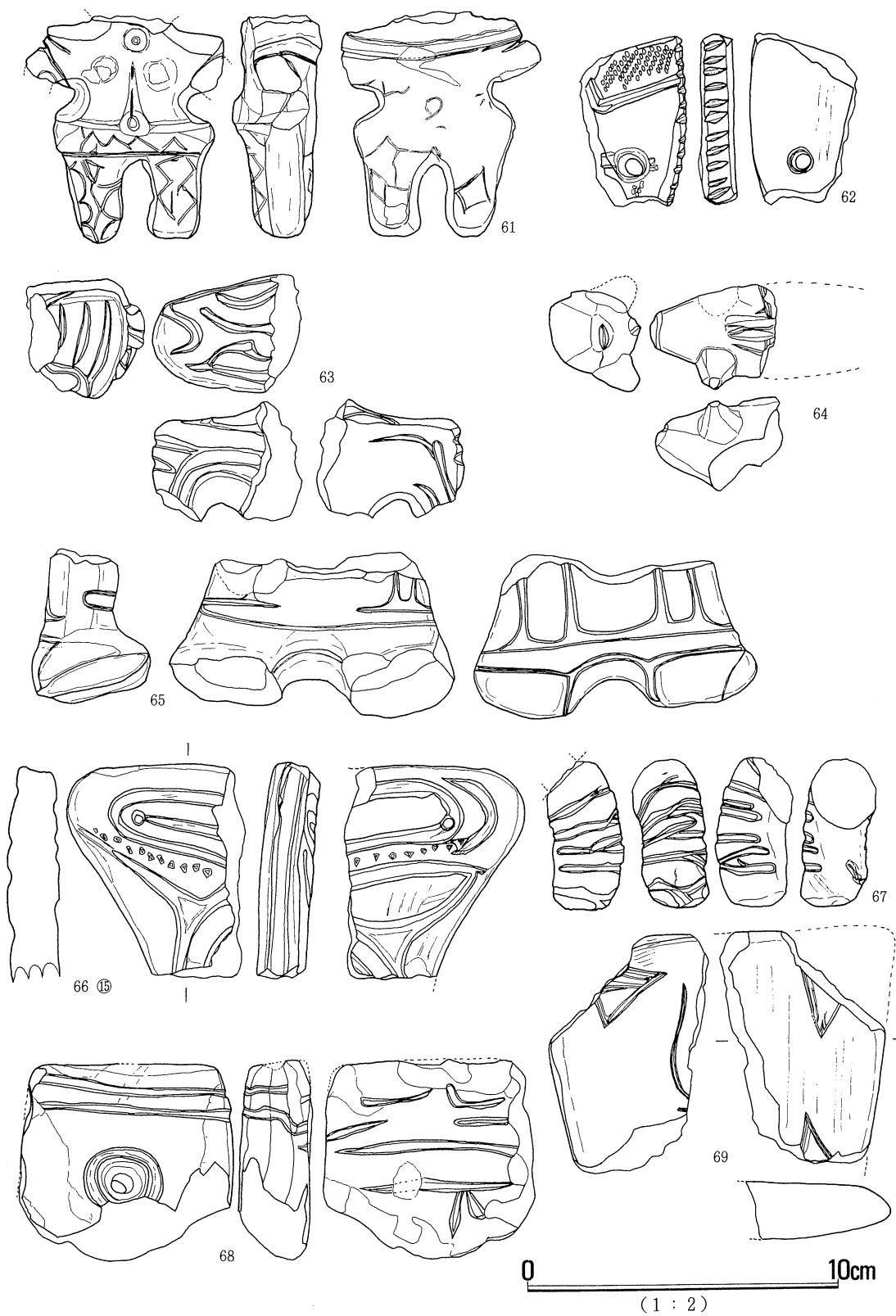
No	名称	形態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素材	縄文時代	挿図番号	備考
127	土器片版	円盤	手永-N05溝	36	38	9	15.2	堀之内式	縄文時代	75-127	
128	土器片版	円盤	手永-15G.13	43	43	5	15.2	加曽利B式	"	75-128	
129	土器片版	円盤	手永-34	53	52	8	26.5	安行3b式	"	75-129	
130	土器片版	円盤	手永-85	38	35	6	9.9	"	"	76-130	
131	土器片版	円盤	手永-50	34	35	9	12.6	?	"	76-131	
132	土器片版	円盤	手永-5G.23	36	33	6	10.7	"	"	76-132	
133	土製円版	円盤	手永-	47	41	11	24.0	"	"	76-133	一部欠損
134	蓋		手永-亀ヶ岡G	67	107	92	251.9		"	76-135	
135	支脚片		手永-	47	43	28	32.0		古墳時代以降	なし	報告外
136	動物形土製品	イヌ類頭部	手永-03号住	(34)	27	23	22.6		縄文時代晩期	43-6	03号住居跡フク土中出土
137	ミニチュア土器片	甕形	手永-63G.2	32	40	5	7.1		古墳時代	なし	
138	土錘	有孔土玉	手永-トレ98	32	32	32	9.5		"	"	
139	支脚		手永II-33号	145	83	73	650.0		縄文時代	"	欠損
140	異形脚付土器	燗台と脚の結合	手永-03号住	(122)	90	89	(322.0)		縄文時代晩期(安行3a)	43-7	千葉余山貝塚類似資料



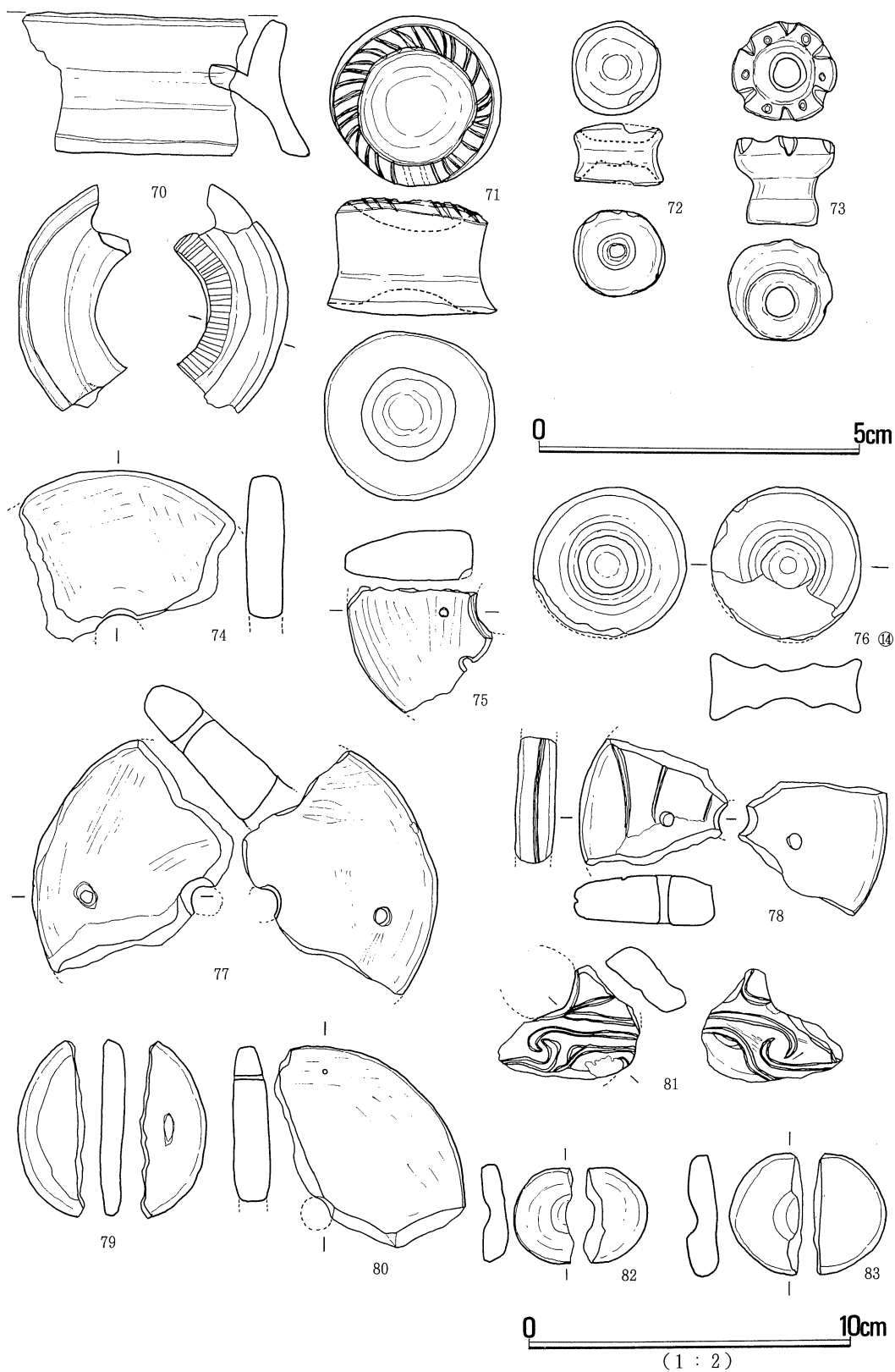
第71図 土製品及び土器の一部



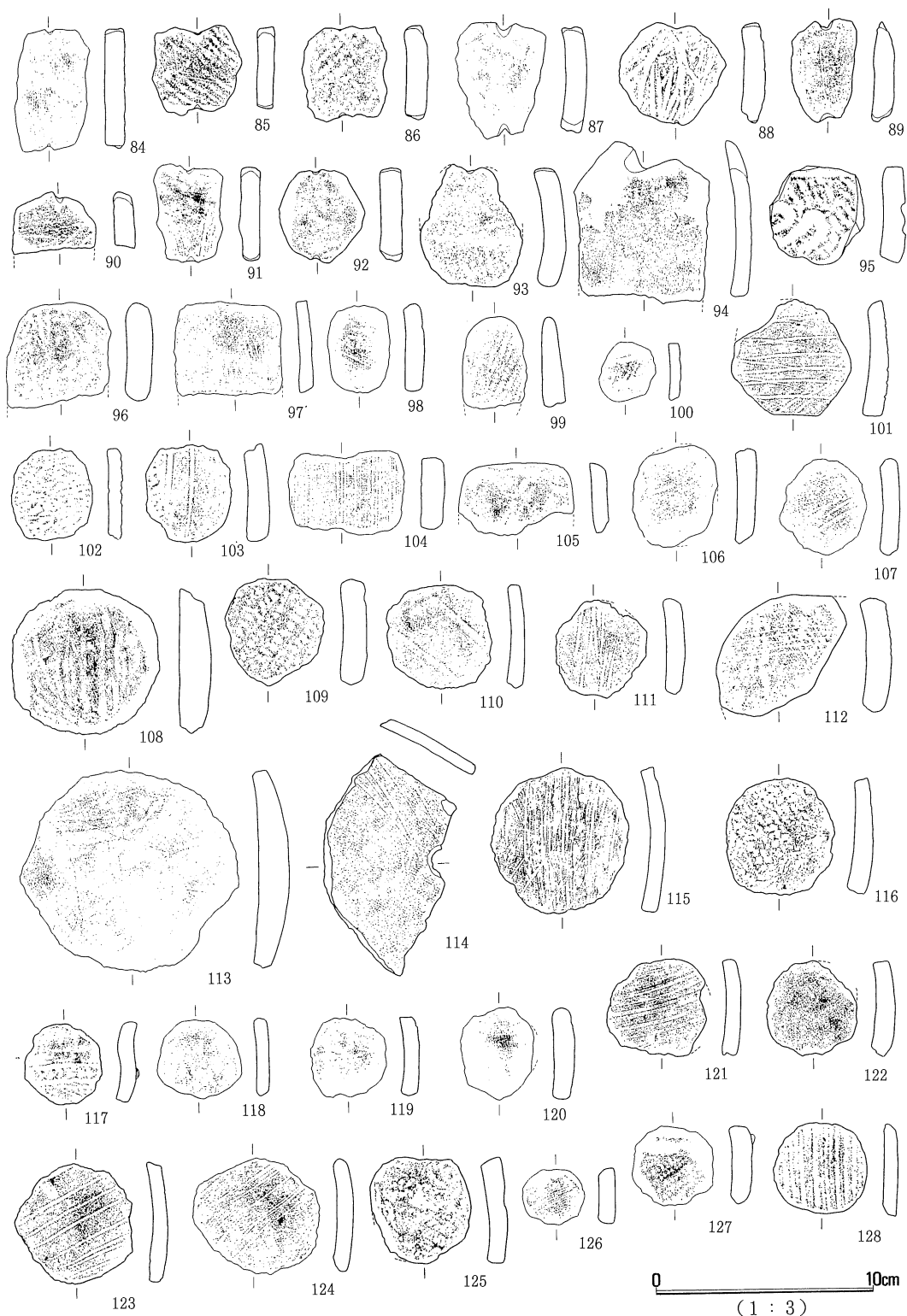
第72図 土製品



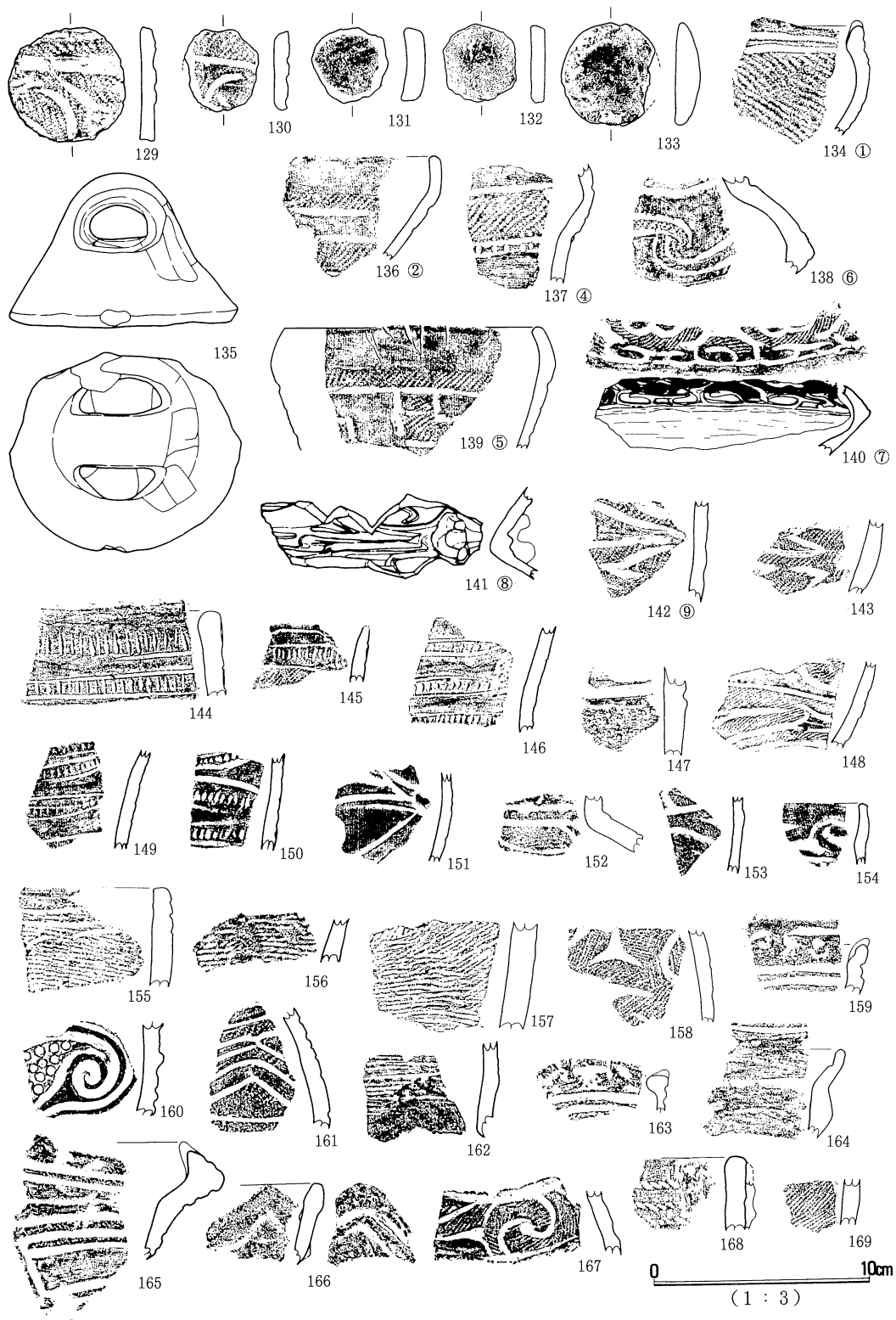
第73図 土製品



第74図 土製品



第75図 土製品



第76図 土製品及び土器

(7) 石 器

石器については第77図～第91図まで掲載され、一部の石製品については第214図上段に掲載している。石器を含むすべての石製品は、第4表菊間手永遺跡石器一覧に掲載している。また石材鉱物同定は、肉眼によって柴田 徹先生にご協力をお願いした。記して感謝申し上げる。剥片石器の実測図の網目トーンは風化した原礫面を示す。チャートの風化原礫面は一様に黄白色を呈し、表面から内部に浸透するように変色している。

第77図1～5は、茶褐色のチョコレート色をしているチャート製の石器である。同じチョコレート色をしている石核・剥片を第78図に掲載した。ほかに小剥片が8個存在している。これらは番号付きで回収されたか、23グリッドとして回収されていた。しかし23グリッドはまったく遺構が無く調査区域からも外れるため、23グリッドは73グリッドの誤記と判断した。73グリッドは第77図1の有茎平基石鏃が出土した043号住居跡がある区域である。チョコレート色チャートは記載した資料のみ出土しており、外見材質等同一母岩の可能性が極めて高いが、残念ながら接合資料はなく作業上の仮説である。チャート製のサイコロ状の石核は昭和58年度調査時に2点、昭和47年度調査時に27点と計29点出土している。そのうちチョコレート色した石核は1点、第21図055号住居脇の055-2から出土したと考えられる石核は、44グリッド出土の15点となる。サイコロ状の石核がまとまって出土した例は、埼玉県石神貝塚にある(82)。そこでは貝層下のピット内からチャート製の石核が数10点検出されている。

サイコロ状石核はチャートの岩脈原石が崩壊し、平行節理面から分離した大型板状原礫がさらに破碎された部分の板状礫の節理面において風化したものが、石核の素材であると考えられる。その板状原礫を適当な大きさ、つまり節理と節理間の長さにはほぼ等しく分割してサイコロ状にしたのが石核となるのであろう。そのため製作される石器は大きさが石核に制限されることになるが、当遺跡においては最大長軸50mm、平均長軸36.1mmの石核であれば、通常の剥片石器は製作可能であると思われる。当遺跡出土石器の最大軸長は、有茎石鏃36mm、石鏃は40mmである。第77図1と2については完成品と思われるが、2と4については風化節理面が残存しているためと形態が定まっていないことなどから未完成品と考えられる。風化節理面が残る面を背面とすると、これらの石器は節理面からほぼ平行に石核から剥離された素材である。第78図は同一母岩と考えられる石核と剥片であるが、剥片は打面部に風化節理面を有している。これらは風化節理面からほぼ直角に剥離されたものである。石核の底面では表面の風化節理面と平行な大きく剥離された裏面があるため、この部分から2と4の素材がとられた可能性がある。

第77図6～11は8の珪質頁岩を除きすべてチャート製であり、外見材質的には当遺跡出土のサイコロ状石核を素材にして製作されたと考えられる。青灰色のチャートの風化面は薄茶色となり、10と11には風化面が一部基部には残存している。

第79図は19・22・23を除き、黒曜石製である。以下▲は打点を示している。20は小形石鏃の未完成品であり、21は黒曜石であるが節理面が顕著である。22は先端基部共に欠損しており、大きさから類推すると木葉形の槍先形の尖頭器になる可能性がある。チャート製の23は楔形状の剥片である。25は凹基無茎の石鏃の再生途上品と考えられる。26・27は形状形態から先土器時代の使用剥片と小型のナイフ形石器と思われる。

第80図は石核とその石核から剥離されたと思われる剥片である。28～30・32は昭和58年度時に出土しているが、包含層にあって帰属は不詳である。そして33・35・37と第80図39・41・43は、44グリッド出土となり石器の集中地点にあったものと推測される。そのためか形状が整っており、立方体に近いサイコロ状石核となっている。31・32・38は角形食パンからスライスするように、板状の剥片を剥離している。28・29はかなり小型であるが34の石核からランダムに剥ぎとった剥片であるとすれば形状が一致する。

第81図45・46を除き、サイコロ状石核の残核39・41～43と40は目的剥片と考えられる。44は削器のサイドスクレーパー状の形態と背面に自然節理面を有することから石器であろう。45はチャート製剥片であるが石材がサイコロ状の石核と異なる。46は大型の頁岩製剥片である、刃部は使用されて細かく刃こぼれしている。頁岩については東北地方からの搬入と思われる。

石器については西田道世氏が「石器報告の原則」(83)として明確に西広貝塚の報告に述べられているが、本報告では表現方法等時間的に準じることができなかった。当遺跡と形状が似ている西広貝塚のサイコロ状石核については、時期的には縄文晩期中葉を周辺土器時期から推定している。剥片石器の組成については数が少ないが石鏃・石錐等似ている。

縄文時代の剥片石器については、田中英司氏の秀逸な論考(84)があり、石核・剥片素材・石器製作の関係が明らかになっている。それらの原資料は埼玉県風早遺跡(85)出土遺物であり、縄文時代中期後半の時期と考えられるが、縄文時代石器製作技術は同一と思われる。報文中の「剥片と石鏃の計測表」は実によく合致している。サイコロ状の石核は縄文中期には無く、今後の資料増加を期待するが、縄文時代後期以降に多く検出されそうである。田中氏は製作技術用具についてまで論じられている。ソフトハンマーやハードハンマー(石製パンチ)等の加工用具については、今後の問題であるが貝塚遺跡等の調査事例を慎重に検討しなければならぬだろう。

(83) 西田道世「出土石器」『西広貝塚』1977.3 市原市教育委員会

(84) 田中英司「縄文時代における剥片石器の製作について」『埼玉考古第16号』1977.7 埼玉考古学会

(85) 田中英司「縄文時代の剥片石器製作」『風早遺跡』1979.4 庄和町教育委員会

第82図は石剣・石棒であるが、すべて欠損または欠損後転用されている。完形品は第43図の5、03号住居跡出土石剣のみである。断面形において正円形に近いものを石棒としているので51一点が石棒であろう。48は第20図043-2の043号住居跡から出土したと思われる。石剣の柄の部分のみであり他の部分は欠損している。「8」の字状の浮き彫りが表裏2段ありその間を一条の浮き彫りが周回する。赤彩が残っており全面に塗布されていただろう。8の字状の浮き彫りは変形工字文の一種の可能性がある。西広貝塚に類例がある。

50は石剣両端破損後、両面の断面アルファベットU字状の溝が数条入り砥石となっている。47・54は図面上上端部分は再調整加工があり明らかに再生転用されている。

菊間手永遺跡は石器について狩猟生産用具の石鏃も少ないが、同じく磨製石斧も少ない。伐採用として使用できるものは第83図55・57・62・63・64である。他加工用としては61と第84図66と第43図3・4及び、第214図2の小型磨製石斧である。土壌生産用具として56・58・59・60の打製石斧である。生産用具も刃部の再生のほか、原形状を失うほどの転用再生加工を受けているものがある。図上の黒三角▲は打点、黒丸●は摩耗痕、黒菱形◆は連続した敲打痕であり、矢印←→は痕跡の範囲を現わしている。

第84図68は軽石製の浮子と思われるが、基部が無く有孔部分が欠損している。69はタガネ状の平板な礫石器である。70は円版状の石製品であるが用途は不明である。71は穿孔と考えられる有孔石製品である、時期的確証はない。72は使用痕の有る剥片石器である。73・74は片岩製の石製円版であり03号住居跡の覆土から出土している。中心部分がやや薄くなって凹む形状になる。2点とも脆弱なため化学樹脂のパラロイドB72を含侵して固めた。76も同じく石製円版であるが、材質が砂岩であり出土地点も異なる。

第84図の75・79は敲石である硬砂岩製で両極端部が実によく叩かれ摩耗している。77・78は片岩質の蛇紋岩製と絹雲母片岩の石皿の転用敲石である。第85図はすべて敲石と凹石と磨石である。一点のみで兼用している資料も有り汎用石器である。第86図は88・94は台石となり、89・91はタガネ状のハンマーである。90・92・93・95は磨石兼用ハンマーであろうか。

第87図はすべて石皿片である。特に96・97と第88図の102は脚付きの石皿であることが、磨り減った脚の残存部分から明確に判断できる。脚付き石皿は東北地方によくみられる。第87・88図の石皿は凹石に転用され破片になっても使用されている。第88図の106は形状は石皿であるが、凹部が鉄のタガネによって加工されているようにもみえて時期は中世とした。第89図はすべて凹石であるが、109の礫を除き石皿からの転用である。第90図112は砥石である。113・115～117は石皿片である。114は側面敲打が顕著な敲石である。第121・122は磨石兼凹石であろう。118は五輪塔の水部分であり、120は茶臼の上部破片であるとともに中世である。119はトレンチ掘削時に検出された超大型の有溝砥石であるが時期は不明である。

第4表 菊間手永遺跡石器一覽

() 部分は、欠損部の計測値

No.	名 称	形 態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	時 期	挿図番号	備 考
1	石 鏃	有 茎 平 基	手永I-043号住居3	36	15	6	2.2	(チャコ) チャート	縄文時代晩期	77図-1	完形、同一母岩有
2	石 鏃	有 茎	手永I-4	(39)	(19)	9	6.3	(チャコ) チャート	縄 文 時 代	77-2	原礫面有
3	キ	リ	手永I-20G-2	(40)	(12)	(10)	3.8	(チャコ) チャート	"	77-3	完形、同一母岩有
4	石鏃、未製品	木 葉 形	手永I-73G-2	(28)	(18)	(6)	3.2	(チャコ) チャート	"	77-4	原礫面有、同一母岩有
5	キ	リ 小 型	手永I-73G-2	19	(9)	(3)	0.6	(チャコ) チャート	"	77-5	同一母岩有、完形
6	キ	リ	手永I-46G-1	28	6	6	1.0	チャート	"	77-6	完形
7	石 鏃	有 茎	手永I-11	(23)	12	4	(0.9)	チャート	"	77-7	基部欠損
8	キ	リ	手永I-10	35	(7)	(7)	2.0	頁岩 (珪質)	"	77-8	基部欠損
9	尖 頭 器	木 葉 形	手永I-17	35	15	9	4.1	チャート	"	77-9	未製品?
10	キ	リ	手永I-27	(25)	(12)	(6)	(1.9)	チャート	"	77-10	完形、原礫面有
11	キ	リ	手永I-15住-3	(23)	(12)	(7)	1.6	チャート	"	77-11	完形品、原礫面有
12	剥 片		手永I-73G-2	(26)	(17)	(5)	2.5	(チャコ) チャート	"	78-12	原礫面有、同一母岩有
13	石 核	サイコロ状	手永I-73G-2	(33)	(26)	(23)	25.2	(チャコ) チャート	"	78-13	原礫面有、同一母岩有
14	剥 片	横 剥	手永I-73G-2	(25)	(16)	(5)	2.1	(チャコ) チャート	"	78-14	同一母岩有
15	剥 片	横 剥	手永I-73G-2	(26)	(15)	(12)	5.2	(チャコ) チャート	"	78-15	同一母岩有
16	剥 片	縦 剥	手永I-73G-2	(41)	(18)	(12)	7.4	(チャコ) チャート	"	78-16	原礫面有、同一母岩有
17	剥 片	縦 剥	手永I-73G-2	(34)	(15)	(9)	4.9	(チャコ) チャート	"	78-17	"
18	剥 片	縦 剥	手永I-42	(34)	(21)	(6)	3.5	(チャコ) チャート	"	78-18	"
19	石 鏃	無 茎 凹 基	手永I-14G-1	(21)	(20)	(3)	1.0	黒 曜 石	"	79-19	完形
20	石鏃未製品	無 茎 凹 基	手永I-23	(16)	(13.5)	(6)	1.3	黒 曜 石	"	79-20	先端部欠損
21	石 核	サイコロ状	手永I-27	(29)	(27)	22	23.6	黒 曜 石	"	79-21	節理面有
22	尖 頭 器	木葉形部分	セ11-O23.33	19	13	5	1.6	チャート	"	79-22	先端基部面欠損
23	搔 器	台 形 状	手永I-15G-14	(27)	(27)	(8)	8.2	チャート	"	79-23	節理面有、一次剥片
24	石 鏃	無 茎 凹 基	手永I-19号住	21	17	(3)	0.8	頁 岩	"	79-24	完形品
25	未 製 石 鏃	無 茎 凹 基	手永I-27	(29.5)	23.5	5	(3.2)	黒 曜 石	"	79-25	先端部欠損、再生?
26	剥 片	縦長剥片	手永I-27	(51)	(24)	(12)	10.6	黒 曜 石	"	79-26	原礫面有
27	ナイフ型石器	横長剥片	手永I-22	(27)	(14)	(7)	2.5	黒 曜 石	先土器時代	79-27	完形
28	剥 片		セ11-10-1	22	20	4	3.0	チャート	縄 文 時 代	80-28	サイコロ状石核剥片、石礫面有
29	剥 片	縦長剥片	セ11-O17-1	23	17	5	1.5	チャート	"	80-29	原礫面有
30	石 核	サイコロ状	セ11-N27-25-4	42	36	36	110.1	チャート	"	80-30	"

No.	名 称	形 態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	時 文 時 代	挿図番号	備 考
31	剥 片	横長剥片	手永I-10	(29)	(28)	(8)	10.3	チャート	縄 文 時 代	80-31	サイロ状、石核、剥片、原礫面有
32	使用剥片	横長剥片	セ11-O23-ケ25	35	32	9	9.4	チャート	"	80-32	原礫面有、刃部、刃こぼれ
33	石 核	サイコロ状	手永I-44G-2	(35)	(28)	(23)	(44.3)	チャート	"	80-33	" 未作出
34	石 核	打面多数	手永I-N04-1	(32)	(21)	(25)	(18.1)	チャート	"	80-34	残核?
35	石 核	サイコロ状	手永I-44G-3	(42)	(25)	(18)	(34.2)	チャート	"	80-35	原礫面有、未作出
36	石 核	サイコロ状	手永I-27	(38)	(32)	(25)	(36.0)	チャート	"	80-36	原礫面有
37	石 核	サイコロ状	手永I-44G-3	(33)	(29)	(22)	(33.1)	チャート	"	80-37	" 作出途上
38	剥 片	横長剥片	手永I-	(27)	(20)	(9)	(7.8)	チャート	"	80-38	原礫面有
39	石 核	サイコロ状剥片	手永I-42G-2	(28)	(27)	(28)	(32.2)	チャート	"	81-39	" 作出途中
40	剥 片	横長剥片	セ11-61	35	30	12	19.8	チャート	"	81-40	原礫面有
41	石 核	サイコロ状	手永I-44G-1	(37)	(35)	(23)	(36.9)	チャート	"	81-41	" 未作出
42	石 核	サイコロ状	手永I-表-29	(50)	(15)	(14)	(20.0)	チャート	"	81-42	" 残核?
43	石 核	サイコロ状	手永I-44G-1	(47)	(28)	(13)	(17.7)	チャート	"	81-43	" "
44	石 核	右側縁調整	手永I-8G-4	(48)	(36)	(13)	(33.6)	チャート	"	81-44	" "
45	使用剥片	横長剥片	手永I-27	(41)	(35)	(12)	16.8	チャート	"	81-45	打面調整有
46	剥 片	縦長剥片	手永-	105	82	14	115.3	珪 質 頁 岩	"	81-46	産地、東北大型
47	石 剣 片	断面長楕円	手永-73G表 S-3	(86)	37	23	130.2	緑 泥 片 岩	"	82-47	両端部欠損
48	赤彩石剣の柄	浮 彫 有	手永-73G表 S-3 手永-73G表 S-4	(66)	(30.5)	(19)	(63.5)	頁 岩	"	82-48	刃部欠損 ⑩
49	石剣の柄?		手永-S-1	(108.5)	(34)	(14)	(61.7)	緑 泥 片 岩	"	82-49	被熱赤化、半割
50	石 剣 片	有溝砥石転用	手永-S-1	(65)	39	18	79.5	緑 泥 片 岩	"	82-50	両端部欠損
51	石 棒 片	断面円形	手永-44G-2	81	27	28	114.6	絹雲母片岩	"	82-51	"
52	石 棒 片		手永I-6G-19	(51)	(41)	(15)	45.3	緑 泥 片 岩	"	82-52	
53	石 剣 柄	断面長楕円	手永I-65G表 S-5	(121)	39	19	140.7	緑 泥 片 岩	"	82-53	両端部欠損
54	石剣先端部	断面長楕円	手永I-H30 S-2	(115)	34	16	(108.1)	緑 泥 片 岩	"	82-54	敲石転用、端部欠損
55	打製石 斧	短冊形未製品	手永-7G混貝2-1	(135)	(45)	(28)	(161.0)	ホルンフェルス	"	83-55	原礫面有、未製品の可能性大
56	打製石 斧	分 銅 形	手永-15	(190)	(100)	25	(570.0)	絹雲母片岩	"	83-56	刃部一部欠損
57	磨製石 斧	両刃、未製品	手永-6G-18	(130)	(48)	(31)	(265.0)	ホルンフェルス	"	83-57	磨痕部、打調整有
58	打製石斧(転用砥)	分 銅 形 ?	手永-大溝1	(113)	(70)	27	(257.0)	緑 泥 片 岩	"	83-58	転用後、欠損
59	打製石 斧	分 銅 形	セ11-O24 カ列	98	46	25	188.3	ホルンフェルス	"	83-59	(多摩川産?)
60	打製石 斧	短 冊 形	手永-59	(74)	57	23	(150.0)	砂 岩	"	83-60	基部欠損
61	磨製石 斧	再生途中(両刃)	セ11-O23. ケ	(56)	40	11	38.6	ホルンフェルス	"	83-61	(多摩川産?)
62	磨製石 斧	再生途中(両刃)	セ11-O25-21	63	45	22	88.1	蛇 紋 岩	"	83-62	基部欠損

No.	名称	形態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	縄文時代	挿図番号	備考
63	磨製石斧	基部のみ	手永-42	(44)	(32)	24	(44.3)	砂岩	"	83-63	刃部欠損
64	磨製石斧	基部のみ	手永-4G-11混貝3	(64)	(35)	20	(103.3)	ホルンフェルス	"	83-64	(多摩川産?)
65	敲石	基部のみ	手永-トレ48	(47)	(35)	25	(50.6)	流紋岩	"	83-65	頭頂部打痕多数
66	磨製石斧	偏平両刃	手永-56G.表37	(56)	33	9	(30.2)	蛇紋岩	"	83-66	刃部欠損
67	くさび形	偏平両刃	手永-トレ25	(60)	32	9	(24.4)	ホルンフェルス	"	84-67	被熱
68	浮子	無孔	セ11-024-1	45	44	15	6.4	軽石	"	84-68	(三宅島産?)
69	敲石	偏平細長	手永-5G-17	(85)	30	12	54.9	角閃石岩	"	84図-69	完形、頭頂部打痕なし
70	石製品	円筒台	手永-13	45	45	(25)	85.8	緑色凝灰岩	"	84-70	原礫面有、(丹沢産?)
71	有孔石製品	一カ所穿孔有	手永-1	(35)	(33)	(7)	(16.0)	緑泥片岩	不明	84-71	半欠損
72	剥片	横長剥片	セ11-023.コ30	56	30	7	11.8	流紋岩	縄文時代	84-72	使用剥片
73	石製円版	偏平円形	手永-03号柱居跡	(54)	(47)	(5)	(18.5)	砂岩(片状)	"	84-73	2分割
74	石製円版	偏平円形	手永-03号柱居跡	(42)	(40)	(4)	(11.8)	砂岩(片状)	"	84-74	"
75	敲石	断面楕円	手永-45G (71G-6)	(77)	(61)	42	(335.0)	砂岩	"	84-75	被熱赤化、摩耗
76	円版	偏平円形	セ11-022-オ-10	63	60	8	43.7	砂岩	"	84-76	1/3欠損
77	石皿	両面磨石	手永-43G-1	96	56	34	202.7	蛇紋岩	"	84-77	転用敲石、端部欠損
78	凹石	石板状	手永-78	96	46	26	162.2	絹雲母片岩	"	84-78	表裏に凹有
79	敲石	断面楕円	セ11-59-2	79	62	38	267.0	砂岩	"	84-79	両端部磨減
80	磨石	凹有	手永-9号住-1	105	74	39	450.0	砂岩	"	85-80	(房総産?)
81	磨石	凹有	手永-45G-12	92	72	36	(405.0)	安山岩	"	85-81	1/3欠損
82	敲石	側縁部敲打	手永-45G-12	90	70	31	335.0	安山岩	"	85-82	
83	敲石	石偏平原礫	手永-9G-きご-1	97	82	28	340.0	砂岩	"	85-83	被熱
84	敲石	石一面凹有	手永-20住-3	100	(76)	66	690.0	石英斑岩	"	85-84	ぶ厚
85	磨石	石凹有	手永-1G混貝57	(75)	(70)	40	(380.0)	緑泥片岩	"	85-85	被熱
86	磨石	側縁部敲打	手永-5G黒土19-7	130	86	55	1080.0	安山岩	"	85-86	アケ付き被熱
87	敲石	石両面凹有	手永-45G-12	92	(78)	39	(485.0)	安山岩	"	85-87	1/10欠損
88	台	石頂部敲打痕	手永-1G-8	150	66	64	840.0	砂岩	"	86-88	被熱
89	敲石	石下端敲打痕	手永-44G-1	127	67	36	450.0	石英斑岩	"	86-89	側縁部アケ付き
90	敲石	石上端敲打痕	手永-1-22住-1	96	71	45	440.0	砂岩	"	86-90	
91	敲石	石上下端敲打痕	手永-1G-9.概土5	170	58	35	605.0	安山岩	"	86-91	
92	磨石	石表裏凹有	手永-3G混貝2	(52)	68	33	(159.3)	安山岩(多孔質)	"	86-92	被熱、1/2欠損
93	磨石	石凹有	手永-トレ-58	(76)	79	37	(405.0)	石英斑岩	"	86-93	1/2欠損
94	台	石頂部敲打	手永-1-24H-1	(106)	(67)	66	(670.0)	安山岩	"	86-94	

No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石	材	時	期	挿図番号	備	考
95	敲	石	凹	有	手永I-30住-1	79	62	31	250.0	砂	岩	縄	文	86-95	被熱、摩耗大	
96	四脚	石皿	有脚	凹	手永-38G混貝3	(130)	(88)	(57)	(935.0)	安山岩(多孔質)				87-96	3/4欠損、摩耗	
97	四脚	石皿	有脚	凹	手永-1Cローム	(113)	(63)	(70)	(448.0)	安山岩(多孔質)				87-97	5/6欠損	
98	石	皿	凹	有	手永-9H-1	(155)	(97)	61	(960.0)	安山岩(摩擦大)				87-98	2/3欠損、被熱	
99	石	皿	凹	有	手永-1G 混貝2	(96)	(78)	(36)	(392.0)	安山岩	岩			87-99	砥石転用	
100	石	皿	凹	有	手永-1G 焼土7-4	(160)	(96)	(49)	(775.0)	安山岩(多孔質)				87-100	3/4欠損、被熱	
101	石	皿	凹	有	手永-15G-1	(134)	(95)	54	(769.0)	安山岩(摩擦大)				87-101	片面アク付き	
102	有脚	石皿	凹	有	手永-9G-2	(145)	(122)	67	(780.0)	安山岩(摩擦大)				88-102	5/6欠損	
103	石	皿	凹	有	手永-15	(103)	(92)	50	(570.0)	安山岩(多孔質)				88-103	3/4欠損	
104	石	皿	凹	有	手永-溝4	(102)	(101)	65	(740.0)	安山岩(多孔質)				88-104	5/6欠損	
105	石	皿	凹	有	手永-4H-14	(137)	(127)	53	(1305.0)	砂	岩			88-105	被熱3/4欠損	
106	石	皿	?	有	手永I-16	(195)	(82)	(90)	(2500.0)	安山岩	岩	中	世	88-106	石製品の可能性大、1/2欠損	
107	台	石	貼状面	凹	手永I-6-1	(157)	(109)	(85)	(2800.0)	77フライト(珪端岩)		縄	文	89-107		
108	砥	石	板	状	手永I-表探24	(95)	(89)	(34)	(425.0)	砂	岩			89-108		
109	凹	石	凹	多	手永I-48G-1	163	(129)	75	(1750.0)	緑色凝灰岩				89-109	(丹沢産?)	
110	石	皿	裏面	凹	手永I-4G 混貝4	(103)	(87)	(51)	(745.0)	安山岩(多孔質)				89-110	5/6欠損	
111	石	皿	両面	凹	手永I-18	(143)	(88)	(62)	(910.0)	安山岩(摩擦大)				89-111	4/5欠損	
112	砥	石	板	状	セ11-表探	(72)	(39)	27	102.1	緑色凝灰岩		中	世	90-112	(鋸山産?) 3/4欠損	
113	石	皿	板	凹	セ11-42-3	(99)	(66)	27	285.0	緑泥片	岩	縄	文	90-113	4/5欠損	
114	敲	石	両面	凹	セ11-40-6	103	85	40	580.0	砂	岩			90-114	側縁摩耗大、完形	
115	石	皿	裏面	凹	セ11-O23-オ-15	(92)	(82)	52	445.0	安山岩(多孔質)				90-115	5/6欠損	
116	石	皿	両面	凹	セ11-O26-5	(122)	(110)	53	840.0	安山岩(多孔質)				90-116	2/3欠損	
117	石	皿	碗	状	セ11-60-3	(180)	(63)	62	718.0	安山岩(多孔質)				90-117	(利根川産、鬼怒川産) 3/4欠損	
118	五輪塔(水)		上面、下面加工あり		セ11-61地下式土坑	220	220	140	8900.0	安山岩(摩擦大)		中	世	91-118	完形	
119	大型有溝砥石		板	状	手永-32-15a	515	175	45	5650.0	砂	岩	?		91-119	2分割は完形(多刺産?) 手永-15と接合	
120	茶臼下部		把手孔	作	手永-19	(152)	(81)	(117)	(2200.0)	安山岩	岩	中	世	91-120	被熱3/4欠損	
121	磨	石	両面	凹	手永I-5G 混貝2-4	60	53	40	172.3	安山岩(多孔質)				91-121	完形全面磨耗	
122	磨	石	両面	凹	手永I-9号住-1	(54)	(53)	28	(94.5)	安山岩(多孔質)				91-122	1/2欠損、全面摩耗	
123	小型磨製石斧		擦切	定	手永-03号住居跡	38	26	10	16.5	蛇紋	岩	縄	文	43-3	完形	
124	小型磨製石斧		擦切	定	手永-03号住居跡	34	18	8	9.0	蛇紋	岩			43-4	完形、精緻	
125	石	劍	握りに線状沈線		手永-1 03号住	423	46	26	950.0	緑泥片	岩			43-5	完形、柄基部、頂柄打痕	
126	勾	玉			手永-4T(J?)	29	15	7	6.9	ひすい		縄	文	214-1	完形、片側穿孔	

No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石	材	時	期	挿図番号	備	考
127	小型石斧	擦切定角	剣	形	手永-3G-6	(31)	14	7	5.1	蛇紋岩	縄文時代	214-2	刃部欠損			
128	石製模造品	剣	形		セ11-M12-3	29	16	4	2.9	頁岩	古墳時代	214-4	3／4欠損			
129	勾玉				手永-3号溝フク土	31	11	10	8.4	めのう	〃	214-6	完形			
130	磨製石斧	片刃石斧？			雪ノ台 手永-34G-18住	(39)	35	25	(59.9)	斑靨岩	弥生時代中期	214-7	基部のみ			
131	磨製石斧	両刃			セ11-O22-2	(66)	44	39	142.2	閃緑岩	〃	214-8	基部のみ			
132	磨製石斧	両刃			手永-29H-1	56	(57)	31	(133.6)	閃緑岩	縄文時代	214-9	被熱、敲石に転用			
133	石剣	断面楕円形			セ11-K12-1	(60)	32	(8)	23.5	砂岩	〃	なし	縦割両端部なし			
134	剥片	石斧状			セ11-O25-4	55	25	9	15.9	ホルンフェルス	〃	〃	刃部作出？			
135	敲石	扁平丸礫			セ11-O25-オ、カ-16	93	53	17	148.8	砂岩	〃	〃	両端部敲打痕、一部欠損			
136	敲石	石丸			セ11-O22-2	86	54	33	229.3	砂岩	〃	〃	両端部敲打痕完形			
137	敲石	石丸			セ11-K-1	72	44	34	159.8	アフライト(斑花崗岩)	〃	〃	両端部敲打痕、完形			
138	敲石	石扁平丸礫			セ11-O24-ウ、エ	82	(40)	(17)	61.1	砂岩	〃	〃	縦割1／2分割			
139	敲石	石円礫			セ11-60-5	(86)	41	39	221.7	砂岩	〃	〃	被熱、完形			
140	敲石	石扁平丸礫			セ11-O23-8	88	62	18	161.3	砂岩	〃	〃	一側縁敲打顕著			
141	敲石	石丸			セ11-5-1	77	54	32	187.7	安山岩	〃	〃	被熱、完形			
142	敲石	石丸			セ11-O27-1	(52)	75	45	280.0	安山岩	〃	〃	側縁、敲打1／2欠損			
143	敲石	石丸礫	角作出		セ11-30-8	(64)	60	35	169.2	チャート	〃	〃	被熱、完形			
144	台石	石丸礫	半割		セ11-N27-20-4	(51)	76	50	280.5	砂岩	〃	〃	平坦作出			
145	敲石	石丸礫	側縁剥離		セ11-O22-2	64	(54)	43	206.7	石英斑岩	〃	〃	被熱、敲打痕顕著			
146	敲石	石丸			セ11-O23-キ-20	(50)	69	42	179.0	石英斑岩	〃	〃	1／2欠損			
147	敲石	石半割			セ11-i10-3	(78)	52	47	305.0	安山岩	〃	〃	両端部、敲打痕			
148	台石	石立方体			セ11-O23-5	76	(39)	47	200.4	頁岩	〃	〃	四方敲打痕			
149	台石	石扁平礫			セ11-O23-2	103	69	25	250.0	緑泥片岩	〃	〃	石皿転用			
150	磨石	石不整形			セ11-63-1	(61)	(50)	(41)	161.0	砂岩	〃	〃	敲打転用			
151	磨石	石不整形			セ11-29	65	(67)	(47)	268.0	砂岩	〃	〃	二面擦痕有、転用？			
152	砥石	石板状			セ11-O25-1	(94)	(77)	(18)	209.8	砂岩	〃	〃	敲石転用			
153	砥石	石偏平板状			セ11-O23-8	90	41	10	76.3	絹雲母片岩	中世？	〃	(長瀨産？)			
154	石皿	片側縁			セ11-O23-ケ-26	(104)	(28)	(45)	124.4	安山岩(多孔質)	縄文時代	〃	1／10以上欠損			
155	石皿	石凹有、片面擦			セ11-O24-2	(98)	(65)	45	355.0	安山岩	〃	〃	7／8欠損、摩擦大			
156	台石	石板状平坦部敲打痕			セ11-O23-カ-19	(85)	(71)	31	286.0	砂岩	〃	〃	5／6欠損			
157	磨石	石			セ11-5-2	(91)	(54)	46	223.6	緑泥片岩(斑花崗岩)	〃	〃	3／4欠損			
158	片岩	石板状			セ11-O23-2	(111)	(60)	10	104.7	緑泥片岩	〃	〃	被熱			

No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石	材	時	期	挿図番号	備	考
159	片	岩	片	板	セ11-J11-3	(68)	(40)	8	35.6	緑泥片岩	緑泥片岩	縄文時代	なし			
160	片	石	片	板	セ11-O27-2	(41)	(35)	14	33.2	緑泥片岩	緑泥片岩	"	"			
161	片	石	片	板	セ11-表探	(38)	(35)	7	19.0	緑泥片岩	緑泥片岩	"	"			
162	石	棒	片	棒	セ11-O24-ウ.エ	(62)	20	13	30.0	石墨片岩	石墨片岩	"	"		縦割半割	
163	片	石	片	板	セ11-O22-4-4	(35)	(26)	7	13.4	緑泥片岩	緑泥片岩	"	"			
164	片	岩	片	板	セ11-O25-4-7	(43)	(30)	9	14.7	緑泥片岩(細雲母)	緑泥片岩	"	"			
165	片	石	片	板	セ11-5-2	(20)	(18)	6	3.2	緑泥片岩	緑泥片岩	"	"			
166	片	石	片	板	セ11-表探	(40)	(26)	7	12.5	絹雲母片岩	絹雲母片岩	"	"		被熱	
167	軽	石	石	丸	セ11-7号-1	74	53	49	38.2	軽	石	"	"		完形(三宅島産?)	
168	軽	石	片		セ11-O22-13-カ	42	28	16	3.6	軽	石	"	"		(三宅島産?)	
169	軽	石	片		セ11-O25-7	49	24	19	8.4	軽	石	"	"		(三宅島産?)	
170	軽	石	片		セ11-O25-ア-2	53	33	28	13.2	軽	石	"	"		(三宅島産?)	
171	軽	石	丸	礫	セ11-30-2	59	44	46	41.3	軽	石	"	"		1/2欠損(三宅島?)	
172	砥	石	板	状	セ11-O22-ウ-5	52	26	18	41.4	砂	岩	"	"		1/2欠損	
173	黒	曜	石	原	セ11-N26-21	46	19	13	15.6	黒曜	石	"	"		一部剥離	
174	剥	片	使用	剥片	セ11-17-1	35	21	10	6.9	黒曜	石	旧石器?	"		風化、白化、旧石器?	
175	石	核	打	面	セ11-41-4	21	10	11	3.6	黒曜	石	縄文時代	"		残核	
176	剥	片	三角形	切断剥片	セ11-39-8	29	8	8	1.4	黒曜	石	"	"			
177	剥	片	縦長	フレーク	セ11-5-1	20	11	6	1.4	黒曜	石	"	"			
178	剥	片	縦長	フレーク	セ11-8-1	21	11	3	0.7	黒曜	石	"	"		使用痕有	
179	タ	ー	ル	不	セ11-59-1	27	20	15	8.5	?		"	"		砂礫混入、タールの可能性大	
180	め	の	う	原	セ11-表探	28	21	12	5.7	めのう		"	"		半割	
181	め	の	う	原	セ11-i列-1	37	26	22	27.4	めのう		"	"			
182	片	岩片(2ヶ)			セ11-O25-21	54	29	3	10.0	緑泥片岩	緑泥片岩	"	"			
183	石	製品	つまみ	状	セ11-39-7	(23)	20	11	8.5	砂	岩	"	"		折部分不明	
184	粘	板	岩	平	セ11-O23-7-23	33	31	3	4.9	粘板	岩	"	"			
185	石	核	方	形	セ11-N21-1	33	30	11	23.1	チャート	チャート	"	"		残核	
186	剥	片	機長剥片	原礫面有	セ11-O23-2	39	30	15	16.5	チャート	チャート	"	"			
187	剥	片	機長剥片	原礫面有	セ11-40-2	34	22	6	5.2	チャート	チャート	"	"		切断剥片	
188	剥	片	機長剥片	原礫面有	セ11-N21-23-7	21	16	4	1.1	チャート	チャート	"	"			
189	剥	片	縦長	剥片	セ11-L12-2	16	9	2	0.3	チャート	チャート	"	"			
190	石	核	サイコロ	状	セ11-29	42	30	21	49.3	チャート	チャート	"	"		原礫面なし	

No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石	材	時	期	挿図番号	備	考
191	石	核	自然	面有	セ11-L12-2	24	16	12	8.1	チャ	ー	ト	縄	文	時代	残核
192	石	核	自然	面有	セ11-N12-4	19	15	14	6.4	チャ	ー	ト	縄	文	時代	残核
193	石	核	不整形、自然面有		セ11-O13-20-2	35	16	15	8.3	チャ	ー	ト	縄	文	時代	残核
194	石	核	サイコ状、自然面有		セ11-O26-9	22	19	13	7.9	チャ	ー	ト	縄	文	時代	残核、自然面二面
195	石	核	不整形		セ11-8-1	22	17	11	8.0	チャ	ー	ト	縄	文	時代	残核
196	剥	片	割	円礫	セ11-O25-0-カ-9	36	20	10	9.9	チャ	ー	ト	縄	文	時代	
197	剥	片	不整形		セ11-表探	19	12	7	2.2	チャ	ー	ト	縄	文	時代	調整切断
198	石	皿	片	面磨石	セ11-表探	104	79	38	395.0	石	英斑	岩	縄	文	時代	(荒川産?) 4/5欠損
199	剥	片	不整形		セ11-39-1	13	9	2	0.6	黒曜	石		縄	文	時代	切断
200	片	岩	片	不整形剥片	セ11-O25-21	52	19	2	3.6	緑泥片	岩		縄	文	時代	被熱
201	軽	石	丸	礫	セ11-N27-20-4	75	44	44	40.0	軽	石	?	縄	文	時代	
202	剥	片	横	剥、切断	手永-7	(23)	(16)	(4)	(1.3)	黒曜	石		縄	文	時代	不整形、ノッチ
203	剥	片	横	剥、切断	手永-73G-2	(25)	(9)	(5)	(1.4)	チャ	ー	ト	縄	文	時代	
204	剥	片	点	石屑	手永-73G				8.3	(チャコ)チャ	ー	ト	縄	文	時代	2点-原礫面有
205	剥	片	縦長スポール状		手永-73G-2	(28)	(7)	(3)	(0.7)	(チャコ)チャ	ー	ト	縄	文	時代	石核調整剥片
206	石	棒	丸	棒状	手永-73G-表	(80)	53	(21)	(95.9)	石	墨片	岩	縄	文	時代	縦割、端部摩耗
207	石	板	扁平板状側縁微切			(85)	62	12	(145.9)	頁	岩		縄	文	時代	中央部、砥石痕
208	石	皿	片	凹面	手永-1G-混貝1	(104)	(48)	(66)	(272.0)	安	山	岩	縄	文	時代	9/10欠損、アタ付、摩擦大
209	石	皿	片	凹面	手永-43G-1	(52)	(29)	(38)	(112.0)	安山岩(多孔隙)			縄	文	時代	皿面平坦、9/10欠損
210	石	皿	片	凹面	手永-6G-黒土	(57)	(48)	(58)	(220.0)	安	山	岩	縄	文	時代	被熱、9/10欠損
211	石	皿	片	面磨面	手永-59	(98)	(95)	(82)	(1705.0)	蛇	紋	岩	縄	文	時代	2/3欠損
212	焼	石	ブ	ロック状	手永-8G-5	(117)	(42)	34	(160.0)	砂岩(新第3紀)			平安時代以降			被熱(房総産?)
213	焼	石	ブ	ロック状	手永-15	(139)	(119)	67	(1090.0)	砂岩(新第3紀)			縄	文	時代	被熱(房総産?)
214	焼	石	ブ	ロック状	手永-2T-1	(138)	(101)	56	(580.0)	砂岩(新第3紀)			縄	文	時代	被熱(房総産?)
215	焼	石	ブ	ロック状	手永-2T-3	(129)	(89)	(53)	(590.0)	砂岩("			縄	文	時代	" (")
216	焼	石	ブ	ロック状	手永-トレ-21	(66)	(56)	(40)	(160.0)	砂岩("			縄	文	時代	" (")
217	焼	石	ブ	ロック状	手永-8H-1	(160)	(150)	(65)	(1495.0)	砂岩("			縄	文	時代	" (")
218	焼	石	ブ	ロック状	手永-2トレ-2	(132)	(108)	(81)	(1275.0)	礫岩("			縄	文	時代	" (")
219	石	皿	片		手永-13G-6	(53)	(42)	(43)	(100.0)	安山岩(多孔隙)			縄	文	時代	アタ付
220	焼	石	ブ	ロック状	手永-4G-16	(108)	(76)	(78)	(1195.0)	安	山	岩	縄	文	時代	被熱、割礫
221	焼	割	台	石状	手永-7G-12	(62)	(60)	(64)	(365.0)	砂	岩		縄	文	時代	被熱
222	砥	石	板	状	手永-4G-5	(85)	(75)	(25)	(170.0)	砂	岩		縄	文	時代	4/5欠損

No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石	材	文	時	期	挿図番号	備	考
223	砥	石	板	状	手永-29H-2	(89)	(83)	(21)	(240.0)	流紋岩(鈹化)	岩	縄	文	代	なし	1/2欠損	
224	焼	礫	両面擦面有		手永-4H-1	(58)	(47)	(31)	(160.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、凹側部割り落し	
225	敲	石	長円板	状	手永-1G-8	85	51	21	143.6	ホルンフェルス	岩	〃	〃	〃	〃	(多摩川産?)	
226	敲	石	両端敲打		手永-4G-20	92	39	29	(128.0)	流紋	岩	〃	〃	〃	〃	端部欠損	
227	敲	石	円礫	状	手永-42	106	66	49	410.0	砂	岩	〃	〃	〃	〃	被熱	
228	敲	石	円盤	状	手永-5G-22	86	83	36	400.0	砂	岩	〃	〃	〃	〃	アケ付	
229	敲	石	三角柱	状	手永-19G-2	151	52	46	530.0	石英斑	岩	〃	〃	〃	〃	一端部のみ敲打痕	
230	敲	石	円礫	状	手永-34H-1	112	86	54	(770.0)	石英斑	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、両端部敲打痕、一部欠損	
231	敲	石	偏平	礫	手永-30H-3	131	96	43	(780.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、一部調整	
232	敲	石	偏平	円礫	手永-30号-1	83	48	27	171.0	流紋	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、赤化一端部敲打	
233	敲	石	小型	円礫	手永-7G-14	(63)	36	26	(79.3)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	両端敲打、摩耗	
234	敲	石	偏平	円礫	手永-表探29	84	(62)	35	(260.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	敲打痕多数	
235	敲	石	円	礫	手永-78	73	44	33	151.2	砂	岩	〃	〃	〃	〃	両端敲打	
236	敲	石	小型	偏平	手永-6G-13	79	39	23	(92.2)	流紋	岩	〃	〃	〃	〃	四隅敲打	
237	敲	石	偏平	円礫	手永-32住-2	71	49	28	138.7	花崗	片	〃	〃	〃	〃	被熱、両端敲打	
238	敲	石	偏平	円礫	手永-45G近辺-1	(109)	56	37	(250.0)	頁	岩	〃	〃	〃	〃	両端敲打、1/3欠損	
239	敲	石?	小型	偏平	手永-45G(71G)-6	75	39	11	39.5	ホルンフェルス	岩	〃	〃	〃	〃	(多摩川産?)	
240	敲	石	小型	円礫	手永-22住-1	82	36	25	107.6	砂	岩	〃	〃	〃	〃	両端敲打弱	
241	台	石	円	礫	手永-1G-8	87	73	(51)	(445.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	側縁三条敲打痕	
242	敲	石	偏平	円礫	手永-5G-20	98	81	36	425.0	石英斑	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、側縁敲打	
243	敲	石	円	礫	手永-地下式土嚢3	(43)	68	53	(211.1)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	1/2欠損、端部敲打	
244	敲	石	円	礫	手永-32H-1	90	(66)	45	(395.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、端部敲打、1/3欠損	
245	敲	石	円	礫	手永-5G、黒土20-3	(70)	61	36	(222.6)	流紋	岩	〃	〃	〃	〃	(神津島産?)、端部摩耗端部欠	
246	台	石	敲打痕多数、半丸		手永-2G-6	89	(60)	68	(495.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	敲石転用	
247	敲	石	丸	礫	手永-34G-1	85	(67)	43	(355.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	端部摩耗顕著	
248	敲	石	丸	礫	手永-5G-25	73	68	44	(340.0)	砂	岩	〃	〃	〃	〃	端部摩耗顕著	
249	敲	石	丸	礫	手永-44	102	(74)	41	(460.0)	安山	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、端部摩耗顕著	
250	敲	石	丸	礫	手永-10H-1	(91)	(92)	46	(630.0)	石英斑	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、側縁摩耗	
251	敲	石	丸	礫	手永-93	123	71	43	490.0	石英斑	岩	〃	〃	〃	〃	側縁敲打完了形	
252	敲石(台石)	円		礫	手永-1G-8	(105)	72	36	(440.0)	安山	岩	〃	〃	〃	〃	両側縁摩耗、平坦部敲打	
253	台	石	円板	礫	手永-4T-5	89	88	41	475.0	石英片	岩	〃	〃	〃	〃	平坦部、両面敲打	
254	磨	石	隅丸角	礫	手永-38G-6	74	(52)	38	(212.3)	安山	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、1/2欠損、敲石転用	

No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	時期	挿図番号	備	考
255	敲	石	円	礫	手永-15G-8	78	62	34	255.0	石英斑岩	縄文時代	なし	被熱、完形敲打顯著	
256	磨	石	円	礫 凹有	手永-5G-18	118	77	50	765.0	安山岩	"	"	完形	
257	台	石	円	礫平坦部敲打	手永-溝5-2	101	(62)	43	(395.0)	安山岩	"	"	1/4 欠損	
258	磨	石	敲打痕	有	手永-No.5溝5	(74)	69	35	(220.6)	砂岩	"	"	1/3 欠損、平坦部敲打顯著	
259	磨	石	凹	有	手永-2G-6	73	61	46	255.0	安山岩	"	"	転用敲石、摩擦大	
260	磨	石	丸礫側面敲打		手永-5G黒土13-2	69	64	45	295.0	安山岩	"	"	完形、敲打痕顯著	
261	敲	石	丸礫端部敲打		手永-14	67	60	43	(222.3)	安山岩	"	"	被熱、端部欠損	
262	敲	石	凹面凹有、丸礫		手永-トレ-32	93	64	34	305.0	安山岩	"	"	完形、敲打顯著	
263	磨	石	凹面凹有		手永-4C-16	(54)	80	32	(260.0)	砂岩	"	"	被熱 1/2 欠損	
264	磨	石	円	礫	手永-45G-12	107	84	47	(620.0)	安山岩	"	"	一部欠損、側縁敲打	
265	磨	石	大型楕円形		手永-45G-10	(123)	138	41	(995.0)	閃緑岩	"	"	1/2 欠損、側縁敲打	
266	砥	石	扁平方	形	手永-5G-18	66	42	13	(55.9)	砂岩	"	"	二端部欠損	
267	砥	石	板状	状	手永-10	(56)	33	11	(35.3)	砂岩	"	"	一端部敲打痕、端部欠損	
268	砥	石	板状、断面三角		手永-大溝12	(58)	47	27	(72.9)	砂岩	"	"	被熱、両面擦り	
269	砥	石	板状	状	手永-45G (71C-6)	(45)	(34)	17	(43.9)	砂岩	"	"	被熱、両面擦り	
270	敲	石	扁平円	礫状	手永-6G黒土3	(84)	(65)	41	(270.0)	砂岩	"	"	四面敲打、1/2 欠損	
271	磨	石	円筒状凹有		手永-6G黒土層1	(67)	(38)	41	(180.0)	安山岩	"	"	1/2 欠損、摩擦大	
272	磨	石	円筒状	状	手永-8G黒土-1	84	66	42	355.0	石英斑岩	"	"	側縁部敲打	
273	磨	石	円筒状凹有		手永-38G-2	(54)	(47)	34	120.0	安山岩	"	"	摩擦大、1/3 欠損	
274	敲	石	長円	礫	手永-44G-6	(95)	(46)	31	165.0	石英斑岩	"	"	被熱、1/2 欠損	
275	敲	石	長円	礫	手永-38G-1黒土	(97)	(49)	36	240.0	流紋岩	"	"	両端部敲打痕	
276	敲	石	扁平	礫	手永-15G-11	81	64	30	265.0	安山岩	"	"	一端部敲打弱	
277	敲	石	丸	礫	手永-38G-9	85	63	43	375.0	斑礫岩	"	"	側縁敲打痕	
278	敲	石	扁平	礫	手永-4G-4	(97)	75	40	450.0	安山岩	"	"	被熱、端部欠損、敲打多数	
279	磨	石	扁平円	礫	手永-6G-11-6	100	(81)	30	(360.0)	閃緑岩	"	"	敲打痕多、一部欠損	
280	台	石	円	礫	手永Ⅱ-No.18-1	(126)	(58)	44	(540.0)	砂岩	"	"	被熱、二側縁敲打	
281	磨	石	円筒状	状	手永-表採-25	(63)	(58)	53	(86.3)	安山岩	"	"	被熱、摩擦大、3/4 欠損	
282	磨	石	方形板	状	手永-6G貝層下-2	(70)	67	40	(330.0)	細粒閃緑岩	"	"	摩擦大、1/2 欠損	
283	磨	石	円	礫	手永-大溝24	(78)	(37)	37	(140.0)	石英斑岩	"	"	(荒川産?) 被熱、き跡、2/3 欠損	
284	敲	石	円	礫	手永-5G黒土7-6	89	69	51	(450.0)	ホルンフェルス	"	"	(多摩川産?)	
285	敲	石	扁平	礫	手永-38G-43腹貝	(99)	(51)	32	(146.5)	凝灰岩	"	"	(丹沢産?) 端部、1/3 欠損	
286	敲	石	断面楕円棒状		手永-2G混貝2	(61)	45	28	(122.3)	砂岩	"	"	1/2 欠損、端部敲打	

No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石	材	時	期	挿図番号	備	考
287	磨	石	円	礫	手永-弥生大住3	(66)	37	25	(93.5)	石英斑岩	岩	縄	文	代	なし	被熱、3/4欠損
288	石	皿	割	礫	手永-6G-ローΔ8	(56)	(37)	(32)	(98.0)	安山岩	岩	"	"	"	"	端部割落し
289	石	皿	"	"	手永-6G-4黒土	(188)	(120)	(102)	(765.0)	砂	岩	"	"	"	"	分割(房総産?)
290	石	皿	凹	有	手永-15G-7	(132)	(122)	53	(870.0)	泥	岩	"	"	"	"	3/4欠損(房総産?)
291	石	皿	"	"	手永-7G-8	(86)	(85)	(63)	(270.0)	安山岩(多孔質)	岩	"	"	"	"	4/5欠損
292	石	皿	断面三角	形	手永-溝5-2	(93)	(93)	55	(495.0)	安山岩(多孔質)	岩	"	"	"	"	5/6欠損(富士山産?)
293	敲	石	偏平棒	状	手永-5G-23黒土8	(108)	(52)	35	(299.0)	頁岩	岩	"	"	"	"	端部敲打
294	砥	石	割	礫	手永-No.4-4	(103)	(52)	(49)	(275.0)	砂	岩	"	"	"	"	2/3欠損
295	磨	石	円	平	手永-12	(95)	(52)	(52)	(345.0)	砂	岩	"	"	"	"	1/2" (房総産?)
296	凹	石	偏	礫	手永-4G-2混貝	(67)	(67)	(30)	(110.0)	泥	岩	"	"	"	"	完形(")
297	敲	石	円	平	手永-表-25	(81)	(53)	(40)	(235.0)	砂	岩	"	"	"	"	被熱、端部欠損
298	台	石	偏	礫	手永-溝18-2	(83)	(49)	(28)	(120.6)	砂	岩	"	"	"	"	1/2欠損
299	敲	石	小型楕	円	手永-3号住-4	(69)	(27)	26	(62.8)	流紋岩	岩	"	"	"	"	完形
300	砥	石	偏平板	状	手永-トレ31	(52)	(43)	16	(38.3)	流紋岩(鈹化石)	岩	"	"	"	"	5/6欠損
301	多孔	石	転	石	手永-表-18	(39)	(34)	(28)	(28.0)	安山岩?	岩	"	"	"	"	"
302	綠色多孔	石	"	"	手永-トレ85	28	18	19	5.9	"	?	"	"	"	"	発泡体
303	軽	石	丸	礫	手永-44G	41	37	31	12.4	軽石	石	"	"	"	"	2/3欠損
304	"	"	"	"	手永-1G3混貝	55	49	42	27.7	"	"	"	"	"	"	1/2"
305	"	"	板	状	手永-6G-5	107	78	45	89.7	"	"	"	"	"	"	ほぼ完形がじり有
306	"	"	"	"	手永-9G-3	82	60	44	85.1	"	"	"	"	"	"	"
307	"	"	丸礫状擦痕	"	手永-3G混貝	94	85	45	65.6	"	"	"	"	"	"	1/5欠損がじり有
308	"	"	磨石	状	手永-トレ-77	82	79	53	75.5	"	"	"	"	"	"	ほぼ完形がじり有
309	"	"	板	状	手永-4G-64	58	57	21	18.9	"	"	"	"	"	"	両端部欠損
310	"	"	凹	有	手永-9号住-1	84	63	49	58.9	"	"	"	"	"	"	ほぼ完形がじり有
311	"	"	磨石	状	手永-38G-ローΔL5	95	69	47	84.3	"	"	"	"	"	"	1/3欠損がじり有
312	"	"	円盤	状	手永-30H-5	63	50	21	16.3	"	"	"	"	"	"	1/5欠損
313	"	"	角礫	状	手永-4H	74	52	60	27.7	"	"	"	"	"	"	1/5" がじり有
314	"	"	無孔浮子形	"	手永-5号住-3	70	44	23	18.9	"	"	"	"	"	"	完形
315	"	"	角礫	状	手永-表-10	45	43	30	10.7	"	"	"	"	"	"	4/5欠損
316	"	"	円礫	状	手永-弥生住-2	61	53	30	34.8	"	"	"	"	"	"	緻密、完形
317	"	"	不整形	"	手永-表-2	57	53	32	35.2	"	"	"	"	"	"	溝状穴多数
318	"	"	礫	状	手永-43	49	29	37	10.8	"	"	"	"	"	"	"

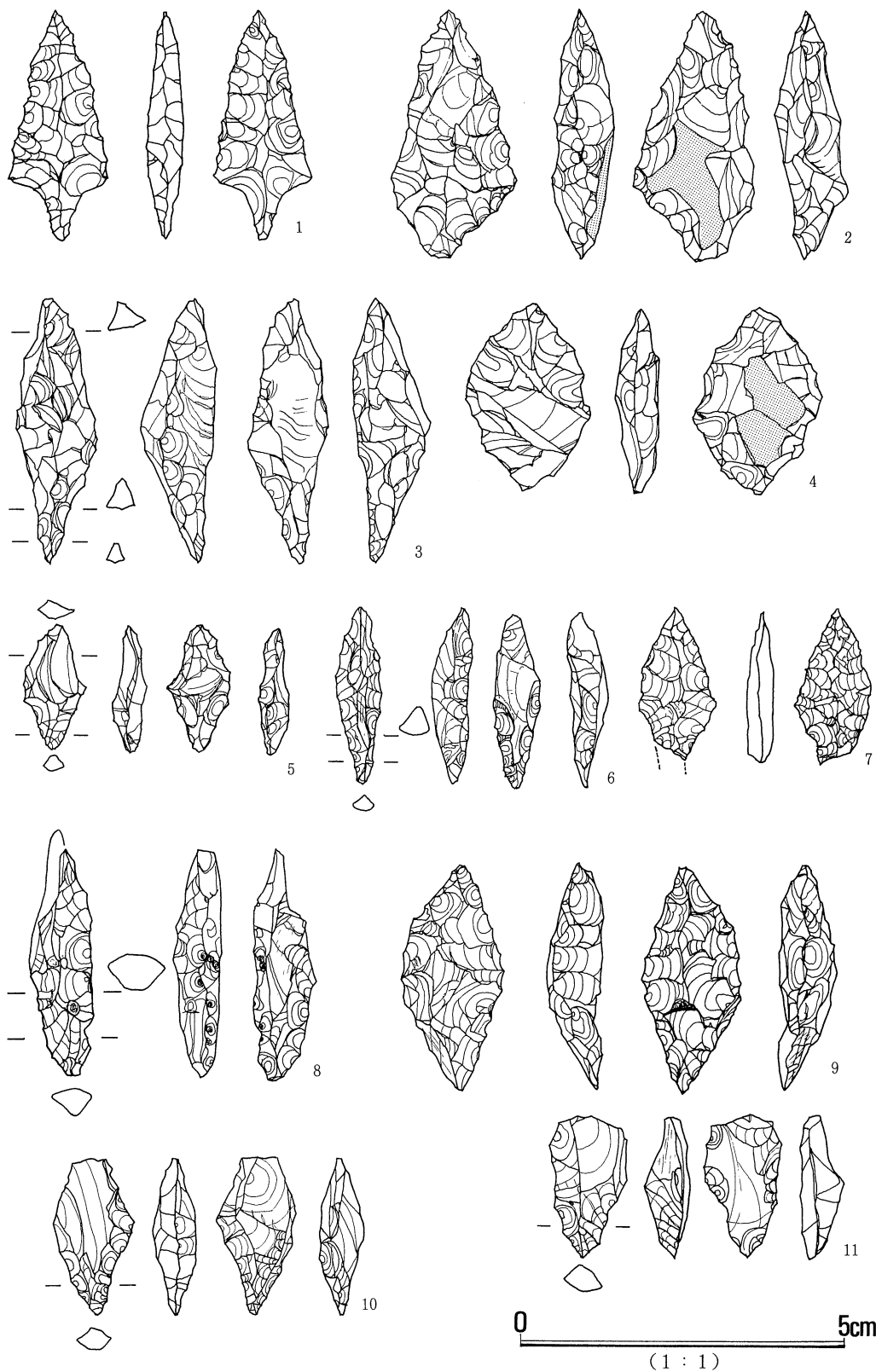
No.	名	称	形	態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石	材	時	期	挿図番号	備	考
319	軽	石	板	状	手永-33G	42	40	19	6.3	軽	石	縄	文	代	なし	半欠損
320	凝灰岩	？	円筒	形	手永-34H-1	43	30	17	7.3	緑色凝灰岩	岩	〃	〃	〃	〃	縦割、1/2欠損
321	石	棒	板	状	手永-38G-6	(47)	46	16	23.6	頁	岩	〃	〃	〃	〃	欠損
322	敲	石	偏平棒	状	手永-4Tローム	(92)	40	9	60.5	ホルンフェルス	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、縦割、端部欠損
323	〃	〃	偏平棒	状	手永-5G-15	(82)	39	21	110.2	砂	岩	〃	〃	〃	〃	両端縁1/2欠損
324	〃	〃	偏平棒	状	手永-2	121	49	32	180.3	砂岩(粗粒)	岩	〃	〃	〃	〃	端部摩耗
325	〃	〃	棒状小円	礫	手永-44G-6	(58)	22	25	47.0	砂岩(粗粒)	岩	〃	〃	〃	〃	(多摩川産?) 端部摩耗
326	剥	片	くさび	状	手永-6G-15	40	18	12	9.3	ホルンフェルス	岩	〃	〃	〃	〃	(筑波山産?) 完形
327	〃	〃	〃	〃	手永-6	(49)	(19)	(13)	16.0	〃	〃	〃	〃	〃	〃	() 端部欠損
328	砥	石	偏平板	状	手永-6G-19	(77)	(71)	(22)	219.4	砂	岩	〃	〃	〃	〃	(多摩川産?) 1/3欠損
329	〃	〃	偏平角板	状	手永-28住-2	(95)	41	20	131.5	流紋岩(鉍化石)	岩	〃	〃	〃	〃	被熱、転用元石皿?
330	石剣の柄	？	偏断面石剣	状	手永-2G-6	(65)	37	13	34.2	頁	岩	〃	〃	〃	〃	(新島産?)
331	砥	石	角棒状四面磨	有	手永-5号住五領	104	19	15	(39.4)	チャート	岩	古墳時代以後	縄文時代	〃	〃	一部欠損精緻
332	石	核	丸礫	原礫面有	手永-73G-2	(48)	(37)	(36)	(86.1)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	原石割
333	〃	〃	サイコロ状	原礫面有	手永-44G-2	(45)	(27)	(24)	(37.9)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	原礫面一面
334	〃	〃	〃	〃	手永-44G-6	(32)	(30)	(18)	(30.6)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
335	〃	〃	〃	〃	手永-44G-2	(33)	(26)	(23)	(33.6)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面、意図的方形
336	〃	〃	〃	〃	手永-44G-6	(39)	(32)	(24)	(43.2)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 一面
337	〃	〃	〃	〃	手永-44G-3	(40)	(26)	(20)	(39.1)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
338	〃	〃	〃	〃	〃	(42)	(28)	(19)	(42.4)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
339	〃	〃	〃	〃	手永-44G-6	(37)	(28)	(23)	(43.6)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 一面
340	〃	〃	〃	〃	手永-44G-2	(32)	(29)	(17)	(27.7)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
341	〃	〃	残核	核	手永-44G-6	(35)	(18)	(14)	(13.1)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	元サイコロ状、原礫面二面
342	〃	〃	サイコロ状	原礫面有	手永-15G-2	(39)	(27)	(27)	(32.5)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	原礫面二面
343	〃	〃	残核	核	手永-15	(41)	(28)	(13)	(20.8)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
344	〃	〃	サイコロ状	〃	手永-弥生1号-9	(28)	(27)	(16)	(20.4)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
345	〃	〃	円礫	礫	手永-6G-15	(29)	(23)	(19)	(13.1)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
346	〃	〃	サイコロ状	〃	手永-ト63	(28)	(27)	(17)	(24.0)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
347	〃	〃	残核	原礫面有	手永-43G-1	(34)	(24)	(14)	(15.3)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 一面
348	〃	〃	サイコロ状	〃	手永-15G-6	(31)	(21)	(23)	(28.6)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
349	〃	〃	〃	原礫面有	手永-6G-15	(25)	(23)	(18)	(19.2)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面
350	〃	〃	〃	〃	手永-6G混土層-1	(26)	(25)	(27)	(34.0)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 二面

No.	名 称	形 態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	時 期	挿図番号	備 考
351	石 核	残 核	手永-44G-6	(49)	(22)	(24)	(39.1)	チャート	縄 文 時 代	なし	原礫面 なし
352	"	丸礫原礫面有	手永-6G-14	(36)	(33)	(25)	(41.9)	"	"	"	サイコロ状意図的
353	"	板 状 礫	手永-北溝-13	(91)	(69)	(28)	(24.5)	"	"	"	未製品?
354	"	丸礫原礫面有	手永-15G-3	(48)	(39)	(33)	(94.7)	"	"	"	割礫?
355	円 礫	割 礫	手永-溝周辺	(86)	(55)	(42)	(36.5)	"	"	"	コア、石核、原礫
356	敲 石	両端部敲打三角柱	手永-11	69	42	40	(178.0)	"	"	"	完形
357	め の う 礫	円 礫	手永-6G-19	37	25	16	(22.7)	め の う	"	"	" 石材?
358	石 核	丸 礫	手永-30H-4	(51)	(40)	(32)	(116.2)	頁 岩	"	"	サイコロ調整
359	石 材	板 状	手永-80号-3	(46)	(36)	(22)	(70.7)	凝灰(黒曜石つき)	"	"	"
360	剥 片	横 長 剥 片	手永-50	(51)	(37)	(9)	(18.0)	ホルンフェルス	旧 石 器 ?	"	(多摩川産?)
361	"	板 状 三 角 形	手永-7G-13	(34)	(32)	(13)	(14.2)	チャート	縄 文 時 代	"	"
362	"	不 整 形	手永-27	(42)	(35)	(20)	(32.5)	ホルンフェルス	"	"	(多摩川産?) 未製品?
363	フ レ ー ク	縦 長 剥 片	手永-表13	(65)	(21)	(13)	(19.5)	頁岩(珪質)	旧 石 器 ?	"	"
364	石 棒	丸 棒 状 割 礫	手永-6G-13	(48)	(32)	(15)	(30.8)	蛇 紋 岩	縄 文 時 代	"	端部欠損縦割
365	" (石棒片)	板 状 縦 割	手永-34H-1	(44)	(30)	(9)	(18.0)	緑 泥 片 岩	"	"	被熱、小片
366	変 成 片 岩	板 状	手永-トレ49	(65)	(60)	(19)	(88.7)	片 麻 岩	"	"	"
367	"	"	"	(56)	(46)	(17)	(71.1)	"	"	"	"
368	"	"	"	(33)	(22)	(7)	(7.4)	"	"	"	"
369	"	"	手永-No4-1	(65)	(48)	(18)	(75.9)	絹雲母片岩	"	"	"
370	"	"	手永-34H	(59)	(28)	(10)	(33.2)	緑 泥 片 岩	"	"	被熱
371	石 製 品	偏 平 板 状	手永-42H-2	(55)	(16)	(5)	(5.4)	頁 岩	"	"	側縁調整、両端部欠
372	"	板 状 三 角 形	手永-20住-4	(23)	(12)	(20)	(1.1)	"	"	"	三角形
373	変 成 片 岩	板 状	手永-42	(53)	(37)	(8)	(27.7)	緑 泥 片 岩	"	"	被熱
374	"	"	手永-5G-14	(59)	(36)	(7)	(26.9)	"	"	"	"
375	"	"	手永-19G-2	(59)	(35)	(8)	(23.8)	"	"	"	"
376	石 製 品 片	剥 片	手永-No8-1	(35)	(14)	(4)	(3.5)	安 山 岩	"	"	磨製石斧、再生剥片
377	変 成 片 岩	板 状	手永-24-1	(39)	(34)	(6)	(17.6)	緑 泥 片 岩	"	"	"
378	"	"	手永-56	(40)	(33)	(8)	(15.9)	"	"	"	被熱
379	"	"	手永-1G-12	(82)	(42)	(15)	(70.7)	"	"	"	"
380	"	"	手永-5G-17	(67)	(18)	(11)	(17.3)	"	"	"	"
381	"	"	手永-4G-11	(56)	(18)	(10)	(16.9)	"	"	"	"
382	剥 片	不 整 形	手永-9	(46)	(30)	(11)	(21.5)	め の う	"	"	調整痕有

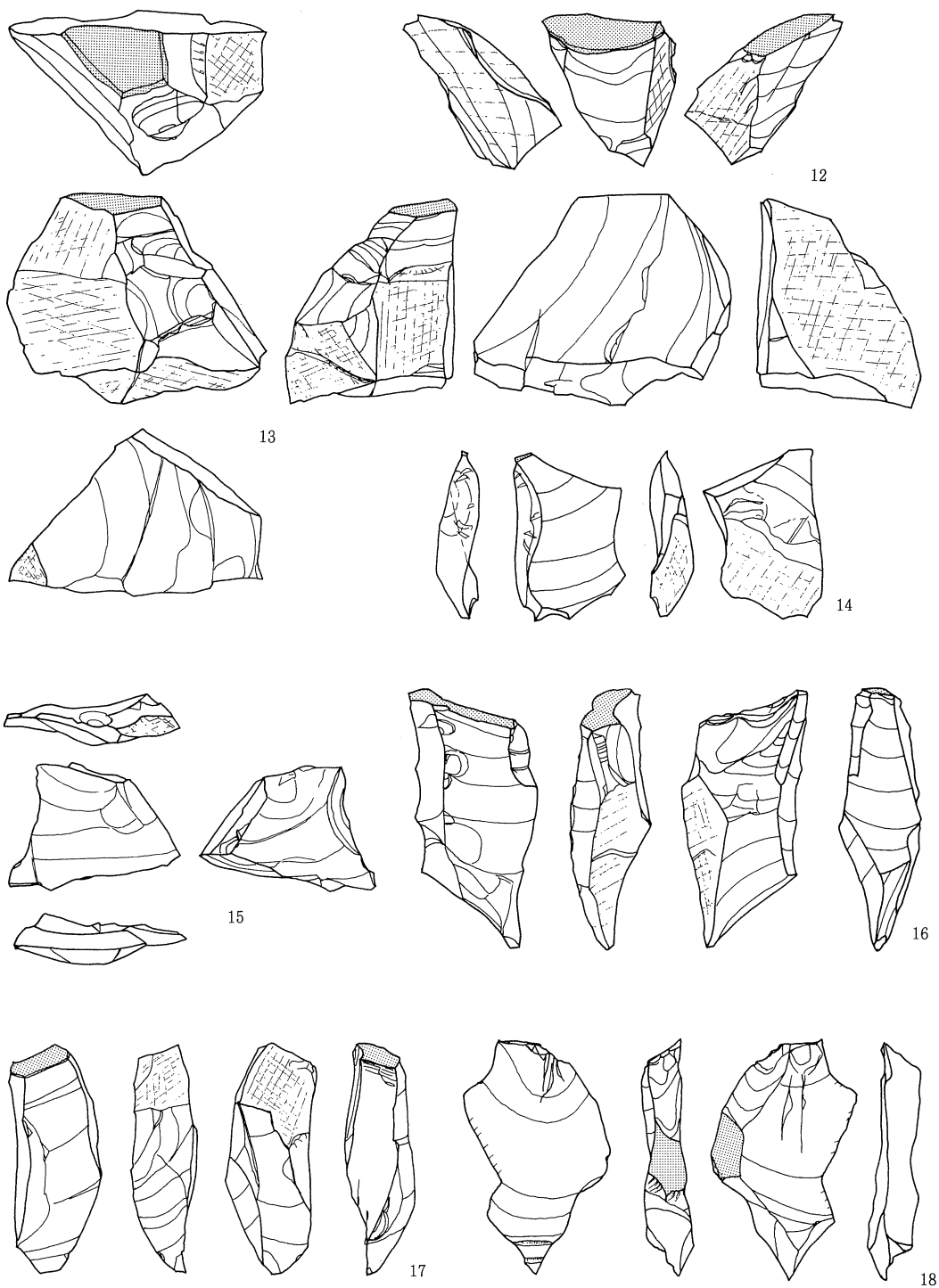
No.	名 称	形 態	出 土 地 点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	時 期	挿図番号	備 考
383	剥 片	横長剥片	手永-9	(22)	(22)	(7)	(5.1)	めのう	縄文時代	なし	調整有
384	"	節理剥離	手永-73	(26)	(23)	(5)	(4.7)	"	"	"	
385	"	縦長剥片	手永-46G-2	(29)	(13)	(7)	(3.3)	"	"	"	
386	"	原礫面有	手永-3	(29)	(26)	(8)	(7.9)	"	"	"	
387	石 核	不 整 形	手永-1	(43)	(28)	(14)	(14.9)	黒曜石	"	"	残核? 気泡多い
388	"	板 状	手永-1	(32)	(18)	(11)	(7.7)	"	"	"	" 石材良好
389	剥 片	不 整 形	手永-22	(22)	(15)	(8)	(3.0)	"	"	"	
390	"	横長剥片	手永-42	(26)	(8)	(6)	(2.7)	"	"	"	
391	"	原礫面有、横長剥片	手永-20住-4	(22)	(17)	(5)	(1.9)	"	"	"	
392	"	調 整 有	手永-27	(25)	(9)	(6)	(1.8)	"	"	"	切断?
393	"	調 整 剥 片	手永-86	(25)	(18)	(6)	(2.5)	"	"	"	原礫面有
394	"	横 長 "	手永-20住-2	(32)	(8)	(6)	(1.5)	"	"	"	ヒンジ
395	"		手永-27住-1	(21)	(11)	(9)	(2.6)	"	"	"	"
396	" (チップ6点)		手永-表22他				(6.3)	"	"	"	
397	黒曜石原石	丸 礫	手永-表18	(27)	(22)	(14)	(10.8)	"	"	"	気泡多数
398	剥 片	調 整 剥 片	手永-27	(27)	(25)	11	9.0	チャート	"	"	
399	コ ア	残核、自然面有	手永-46G-2	(27)	(18)	(13)	10.5	"	"	"	
400	剥 片	調 整 剥 片	手永-No4-1	(27)	(27)	(10)	6.3	"	"	"	自然面なし
401	"	横 長 剥 片	手永-北溝-13	(28)	(20)	(9)	5.0	"	"	"	" 有
402	"	板状横長剥片?	手永-27	(25)	(20)	(5)	4.7	"	"	"	
403	"	板 状	手永-20住-4	(28)	(5)	(12)	7.7	"	"	"	自然面有
404	"	不 整 形	手永-27	(22)	(22)	(15)	6.5	"	"	"	残核?
405	"	横長剥片切断	手永-7G-3	(27)	(18)	(4)	2.7	"	"	"	
406	"	横長剥片原礫面有	手永-3	(25)	(21)	(7)	5.1	"	"	"	
407	"	原礫面有板状	手永-弥生大住3	(27)	(18)	(7)	3.7	"	"	"	
408	"	横長剥片板状	手永-27	(22)	(18)	(3)	1.7	"	"	"	節理面有
409	"	三 角 形	手永-27	(19)	(19)	(12)	4.2	"	"	"	残核?
410	"	節 理 面 有	手永-27	(22)	(18)	(6)	2.1	"	"	"	
411	石 核	丸 礫	手永-59	(35)	29	20	27.1	"	"	"	端部剥離
412	"	四 角 錐	手永-1G-8	(24)	(23)	(19)	7.6	? 珪質岩	"	"	赤色
413	"	丸礫原礫面有	手永-59	(40)	(31)	(13)	17.0	チャート	"	"	残核?
414	"	板 状	手永-1	(35)	(19)	(22)	11.6	"	"	"	"

No.	名 称	形 態	出 土 地 点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	時 期	挿図番号	備 考
415	剥 片	横長剥片原礫面有	手永-11	(22)	(22)	(3)	1.9	チャート	縄文時代	なし	
416	"	"	手永-15G-14	(21)	(15)	(9)	2.4	"	"	"	原礫面一面
417	石 核	サイコロ状	手永-42	(27)	(22)	(12)	9.0	"	"	"	残核
418	剥 片	横長剥片	手永-15G-14	(27)	(18)	(6)	2.7	"	"	"	
419	"	縦長剥片	手永-59	(27)	(17)	(4)	1.9	"	"	"	
420	"	横長剥片、原礫面有	手永-59	(24)	(18)	(4)	2.0	"	"	"	
421	石 核	サイコロ状	手永-42	(24)	(15)	(13)	5.4	"	"	"	調整剥片?
422	剥 片	原礫面有、横長剥片	手永-42	(21)	(18)	(5)	2.8	"	"	"	
423	"	調整剥片	手永-27	(25)	(20)	(15)	6.6	"	"	"	
424	"	切断	手永-73G-2	(33)	(18)	(9)	4.3	"	"	"	
425	"	調整剥片	手永-73G-20	(29)	(16)	(16)	5.2	"	"	"	
426	"	"	手永-43G-4	(29)	(19)	(13)	10.5	"	"	"	
427	"	原礫面有	手永-15	(21)	(17)	(7)	2.6	"	"	"	
428	"	調整有	手永-3	(26)	(15)	(3)	2.3	"	"	"	
429	"	横長剥片、原礫面有	手永-73G-2	(28)	(15)	(6)	2.3	"	"	"	
430	" (チップ4点)		手永-73G-2他				2.2	"	"	"	
431	剥 片	自然面有	手永-42	(19)	(18)	(10)	4.2	"	"	"	調整痕有
432	" (チップ3点)		手永-24H-1				0.1	斑 靨 岩	"	"	
433	剥 片	不 整 形	手永-27	(26)	(13)	(10)	2.5	(チョコ)チャート	"	"	石核調整剥片
434	"	横長剥片	手永-10	(23)	(18)	(6)	(2.9)	チャート	"	"	
435	" (チップ22点)	板 状					(25.7)	"	"	"	
436	使用剥片	小型横長	手永-27	(21)	(16)	(4)	(1.3)	"	"	"	
437	剥 片	横 長	手永-27	(18)	(15)	(3)	(1.3)	"	"	"	
438	使用剥片	横長剥片切断	手永-5G-23	(20)	(16)	(4)	(2.1)	"	"	"	
439	"	"	手永-15G-15	(24)	(15)	(8)	(2.1)	"	"	"	
440	石 核	サイコロ状、原礫面有	手永-44G-2	(39)	(21)	(17)	(22.1)	"	"	"	原礫面二面
441	敲 石	円 礫	手永-10H-1	(102)	(71)	(42)	(452.0)	石英斑岩	"	"	被熱、完形
442	"	"	手永-トレ-76	(86)	(57)	(38)	(299.0)	砂 岩	"	"	完形、両端部敲打
443	剥 片	不 整 形	手永-表-10	(51)	(33)	(19)	(29.8)	砂 岩	"	"	縦長剥離痕有
444	めのう剥片2点		手永-73G-2他				(1.2)	めのう	"	"	
445	変 成 片 岩	片 岩	手永-弥生大柱3	(29)	(15)	(12)	(7.0)	ホルンフェルス	"	"	
446	"	"	手永-15G-11	(40)	(20)	(7)	(8.0)	絹雲母片岩	"	"	

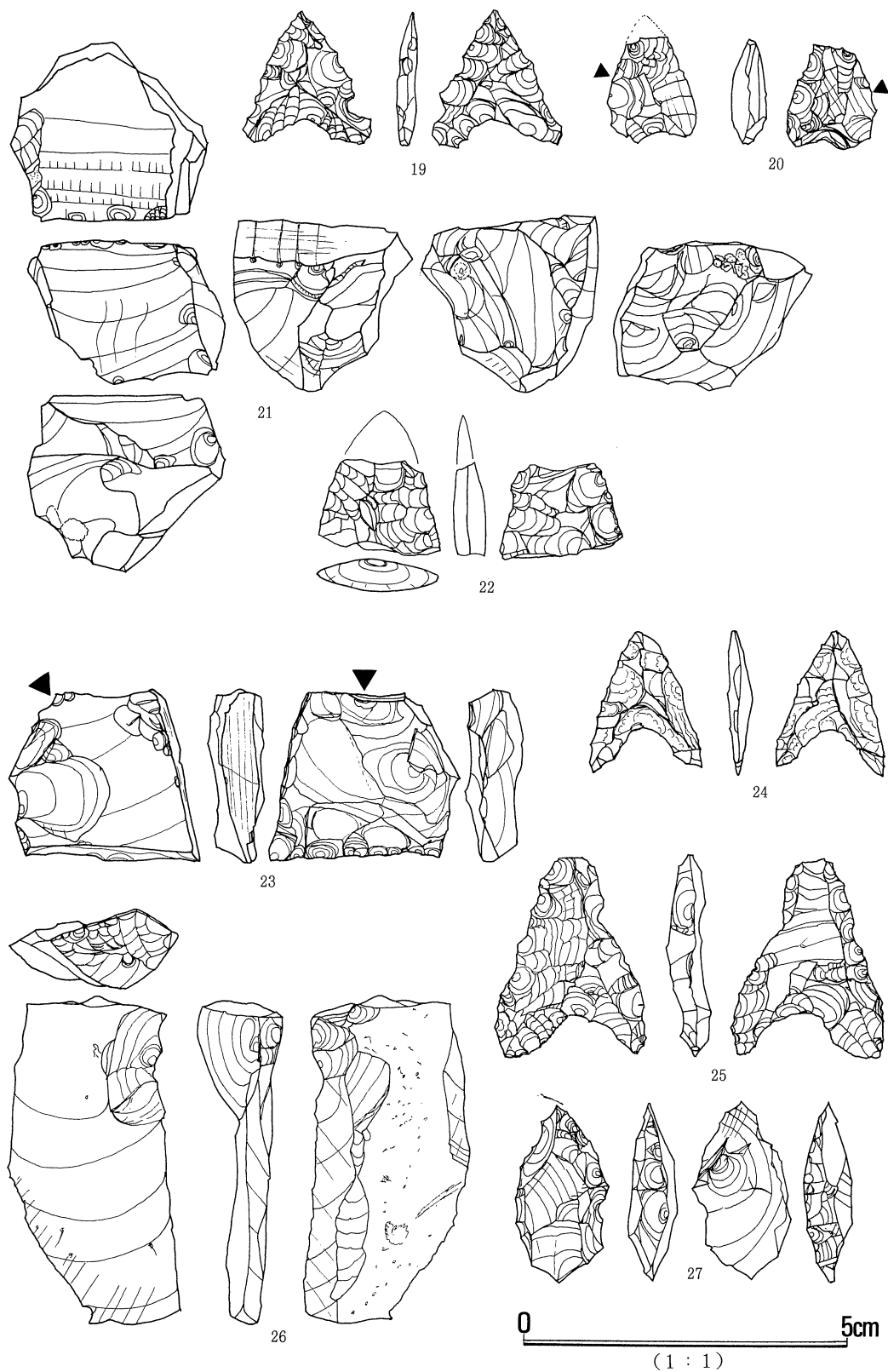
No.	名	称	形	態	出 土 地 点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石 材	時 期	挿図番号	備 考
447	剥	片	剥	片 礫	手永-1-1	(30)	(19)	(5)	(3.5)	蛇 紋 片 岩	縄 文 時 代	なし	磨製石斧、再生剥片
448	"	"	片	片 岩	手永-34H-1	(36)	(25)	(10)	(11.4)	緑 泥 片 岩	"	"	
449	"	"	"	"	手永-1-1	(35)	(27)	(10)	(11.0)	"	"	"	
450	"	"	"	"	手永-4H-12	(39)	(22)	(7)	(10.8)	"	"	"	
451	"	"	"	"	手永-15G-5	(40)	(30)	(5)	(9.2)	"	"	"	
452	"	"	"	"	手永-5G-16	(23)	(22)	(4)	(3.5)	"	"	"	
453	"	"	"	"	手永-弥生大住3	(24)	(18)	(5)	(3.6)	"	"	"	
454	"	"	"	"	手永-20住-4	(11)	(10)	(3)	(0.6)	"	"	"	
455	"	"	"	"	手永-5G-19	(32)	(20)	(6)	(6.1)	片 麻 岩	"	"	



第77図 石器



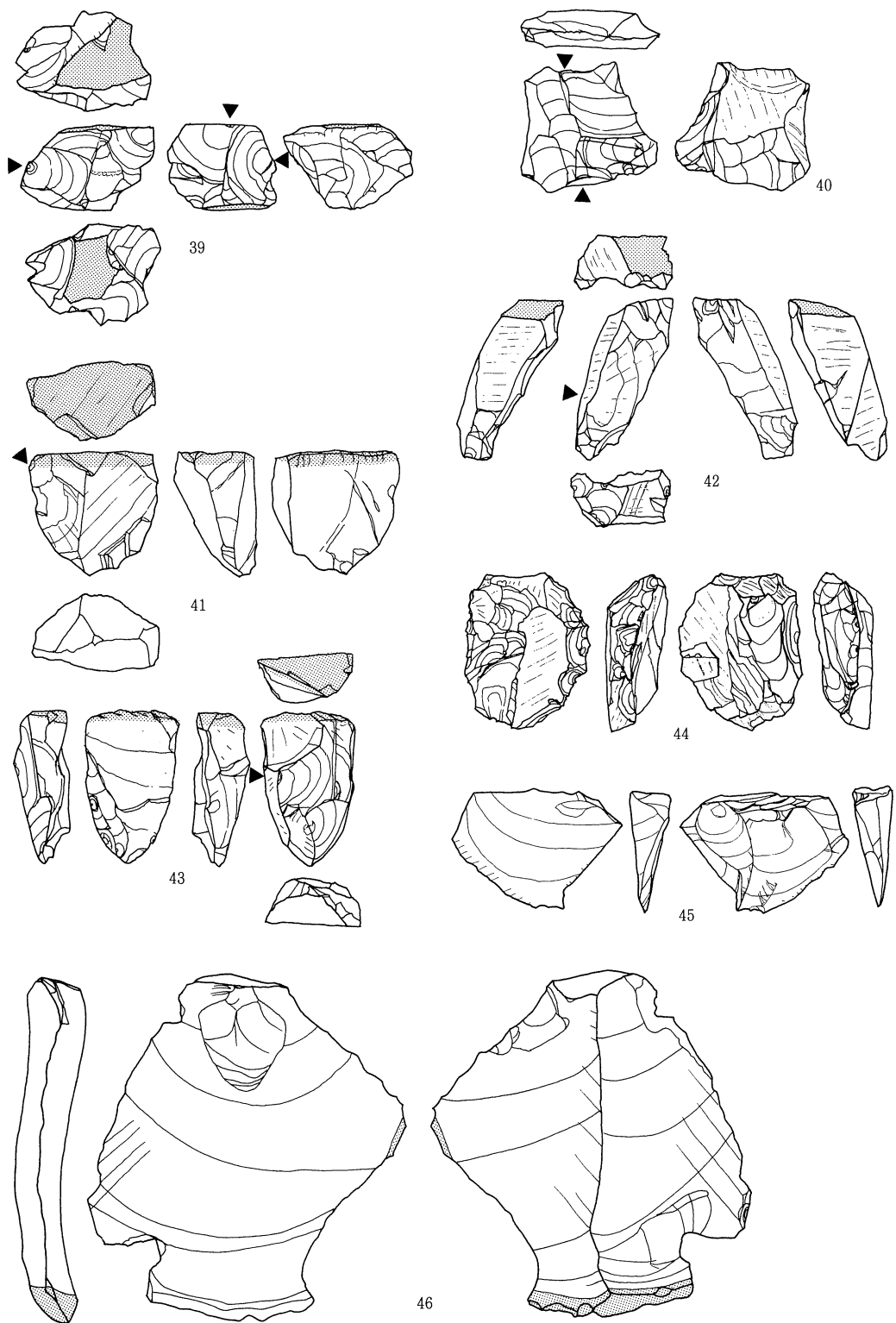
第78図 石核・剥片



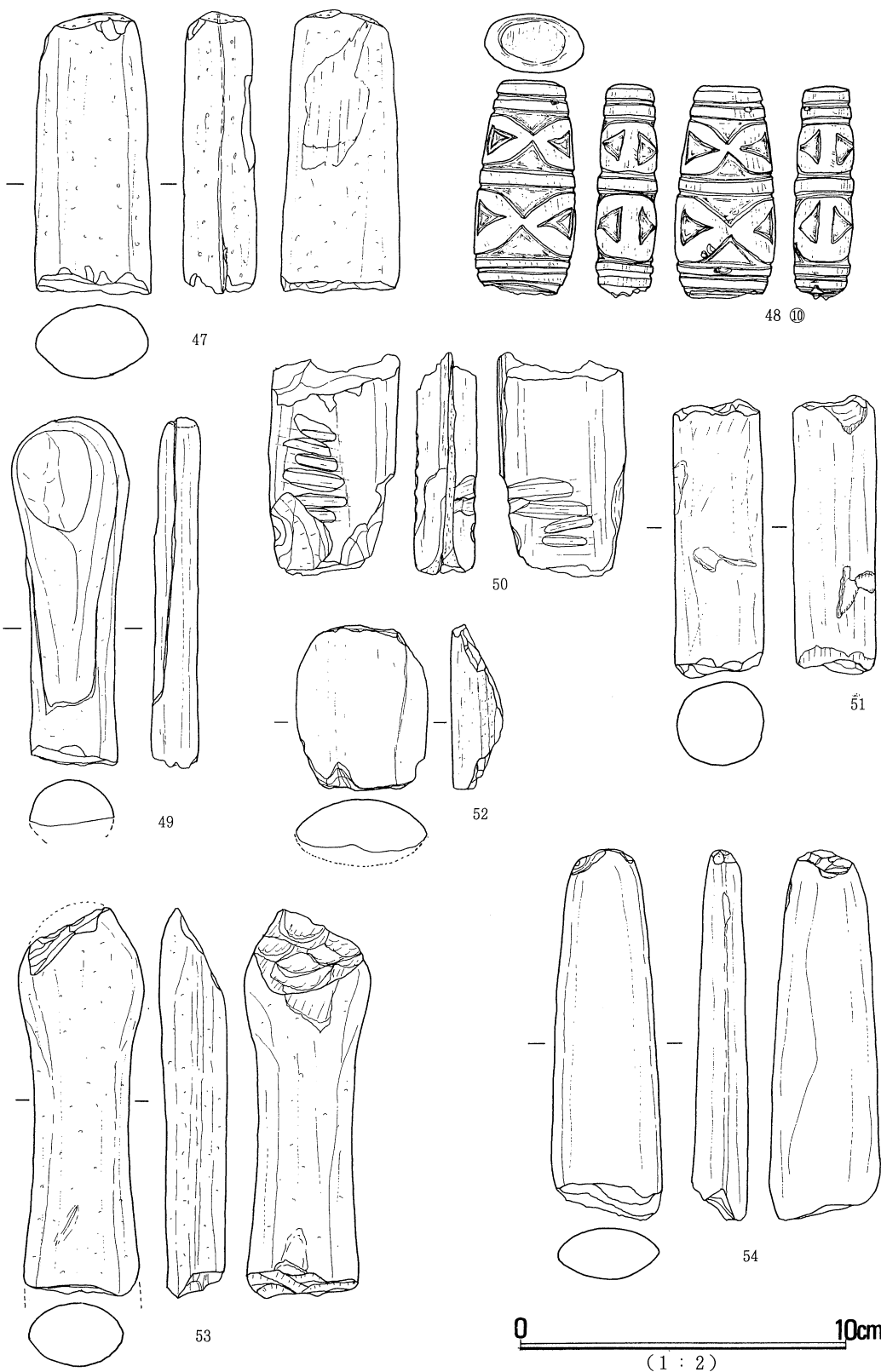
第79図 石器



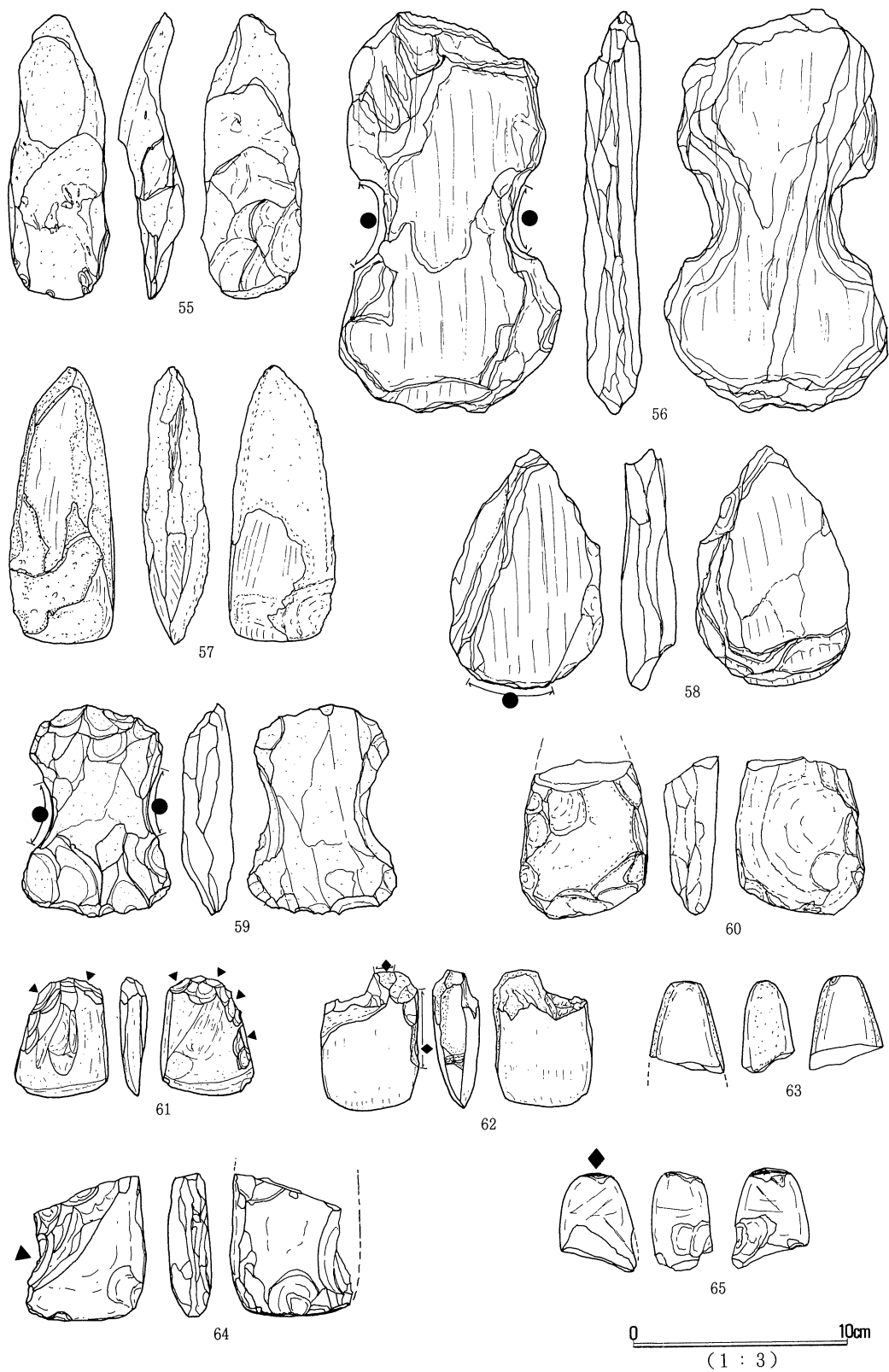
第80図 石核・剥片



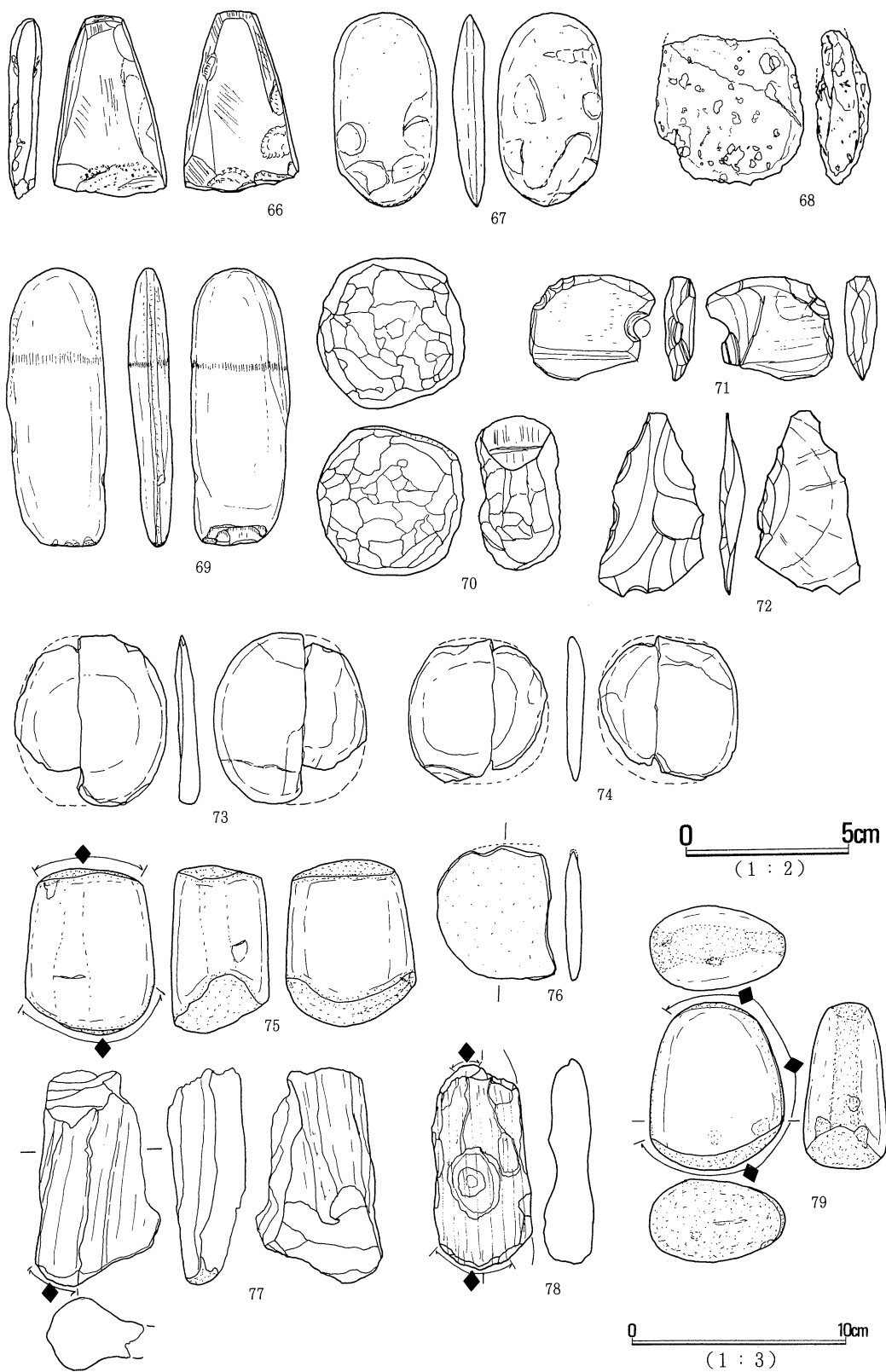
第81図 石核・剥片



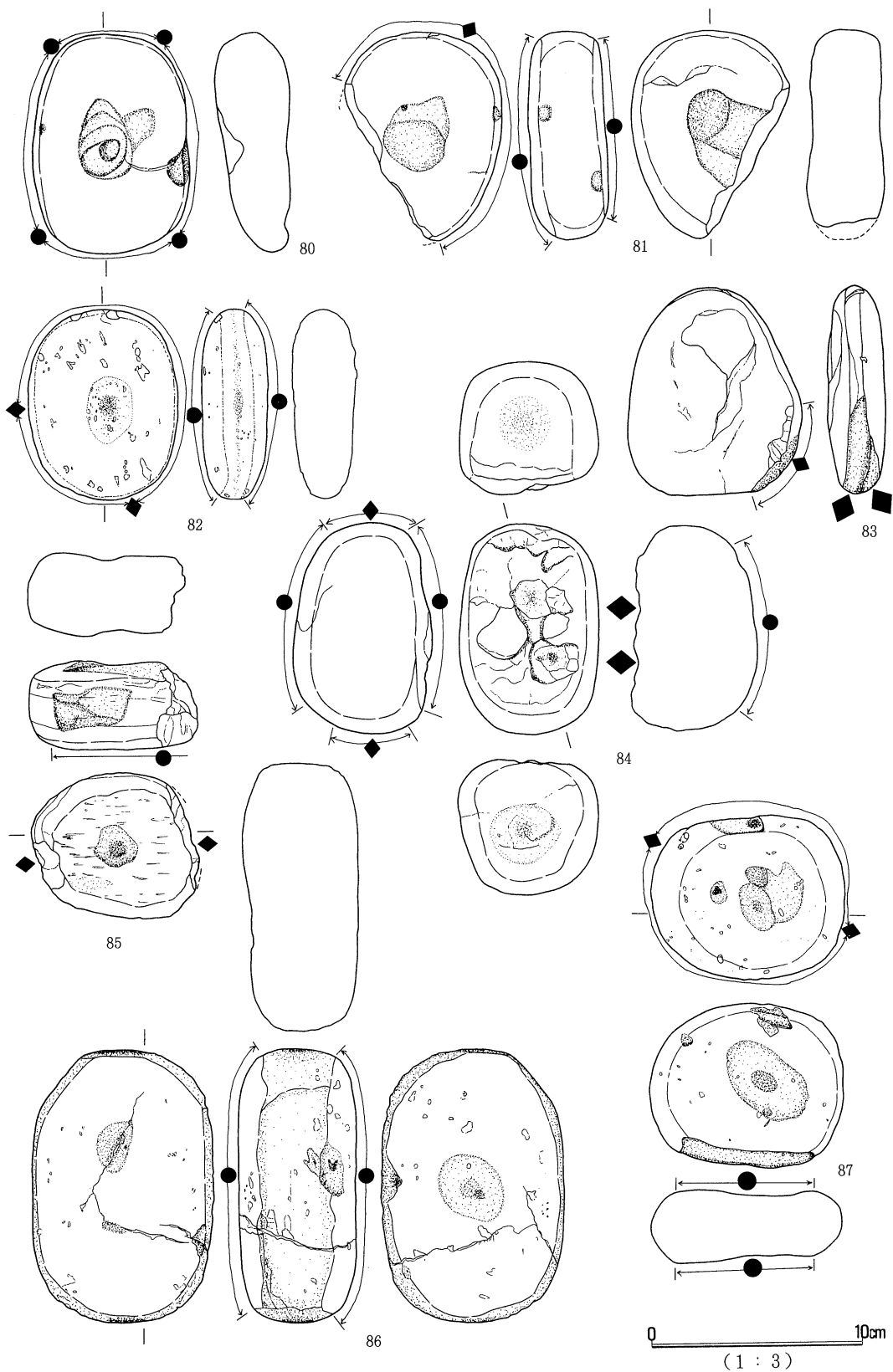
第82図 石剣・石棒



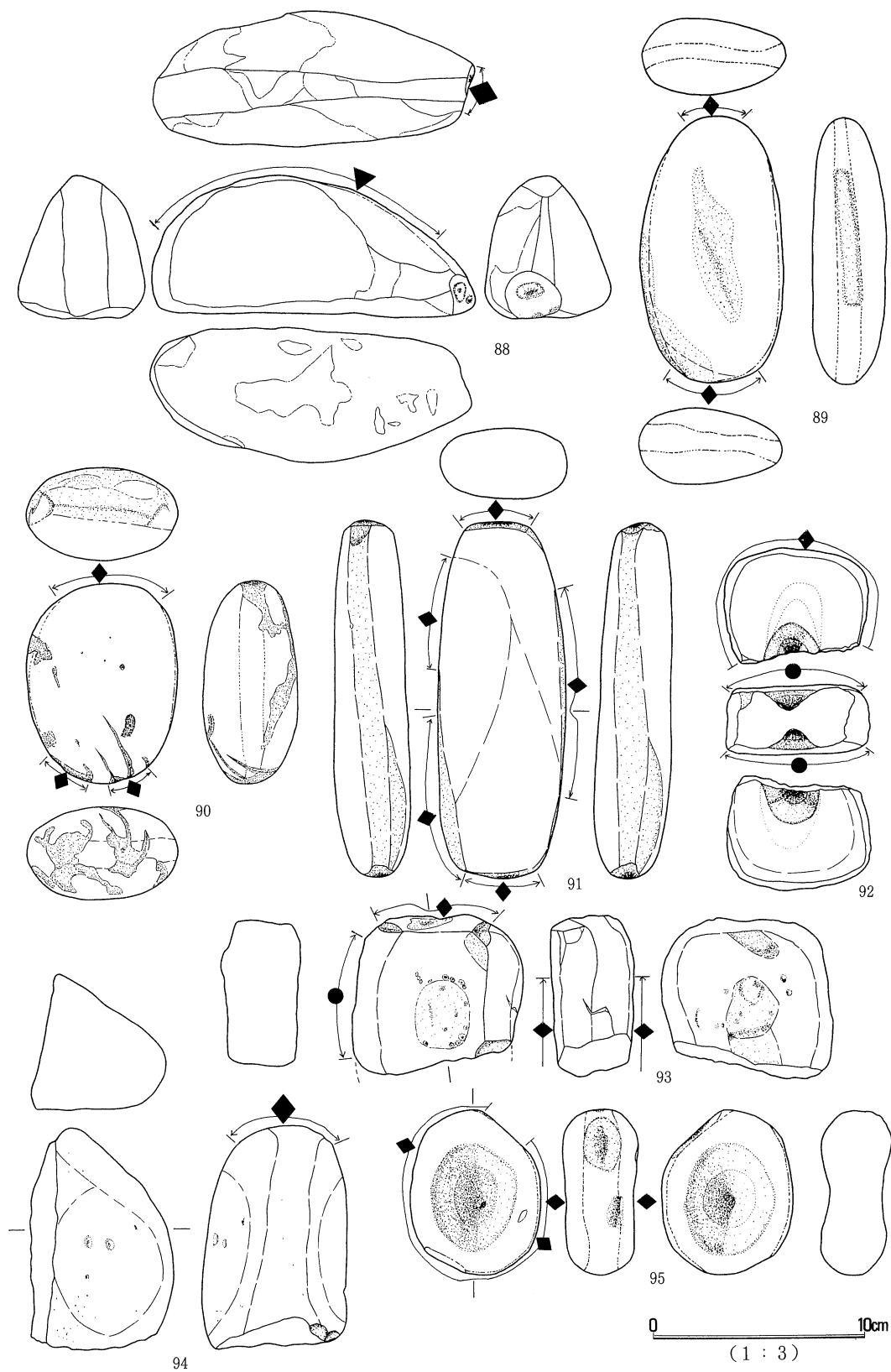
第83図 石斧・その他



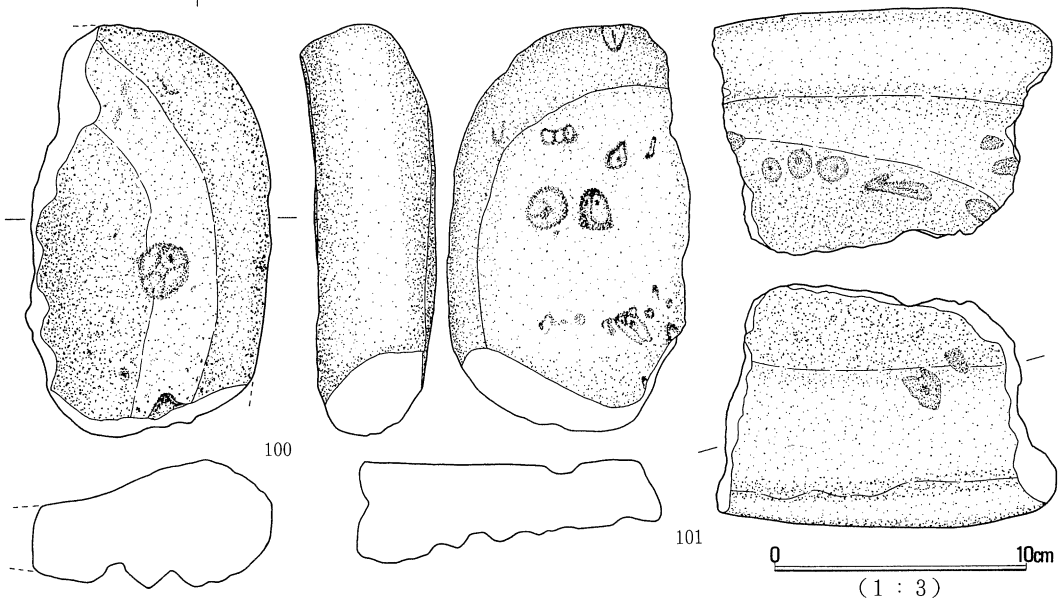
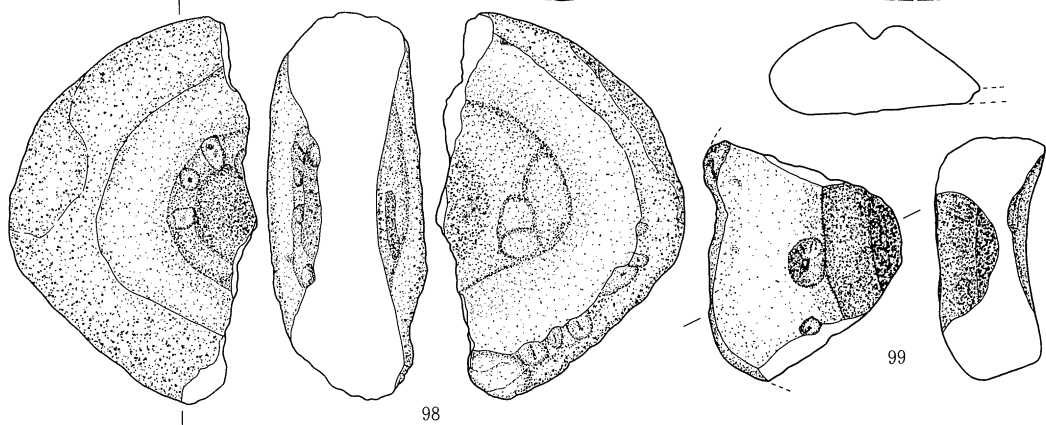
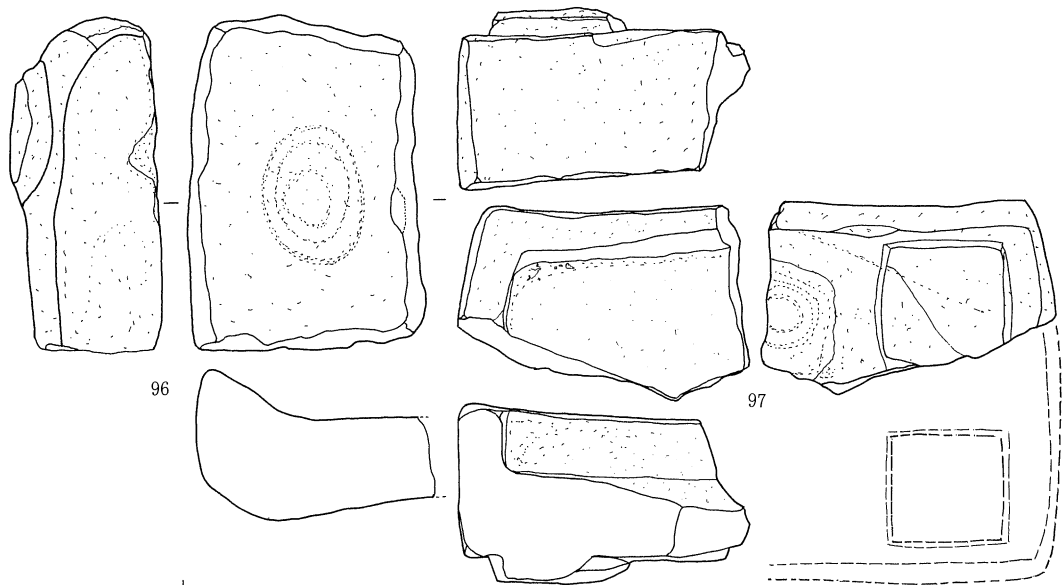
第84図 石器



第85図 磨石・敲石等

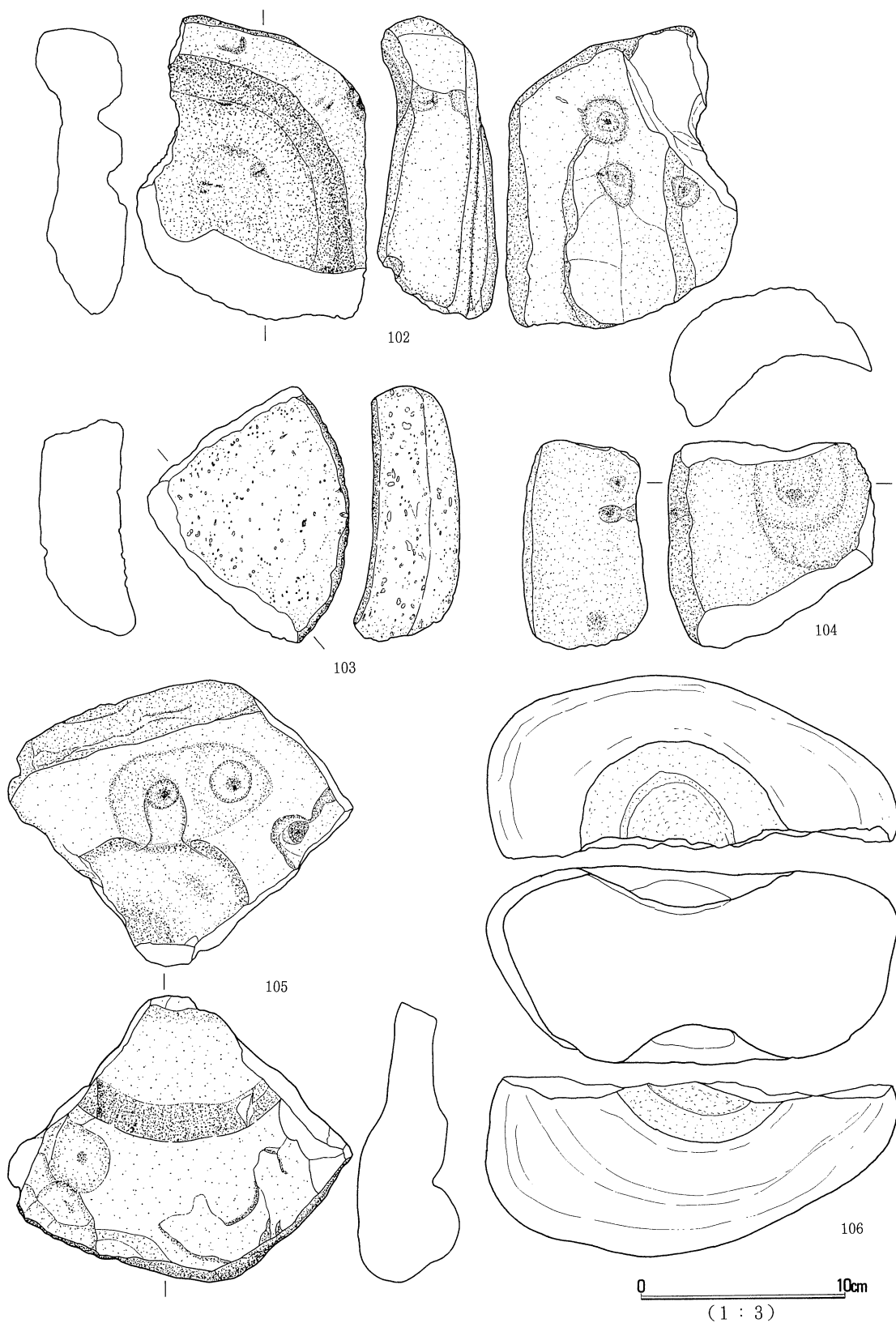


第86図 台石・敲石・磨石

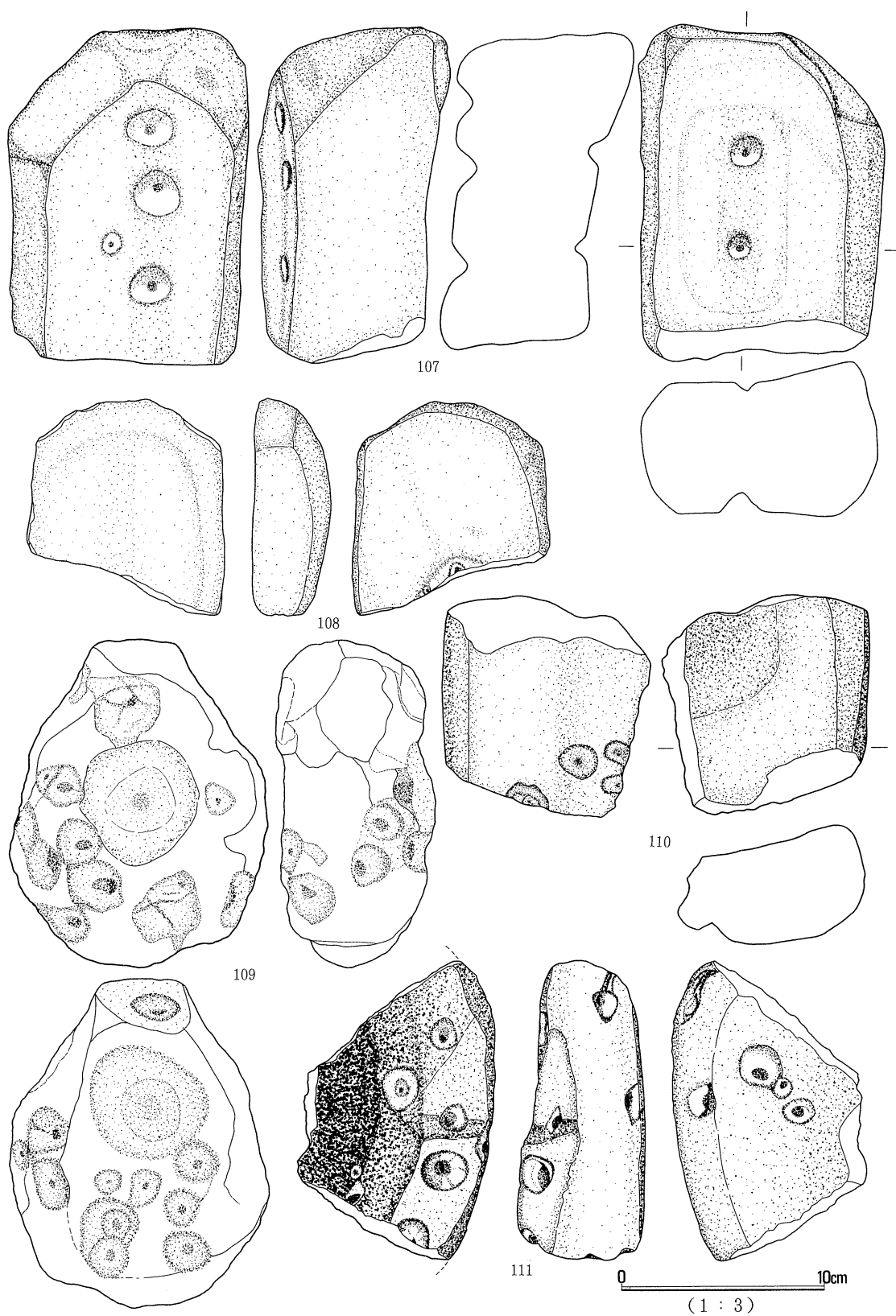


0 10cm
(1 : 3)

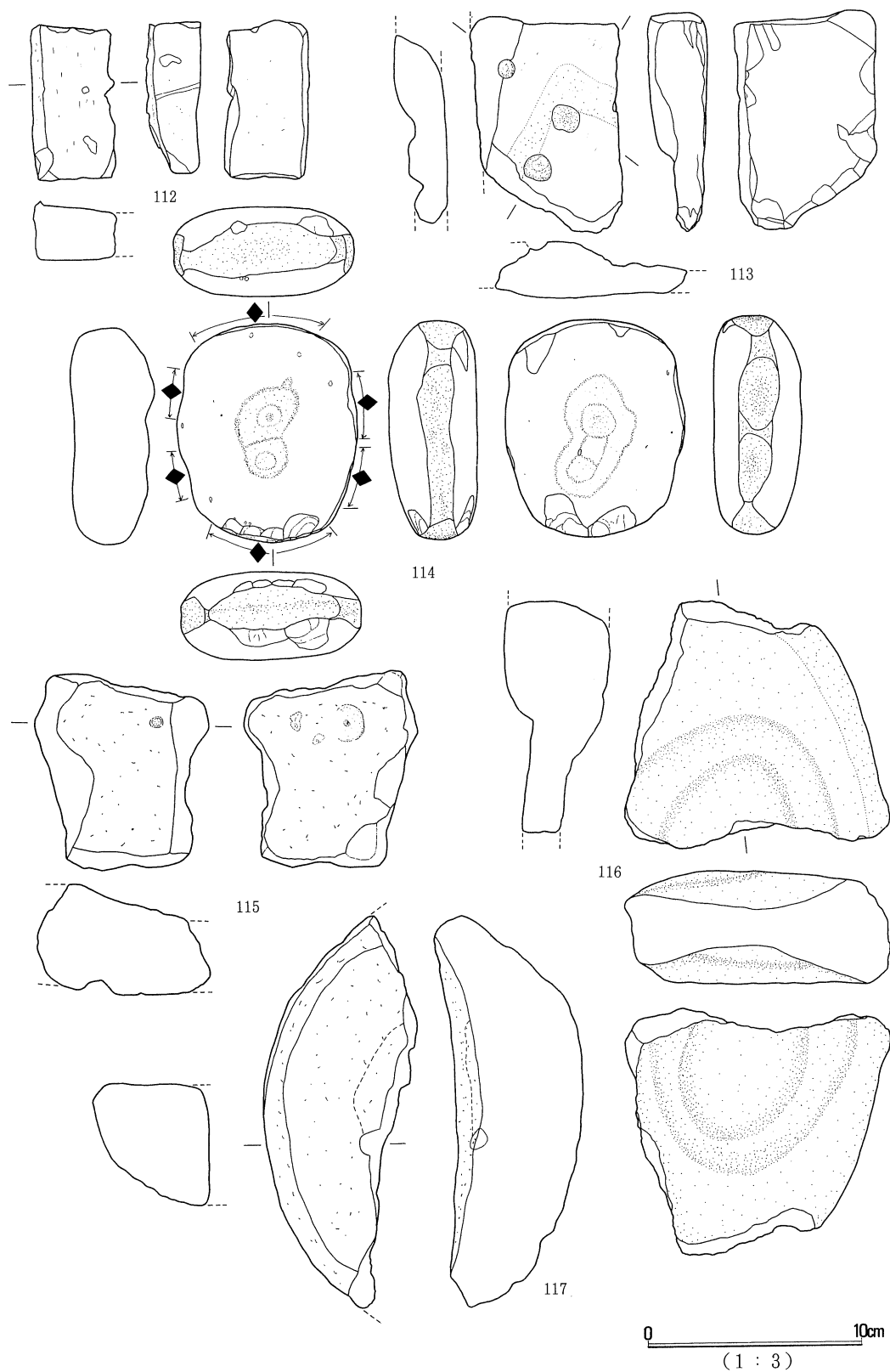
第87図 石皿



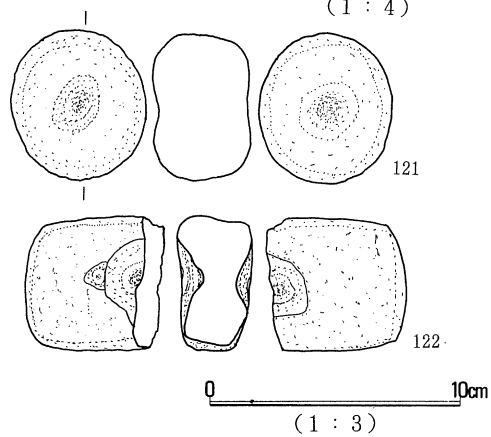
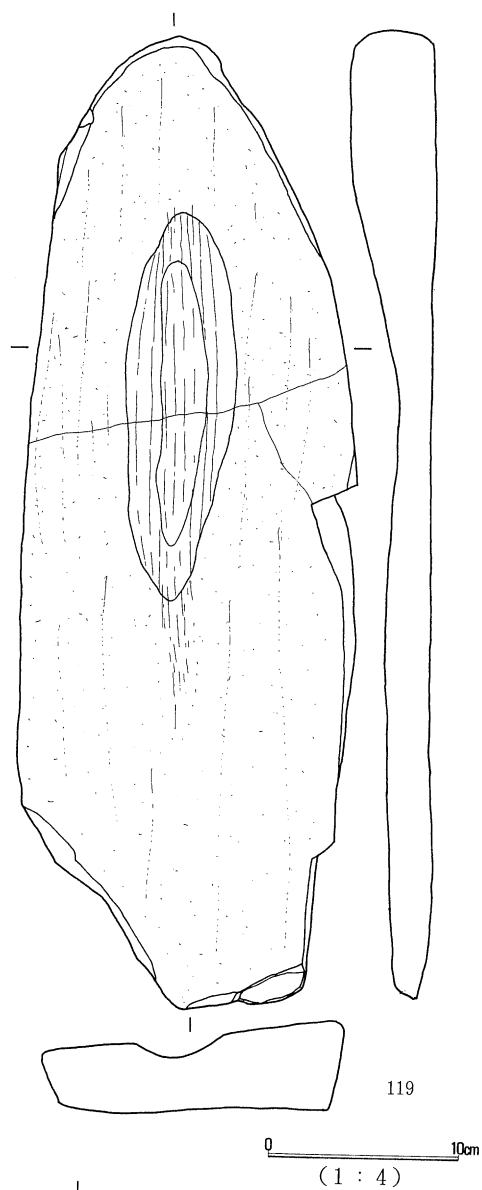
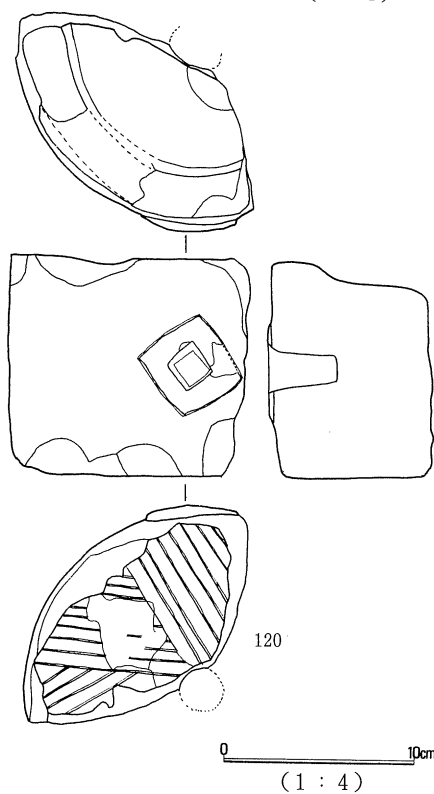
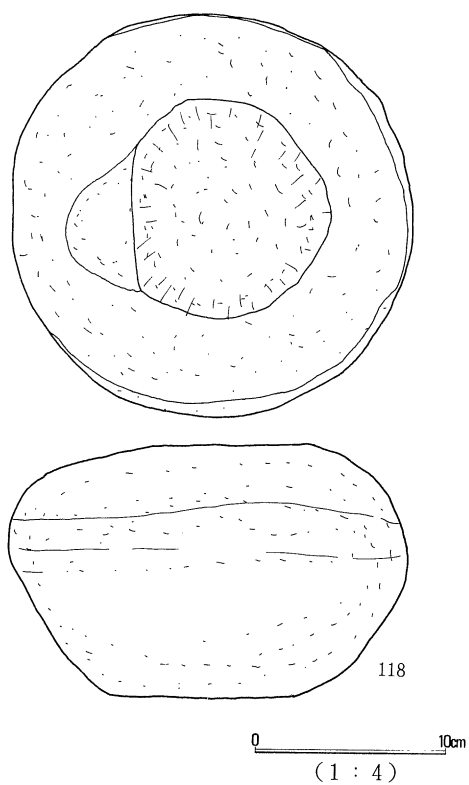
第88図 石皿



第89図 石皿・凹石



第90図 石皿等



第91図 石製品

(8) 骨角貝製品と破壊骨

第92図～第99図は骨角貝製品と破壊骨の掲載である。骨角製品には加工した素材段階の資料も含んでいる。素材の骨・角・貝の種及び部位同定については、金子浩昌先生にお願いした。製品の全ては第5表菊間手永遺跡骨角貝製品一覧に掲載している。

挿図中矢印は $\longleftrightarrow$ は加工部位、黒三角印は▲は加撃点を示す。骨角貝製品の多くは、1～6・13～16・26・27・38・39グリッドに検出されている。それらは人骨が53体検出された方形墓域周辺部分か、03・011・020・021住居跡の周辺部分にあたる。それら遺物が多く残された要因として、これら地域に貝塚の混貝土層が広く分布して遺存していたことと、元来遺物が多く存在したためであろう。

第92図1は39グリッド出土であるので020・021号住居跡に伴う可能性があるので、時期的には安行式期となるであろう。ヤスと考えられ、細身部分がソケット状に装着されると思われる。鹿角内側髄側の身半ばに調査時のガジリがあり、やや湾曲する側に一条の擦り痕というか溝が付けられている。2は6グリッド人骨北端のピットから出土と注記にある。つまりX3号人骨頭位側のピット中から出土したことになるので副葬された可能性がある。ヤスとしたが先端基部とも欠損し1とは断面形状も異なる。4面ともよく整形され整形痕が残る。3は5グリッド出土であり、方形墓域北部分に検出されているので副葬された可能性がある。ヤスとしたが基部が欠損しており、基部付け根部に2条の周回する溝があるため別の用途も考えられる。

4は4～5グリッドから出土しており墓域内である。小振りの刺突具と考えたが先端部は欠損し明確ではない。5は4と似ており同じく先端部分が欠損している。番号付きで回収されているので5グリッド出土の可能性がある。6は真っ黒に焼けており加工痕がある。5と同じ理由により5グリッドの可能性がある。7は骨を縦位に分割した素材のヤスとした。被熱のために曲り両端部を欠損している。15グリッド出土のため、03号住居跡など晩期初頭の時期になる可能性がある。8は2グリッド出土であるため副葬された可能性がある。平滑に整形されておりかなり偏平である。基部を欠損しており形状は不明である。9は8と似ており同じ製品の部分の可能性がある。全面整形されているが骨の部位同定ができた。両端部欠損しているが、8と考え合わせると篋状製品の可能性がある。10は出土位置が不詳である。中空の鳥骨の先端部分を斜めにカットした刺突具であり基部は欠損してない。東北地方によく見られる製品である。11はカモの上腕骨素材になっており10と同様な製品の可能性があるが、先端部が欠損しており確証はない。12は鹿角の素材をかなり擦りきり刃材部を使用している。両端部欠損のため骨鏃としたが確証はない。4グリッド出土のため墓域内の可能性がある。13は骨の縦位分割素材になっており加工してかなり尖らしているが先端は若干摩耗している。基部は欠損しない。16は13と同じ素材である。先端部は欠損し、基部は丸く摩耗している。

第92図14・15はシカの下顎骨の先端部部分の右側を素材としている。遠位端部は欠損しているが、溝を周回している部分からの欠損とも考えられ解体痕の可能性もある。今後の類例の増加があれば製品の性格も判明するだろう。出土位置は15は4グリッド、14は番号付きなので5グリッド付近の可能性があり、副葬されたものかもしれない。

第93図17・18は方形墓域内の2号人骨に伴って回収されたが、出土位置の細部は不詳である。ウミガメの左右坐骨の遠位端であり、同じ個体からの素材製品である可能性が高い。擦りきりを周回させ、きれいに切り離している。19は38グリッド出土であり隣接の39・27グリッドには人骨の出土（3体～5体）があり、副葬された可能性がある。17・18と同じアオウミガメの肢骨が素材として使用されている。両端部欠損しているため、切り離し状態は不明である。2穴ある類例が加曽利南貝塚にある（86）。20はマダイの骨瘤に穿孔したもので東北地方に類例がある。21は髪針のつまみ部分と考えられるが、両端部欠損しておりはっきりしない。22は大型の鳥類の上腕骨を輪切りにした素材に、沈線を擦り込んだ管状垂飾である。類例に岩手県貝島貝塚や東北地方・北海道地方に多い。第95図54にヒシクイ類の上腕骨素材を掲載した（87）。23はイノシシの中間手根骨を素材にし、中心部を穿孔している。類例は不明である。24はエイの椎体を素材にして中心部に穿孔している。25は平滑に磨かれ素材は明確でない、中間が折れていたが接合完形になった。髪針と考えられ全国に類例がある。

26はイノシシ、オスの下顎の左側犬歯の牙素材であり、折取られている。27は26の基部に近い部分を素材にして、牙を分割して次の段階の素材にしている。28はやはり26を素材にしているが右側の犬歯を使用し、エナメル質部分を擦りきり取っている。29は26の右素材の先端部分を利用した牙斧状の利器である。風化が激しく危弱なのでバインダー17を塗布した。30は完形品であり、刺突部の先端頂部は素材のままの状態である。牙を縦位に分割しエナメル質部分を利用している。両側縁部に切り込みが入り、縛りやすくなっている。31は先端部はナイフ状に鋭く基部は折れて欠損している。調整痕が残り擦り跡が明瞭に観察される。

第94図は全て貝製品である。32は貝輪の番号付けなので方形墓域内の出土の可能性がある。端部が欠損しているが貝の大きさから全体がほぼ把握できる。風化が進んでいるがよく整形されている。33は貝輪片でありやや粗雑な作りをしており、風化が進んでいる。34は32と同じベンケイガイ製であり緻密に磨かれている。4グリッド出土のため方形墓域からの出土の可能性がある。35は焼けて灰色になっているが、よく整形された貝輪片である。36は巻貝のアカニシ素材の貝輪と考えられるが、やや粗雑な作りをしている。これも4グリッドの出土である。37はサルボウガイ素材であり、頂部を取り去った状態までの加工であるので未完成品と考えた。38はハマグリ素材であるが37と同じ理由により未完成品とした。37は1グリッド、38は4グリッド出土であるが、未完成であることは興味深い。39～41はみなよく整形されている。完成品の

破損したものかその後に欠損したものかは不明である。出土地点は不詳である。42・45は欠損部分の状態から打ち欠いたものとして未完成品とした。43・44ともにチョウセンハマグリなので外洋性であるから東京湾でなく太平洋側からの搬入品である。43は3グリッドの混貝土層から出土している。とても良く摩耗しており筒状に使用されたかもしれない。44は4グリッド出土である、風化が進み外縁部はすべて欠けている。46・47はそれぞれ貝輪の完成品である。貝種が異なるが、形態も異なることが興味深い。縄文後期の斜面貝層調査中に検出したが攪乱等があり時期決定はできない。48・49は赤彩されたオオノガイであり網目トーンが入っている部分に塗布されていた。斜面貝層南斜面出土であるが、時期は確定できない。

95図50・51・52はシカの角および角坐骨付きの解体されたシカ角が素材である。50・51・52共に切断面は擦りきりされている。52は角の髄部分を穿孔されほじくられている。後の分割によって利用しやすくした可能性がある。50は6グリッド、51は1グリッド出土である。

55・56は貝刃であり、完形品である。出土地点は南側の斜面貝層であるが、遺存状態の悪い地区であるので時期が特定できない。53はオオハクチョウの上腕骨である、破損しているが調査時は完形であったと思われる。菊間手永遺跡の鳥類骨にはタンチョウヅル等北地域に生息する大型鳥類の検出されているので、詳しくは第12表爬虫類・鳥類遺存体出土量を参照して頂きたい。54はヒシクイ類の上腕骨に第93図22の管状垂飾の素材部分を示した図である(87)。

第96図～第99図は破壊骨の出土資料である。菊間手永貝塚は多くの動物遺存体が出土しておりそれらは第14表イノシシ遺存体出土量、第17表シカ遺存体出土量、第20表シカ・イノシシ遺存体出土量に総量は掲載してある。その中には、骨がスパイラル状態に割れている遺存体が確認できたので、出土位置など明確でなくとも縄文時代後晩期時期の骨髄食の関連資料として提示できるものと考えた(88)。そのため種同定及び同定した部位を明記して、実測図とそれに伴う記載を掲載した(第96図～第99図)。

狩猟対象のシカについては解体された頭骨が昭和58年度調査時に、検出したが復元等が間に合わず図示できなかった。また昭和47年度調査時の方形墓域内に埋葬されたイノシシの幼体についても、回収された骨格は復元出来ずに保存してある(89)。今後これらの資料を整理し比較検討材料になるように、資料化を進めたいと考えている。

(86) 金子浩昌・忍澤成視『骨角器の研究縄文篇Ⅱ』1986.12 慶友社

(87) 草間俊一・金子浩昌「第4節骨角牙器と骨角牙製品」『貝鳥貝塚第4次調査報告』1971.12 花泉町教育委員会・岩手県文化財愛護協会

(88) 丹羽百合子「解体・分配・調理」『縄文文化の研究第2巻生業』1983.2 雄山閣出版

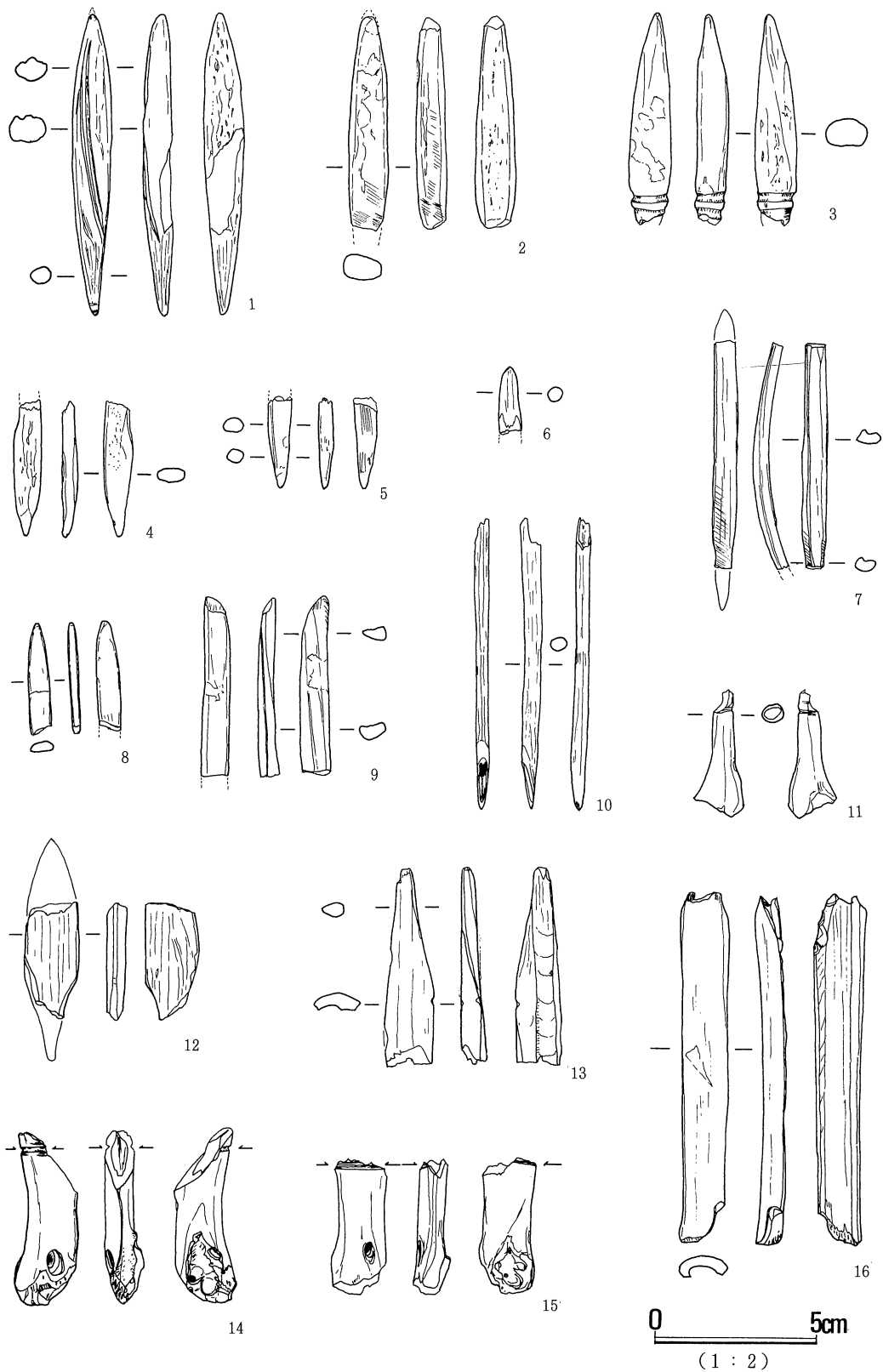
(89) 金子浩昌「焼けたイノシシの幼獣の下顎骨」『貝塚の獣骨の知識』1984.8 東京美術

第5表 菊間手永遺跡骨角貝製品一覧

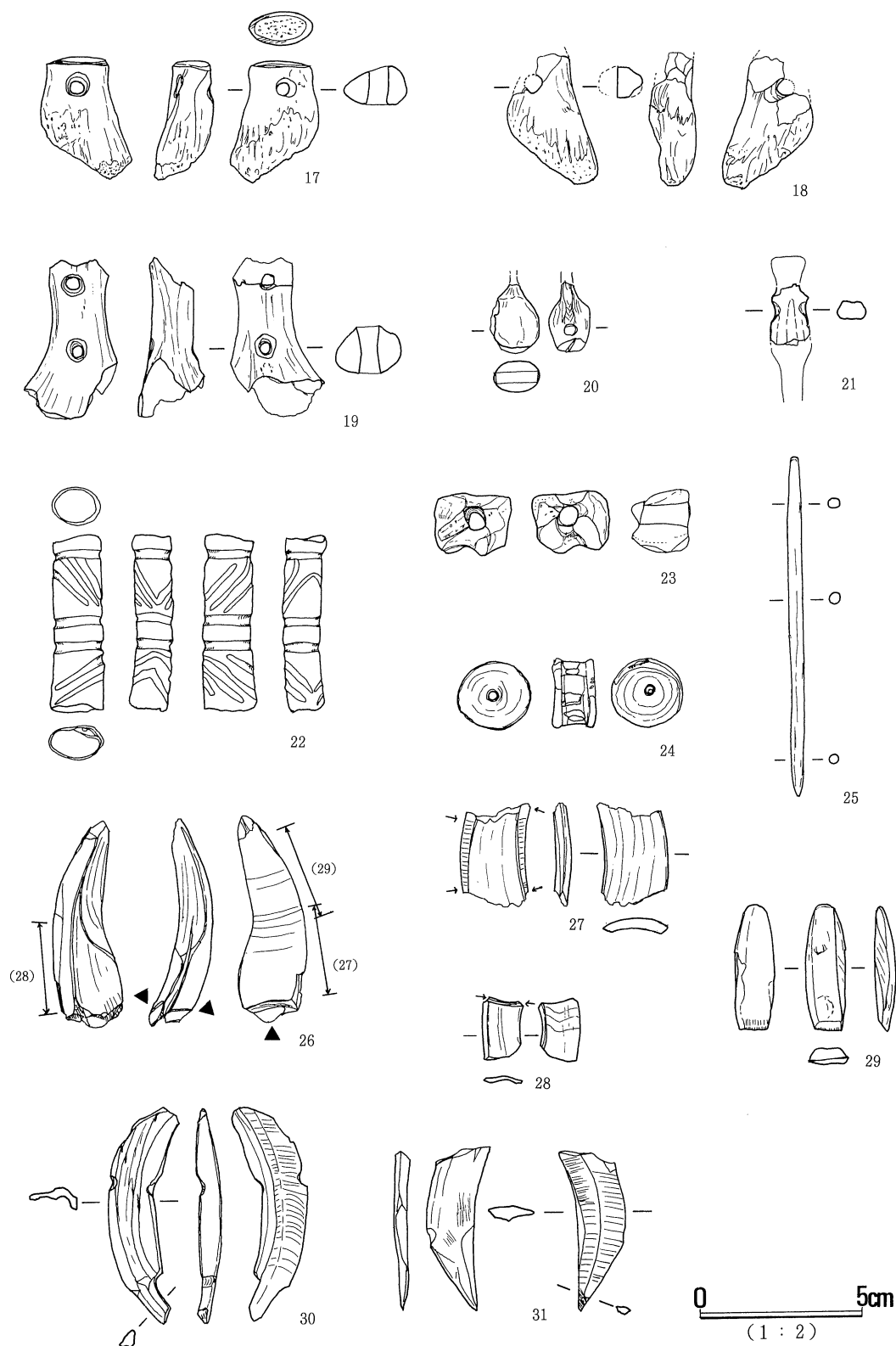
() は、破片、欠損部計測

No.	名称	形態	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素材	時期	插图番号	備考
1	ヤス状刺突具	無断有溝	手永-39G-1	94	12	9	7.1	シカ、角	縄文時代後晩期	92図-1	中半部欠損
2	ヤス状刺突具	断面隅丸方形	手永-6G-18	66	12	8	3.8	シカ、角	"	92-2	基部欠損
3	ヤス状刺突具	有段基部作出	手永-5G	66	13	10	(5.1)	シカ、角	"	92-3	"
4	刺突具?	断面隅丸方形	手永-4~5G-19	43	9	5	1.5	シカ、角	"	92-4	先端部欠損
5	刺突具?	断面橢円	手永-72	29	8	5	0.7	シカ、角	"	92-5	"
6	製品	先丸円錐形	手永-102	12	5	5	(0.9)	角の枝の先端	"	92-6	黒色化、平滑
7	ヤス状刺突具	湾曲	手永-15G	70	8	5	(4.1)	シカ中手or中足骨	"	92-7	被熱湾曲先端基部欠損
8	ヤス状刺突具	偏平	手永-2G-13	30	7	4	(0.5)	シカ中手or中足骨	"	92-8	基部欠損
9	ヤス状刺突具	偏平	手永-4G-17Pit	56	9	7	2.7	イノシシ腓骨	"	92-9	基部、先端部欠損
10	刺突具	先端斜切り	手永-	91	6	4	(1.2)	鳥骨	"	92-10	基部欠損
11	有溝製品		手永-5G-22	40	16	7	(1.2)	カモ、上腕骨L	"	92-11	両端部欠損
12	骨鏃	有茎	手永-4G-7	37	17	6	(2.0)	シカ、角	"	92-12	先端基部欠損
13	刺突具	先端鋭利	手永-3G-8	62	15	6	(4.8)	骨、縦切断	"	92-13	基部欠損
14	素材?	有溝製品	手永-100	55	20	9	4.6	シカ、右下顎近心部	"	92-14	近心部遠位欠損
15	素材?	有溝製品	手永-4G-18	43	18	11	4.0	シカ、右下顎近心部	"	92-15	"
16	ヘラ状製品	縦割り、加工品	手永-53	110	16	7	(8.7)	シカ、中手骨	"	92-16	両端部欠損
17	垂飾	有孔	手永I-No2人骨	38	28	13	3.6	アオウミガメ骨遠位部L	"	93-17	対になる
18	垂飾	有孔	"	41	24	13	3.0	" R	"	93-18	
19	垂飾	2穴	手永-38G-No6	50	29	13	8.0	アオウミガメ肢骨	"	93-19	両端部欠損
20	垂飾	有孔	手永-101	22	16	12	(1.0)	マダイ骨瘤(鱗棘)	"	93-20	棘部欠損
21	髪針	破片	手永-7G-25	20	12	6	(1.0)	シカ、角	"	93-21	
22	垂飾	管状	手永-101	54	15	12	3.8	ヒタゲ豚、上腕骨R	"	93-22	完形
23	垂飾	有孔方形	手永-71	23	18	22	(3.1)	イノシ、中颚、手根骨L	"	93-23	貫通突孔穴
24	垂飾	有孔	手永-47	21	21	12	3.1	エイ類、椎体	"	93-24	ほぼ完形
25	髪針	平滑製品	手永-1号住	106	5	4	2.3	鹿角?	"	93-25	完形品、中央部接合
26	未製品	切断牙製品	手永-101	64	18	18	10.3	イノシ、下顎犬歯L、J	"	93-26	割れ有
27	犬歯製品	牙縦分割	手永-6G-7	33	21	3	(2.0)	イノシ、下顎犬歯L、J、頰	"	93-27	両端部欠損
28	犬歯未製品	剥片、擦り切り	手永-4G-48Pit	19	13	2	(0.6)	イノシ、下顎犬歯L、J、頰	"	93-28	端部イキ
29	磨製刃器	斧形状	手永-13G-5	40	14	7	2.9	イノシ、下顎犬歯L、J	"	93-29	ほぼ完形、風化
30	刺突具	偏平錐体	手永-70	67	17	6	3.7	イノシ、下顎犬歯L、J	"	93-30	先端部摩擦

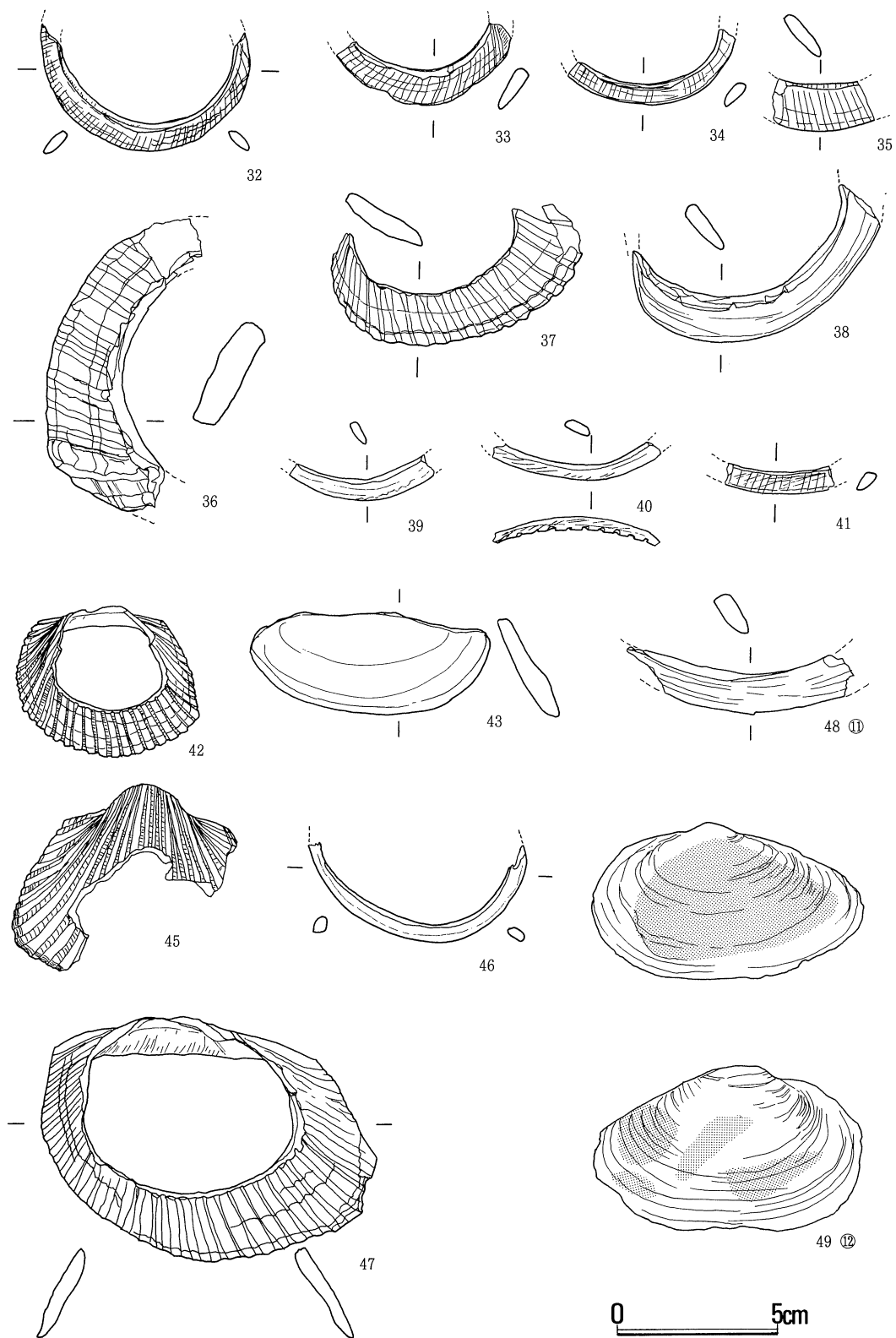
No.	名 称	形 態	出 土 地 点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	素 材	時 期	挿図番号	備 考
31	刺 突	全 面 研 磨	手永-5G-53	50	16	4	2.9	イノヅ、磨滅し、?	縄文時代後晚期	93-31	基部欠損
32	貝 輪	全 面 研 磨	手永-No.17	39	66	3	(5.8)	ベンケイガイ (R)	"	94-32	上端部欠損 風化している
33	貝 輪	やや粗 雑	手永-38G	25	55	5	(6.5)	サルボウガイ (L)	"	94-33	両端部欠損 風化している
34	貝 輪	密に整形	手永-4G	22	52	4	(3.4)	ベンケイガイ (L)	"	94-34	両端部欠損
35	貝 輪	密に整形	手永-	17	32	4	(4.0)	サルボウガイ (L)	"	94図-35	被熱、黒色化
36	貝 輪	整形粗 雑	手永-4G	49	92	11	(61.4)	反転アカニシ	"	94-36	1/2欠損
37	貝 輪	未 製 品	手永-1G.8	45	78	6	(15.8)	サルボウガイ (L)	"	94-37	両端部欠損
38	貝 輪	未 製 品	手永-4G	50	77	5	(10.8)	ハマグリ (R)	"	94-38	両端部欠損、風化している
39	貝 輪	密に整形	手永-27C (1号住)	15	45	3	(1.8)	ベンケイガイ (R)	"	94-39	両端部欠損
40	貝 輪	密に整形	手永-27C (1号住)	12	53	3	(2.0)	サルボウガイ	"	94-40	"
41	貝 輪	密に整形	手永-	9	35	5	(1.9)	サルボウガイ (R)	"	94-41	"
42	貝輪未製品	小 型	手永-	48	58	3	11.6	サルボウガイ (L)	"	94-42	
43	へら状製品	四 週 研 磨	手永-3G混貝	34	75	7	27.8	チョウセンハマグリ (R)	"	94-43	完形
44	貝 輪		手永-	22	71	7	(9.1)	チョウセンハマグリ (L)	"	94-44	両端部欠損風化
45	貝輪未製品		手永-	63	71	4	17.2	サルボウガイ (R)	"	94-45	貝頂部打痕
46	貝 輪	密に整形	セ11-025-1	32	68	5	(4.3)	ベンケイガイ (R)	"	94-46	両端部欠損
47	貝 輪	密に整形	セ11-N28-16	78	106	6	66.1	アカガイ	"	94-47	
48	赤 彩 貝	表面丹 彩	セ11-	49	86			オオノガイ (L)	"	94-48	顔料分析 ①
49	赤 彩 貝	表面丹 彩	セ11-	52	84			オオノガイ (R)	"	94-49	" ②
50	鹿角製品	頂部切断部	手永-6G-33	42	17	16	6.7	シカ、角	"	95-50	擦り切り後、折りとり
51	鹿角製品	頂部切断部	手永-1G-7	46	20	17	7.0	シカ、角	"	95-51	頂部欠損
52	鹿角製品残欠	上唇部-枝分岐部	手永-トレ6	132	65	55	122.8	シカ、角骨	弥生時代中期?	95-52	製品素材切りとり残部
53	骨製品素材	加工なし	手永-53	273	47	43	30.7	オホノガイ (L)	縄文時代後晚期	95-53	
54	貝 刃	刃部作部2/3	セ11-O22-ウ-7	68	86	21	37.1	ハマグリ (R)	"	95-55	
55	貝 刃	刃部作部1/2	セ11-O22-ウ-7	55	72	17	20.2	ハマグリ (R)	"	95-56	
56	貝 輪	完 形 品	84号人骨左手首						"	なし	標本人骨に付属したまま、実測図なし



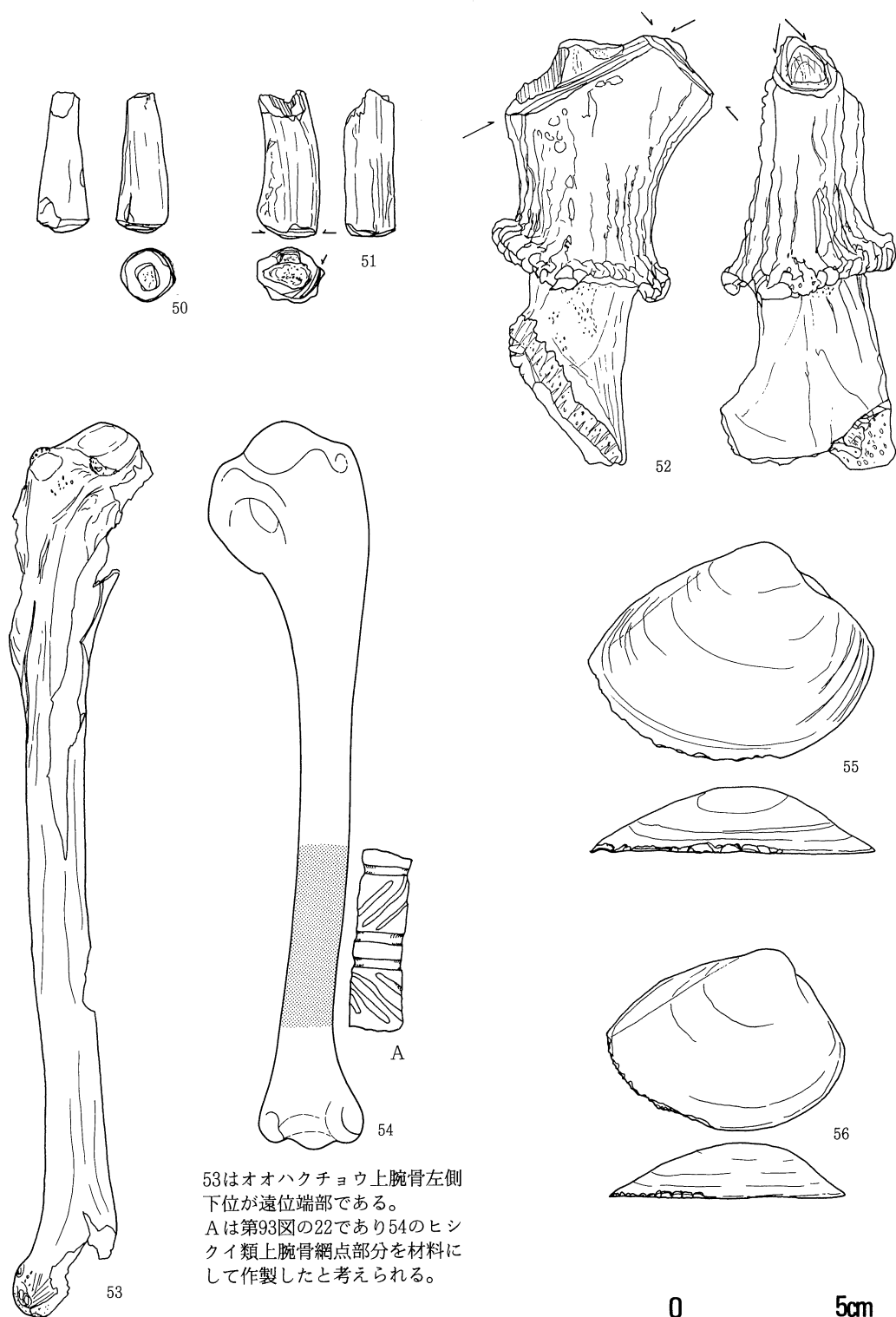
第92图 骨角器



第93图 骨角器

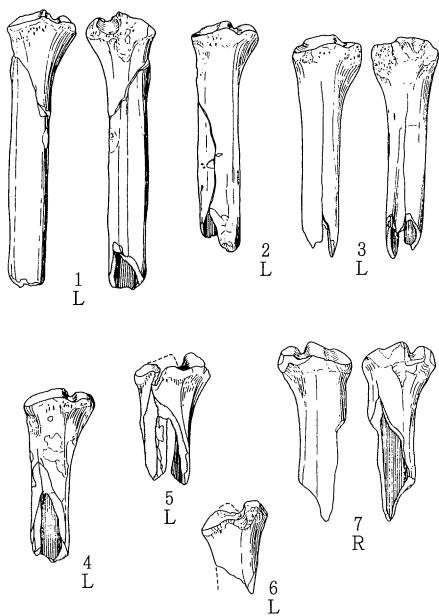


第94図 貝製品

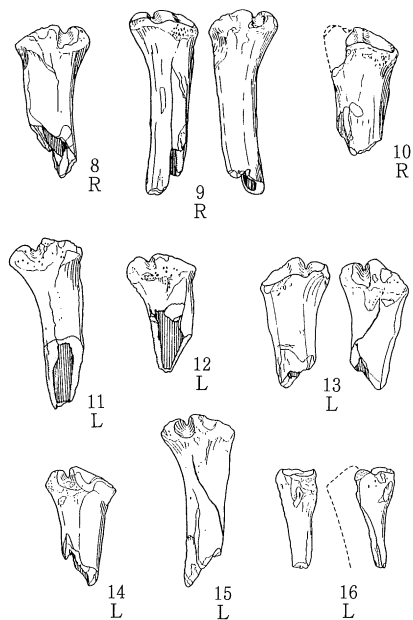


53はオオハクチョウ上腕骨左側
下位が遠位端部である。
Aは第93図の22であり54のヒシ
クイ類上腕骨網点部分を材料に
して作製したと考えられる。

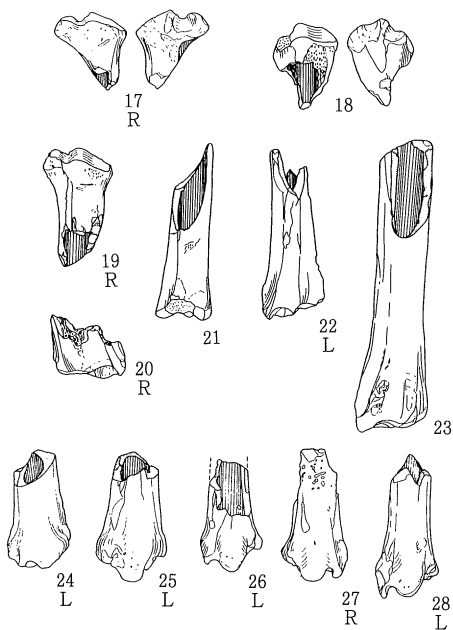
第95図 骨角貝製品



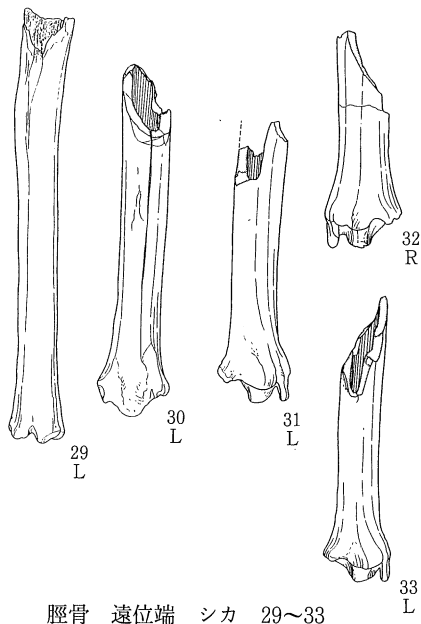
橈骨 上段 イノシシ (SUS)
(Radius) 下段 シカ (CERVUS)



橈骨 近位端 シカ
(proximal)



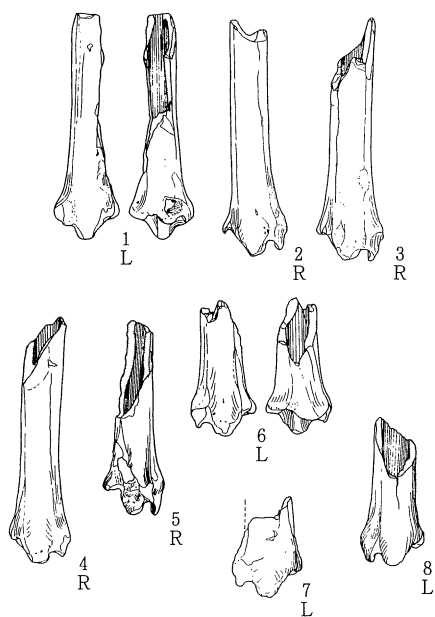
橈骨 上、中段 遠位端 (distal) シカ 17~23
脛骨 下段 遠位端 イノシシ 24
(Tibia) シカ 25~28



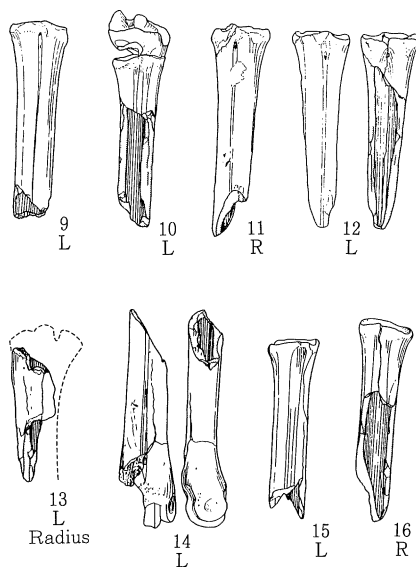
脛骨 遠位端 シカ 29~33

0 10cm
(1 : 4)

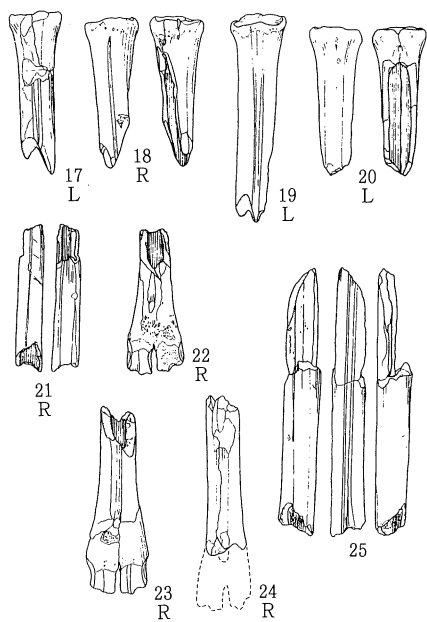
第96図 破壊骨



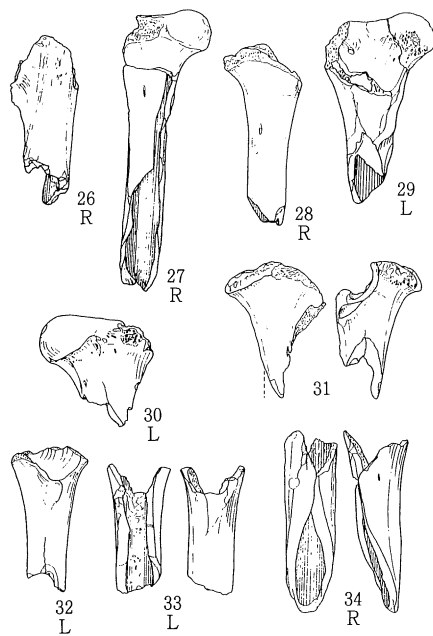
脛骨 遠位端 シカ



中手骨 (Metacarpus) シカ
中足骨 (Metatarsus)



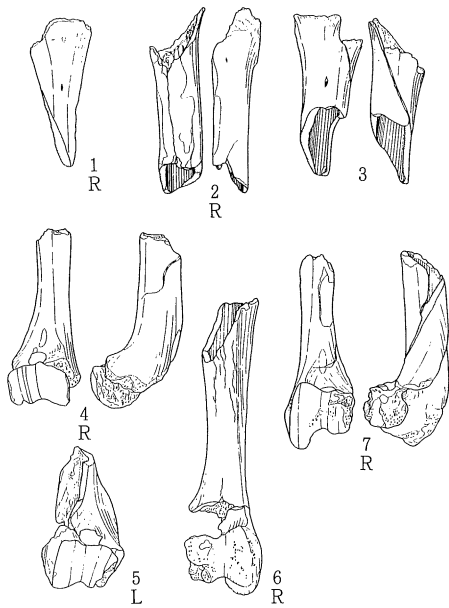
中手骨・中足骨 シカ



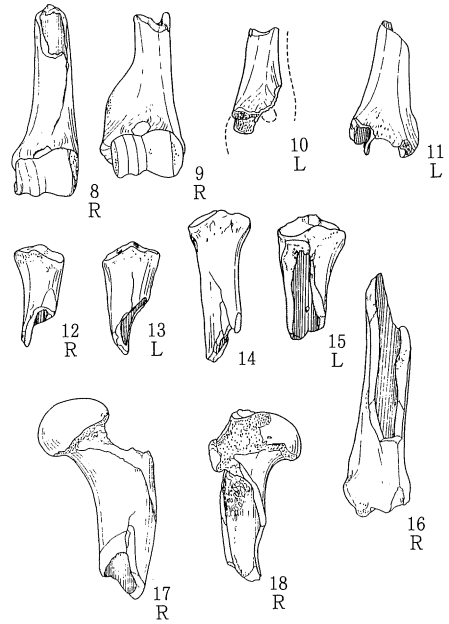
大腿骨 (Femur) シカ 26~30 シカ 31~34

0 10cm
(1 : 4)

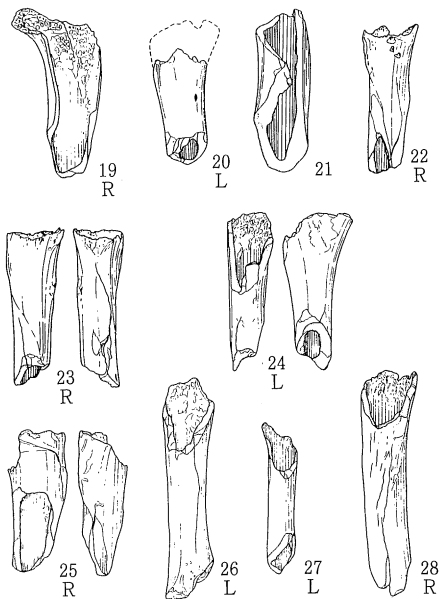
第97図 破壊骨



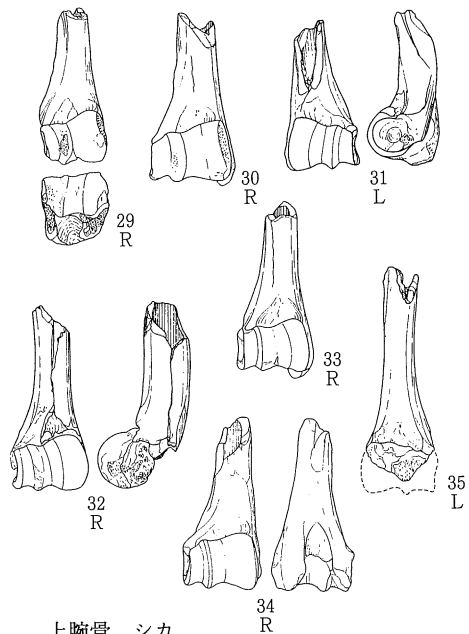
上腕骨 シカ 1～3
 橈骨 シカ 4～7



上腕骨 イノシシ 8～11
 橈骨 イノシシ 12～14 脛骨 イノシシ 16
 上腕骨 (Humerus) シカ 17、18



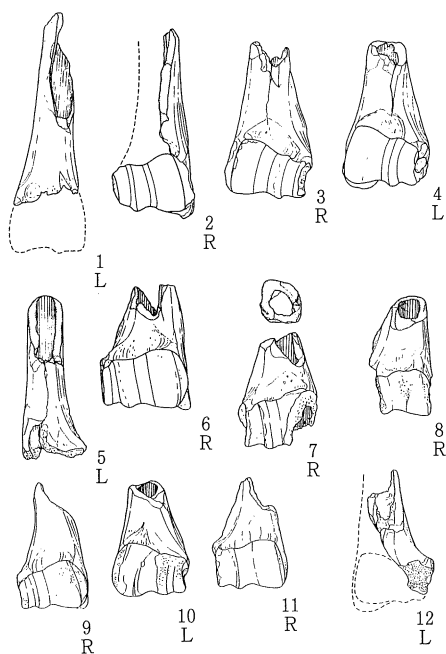
上腕骨 シカ 19、21～28
 橈骨 シカ 20



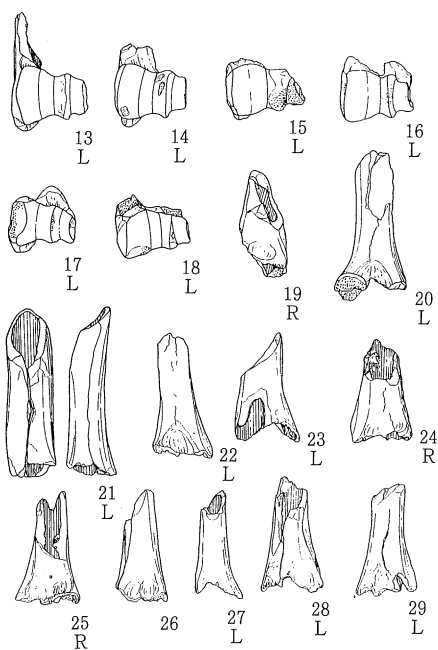
上腕骨 シカ

0 10cm
 (1 : 4)

第98図 破壊骨

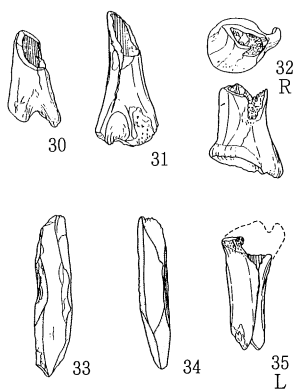


上腕骨 シカ



上腕骨 シカ

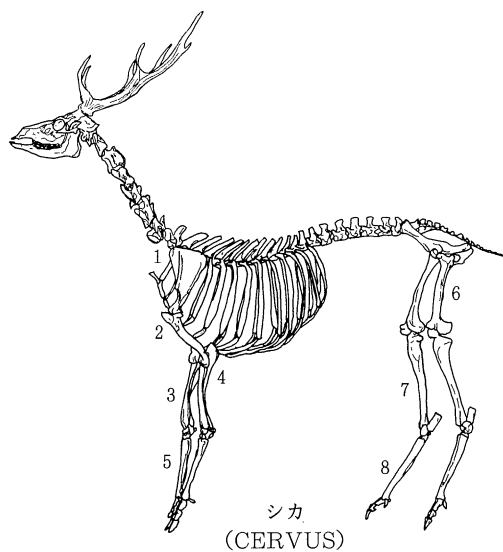
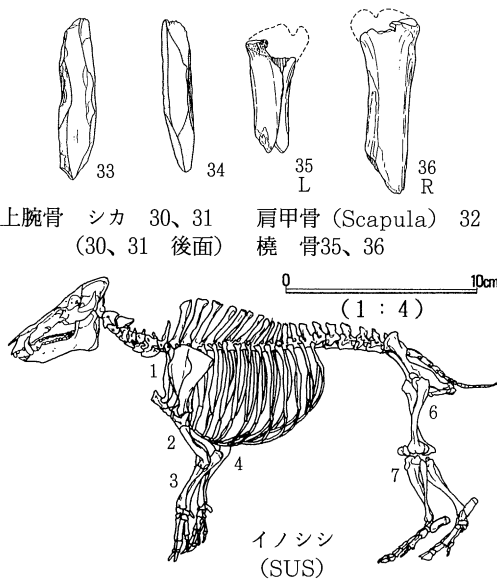
0 10cm
(1 : 4)



上腕骨 シカ 30、31 肩甲骨 (Scapula) 32
(30、31 後面) 橈骨 35、36

同定部位

- | | | | |
|-------|---------|-------|------------|
| 1 肩甲骨 | Scapula | 5 中手骨 | Metacarpus |
| 2 上腕骨 | Hemrus | 6 大腿骨 | Femur |
| 3 橈骨 | Radius | 7 脛骨 | Tibia |
| 4 尺骨 | Ulna | 8 中足骨 | Metatarsus |



第99図 破壊骨及び骨格図

(9) 包含層出土土器（昭和47年度調査）

第100図～第153図までは、昭和47年度調査時に出土した縄文土器を掲載する。整理の際土器の選択に関しては次の通りにした昭和47年度調査資料の引継ぎの際多量な土器片のために、担当者の判断によって整理補助員の手で50mm以下の土器片をまず整理対象から除外した。対象外になった土器は、担当者が見直し点検をした後収納したが、その時再点検の土器は整理対象に戻した。このような方法にしたのは、縄文土器のほとんどが帰属、出土状態及びそれに関する情報がなく、遺物自体が有する価値と調査の際出土した事実があるのみであったからである。しかし、調査中の写真によって確認された遺物については別扱いにした。そのため掲載した約1,600点の土器は包含層出土土器であり、その包含層は遺構の帰属の可能性もあるし、副葬された可能性もある。写真による帰属判断の可能性は高いが、必要十分条件の確証がない場合は混乱する要因になるので、不明なもの不詳なものについては包含層にした。

以上の資料操作を行なった後に、掲載土器の選択をしたため数量は偏りが生じている。操作の前に定量の確認を実行しなかったのは担当の誤りである。操作時の感覚では堀之内1式が非常に多く存在したと思われる。そのため加曽利B式以降の土器は全部ではないが、努めて掲載してある。

第100図～第106図の189点は堀之内1式とした。第107図～第110図の108点は堀之内2式と堀之内式の土器底部である。第111図～第117図は加曽利B1式から曾谷式の精製土器である。第118図～第123図は加曽利B1式から曾谷式の粗製土器である。第124図160～176は堀之内式から加曽利B式の土器の把手である。177～184は第123図に続くものである。185～194は堀之内式土器の底部である。第125図195～222は加曽利B式の土器である。223～240は加曽利B式土器の底部である。第126図はすべて加曽利B式土器の底部である。第127図～第131図29までは、後期安行式1～2式である。第130図の118・119は、加曽利B式である。第131図30～47、第132図・第133図は、安行式の粗製土器である。第134図は安行3a式以降となり、第135図は安行2式から安行3a～3b式までの口縁部があり、76・77は小型の甕と壺形土器である。第136図は安行3b式の粗製土器がある。第137～第139図は口縁部条線文の粗製土器と安行式後晩期の底部がある。第140図は安行3b式の無文の土器である。第141図の1～4・6は安行3a鉢形土器、5・8・10は安行3b式、7・9は縄文時代後期の土器である。32・42を除く11～43は安行3bの粗製土器であり、32・42は前浦式である。第142図～第147図は141につづき安行3b式土器である。第148図は第146図掲載の土器群に列点を加えたもので、地文に縄文があるものがあり、安行3b～3c式になるだろう。第149図は安行3b式の壺形・甕形土器である。第150図～第153図は前浦式土器である。そのなかで39・40・43・46・64・66～71・92・96・103～120は安行3b式に近いと思われる。第152図91は縄文がない、調査時同じ文様の完形土器が出土している。

菊間手永貝塚の縄文時代出土土器は、時期的には縄文時代早期から前期は数片しかなく、縄文時代中期後半になってややその出土量を増加する程度である（第41・42図）。縄文時代後期に入っても後期初頭の称名寺式土器は少なく、それに並行するかやや後になる土器は1・2号埋甕（第44・45上段）であるが、その時期の在地の堀之内1式古段階の土器は包含層出土土器はとても少ないことになる。09号住居跡は写真にある出土土器から堀之内1式と考えられるので、台地上では堀之内1式期後半からは集落があった。台地南側斜面部には5基の住居跡が検出され、3基は堀之内2式期である（第46～48図）。その住居跡東側には斜面貝層があり貝層下に堀之内1式の土器が多数検出され、斜面貝層本体は堀之内2式の土器が包含されている（第49・50図）。調査ノートによれば01・02・08・09・10号住居跡は堀之内式期である。それに南斜面部の65～69号を加えると10基になる。

遺物の帰属が特定できない住居跡は、平面図の状況から07・053・06・054・ α 25・ α 24号の6基が縄文時代後期から中葉であると考えている。土器型式では堀之内式と加曽利B1式から曾谷式まで第111～126図に少ないが出土している。縄文時代後期後半から末までと、縄文時代晩期初頭とされる安行1式・2式と安行3a式は、住居跡形態がほぼ五角形から方形になる時期である。第127図～第139図（136図等一部を除く）まで、多いとは言えない程度に出土している。安行3a式期の住居跡は03号が確実であり、ほか011・020・021・057・ α 30号の5基が当該期の可能性がある。

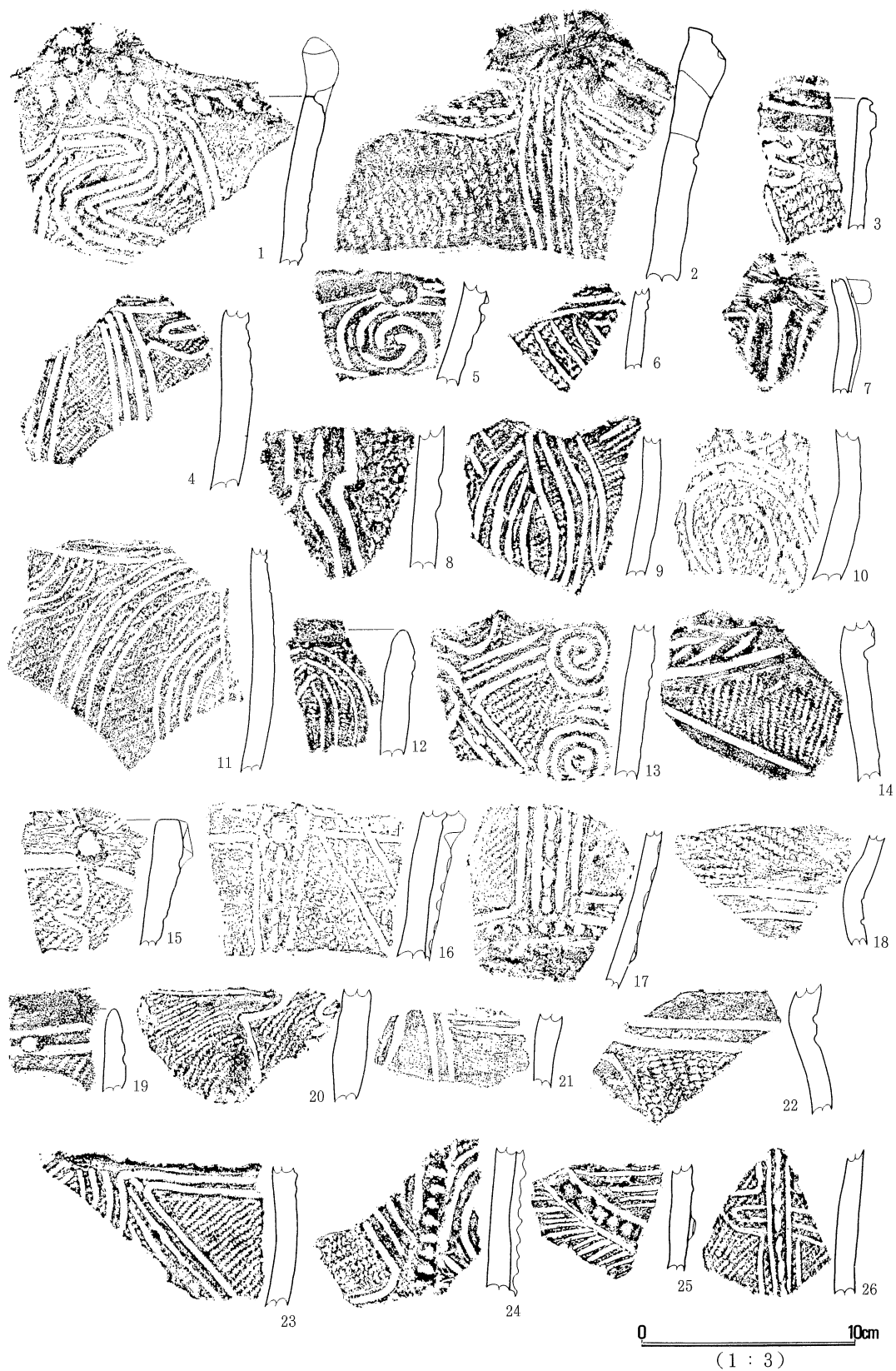
菊間手永遺跡においては、安行3b式は房総半島の地域色の姥山式が主流である（90・91）。第136・第140図～第147図・149図が当該期になるが、第142図～第144図は姥山式の粗製土器にあたる。安行3c式以降は第148図の列点の施文があるのみである。前浦式は西広貝塚を基本資料に鷹野氏が細分案を提起している（92）。当遺跡資料は少ないがある程度まとまりがある。043・056・055号が、安行3b式期から前浦式期の住居跡と考えている。043号は2回以上の建て直しがあり、平面図の情報では大洞BC～大洞C1式の土器が出土している。当該期の土器は南側斜面部にも出土があり、台地北側の043・056・055号の4基以外の住居跡が存在した可能性もある。

菊間手永遺跡の貝塚は縄文時代後期前半から縄文時代晩期の前半にわたる集落であり、貝塚は斜面貝層を含む北に開放部を有する環状貝塚であった。住居跡は後期には斜面台地に広がり、後期後半から晩期は中央の凹地を中心として環状に並び、集落を長期に渡って存続した。

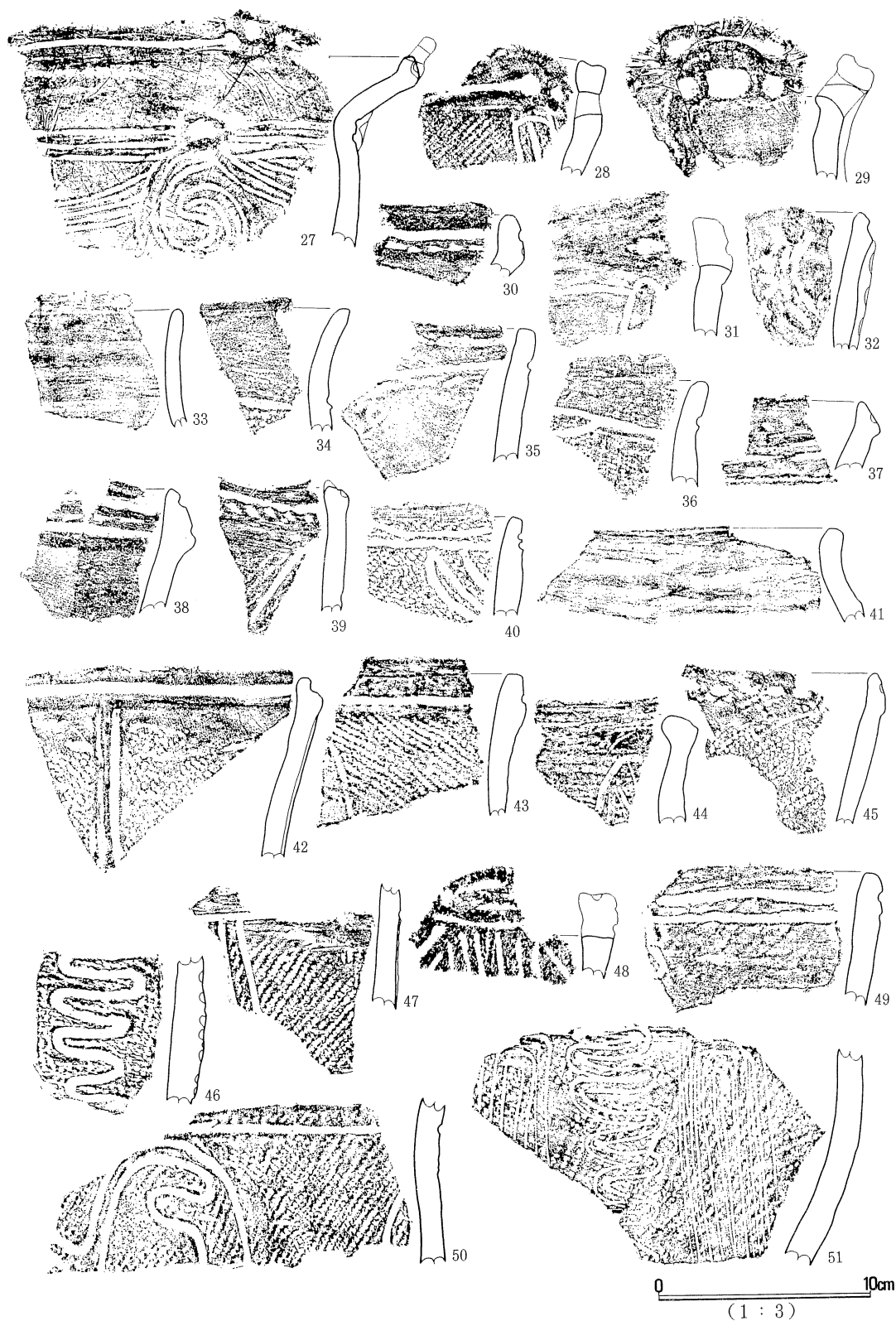
（90）鈴木正博・鈴木加津子「安行3b式研究の序」『土曜考古5』1982.1

（91）鈴木正博・鈴木加津子「安行式遺蹟解題(1)」『土曜考古7』1983.7

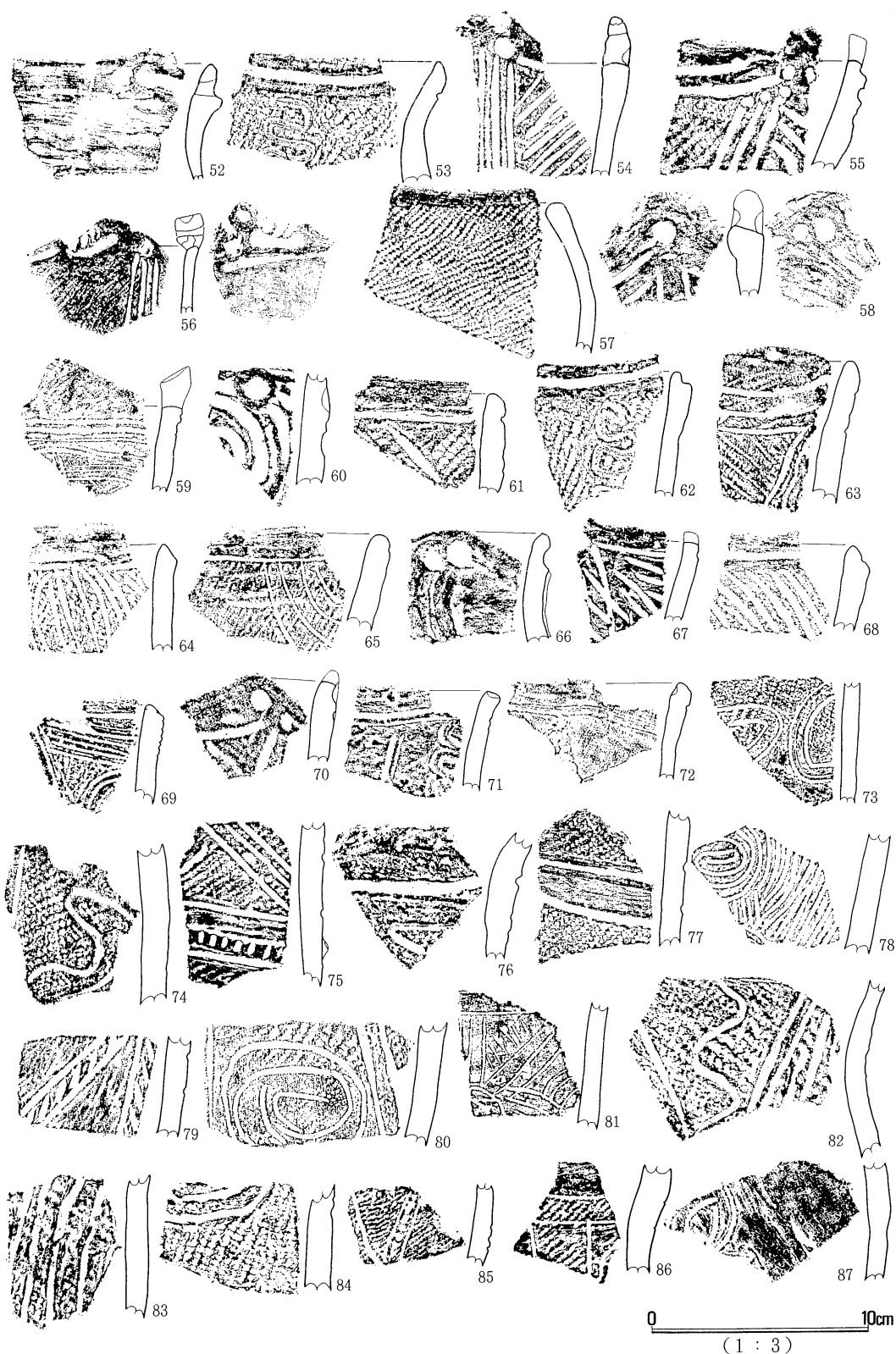
（92）鷹野光行「前浦式土器の研究」『考古学雑誌第64巻第3号』1978.12 日本考古学会



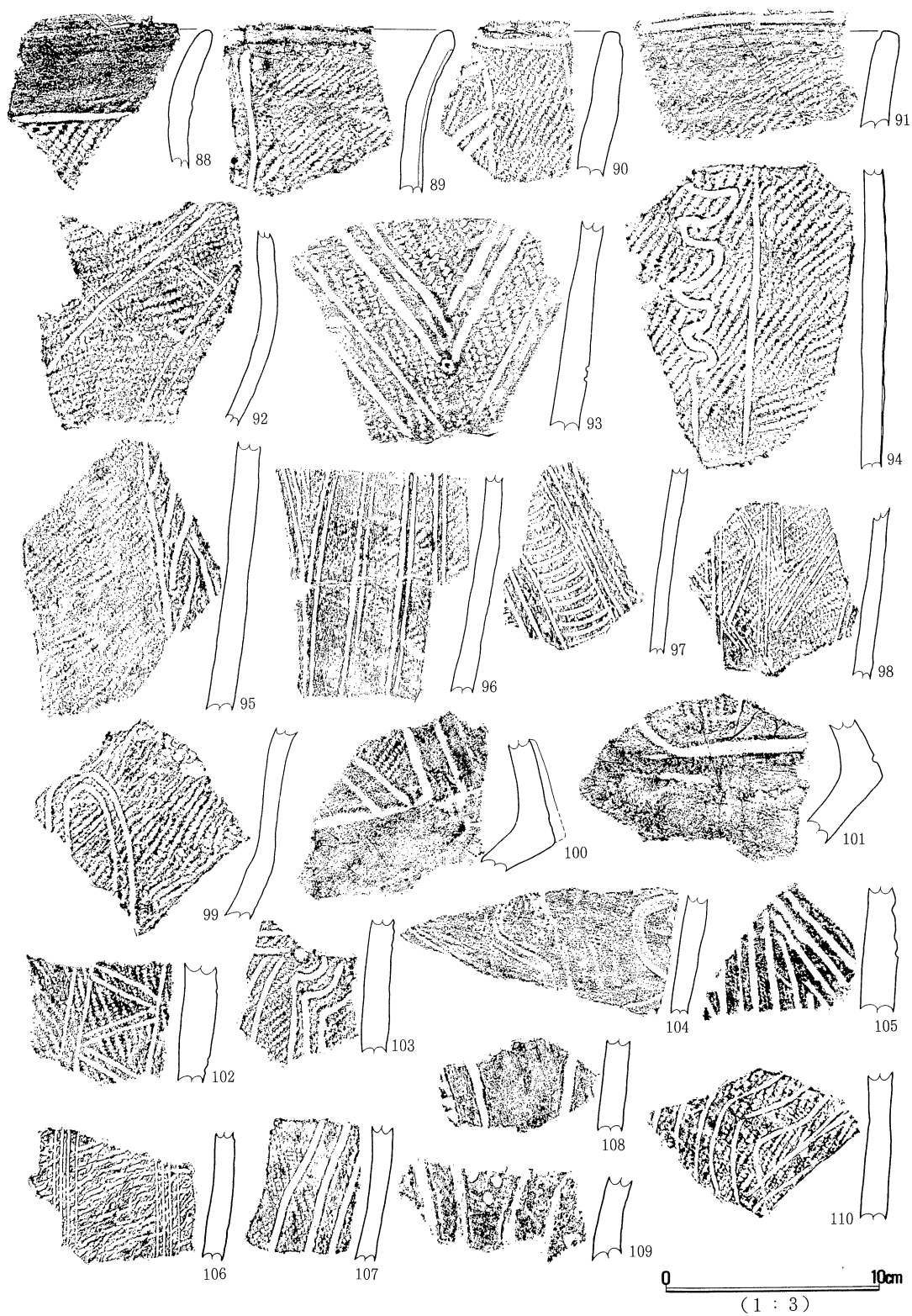
第100図 包含層出土縄文土器



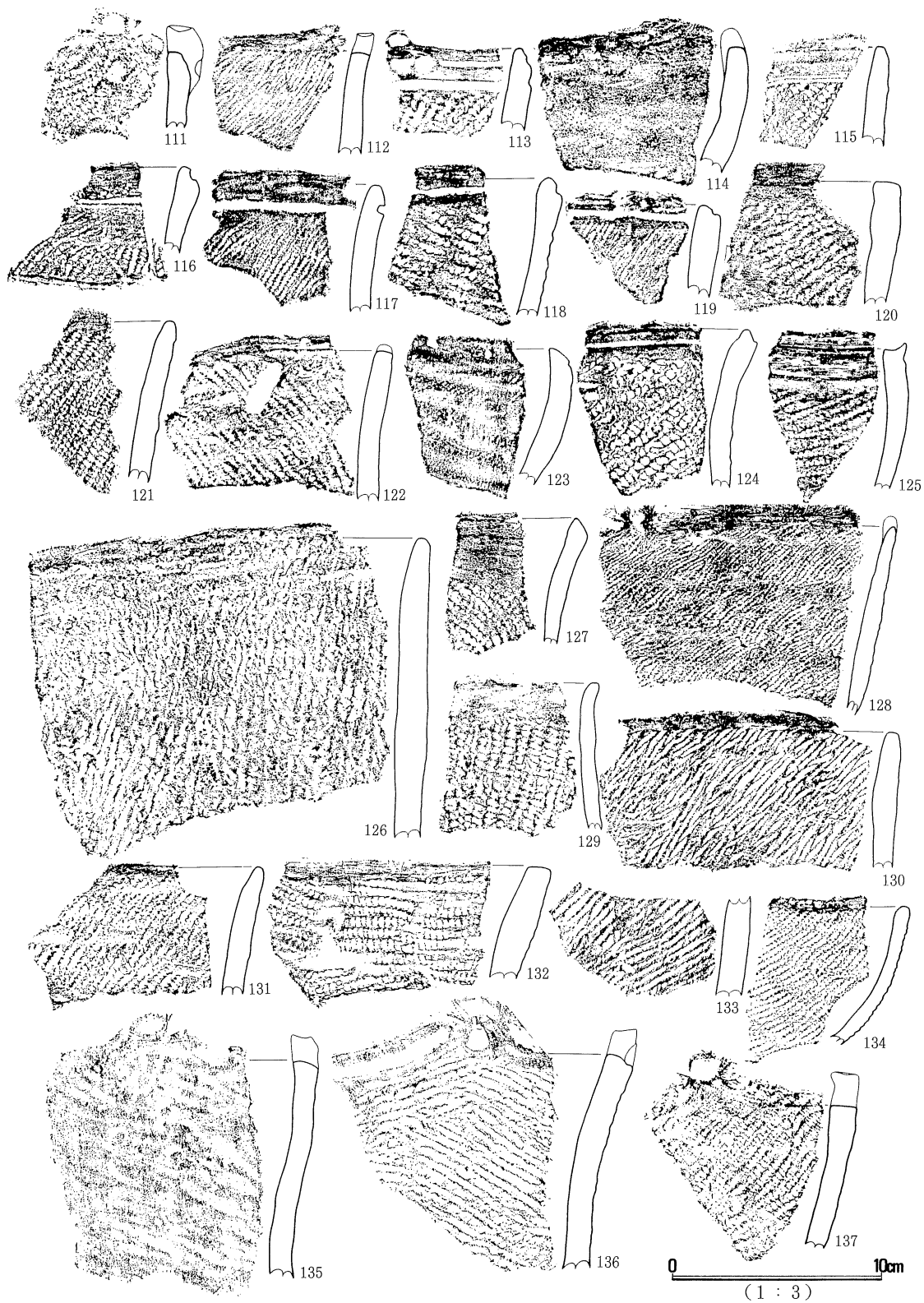
第101図 包含層出土縄文土器



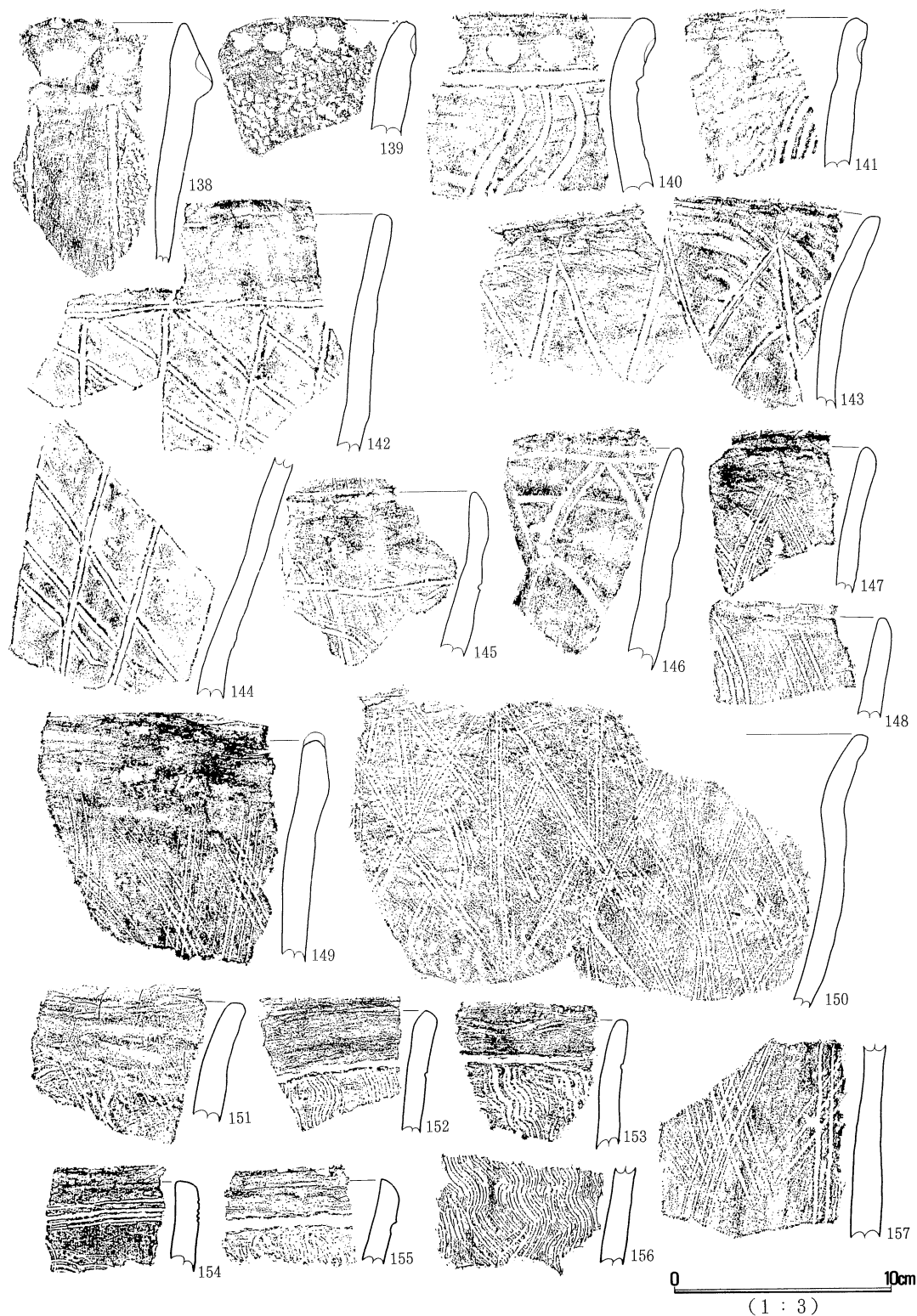
第102図 包含層出土縄文土器



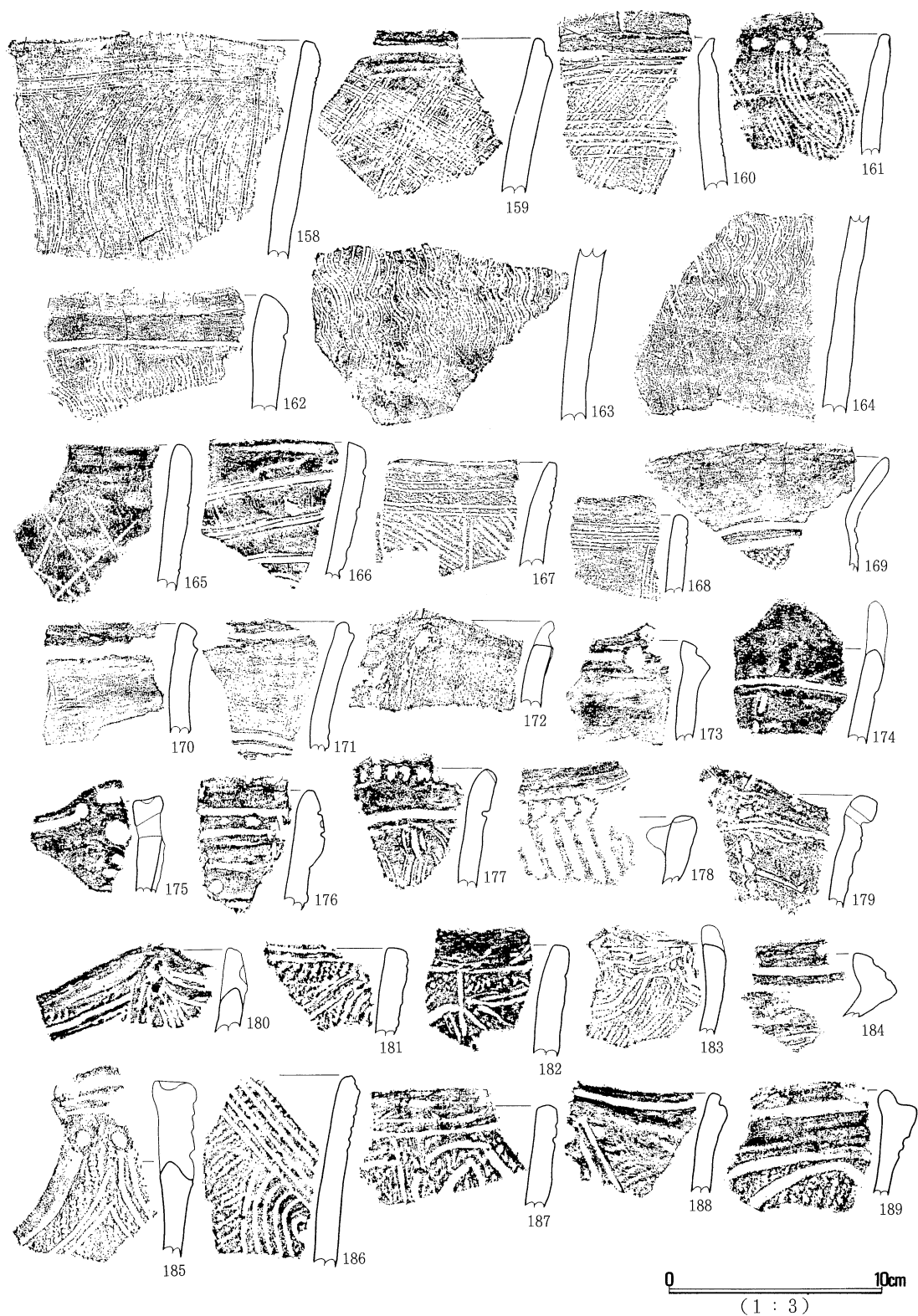
第103図 包含層出土縄文土器



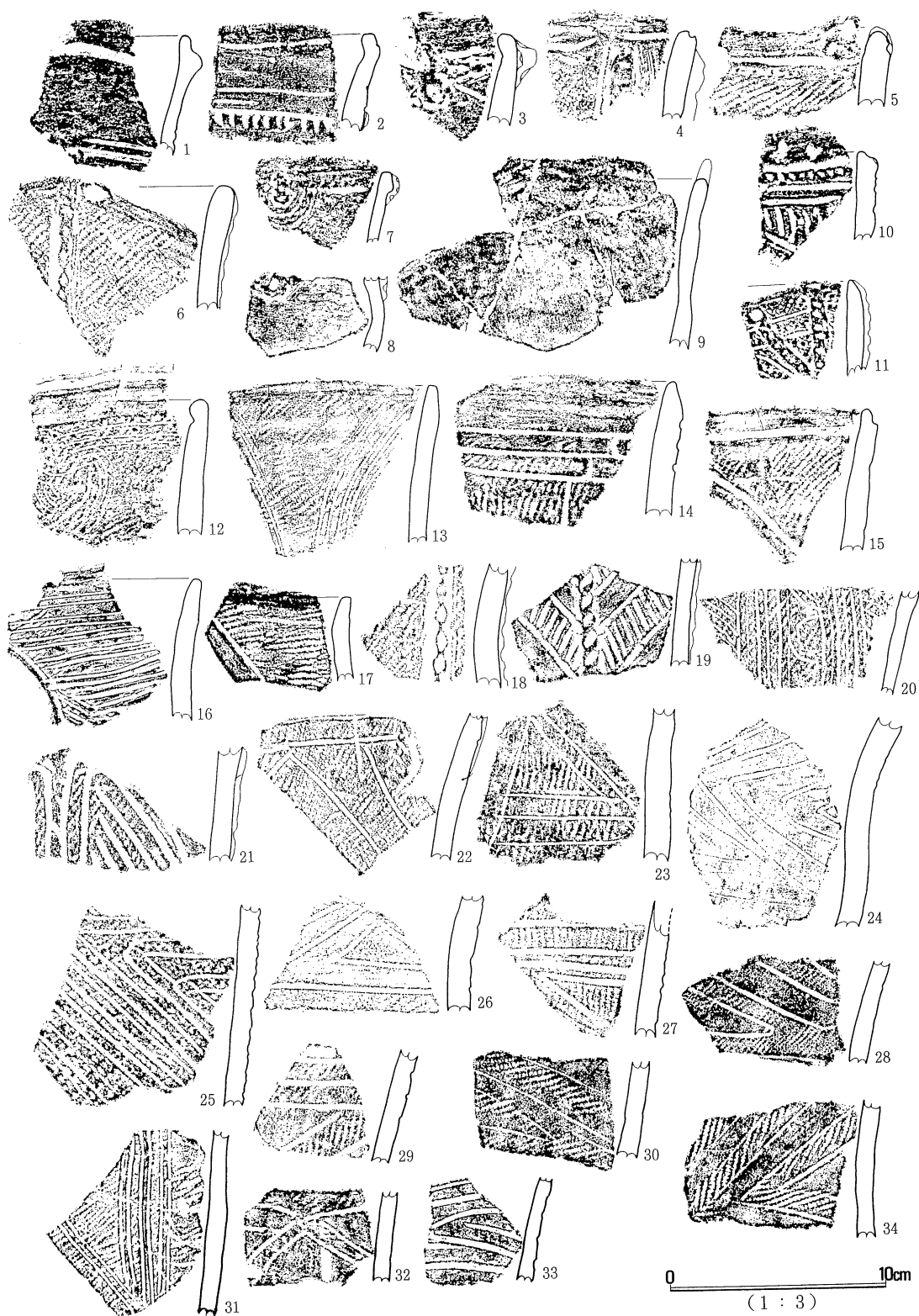
第104図 包含層出土縄文土器



第105図 包含層出土縄文土器



第106図 包含層出土縄文土器



第107図 包含層出土縄文土器